

# 牧羊者

## 教師の方々へ「神との関係」

過去一年間、幾つかの教区の教会学校教師研修会に招かれ、新しい『牧羊者』の用い方を話す機会を与えていただきました。また、現場の教師の方々から、生の声を聞くこともできました。そういう中で、切実に感じた三つの点を、以下に記させていただきます。これが、教師の方々への励ましになるように、心から祈っています。

第一に、どの教会も、教会学校の生徒の減少に心を痛めていることです。しかも大半がクリスチャン・ホームの子どもたちで、一般の家庭からはくわすかしか来ていません。多くの子どもたちが、真の神のことを全く聞かずに育っている姿を見るとき、自分たちの力の足りなさを痛感してしまいます。

しかし、忘れてはならないのは、今来ている子どもたちの貴さです。友だちが塾で勉強し、スポーツクラブで楽しんでいる時間に、あえて教会学校に来ているのです。彼らが、他のどんな時よりもすばらしい時間を過ごすことができるように、教師は祈り備えねばなりません。生徒が少ないからこそ、一人一人に手の届く配慮をしましょう。生徒三十人対教師一人というやり方では不可能なことが、教会学校ではできます。それは、彼らと心の交わりをすることです。教会学校は

他のどこでもしていない「人格教育」をしている所と確信しましょう。

第二に、昔では考えられないほど、現代の子どもたちは大きな問題を抱えていることです。メディアで報道される学級崩壊・いじめ・引きこもりなどは、教会学校の生徒たち自身やその周辺にもおこっていることをあちこちで聞きました。私たちは、その現実をはっきり知らねばなりません。教会学校のメッセージが、おさなりのお話であっては、彼らの心の求めに答えられないのです。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」(ローマ12:15)は、教会学校教師にとって、座右の銘にすべき聖句です。主イエスがそうであったように、謙遜に子どもたちと同じ位置になりました。教師が担当する生徒は、どんなに多くても十名以下でしょう。その中の一人が悩んでいるなら、どうか一緒に悩んでください。それが何にもまさる尊い奉仕なのです。

第三に、教会学校教師自身が多忙で、あまり準備の時間がとれないことです。それぞれに仕事や家庭があり、また他の教会奉仕もあるので、気になりつつも、土曜日の夜か日曜日の朝に、礼拝メッセージのページをさらっと読むだけだという場合もあると聞きます。しかし、毎回

そうであるなら、残念です。もし教会の牧師がそんな準備で礼拝メッセージをしておられるなら、信徒の霊性は養われるでしょうか。

新聞を読む時間を五分けずってください、ナイターやドラマを見る時間を十分少なくしてください。通勤電車の中でもいいですから、『牧羊者』を開いてください。特に、聖書講解と研究資料には目を通してください。自分でワークの答を考えてみてください。教会学校が主の栄光を現せるかどうかは、教師がどれほど真剣に準備し、どれほど生徒一人一人のために祈っているかで決まるのです。

今年度のテーマは、「神との関係」です。最初の旧約聖書の学びで、これがどういう意味をもつかをご理解いただけたと思います。「神のかたち」にかたどって創造された私たちです。墮罪によって失われたその「神のかたち」が、神と交わりをもつことによって回復されていく姿を、一年かけて学んでいきましょう。今年は年間二冊の発行になりますので、一年通してのカリキュラム表を別刷りで作成しました。付録として、本誌一冊に一枚ついています。机の前などにはってくださり、年間の流れを把握した上で、毎週の準備をしてください。

## 目次

インタビュー 「教会学校が今の子どもにできること」	2
本書を用いる方々のために	4
教案とワークブックの用い方	5
年間カリキュラム	6
4月教案	8
5月教案	28
6月教案	44
7月教案	60
8月教案	80
9月教案	96
母の日特別教案	116
編集後記	117

4月

5月

6月

7月

8月

9月

## ●インタビュー● 立石一信兄に聞く

# 「教会学校が 今の子どもにできる」

教会学校教師として、今の子どもたちを取り巻く環境がどういうものかを理解しておくことは、非常に大切です。そこで、御影福音教会の会員であり、教育カウンセラーとして貴重な働きをしておられる立石一信兄に、お話を伺いました。兄は長年にわたって幾つかの大学で教育心理学を学ばれ、臨床経験も豊富です。

**質問** 「教育カウンセラー」というと、どのようなことをするお仕事ですか。

——様々な働きがありますが、私の場合はある市の教育委員会やその他のところで不登校やいじめ、また子どもたちの異常行動で悩んでいる方々と話しています。遊戯療法や力ウンセリングを通して、その方々の抱えている問題を一緒に考えて解決をはかることが主な仕事です。

**質問** 最近増えているこのような問題の根本的な原因は何なのでしょう。

——私は、子どもたちのコミュニケーション能力が劣化していることが一番の原因だ、と思っています。昔と違って、今は同胞（兄弟姉妹）

の数が少なくなっており、子ども同士の間形成の基礎体験ができていないのです。近所の子どもたちが年令を越えて、かくれんぼやかんけりなどの遊びをしている姿はほとんど見られませんが、かつてテレビゲームなどの個人的な遊びが主流になっています。家庭では、子どもが個室を与えられ、そこで自分の好きなことをする場合が多いのです。学校でも、教師と良い関係が築けない、また友だちができないという子どもがたくさんいます。

親にも、同じような問題がおこっていると思います。昔なら、子育てで悩むことがあっても、一緒に住んでいるおばあちゃんに聞いたり、近所の井戸端会議で話したり、経験上の知恵を聞

く機会が多かったのです。今はそういう機会が余らないために、例えば赤ちゃんのミルクの与え方まで保健所に電話で問い合わせるようなことさえあるようです。特に新興住宅地などでは、隣近所に知り合いがないために、ほとんど孤立化が進んでいるように思えます。

学校においても、教師と保護者の関係は概して良いものではありません。保護者は教師に要求することが非常に多いのです。家庭ですべきしつけさえも学校に要求することもあります。教師と保護者の間に信頼関係ができていないのです。

つまり、子どもも親も、コミュニケーションがうまくできないことが、様々な問題の原因のように思えます。子どもたち同士でも、親子の間でも、また近所の人々の間でも、気兼ねなしに親しく話し合うことができるなら、解決の糸口がつかめるのではないのでしょうか。

**質問** 立石さんは、不登校やいじめで悩んでいる子どもたちにどのように接しておられますか。

——まず子どもたちと一緒に遊ぶことから始めています。トランプや人生ゲーム、魚釣り、栗拾い、卓球やサッカーなど、テレビゲーム以外のほとんどの遊びをします。大学生のボランティアも加わってくれます。そうしている間に、子どもたちは自分のことを話してくれるようになります。五十歳を越えた私より、大学生のほうがよく話してくれますね。このようにして、

彼らのコミュニケーション能力を高め、「何でも話せるんだ」と感じられるように導いていくのです。

**質問** そのようなことは、私たちの教会学校にも必要なことのように思えますね。

——確かにそうです。教会学校は、聖書のお話を聞かせることが中心になっていますね。それは決して悪くはありませんが、もっと子どもたちと遊ぶ時間をもっといいのではないのでしょうか。それによって、子どもたちとコミュニケーションを十分とるのです。といっても、週一度で一時間ほどのわずかな時間に、十分な遊びの時間をとることは不可能です。できれば、土曜日や週日などに、CS教師と子どもたちが一緒に遊べるならいいですね。時間に余裕のある主婦や仕事を引退された方々に、そのような場をもっといただくという方法もあるでしょう。

**質問** どのような遊びが良いのでしょうか。

——それについては、國分康孝編（図書出版シリーズ）『エンカウンターで学級が変わる』に、詳しく実践例が紹介されています。小学校編、中学校編、高校編など、年齢別ワークブックがありますので、きつと役に立つでしょう。

**質問** 現在でも「子ども大会」などを開いて、子どもたちと遊ぶ時間をもつ場合がありますが、その時だけ来て、日曜日には来ないという問題

があるのですが。

——それでも良いのです。幼い頃に一度でも教会学校に来たことのある人は、成長して何かの問題にぶちあたった時、再び教会に来るケースがたくさんあります。「教会に行つて楽しかった」という経験をせびさせてあげてください。少し言い過ぎかもしれませんが、「教会学校に遊びに来た」という子どもがあってもいいのです。

**質問** 教会学校で、よく騒ぐ問題児がいます。そんな子に対してはどうすべきでしょうか。

——そういう例は教会学校だけではありません。できれば、数人の先生でそういう子どもたちを引き連れて公園に行ったり、あるいはまた別室でゲームをするなりして、一緒に遊ぶのが良いと思います。遊んだ後なら、短い時間でも聖書のお話をきくかもしれません。まず子どもとの信頼関係を築くことが第一です。遊びの中に、その子の問題がわかってくることがあります。

**質問** 親が子どもを教会におくるのは、教会でしつけをしてもらいたいからというケースがあることを聞いたことがあります。

——しつけの主体はあくまで家庭にあります。ですから、親の方を教育しなければなりません。時には教会で「教育講演会」「母親教室」「子育ての悩み相談会」などを開いて、親に来てもらうのです。呼んでいただいたなら、私も喜んで行かせていただきます。そうすることで、

教会はその地域の一員としての役割を果たせるのではないのでしょうか。特に新興住宅地などでは、悩みをもちながらどこにも相談相手のいない方々がたくさんいます。信徒の中に相談にのれる方々もおられるのではないのでしょうか。

また、例えばもちつき大会とかバザーとかで、子どもたちの親を教会に招く機会をできるだけたくさんもち、普段から教会が地域と接点をもつようにすれば、「コミュニケーション作り」に役立つと思います。教会こそ、失われた地域の「コミュニケーション」を回復する場所になってほしいのです。

**質問** 子どもたちのことを知るために参考になる本を紹介していただけませんか。

——最初にお薦めしたいのは、クリスチャンである神谷美恵子さんが人間の心の発達を書いた『こころの旅』（みすず書房）です。また、岩波書店から出ている河合隼雄著『子どもと悪』や、新書版の『子どもの宇宙』『子どもと学校』は子どもを知るために大変役立ちます。隼雄さんのお兄さんでサル学者として有名な河合雅雄さんの『子どもと自然』（同新書）や『学問の冒険』（岩波同時代ライブラリー）も良書です。

今日は良いお話をしていただいて、本当にありがとうございました。



## 本誌を用いる方々のために

昨年から『牧羊者』は様変わりしました。多くの方々から好意ある評価をいただき、嬉しく思っています。しかし、幾つかの厳しいご指摘もありました。そのうち、根本的に重要だと思われる三つの意見を紹介します。

第一に、「現在の子どもたちを取り巻く環境を十分に考え、彼らの必要にあった内容にしてほしい」という意見です。確かにその通りだと思います。そこで、子どもが霊的に自立できるよう、今年度は幾つかの点で抜本的な改善を試みました。詳しくは後述します。

第二に、「毎回の礼拝に用いることのできる視聴覚教材を用意してほしい」というご意見がありました。それに応えてワークとは別にフラッシュ・カード（お話の内容を六つの絵に表わしたもの）を新たに作りました。

第三に、「ワークBとワークCの内容に大きな差がある」という意見もたくさんありました。これに対しては、ワークをもっと種類増やすということと対応しています。

### 子供の霊的成長重視の編集姿勢

私たちは、第一の意見が最も重要だと感じて、CS局員をはじめ、執筆者や有識者と話し合ってきました。その結果、聖書知識を増やすことにも力をいれますが、何よりも子どもたちの霊的な成長に重点をおいて編集することになりました。彼らが霊的にめざめ、自立し、主に出会い、悔い改め

ることを目標としています。子どもたちを小さな信仰者と考えるのでなく、一人の求道者と考えて、彼らを明確な救いに導きたいと思っています。

まずカリキュラムを考え直して、年間に次のような三つの学びをすることにしました。最初は、旧約聖書から歴史に現わされた神の救いの計画を知る学び、次に子ども的人格を自覚させて神の前に立たせるための学び、そして最後に主イエスと出会ってその人格を受け入れる学びです。それを三年間で一サイクルとし、旧約聖書をほぼ全巻学ぶことになります。

毎週の聖書箇所は、多少の例外はありますが、子どもにわかりやすいストーリー性のある所ばかりです。ストーリーを話すなかで（物語法、子どもたちが自身がそのストーリーから教訓を発見し（発見学習）、自分に適用するように導いていく教育方法を用います。

### 各週の構成

各週の構成も、かなり変更しました。子どもに教える前に、教師がテキストの意味を十分に理解することが必要です。そのため各週の最初のページは、聖書講解になっています。A/V内は聖書本文の引用です。第二ページの研究資料とともに、まず教師が聖書をじっくり学んでください。これから二つのページは、成人科にも用いることができます。

第三ページは説教例です。導入の後に、起承転

結の四つの部分があります。「起」ではストーリー

を語り、「承」ではその箇所から学ぶべき最も大切な真理を指摘し、「転」で生活への適用を考え、そして「結」で締めとめをしてください。ストーリーを語る際に、聞いている子どもたちの年齢や教会生活の長短などによって表現を変えてくださっても結構です。幼い子どもが多い場合は、フラッシュ・カードを用いてくださると効果的でしょう。

第四ページには、四種類のワークブックを用いる時の注意点が記されています。また、中高校における学びのヒントも掲載されています。

今年度のカリキュラムは母の日や収穫感謝などの教会行事と関連づけていませんので、母の日だけは巻末に特別ページを設けました。ワークブックBの冒頭の特別ワークもご利用ください。

### ワークブックの種類と目的

先に述べたように、今年度は四種類のワークブックを用意しました。ワークAは、未就学児童を主な対象にして作成されています。ワークBは小学校一〜二年生、Cは三〜四年生、Dは五〜六年生を想定しています。しかし、子どもの能力に応じて、一番適切なワークを用いてください。Dは、中高生や一般の信徒にも用いていただいても結構です。

ワークブックは、試験の答案用紙のように正しい答えを書いたらよいというものではありません。これは、教師と子どもが心を開いて話し合うため

### ワークブックC

このワークは三つの質問で構成されています。第一の観察質問では、その日の聖書箇所から中心的な一つのテーマを捉えます。暗唱聖句の一番重要な部分を空白にしておいて、そこに書き込んでもらう方法です。第二の意味質問では、中心テーマが意味していることが何かを尋ねます。生徒が楽しめるように、ユーモアも含めた設問になっています。最後に来るのが適用質問です。中心テーマに対して、適用は無限にあります。ここで、一人一人がこの一週間どのように過ごすべきかを考えるのです。次の週に、それがどこまで実現できたかを話し合うことも大切なことでしょう。

### ワークブックD

このワークDでは、まず一緒に聖書を読むところから始めてください。輪読だけでなく、教師がメリハリをつけて読み聞かせるとか、生徒に登場人物になってもらうとかの方法を考えましょう。複数の質問がありますが、それぞれの設問aは事実の把握です。情景が浮かぶように聖書の記述を追いつながり一緒に確認をしてください。全体像をつかむためにaだけを先にしても良いでしょう。それに対して設問bは、その箇所の意味を考えます。断定的な答を避けて、さまざまな可能性を考えてみましょう。ここで、目標とすることが生徒

### 中高校のための手引き

ワークDは、昨年度のワークCより多少簡単になっています。そこで、中高校のために少し難しい質問を用意しました。中高生ともなると、ワークなどに嫌悪感をもつ場合もあります。教会の実情に応じて、ワークDを用いるか、それともこのような質問でクラスを運営するか、自由に決めてください。

中高校の場合は、「考えてみよう」「自分に当てはめてみよう」「話し合ってみよう」の三種類の質問があります。全部の質問に答える時間がない場合は、この三種類の中から一つずつ取ってください。

### おわりに

昨年度は、過去の『牧羊者』の中から選んで編集しましたが、今年度は十二人の先生方によって新たに書き下ろされました。また、ご意見を伺ってすぐに改善できるように、また持ち運びにも便利なように、年間二分冊にしました。さらに、「こうすれば良い」という意見を聞かせていただければ幸いです。

の道具です。もし間違った答が出たら、「なぜそう思うの?」と聞いてみてください。そこに交流が生まれます。そのような交わりの中で、その子の悩みや苦しみがわかってくる場合もあるでしょう。そうなるって初めて、具体的な適用ができるのです。

では、各ワークブックの特徴を説明しましょう。

### ワークブックA

まずワークAですが、切ったり貼ったり塗ったりすることが多いワークです。クラスにはさみ、のり、クレヨンなどを常備しててください。子どもたちと一緒に作業をしながら、その日の目標が理解できるようにしましょう。このクラスは毎週違う聖句を暗唱するのが大変なので、一カ月に一つの暗唱聖句が選ばれています。

### ワークブックB

このワークでは字を書くことが多くなります。多少時間がかかってても、子どもが自分で考え、自分で書きこむまで、忍耐をもって待ちましょう。「やすお君は、イエス様のようにできるかな?」などと、自分にあてはめて考えさせることも大切なことです。

本誌のワーク説明のページに、毎回、その日の内容にふさわしい子ども用の賛美歌を選んで載せていますので、参考になさってください。

## 教案とワークブックの使い方

# 神との関係

中心聖句・創世記1:26

神はまた言われた、  
「われわれのかたちに、われわれにかたどつて人  
を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地  
のすべての獣と、地のすべての這つものとなを治め  
させよう。」



## 第一期 神の救いの計画

2001年			
日	週題	聖書	暗唱聖句
4月1日	進級式	ヨハネ18:1-11	同上
8日	受難週 救いの完成	ヨハネ19:28-30	同上
15日	イスター 復活された主	ヨハネ20:19-29	同上

## ●天地創造からヤコブまで

日	週題	聖書	暗唱聖句
4月22日	天地創造	創世記1:1-31	同上
29日	人間の創造	創世記1:26-31	同上
5月6日	人類への命題	創世記2:15-25	同上
13日	罪の侵入	創世記3:1-24	同上
20日	母を敬う	ルカ2:29-32	同上
27日	母を敬う	ルカ2:29-32	同上
6月3日	アブラムの召し	創世記11:27-12:20	同上
10日	困難に立ち向かう	創世記14:13-24	同上
17日	信仰による義認	創世記15:1-16	同上
24日	父の日	創世記17:1-8	同上
7月1日	神の友となる	創世記18:1-33	同上
8日	イサクをささげる	創世記22:1-19	同上
15日	争わないイサク	創世記26:1-33	同上
22日	ヤコブへの約束	創世記27:1-28	同上
	変えられたヤコブ	創世記32:1-33	同上

## 第二期

## 神の前に立つ備え

日	週題	聖書	暗唱聖句
7月29日	人を汚すもの	マルコ7:1-23	同上
8月5日	生きている者の神	マルコ12:18-27	同上
12日	一番重要な命令	マルコ12:28-34	同上
19日	まことの献金	マルコ12:41-44	同上
26日	良きサマリヤ人	ルカ10:25-37	同上
9月2日	天に宝をたくわえる	ルカ12:13-34	同上
9日	招いておられる神	ルカ14:15-24	同上
16日	神のもとに帰る	ルカ15:1-32	同上
23日	死後の世界	ルカ16:19-31	同上
30日	謙遜な祈り	ルカ18:9-14	同上
10月7日	ぶどう園のたとえ	ルカ20:9-18	同上
14日	人を裁くのは誰か	ヨハネ8:1-11	同上
21日	苦難がある理由	ヨハネ9:1-41	同上

## ●神の国の価値観

日	週題	聖書	暗唱聖句
10月28日	罪とは何か	創世記1:26-3:5	同上
11月4日	罪の支払う報酬	ローマ2:23-マタイ5:46	同上
11日	罪の赦しのために	民数記35:1-15	同上
18日	罪を犯す兄弟に	マタイ18:15-20	同上
25日	信仰とは何か	ヘブル11:1	同上

## ●罪の解決

## 第四期

## 主イエスとの関係

## ●降誕節

日	週題	聖書	暗唱聖句
12月2日	その名はインマヌエル	イザヤ7:10-17	同上
9日	クリスマスの贈り物	ヨハネ3:16-17	同上
16日	ヨセフへの告知	マタイ1:18-25	同上
23日	博士の訪問	マタイ2:1-12	同上

## ●イエスに出会った人々

日	週題	聖書	暗唱聖句
12月30日	年末感謝	マルコ1:40-45	同上
1月6日	皮膚病を患った人	マルコ1:40-45	同上
13日	墓場に仕える人	マルコ5:21-24	同上
20日	病気の娘を持つ人	マルコ5:25-34	同上
27日	長血の女	マルコ9:14-29	同上
2月3日	山麓にいた父親	マルコ10:17-31	同上
10日	金持ちの青年	マルコ10:46-52	同上
	エリコの盲人	同上	同上

## ●私は～である

日	週題	聖書	暗唱聖句
2月17日	柔和で謙遜な主	マタイ11:25-30	同上
24日	安息日にも主	マタイ12:1-8	同上
3月3日	父なる神を示す主	ヨハネ5:19-29	同上
10日	共におられる主	マタイ28:20	同上

## ●受難節

日	週題	聖書	暗唱聖句
3月17日	ゲッセマネの祈り	ルカ22:39-53	同上
24日	ピラトの裁判	ルカ23:1-23	同上
31日	十字架と復活	ルカ23:32-24:12	同上



週 題 従われた主  
聖 書 ヨハネ18・1～11

## 序論

13章でペテロやユダを含めた十二弟子の足を洗って人彼らを最後まで愛し通されたV主は、ご自分が十字架にかかった後にも、弟子たちが信仰を失わないように、もう二つの方法で彼らを力づけられた。すなわち、14～16章の聖霊の約束と、17章のとりなしの祈りによってである。その後主は、堂々と悪の力に向かって進んでいかれる。それは、十字架にかかることこそ、父なる神の御旨に従うことだと確信をもたれていたからである。しかし、裏切ったユダも、第一弟子と自認していたペテロも、神の御旨を理解していなかった。

## 一、ユダの態度

13章27節でわかるように、主はユダの裏切りをよくご存じだった。しかし主は、ユダがよく知っている場所に行かれた(2節)。そこは、主が何度も弟子たちと一緒に祈ったり、話しあったりした所だった。最後の晩餐の席から立ち去ったユダは(13・30)、主の行かれた場所を容易に推察でき、そこにローマ兵と下役どもを案内できた。

ユダは、なぜ主を裏切るようなことをしたのだろうか。当時のユダヤの人々を苦しめていたローマの軍隊を奇跡的な力で滅ぼし、ダビデ王の時代のように強く繁栄した国を建てようという主に

失望したのかもしれない。またユダは、預かっていた皆の生活費をごまかしていたので、それがばれることを恐れていたとも考えられる。

## 二、主イエスの態度

満月の夜であるのに、さらにたいまつやあかりをもって主を捜しにやってきた兵士たちに、主は「だれを捜しているのか」と尋ねられた。まさか目の人物がその人だとは思わなかった彼らは、**「ナザレのイエスをVと言った。主は堂々と入わだしが、それであるVと答えられたが、これは神の御名を示す表現である。この権威あることばに敵は圧倒され、地に倒れてしまった。バックストンは、これを詩篇27・2の成就だと説明している(『ヨハネ伝講義』二五二頁)。**

あわてた敵は弟子たちも捕まえようとしたのだろう。しかし直前の17・12で仰せられたように、主は弟子たちを守られる。単に肉体の命だけではない。弟子たちが永遠の命を得るために、主はご自分の命を差し出されたのである。確かに主は、**「羊のために命を捨てるV良い羊飼いであった。**

この主の生き方は、現在の私たちにも及ぶものである。私たちが永遠の命を得るために、主は進んで悪の力にご自分をお渡しになった。**「あなたに与えてくださった人たちの中のひとりも、わたしは失わなかったVという主の言葉の「ひとり」とは、主を救い主と信じる現代のわたしのことであり、またあなたのことなのだ。**

## 三、ペテロの態度

この時ペテロは、「主を最も愛している私こそ主を守らねばならない」と思って、敵の僕の耳を切り落とした。しかし主は彼の間違った愛の表現を正されたのみか、奇跡的に人その僕の耳に手を触れて、おいやしになったV(ルカ22・51)。本当の愛とは、主がなされたように迫害する者さえも愛することである。しかしペテロはまだそれを理解してはいなかった。父なる神の御旨が何であるか、わかっていなかったのである。

## 四、従われた主

父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないかVとの主の言葉に注目しよう。他の福音書も杯について述べているが、父がわたしに下さったVと説明するのはヨハネだけである。旧約聖書では、杯は苦しみとか神の怒りの象徴として用いられている(イザヤ51・17、エゼキヤ25・15)。罪人に下されるべき父なる神の怒りを、何の罪もない御子イエスが、罪人の代わりに引き受けられた。これを父なる神の御旨と受けとめ、それに従われたことこそ、私たちの救いの基盤なのだ。

## 結論

主は、ユダヤ人から強制されて十字架にかけられたのではない。父なる神の御旨に従い、ユダヤ人をはじめ人類のために、自ら進んでご自分の命を差し出されたのである。この事実を心から感謝して受けとめねばならない。

## 研究資料

## キリストの受難における自発性

捕縛から十字架の死に至るキリストの受難の有り様を見ると、見逃してはならないことは、それがキリストの自発的、意志的な決断によって起こったということである。すなわち、キリストの死は、単にユダヤ人たちの陰謀から逃れるすべがなかった故に、悲劇的に起こったというものではなかった。キリストご自身が、受難を選び取られたということが、見過ごされてはならない。

このことは本日テキストにおいては、4節と11節で明らかである。またマタイは、並行記事の中で、以下のような主のお言葉を記録している。

「それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」(26・53、54)。

また、ヨハネによる福音書は、他のいくつかの箇所においても、キリストの受難の能動性、自発性を、特に強調している(3・14、10・17、18、12・24、25、13・18)。

私たちの救いは、キリストが十字架での御苦しみをご自ら引き受けて下さったことを土台としているのだ。

## テキスト

1 これらのことを語り終えて 13～17章の内容を指す。

ケデロン谷 ケデロン谷は、エルサレムの町の東側、町とオリブ山との間にあった。

園 ゲッセマネと呼ばれる園(マタイ26・36)。

2 イエスを裏切ったユダ ユダが主を裏切るに至った原因については、いろいろなことが言われている。期待したメシヤ像との食い違いによる失望、預かっていた金銭のごまかしの発覚を恐れて(ヨハネ10・6)、あるいは、捕らえられても死刑にはなるまいとの思惑(マタイ27・3)等が指摘されるが、最終的なこととして、聖書が明確にしているのは、ユダにサタンが入ったということであった(ルカ22・3、ヨハネ13・2)。

だびたびそこで集まった おそらく、礼拝と祈りの場所として用いられたのであろう(ルカ22・39、40)。

4 自分の身に起ころうとしていることをことごとく承知しておられ、進み出て 今後起こる捕縛、裁判、十字架での苦難と死を承知された上で、毅然としてそこに進み出られるキリストの姿が示されている。

5 わたしがそれである ギリシア語で「エゴ・エイミ」。これは、当時親しまれていたギリシア語訳の旧約聖書では、出エジプト記3・14に神の御名として登場する(ヨハネ8・58でも見られる)。**6 彼らは…地に倒れた** キリストの神ご自身としての権威と栄光が、この時、瞬間的に現された

故であるかもしれない。神であるお方が、自ら捕らえられ、十字架の御苦しみを引き受けて下さったからこそ、私たちの救いが成立した。

8 わたしを捜しているのなら、この人たちを去らせてもらいたい ご自分の命が死に向かおうとしている中にも、良い羊飼いとて、弟子たちの安全を求められるキリストの姿が表されている。

9 …とイエスの言われた言葉 17・12

10 シモン・ペテロは…大祭司の僕に切りかかり衝動的なペテロの性格がよく表れている。

11 剣をさやにおさめなさい 「剣をとる者はみな、剣で滅びる」(マタイ26・52)。神の救いの計画は、このような形で力を示すことは全く別のところにあった。

父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないかキリストの父なる神への絶対的な従順とともに、自発的に受難へと向かおうとされる主の断固とした意志が表されている。「杯」は、ゲッセマネの園での祈りにも用いられたが、「わが父よ、もしできることでしたら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」(マタイ26・39)や、「わが父よ、この杯を飲むほかに道はないのでしたら、どうか、みこころが行われますように」(マタイ26・42)とのお言葉と比べると、既に受難をご自分のものとして引き受けておられることが、明確に言い表されている。主イエスが、ご自分から、神の御怒りの杯を飲み干して下さったことによって、私たちは救われた。

## ● 週題 従われた主

● 聖書 ヨハネ18・1-11

● 暗唱聖句 父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか。ヨハネ18・11

● 目標 主イエスが父なる神のみ心に従われたゆえに、私たちは救われたことを発見する。

## 導入

私たちの思い描く神様の姿と聖書の示す神とが異なっていることがあります。そんな時、間違っているのは聖書ではなく、自分の方です。イエス様の弟子の中にも、イエス様の救いが自分の思い描く救いではないため、イエス様が間違っていると思ってしまう人たちがいました。

## (起) ストーリーを語る

イエス様が弟子たちの汚れた足を洗ってくださったとき、その中にユダもいました。イエス様はユダも救われて欲しかったのです。しかし、ユダにはイエス様の御心は伝わりませんでした。洗足の直後に、彼はイエス様の居場所を教えるため、祭司長たちの所へ出て行ったのです。

ユダがイエス様を裏切ったのは、ユダヤ人を支配していたローマ帝国をイエス様が奇跡的な力でやつつけてしまわないので、失望したという理由もあるでしょう。またユダは、預かっていたみんなの生活費をこまかしていたので、それがばれる

のを恐れていたのかもしれませんが。

ユダは、イエス様たちが、洗足の後にケテロンの谷の向こうにあるゲッセマネの園に行かれることを知っていました。そこで、彼はローマの兵隊たちと役人を連れて、そこへやってきました。兵隊たちはたいまつと武器とを携えていて、まるで凶暴な殺人鬼を逮捕するかのようです。

イエス様が「だれを捜すのか」と言って、出てゆかれると、彼らは「ナザレのイエスを」と答えます。するとイエス様は、「わたしはそれです」と答えられました。すると彼らは、あつさりして倒れてしまったのです。イエス様は、もう一度同じことを繰り返し、「わたしを捜しているなら、彼らを去らせなさい」と、弟子たちがつかまらないうちにされました。

そのときです。剣を持っていたペテロは敵に切りかかり、一人の人の右の耳を切り落としてしまいました。すると、イエス様は「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」とおっしゃって、ペテロを引き止めたのです。そして、切られた人の耳をいやしてあげました。こうして自分から、イエス様は捕らえられました。なんと弟子たちは、それを見て一目散に逃げ出してしまいました。

## (承) 学ぶべき真理

ユダもそしてペテロも、父なる神様のご計画を知りませんでした。ですから、ユダは裏切り、ペテロは剣をとったのです。しかしイエス様は、父

なる神と一つになって、人類の救いの計画を実行されたのです。

神様のご計画とは、神の子のイエス様が十字架にかかって、死なれることです。それは、罪人に下される罰を、神の子であるイエス様が身代わりになって受けることでした。十字架は、イエス様にとっては苦しいことでしたが、あえてそれを受け入れられました。イエス様が心から父なる神様のご計画に従われたので、私たちは救われるのです。

## (転) 生活への適用

ユダやペテロのように、神様を誤解することが私たちにもあります。たとえば、「これだけ祈っているんだから、神様はパソコンを与えてくださるはずだ」と思っても、動機が悪ければ神様はきかれません。神様の救いの計画は、罪から救う計画から始まります。みなさんも、まず、罪から救われ、神の国とその義を第一とするなら、すべてのものは添えて与えられるようになります。

## 結論

「父がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」と言って、イエス様は十字架に向かって行かれました。このことによって、世界中の人々が罪から救われる道が開かれたのです。

罪のない神の御子が、私たちの罪の身代わりになってくださったのです。みなさんの思い描く神様の姿と異なりますか。けれども、これが真の救い主の姿なのです。

## ワーク A

● 暗唱聖句 (4月1日〜15日)

見ないで信する者は、さいわいである。

(ヨハネ20・29)

● 用意するもの (フラッシュカードが最適)

\* 紙芝居「イエスさまのくるしみ」

(キリスト教視聴覚センター)

● 導入のヒント

ケンちゃん、理由もないのに「あなたをつかまえます」と言われたらどうでしょう。きっと「いやだ。何もしていないよ」と言って、逃げ出すでしょうね。イエス様は、どうだったでしょう。

● ワークは、神様のみこころにかなうように生きるための具体例を示すものです。まだ字をならっていない幼児には、説明が必要でしょう。

## ワーク B

● 質問1 ユダ、イエス様、ペテロの気持ちと行動を話し合いながら考えましょう。

● 質問2 十字架は、「わたしの罪のため」であったことを具体的に話し合いましょう。

● 質問3 本日の暗唱聖句です。「杯」の意味を語り、イエス様が従って下さったから私たちが救われることを感謝しましょう。

● 賛美歌 「じゅうじか」

(ふくいん子どもさんびか14番)

● 今日のお祈り「イエス様が私たちのために十字架に向かって下さったことを、心から感謝します。」

## ワーク C

● 質問1は観察質問です。キーワードは「杯」になることはすぐわかるでしょう。「父」がだれであるかも、確認しておいてください。

「ドクター・ゴッホ」は、①前後をつなぐため、②用語を解説するために、時々登場します。

● 質問2は意味質問で、「杯」とはどういう意味かを発見させます。

● 質問3は適用質問です。イエス様があえて苦しむ十字架に向かった理由を、それにどう応答するかを一人一人に考えてもらいましょう。時間を十分に与えてください。

## ワーク D

● 質問1 ユダについて。aで事実を把握させ、bでより深く考えさせましょう。生徒の考えを受けとめて、「神の救いの計画が理解できていなかった」と気づくように導いてください。

● 質問2 ペテロについて。「あなたならどうしますか」という問いは、学校における暴力などについて適用できるようにしましょう。

● 質問3 イエス様について。bの問いが一番大切です。じっくり考えさせましょう。

● 質問4 これについては、いろいろな意見が出てくるかもしれませんが、最後には、主の従順によって与えられた救いを、自分のものとするところにまでもっていくようにしてください。

## 中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 なぜユダは、イエス様を憎んでいた祭司長や役人に、イエス様のおられるところを教えたのでしょうか。

2 ユダに率いられた兵士が近づいて来たとき、イエス様が逃げなかったのはなぜでしょうか。

3 イエス様の言われた「飲むべき杯」とは何のことでしょうか。(答へ人類の罪のために十字架にかかって死なれること)

● 自分に当てはめてみよう

1 他の福音書によると、イエス様は、「この杯をわたしから取りのけてください」と祈られた後、続いて、「みこころのままに」と祈られ、十字架にかけられることが神のみこころだと確信されました。私たちは、このイエス様のように、神のみこころを求めているでしょうか。

● 話し合ってみよう

1 神の子である主イエスは、神のみこころがなるようにと祈られました。みこころの道を歩むことは簡単なことではありませんでした。むしろ大変な苦しみが予想されました。しかし、祈りの中で、確信を持って十字架の道を歩まれました。

2 私たちも、神のみこころを聖書によって知ることができそうですが、知ることと実際に行うことには違いがあります。実際に行って勝利を得るために何が必要なのでしょう。

週 題 救いの完成  
聖 書 ヨハネ19・28～30

## 序論

木曜日の夜に逮捕された主イエスは、その夜の間にまず大祭司カヤパの前に引き出され、宗教裁判による有罪判決を受けた。その後、ローマ総督ピラトのもとでの政治裁判に回された。総督の許可がなければ、死刑を執行できなかったからである。そして金曜日の朝、九時頃に十字架につけられ、十二時頃には全地が暗くなった。今日の聖書箇所は、その後の出来事を描いている。この間に主は、七言の後半四つを言われたのだろう。ヨハネはその内、二つを記しているが、どちらも神の救いの計画が完了したことを示唆している。

## 一、わたしはかわく

△わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですかV(マタイ27・46)と叫ばれた主は、苦難の絶頂を味わっておられた。バックストンは、主の苦しみは三重だったと言う。肉体においては釘づけられた手足の傷、精神においては人々の罵り、そして靈魂においては全人類の罪を負う痛みである(『ヨハネ伝講義』三七六頁)。父なる神に捨てられるはずがない、聖い神の御子が見捨てられたからこそ、罪ある者が救われる道が開かれたことを肝に命じたい。

釘が打ち込まれている主の両手両足からは、と

めどもなく血が流れ出ていた。からだ中の水分が

ほとんど減っていったこの時に、主は△わたしはかわくVと言われたのである。これは、詩篇69・21の成就だった。主がそのように言われたのは、

△今や万事が終ったことを知ってVであることに注目しよう。「終った」という語は、30節と同じであり、「完了した」と訳する方が正確である。主のかわきは私たち罪人の受けるべき刑罰の身代わりだった。ルカ16・24では、黄泉に落ちた金持ちが、△ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてくださいVと願っていることを思い出す。主はご自分の肉体をもつて、罪人が受けるべき苦しみを、代わりに体験されたのだ。

## 二、すべてが終わった

△すべてが終わったVという言葉は、「もうこれで何もかもおしまいだ」とか、「これでやっとわたしの苦しみも終わった」などという意味ではない。主イエスのなすべき使命が完了し、全人類の救いという神の計画が完成したのだ。

ライルは、「完了した」を次の六つの意味において理解している。①神の義を満足させるために必要なすべての支払いが完了した。②神の救いの計画が完了した。③主が神の聖なる律法を守るというわざを完了された。④律法が予表していた全てのいけにえが、主によってささげ終えられた。⑤旧約の預言がすべて成就した。⑥受けるべき苦しみをすべて味わわれた(『福音書講解』ヨハネ第四

卷三〇七～三〇八頁)。

ヨハネ以外の三つの福音書は共通して、死の直前に主が大声で叫ばれたことを記している。きつとこの「完了した」という言葉だったのだろう。それは決して苦しみの叫びではなく、サタンに対する勝利の宣言であった。

なすべきことを完了されたからこそ、主は△息をひきとられたV。これは直訳では「息を引き渡す」という意味で、ルカが記す最後の言葉、△父よ、わたしの霊をみ手にゆだねますV(23・46)と同じ内容である。聖書では、主イエスの死を言う場合だけにしか用いられていない。ヨハネもルカも、この表現を用いることによって、主がご自分の意志によって地上における自分の使命を終えられたことを明白に示している。

## 三、信仰によって受け取る

救いが完成した以上、それに人間が何かをつけ加える必要はまったくない。ただ単純に受け取るだけでいいのだ。信仰とは空っぽの手である。小島伊助師は、「手のものを、みな地におきて、清水かな」という俳句を紹介し、これが信仰だと教えてくださった。

二千年前の十字架で、救いは完成している。今の時代に必要なのは、それを受け入れる信仰だけである。だからこそ、どんな罪人も、病人も、老人も、子どもも、同じように救われることを忘れてはならない。

## 研究資料

## 十字架上の七言

キリストが十字架で語られたお言葉は、聖書中に七つ記録されている。時間的には、以下のような順序が想定される。

- ①「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)。
- ②「よく言うておくれ、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであらう」(ルカ23・42)。
- ③「婦人よ、ご覧なさい。これはあなたの子です。……あらなさい。これはあなたの母です」(ヨハネ19・26、27)。
- ④「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」)(マタイ27・46、マルコ15・33)。
- ⑤「わたしは、かわく」(ヨハネ19・28)。
- ⑥「すべてが終った」(ヨハネ19・30)。
- ⑦「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ23・46)。

## 十字架による贖いの完成

十字架は、人類の救いに関する壮大な計画を完成させるものであった。

それは、旧約聖書の初めから預言されていたことの成就であった(創世記3・15)。また律法を要求することなく満たし、律法ののろいから贖い出

すものであった(ガラテヤ3・13、ローマ3・31、ローマ10・4)。一度限りのこのみわざによって、永遠の贖いが成し遂げられ、贖罪に関わる古い儀式は廃棄された(ヘブル9・12章、10・11～14)。主の十字架こそは、まさに「とがを終わらせ、罪に終わりを告げ、不義をあがない、永遠の義をもたらす」(ローマ9・24)すものである。

この十字架の故に、私たちの罪過は赦され、罪責は完全に消し去られた(コロサイ2・14)。私たちは、自らの救いのために、十字架のみわざに何かを付け加える必要はないし、付け加えてはいけないのである(ガラテヤ5・3、4)。私たちは、主が十字架上で成し遂げて下さった贖いのみわざのゆえに、信仰によって安息することができ、ほふられた小羊こそ、とこしえにほめたたえられるべきである(黙示録5・12)。

## テキスト

28 今や万事が終ったことを知って 「終った」は、30節と同じギリシア語「テテレストαι」で、人類の贖いのためのみわざがすべて完了したことを自覚して、の意。

わたしは、かわく 大量出血のための激しい肉体的渇きを言い表されたものであろう。地獄の苦しみは、火による激しい渇きとして知られるが、主は、私たちがそのような苦しみを受けることがないためにこの苦しみを受けて下さった。同時に、そこには、十字架上でなされようとしている神の「計画を思い、そのことによって満たされよう」と

する霊的な渇きが、言い表されているのかもしれない。

聖書が全うされるためであった 一般に、続く29節から、詩篇69・21のことを指していると考えられている。

29 酔いどう酒 兵士たちが自分たちのために持ってきていたのであろう。

イエスの口もとにさしだした 詩篇69・21から考えると、悪意からとも解釈できるが、必ずしもそうとは限らない。

30 すべてが終った ギリシア語では、一語で「テテレストαι」。「完了した」の意。人類の罪の贖いのための計画が、この時完成されたことを言い表されたお言葉。このお言葉の故に、私たちは、贖いのための一切が成し遂げられていることを知り、信仰による安息を得ることができるのである。

息をひきとられた 直訳では、新改訳のように、「霊をお渡しになった」。父なる神にご自分の霊を委ねられての死であった(ルカ23・46参照)。





## 礼拝メッセージ例

## ●週 題 救いの完成

●聖 書 ヨハネ19・28～30

●暗唱聖句 すべてが終(わ)った。

●目 標 二千年前のイエス様の十字架によ

つて救いの御業が完成していることと発見する。

## 導 入

イエス様は、二千年ほど前に十字架上で死なれ、「完成した」と言われました。イエス様は、いったい何を完成されたのでしょうか。

## (起) ストーリーを語る

祭司長や律法学者たちは、イエス様をなんとか殺そうと、ありもしない罪を言いたてました。しかし、総督のピラトは、「私はこの人には罪を認めません」と正直に言いました。そこで、祭司長たちは群衆に、「十字架につけろ」と激しく叫ばせて、暴動がおきそうに見せかけました。すると総督としてユダヤの国を治めなければならぬピラトはおしきられてしまい、しかたなくイエス様を十字架につけるように命じたのです。

イエス様はもう2人の十字架につけられるとともに、自分のつけられる十字架を背負い、ゴルゴダ(どくろ)という意味)の処刑場へ向かわれました。そこでイエス様は、手と足を釘で十字架に打ちつけられました。それから、十字架が真つ直ぐに立てられました。全ての体重が、イエス様

の手と足の釘を打たれたところにかかりました。それはそれは、ものすごい痛みだったでしょう。

そこには、母のマリヤやマグダラのマリヤなどが立っていました。彼女らの悲しみをよそに兵士たちはイエス様の着物を分配しました。でも下着は一枚布なので裂かずに分配したのです。これは旧約聖書に預言されていたとおりでした。

その時イエス様は、弟子のヨハネと母マリヤを見て「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と、おっしゃいました。ヨハネはこの時からマリヤを自分の家に引き取ります。イエス様は、ご自分が極限の痛みと苦しみを感じているときでも、お母さんのことを気づかっておられました。

この後、イエス様は全てのことが完了したことを知り、へわたしは、かわくVと言われました。見ると、そこに酔いぶどう酒が置いてあり、処刑係がそれに海綿をひたして木の枝につけ、イエス様の口もとに差し出すと、イエスはそれをなめられました。これもまた、旧約聖書に預言されていたとおりです。

そしてイエス様は最後にへすべてが終わったVとおっしゃって、頭をたれて、御自分の霊を父なる神様にお渡しになりました。この言葉の意味は「完了した」もしくは「完成した」という意味です。すなわち、神様が計画しておられた御業が、イエス様が十字架につかれることによって完成したと言ったことです。イエス様の十字架は、旧約聖書に預言されていたとおりであり、神様の計画を完成するものでした。

## (承) 学ぶべき真理

完成したということは、あと何も付け足す必要がないということです。イエス様が二千年前に十字架につけられたことで、神様の救いの御業は完成しました。イエス様の十字架は、罪人が受けるべき刑罰と支払うべき弁償の身がわりだったので、罪からくる弁償は死であり、罪からくる刑罰は永遠の滅びです。イエス様が十字架という刑罰と死という弁償をわたしたちの代わりに支払われたので、救いは完成しました。イエス様を信じて受け入れた人の罪は、イエス様が身代わりに受けてくださいます。しかも、ただ信じるだけでよいのです。完成した救いに、何も付け足す必要がないからです。

## (転) 生活への適用

さて、皆さんはよいことをしたら天国に行けると思いませんか。それは、イエス様の十字架だけでは不十分で、自分のよい行いが必要だと言っているようなものです。イエス様を信じたら天国に行けるのです。他には何も必要ありません。

## 結 論

イエス様の十字架は、聖書に預言されたとおりの出来事です。そしてそれは神様の人類を救う計画の完成なのです。あなたがイエス様を信じて受け入れるなら、あなたの罪の刑罰と弁償は、イエス様が十字架によって身がわりに受けて下さいます。あなたも今日、イエス様を信じて、この完成した救いを受け取りませんか。

## ワーク A

## ●用意するもの

\*紙芝居「しゅはよみがえられた」

(キリスト教視聴覚センター)

\*「十字架にかかられたキリストの絵」等

## ●導入部のヒント

マリちゃんは、けがをした事がありますか。おひざをすりむいたりしただけでもとても痛いね。先生は足の指の骨を折ったことがあります。その時は本当に痛かったです。じゃあ十字架のイエス様はどうでしょう。神様だから痛くなかったのでしょうか。いいえ、とても痛かったのですよ。

●ワークの迷路は、十字架を通ってのみ、天国へ行けることを明確にする目的があります。

## ワーク B

●質問1 本日の暗唱聖句で、イエス様の十字架上の最後の言葉です。「終わった」とは、「完成した」「これで十分」という意味であることを十分説明してください。

●質問2 下から選んで文章を完成します。二千年前の十字架ですが、「今」も信じる人には有効であることを語り、「わたしも信じます」と告白できるように導きましょう。

●賛美歌 「さあノイエスさまを信じましょう」

(ふくいん子どもさんびか1番)

●今日のお祈り 「イエス様、十字架で救いの道を完成してくださってありがとうございます。」

## ワーク C

●暗唱聖句は、口語訳で「すべてが終わった」です。でもこの表現だと、「万事休す」という意味にも取られかねません。よって、「成し遂げられた」(新共同訳)、「完了した」(新改訳)の訳語を確認しながら、「救いが完了した」という意味であることを知らせます。

●「すべて のさら をわった」というのは「すべて：おわった」の引っかけです。

●上部のイラストにある「テレストアイ」は、この30節のギリシャ語であることを知らせたら良いでしょう。最後の「イタイイタイ」でフツと笑うと楽しいかもしれません。

## ワーク D

●質問1 十字架の受苦を他人事でなく自分の体験をもとに考え、刑罰の重さ、罪の重さを知る試みです。質問4の前にも良いでしょう。

●質問2のb 単に肉体的極限状態としてだけでなく、詩篇69・21に預言されていることを示して、救いの計画の深さと確かさを話します。

●質問3 罪の身代りとしてのわががすべて完了したこと、またそれは繰り返す必要のない一度限りの出来事であることをハッキリさせます。

●質問4 自分も罪の刑罰を受けるべき者であるが、信じるなら救われることを語りましょう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 イエス様は十字架上で、「わたしは、かわく」と言われました。なぜだと思えますか。

2 イエス様は、ご自分の罪のために十字架につけられたのでしょうか。それとも私たちの罪の身代りとなって、私たちに下される罪の裁きを受けられたのでしょうか。

3 「すべてが終わった」という言葉は、「残念で無念だ」というあきらめの表現でしょうか。それとも悪への勝利を意味するのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 私たちは、罪から救われているという確信を持っていますでしょうか。

2 もし救いの確信がないとしたら、それはなぜでしょうか。

3 神の救いを得るために、私たちは何をしたらよいのでしょうか。

## ●話し合ってみよう

神は、私たちが罪を悔い改めるように、昔は預言者を遣わして警告してこられました。二千年前にはひとりイエス様をお遣わしてくださいました。イエス様は、警告するためではなく、私たちの罪の身代りとなるために遣わされたのです。私たちが負いきれない罪の負債を、代わって払ってくださったイエス様の十字架は、現在でも効力があります。この二千年前のイエス様と私たちに、どんな関係があるのでしょうか。

## ワーク解説

週 題 復活された主  
聖 書 ヨハネ20・19・29

## 序論

よみがえられた主は、次の順序でご自身を現された。最初はマグダラのマリヤに（本章前半）、次いで墓から帰途についていた婦人たちに（マタイ28・9）、三度目はペテロに（ルカ24・34、1コリント15・5）、四度目はエマオに向かう二人の弟子に（ルカ24・13）。だから今日のテキスト19節の顯現は五度目になる。（本章の記事は、書き方は違いますがルカ24・36〜43と同じ時の出来事ではないかと推測される。）この箇所、主が三度「安かれ」と言われている点に注目したい。

## 一、弟子たちの恐れ

主は、十字架と復活のことを、何度も弟子たちに予告されていた。しかし十字架刑が実現したこの時でも、彼らはだれ一人、本気で主の復活を信じていなかった。しかも18節では、マグダラのマリヤが、主とお会いしたことを彼らに伝えていたにもかかわらず、かえって彼らは、自分たちも捕らえられるのではないかと恐れていた。それほど復活は、彼らの想像もつかない出来事だったのである。現代の多くの人々が、「キリスト教は、復活など非科学的なことを言うから、はやらないのだ」と批判するのも無理からぬことだろう。

だが復活がないなら、人間は死の不安から解放

されることはできない。弟子たちが恐れていたのは、単に逮捕されることだけではない。その後、殺されることが予想されたからである。

## 二、主が与えられる平安

その日の夕方のことだった。突然に主が、嚴重に戸締まりされていた部屋にはいつてこられた。彼らはどれほど驚いたことだろう。ルカは「彼らは恐れ驚いた」と記録している（24・37）。その彼らに主は「安かれ」と仰せられたのである。

十字架にかかられる前夜、主は弟子たちに「わたしの平安をあなたがたに与える」と約束されていた（ヨハネ14・27）。でも彼らはその約束を信じていなかった。その不信仰な弟子たちに、主は傷のあるご自分の手とわきとお見せになられ、ご自分がどこにでも存在されることを示された。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいる」という約束は、罪の赦しという文脈の中で語られていることを忘れてはならない。主は不信仰な彼らに現われ、「神と和らぐ平安」を与えられた。

これと比較して、21節で主が与えられた平安は、「働きの中に得る平安」と言える（バックストン）。弟子たちが世に遣わされるときに与えられるものである。この世では反対があり、迫害があるだろう。しかし聖霊を受けるなら、弟子たちはその中でも平安をもつことができる。また罪を赦す権威さえも与えられるのだ。

## 三、トマスの場合

しかし、トマスだけはその時、この場にいなかった。他の弟子たちがマリヤの証言を信じなかったのと同様に、トマスも弟子たちの証言を信じようとしなかった。彼はもっと明確に、「釘あ」とを見、指をそこにさし入れなければ信じない」と宣言したのだ。ヨハネは11・16と14・5でトマスの言葉を記しているが、どちらの場合にも消極的で悲観的な彼の性格が表れている。

それから一週間、トマスは不安な日々をおくったであろう。「ああは言ったものの、ペテロもヨハネも、今までと違う。主の復活は本当なのか。それを信じられない私は、呪われた者なのか」。

弟子たちも、不信仰なトマスを追いつきはしなかった。自分たちも信じられない時があったからだろう。そして次の日曜日、主は再び弟子たちのいた家に現れ、トマスの前に立たれた。その時も主は「安かれ」と言われたことに目を向けよう。主はトマスの不安な心を知っておられた。そして彼を叱責されないばかりか、彼が信じられるように手とわきとを示されたのである。それだけで十分だった。彼は「わが主よ。わが神よ」と、主イエスこそ真の救い主であると告白したのだ。

## 結論

現在、私たちは主を見ることはできない。だから復活を信じるのは容易ではない。しかし、二千年間、見ずに信じた人々は存在し続けた。彼らは死を恐れず、復活を宣べ伝えてきたのである。

## 研究資料

## 生けるキリスト

先週学んだように、主は、十字架上で私たちの罪の贖いのための一切を成し遂げて下さった。それゆえ、私たちは、成し遂げられたみわざに安息し、ただ信仰によって救いを得ることができ

る。しかし、私たちの信仰の対象は、死んでそのままになられたお方ではなく、よみがえって、今も生きておられるお方である。復活日を迎え、今も生けるキリストを、信仰の目をもって仰ぎたい。

## 信仰の本質

「見ないで信する者は、さいわいである」との今回の暗唱聖句は、信仰の本質を明確に示している。ヨハネによる福音書は、キリストがなさったいくつものしるしを記録しており、それらは、信仰への契機となるためのものであることを明らかにしている（2・11、4・53、54、20・30、31）。主は、私たちを、「見ただけで信する信仰」から、更に「見ないで信する信仰」へと招いておられる。信仰の最後の決断には、「見ないで一步を踏み出す」という信仰の一面が伴う。子どもたちに対して信仰への招きを行う時、私たちの側でも、働き給う主への信仰を持ちたいものである。

## テキスト

19 その日 主が復活され、マグダラのマリヤが

主にお会いした、その日（1節）。

ユダヤ人をおそれ、主の捕縛、不当な裁判、十字架刑の執行は、弟子たちにとっても、命の危険を感じさせるに十分であったろう。

戸をみなしめていて、弟子たちの恐れを表れ、イエスがはいってきて、復活された主のお体は、物質的なお体であった（単なる霊ではない。ルカ24・39）が、同時に、「霊の体」であって（1コリント15・44）、閉め切った戸や壁にさえぎられず、自由に行き来できたと考えられる。

安かれ この時の弟子たちが最も必要としていた平安を受けるようにとの招きであると同時に、復活の主はその平安を与えることができるということの、再宣言でもあったであろう（14・27）。

20 手とわきとを、彼らにお見せになった。まさしく十字架にかかられた主であることの立証。

弟子たちは主を見て喜んだ。恐れに満たされた弟子たちの心は、復活の主を見て一変した。復活の主への礼拝は、常に喜びを与える。

21 安かれ 主の与える平安こそは、続く派遣のために必要とされる。

父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす。天から遣わされた主は、天に帰ろうとしておられる。以後、主は、弟子たちを通して働きを進めようとされている。

22 息を吹きかけて 主の息としての聖霊を受けるようにとの象徴的行為。

聖霊を受けよ 聖霊を受けることなしに、主から派遣されての任務を、遂行することはできない。

23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ。福音宣教の働きに伴う大きな権威を示唆する。

24 トマス 11・16、14・5に見られる彼の言葉からは、主への愛と同時に、物事の消極的な面を見ようとする傾向も伺える。

25 その手に釘あとを見、わたしの指を。他の弟子たちの証言に対する、深い懐疑の念が表されている。

26 八日のち 「一週間後」を意味するユダヤの表現。復活の主の再度の顯現は、やはり日曜日であった。このことは、日曜日礼拝への契機となったであろう。

トマスも一緒にいた。以下、戸を閉め切った中への顯現や、「安かれ」とのお言葉は、一週間前と同じ。他の弟子たちと同じように、トマスをも愛しておられる主の御思いを思わせる。

27 あなたの指を。手をのばし。疑い深いトマスに「信じない者にならないで、信する者にならないで」と、不信仰から信仰へと導こうとする、慰めに満ちた叱責。

28 わが主。わが神 不信仰を恥じつつ、彼としての精一杯の信仰告白。

29 わたしを見たので信じたのか。見ないで信する者は、さいわいである。見てはじめて言い表されたトマスの信仰告白を受け入れつつ、見ないで信する信仰へと励ましておられる。



## イースター

● 週 題 復活された主

● 聖 書 ヨハネ20・19～29

● 暗唱聖句 見ないで信する者は、さいわいである。  
ヨハネ20・29

● 目 標 自分の経験に基礎をおく信仰ではなく、復活の事実に基づいた信仰をもつ。

## 導 入

私たちは、自分の目で復活された主イエス様を見ることはできません。しかし、人見ないで信する者は、さいわいであるVと主は言われました。なぜ見ないで信することがさいわいで、どうしたら見ないで信することができるのでしょうか。

## (起) ストーリーを語る

「おい、だれか来るぞ、戸は締まっているか」  
こんな声が、いつものように聞こえてきます。話しているのは、イエス様の弟子たちです。彼らはイエス様を十字架につけたローマ兵や祭司長たちが、自分たちを捕えに来るのではないかと、びくびくしていました。そんな彼らは、その日の朝に墓の前でイエス様と会ったというマリヤの言葉に信することができません。目の前で確かに死んでしまったイエス様がよみがえるなんて、そんなバカげたことはおきないと、思っていました。  
ところがその日の夕方のことでした。あいかわ

らず、弟子たちのいる家は嚴重に戸締まりされていましたが、よみがえられたイエス様が、突然その家の中に立たれたのです。そして、弟子たちに「安かれVとおっしゃいました。さらに、彼らに自分の手とわきとお見せになりました。手には十字架につけられた釘の跡があり、わきには槍で刺された傷跡があります。夢じゃないかと思つて、ほつぺたをつねった弟子もいたでしょう。しかし夢ではありません。これは事実だとわかった弟子たちは、やっと喜ぶことができました。そしてイエス様は、父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわすVと言われました。さらに人聖霊を受けよVとおっしゃったのです。

ところがトマスだけは、その所にいませんでした。帰ってきたトマスに、他の弟子たちが「わがしたちは主にお目にかかったVと伝えたのですが、トマスは信することができません。彼は、人その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じないVと言ったのです。それから一週間後の日曜日です。今度はトマスも一緒にいました。やはり戸はみな締まっていたが、イエス様は再び弟子たちの隠れている所に入つてこれ、人安かれVとおっしゃったのです。そしてトマスに、人あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。信じない者にならないで信する者にならないさいVと言われました。トマスが、人わが主よ。わが神よVと答えると、

イエス様は人あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信する者は、さいわいであるVとおっしゃったのです。

## (承) 学ぶべき真理

弟子たちは全員、復活を信じていなかったのに主の復活の事実によって信するようにになります。弟子たちが見たことを口をそろえて証言しても、トマスは信じませんでした。イエス様はそのトマスが信することができるよう、復活の事実を彼に見せられました。見たという自分の経験が基礎になるのでなく、イエス様がよみがえったという事実が基礎になって、信仰はなりたちます。

## (転) 生活への適用

今の時代にイエス様を見ることはできません。見たと言ふ体験がなければ信じないのなら、南極や北極を見た人がいますか。見ていないけれど、証拠と証言によって事実を確認して、信じていますね。イエス様を信じるのも、目には見えませんが、十字架の後によみがえられたという事実を証拠と証言によって確認して、信じているのです。

## 結 論

イエス様が十字架刑から3日目によみがえられたことは、証拠と証言によって確認されます。ですからどんな時代の人も、見ないで信することができません。自分が見たという経験を基礎にするのではなく、イエス様がよみがえったという事実を基礎にして信じる人は、ゆるがない信仰をもつことができます。さいわいなのです。あなたは、見ないで信じられませんか。それとも見ないで信じますか。

## ワーク A

● 用意するもの

\* 紙芝居「しゅはよみがえられた」

「わたしの羊を飼いなさい」ペテロ◎  
(以上キリスト教視聴覚センター)

● 導入部のヒント

今日はイエス様がよみがえられたことをお祝いするイースターです。イエス様は十字架にかかって死なれましたが、それで「おしまい」ではありませんでした。イエス様はわたしたちのためによみがえられたのですよ。

ワークの制作は、イエス様が現実に墓から出てこられたことを強調します。

## ワーク B

● 質問1 パズルでイースターを喜びます。

● 質問2 トマスの信仰告白の言葉です。トマスを愛して、わざわざ会いに来て下さったイエス様です。トマスの感嘆の言葉を味わい、一人一人の信仰告白とさせていただきますしよ。

● 質問3 本日の暗唱聖句です。キリスト教信仰の中心「信じる」ことを共に確認しましょう。

● 賛美歌 「よみがえり」

(ふくいん子どもさんびか70番)

● 今日のお祈り 「イエス様、よみがえってくださってありがとうございます。また、いつも私たちと一緒にいてくださって感謝します。」

## ワーク C

● 「証拠を見せろ」とはよく使われる言葉です。

トマスのように、自分の目で見、自分の手で触れなければ信じない気持ち、生徒自身の心の中にもあるでしょう。トマスのことを尋ねつつ、自分はどうかと考えさせます。

● 「見ないで信じている」ことが多い点に気づかせます。この他の例も考えておいてください。

● トマスは最初、「見ていないから信じない」人であり、物事を筋道立てて考える理論家でした。ところが、そのトマスが信じたのです。それならば自分の目でイエス様を見られない私たちも、疑い深いトマスさえ信じたことを証拠として、信じることができるのではないのでしょうか。

## ワーク D

● 質問1 復活の日の朝からの出来事を、いっしょに聖書の記事を追って確認すること。

● 質問2 弟子の気持ちを考えます。裏切ったゆえのうしろめたさや、主の遺体を盗み出したというわさなどのゆえに、恐れがありました。

● 質問3 トマスについて。先の弟子の不安に加え、疎外感や他の弟子への不信感もありました。人は何を根拠に信じるのかを考えてみます。

● 質問4 主イエスと出会った時のトマスの気持ちを考えます。疑ったのに自分のことを愛し、自分のために現れて下さった主でした。彼の気持ちから、見ないで信じる信仰を考えます。

## 中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 イエス様の弟子たちは、なぜ戸をしめて隠れていたのでしょうか。

2 イエス様の復活を信じられない弟子たちに対して、イエス様はどうされたのでしょうか。

3 トマスは、イエス様の復活を通して、どのように変えられたのでしょうか。

● 自分に当てはめてみよう

1 イエス様の復活を現実に見なければ、信じられませんか。それはなぜですか。

2 イエス様の復活について、私たちが何をすることをイエス様は望んでおられるのでしょうか。

3 イエス様の復活を信じられたら、私たちはどのような人になりますか。

● 話し合ってみよう

復活は、キリスト教の最も重要な教理の一つです。ところで、もしイエス様が復活されなかったとしたら、どういうことになるのでしょうか。

1 コリント15・17には、「もしキリストがよみがえらなかつたとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになる」と書かれています。

復活されたイエス様との出会いは、弟子たちやトマスの信仰を生き生きとしたものに変えましたね。現代の私たちにもイエス様は、「見ないで信する者はさいわいです」と語っておられます。見て信じることは、信仰と言えるのでしょうか。



週 題 天地創造  
聖 書 創世記1・1～31

## 序論

今まで長い間、イエスの生涯を学んできたが、今週から数か月は旧約聖書を扱う。主イエスの十字架によって完成された救いは、すでに旧約の時代から綿密に計画されていたからである。

まず今週は、天地を創造されたお方こそが、本当に神と言える存在であることを学ぶ。世の中には「神」と言われるものが無数に存在するが、それらはみなこの天地に存在するものか、あるいは人間が造り出したものである。しかし聖書はその冒頭で、人はいじめに神は天と地とを創造された」と宣言する。万物を創造された方こそが、万物を支配される方だ。エシミヤははっきりと天地を造らなかつた神々は、地の土、天の下から滅び去る」と言う(10・11)。だから、いつかは死んでしまふ人間が神であるとか、人間が考え出した思想が絶対的な真理であるはずがない。

## 一、聖書記事の解釈

天地創造の記事を、神話的物語と考える人々が多い。確かに、三千五百年も昔の人物であるモーセが、現代の科学的な用語でこの記事を書けるはずはない。今週のテキストは、当時の世界観に基づいて書かれた。だから、それらの言葉をどう解釈するかが重要になってくる。

NASA(アメリカ航空宇宙局)の物理学研究

員だったミッチェル博士は、天地創造の六日間はそのようにも解釈できると言う。第一日→神が創造されたエネルギーの塊が大爆発をおこした(いわゆるビッグバン説)。第二日→水素とヘリウムがガス状の雲を造り、次第に分離していった。第三日→太陽系が創造され、二酸化炭素ガスに包まれた地球が生まれた。植物が種類にしたがって創造されて、二酸化炭素ガスが酸素に変えられていった。第四日→ガスがうすくなって、天体が見えるようになった。第五日→魚類・両生類・鳥類が種類にしたがって創造された。第六日→爬虫類・哺乳類が種類にしたがって創造された。

これが唯一の解釈でないことは確かだが、科学的な用語に慣れている現代人には興味ある説明である。細かい違いがあろうとも、聖書全体が示す解釈法は、現在の天地宇宙は自然にできたものではなく、創造されたものであるとの考え方に基いている。創造したお方こそが絶対であり、その他のものはすべて、このお方の支配に服すべきである。被造物は決して神にはなれないのだ。

## 二、進化論の問題点

進化論の問題点はここにある。稲垣久和によると、進化論と論争するとき、二つの面を考えねばならない。一つは生物が発生した起源についてであり、それについては事実に基づいた科学的な方法論で論争せねばならない。しかしもう一つは、考え方についての論争である。進化論は、すべて

## 研究資料

## 進化論

進化論をどう考えるかは、教会学校で育ってきた子どもたちにとっても、現実的な問題である。子どもによって問題意識の程度が違うので、実際の指導は、適切に行う必要があるが、教師の側では、十分に備えておく必要がある。

各キリスト教出版社から、多数の関連図書が発行されている。特徴的なものとしては…

ヒュー・ロス『創世記の謎を解く』(いのちのことば社)「二日時代説に立つ」

宇佐神正海『崩壊する進化論』(マルコーシユ・パブリケーション)「二日24時間説に立つ」

創造科学研究会監修『ごつちがホント』No.1～6(創造科学研究会)「マンガで、主要テーマを整理」

ここでは、要点のみ挙げておく。

- 一、立証された科学的事実と思われている場合が多いが、進化論は仮説に過ぎない。
- 二、進化論の問題点。(一)上は進化論(特に、ダーウィニズム進化論)の主張。下はその反証。
- ①進化は小さな変化の累積…中間種の化石がないこと。また、小さな変化の累積では説明のつかない各種器官(眼など)があること。
- ②突然変異によって種が変化…多くの研究は、「種」が極度に安定していることを示している。
- ③生命は、偶然発生した…生命の持つ複雑さの故

に、それが偶然に起こることは確率的に不可能。

④いくつかの化石(ウマの足、「類人猿」の化石が進化を証明する…実際は証明できていない。

三、宇宙や地球の年代については、創世記1章の「日」の解釈によって、クリスチャンの間にも意見の多様性がある。

四、人間の存在が偶然の産物であるとすれば、人生の意味や人間の生き方について考えることは虚しいことであろう。「主を恐れることは、知識のはじめである」(箴言1・7)。

## テキスト

【第1日】(1～5節)

天と地、水、光の創造。天と地の創造も、第二日に含まれることについては、出エジプト20・11を参照。

1 はじめに神は 歴史の出発点は、神による天地創造から始まる。これを知ることなしに、人間のあるべき生き方は分らない。

2 形なく、むなしく…神の霊が水のおもてをおおっていた 命も秩序もない状態ではあっても、神の霊による創造のわざは進められようとしていた。

3 光あれ 最も単純に、光(可視光線)の創造と理解する以外に、(地上からの観点に立って)この時、大気が半透明になり、既に存在していた天体の光が地上に届くようになった(4日目)には、完全に透明になった」という解釈もある。

言われた。…すると光があった 御言葉による創

の物は偶然にできたのであり、そこには特別の意味がないと考える(『進化論を斬る』七頁)。

第一の科学的な研究においても、今日、ダーウィンの理論には様々な問題点があることが指摘されている(例えば、フランシス・ヒッチング『キリンの首』ダーウィンはどこで間違ったか『平凡社』)。しかし第二点については、聖書の考え方と真に向かい対立する。天地万物は、すべて神のご計画によって、意味あるものとして創造された。天体も、地球も、動植物も、人間も、すべて神の手の中にある。「万物の霊長」と言われる人間も謙遜にそのことを認め、創造主なる神をあがめなければならぬ。それと同時に、人神のかたちに創造されたすべての人間は等しく重要であり、人種や能力や性別の違いを越えて尊重されねばならない。このような考え方は、すべてを偶然の所産とする進化論からは生まれてこない。

## 結論

聖書が天地創造の記事で始まっているのは、重要な意義がある。これは、聖書全体を理解するための鍵なのだ。同志社大学を創立した新島襄は、創世記1・1を読んで、「これは私の考えていた神と違つ。神社や神だにまつられている神と全く違っている」と悟つたと伝えられている。これから学ぶ旧約聖書のすべてにおいて、「創造主なる神」が重要な位置にあることが、次第に明らかになるだろう。

造。

5 第一日である 「日」(ヘブル語でヨーム)

については、24時間説、(長期の)時代説、その他の理解がある。

【第2日】(6～8節)

おおぞらの出現、水の上下分化。

6 おおぞら 大きなひろがり。

7 おおぞらの上の水 雲のこと考えられる。地上を覆っていた水蒸気が、上方に集まって雲を形成し、その下に大気の空間ができたのかもしれない。

【第3日】(9～13節)

陸の形成、植物の創造。

11 種類にしたがって 一つの種類から別の種類へと変化していったのでなく、最初から種類に従つての創造であった。

【第4日】(14～19節)

太陽、月、星の創造。

14 光 この「光」は2節の「光」とは別語。(新改訳では「光る物」(15、16節も)と訳し分けられる。)

16 大きな光 太陽。

小さな光 月。

【第5日】(20～23節)

水中の生物、鳥の創造。

22 生めよ、ふえよ 魚や鳥には、繁殖力が与えられた

【第6日】(24～31節)(次週研究資料参照)

地上の動物と人間の創造。

# 礼拝メッセージ例

●週題 天地創造  
●聖書 創世記1・1～31  
●暗唱句 はじめに神は天と地とを創造された。  
●目標 神様が、天と地とそこにあるすべてのものを創造されたお方であることを発見する。

## 導入

今まで長い間、イエス様の生涯を学んできましたが、今日から数か月は旧約聖書のお話になります。では聖書の最初のページを開きましょう。きれいに晴れた夜、空を見上げると、月やたくさん星が見えます。私たちの住む地球も、宇宙から見ると、美しい青い星です。こんな広大で秩序だった宇宙が、自然にできたのでしょうか。いえ、そうではありません。神様が天と地のすべてを創造されたのです。

## (起) ストーリーを語る

神様は、形なく、混沌とした所に「光あれ」とおっしゃいました。すると光が生まれました。光は時間や空間や物質を決定する基礎です。神様が言葉を出すだけで、この世界は始まりました。こうして神様は第一日の仕事を完成されたのです。「第一日」と言っても、太陽がまだできていなかったで、今の24時間とは限りません。神様の第二日目の働きは、おおよそを造ることでした。これは宇宙と、そこにある無数の星を意味するのです。

味するのでしょうか。また地球上の物質の代表としての「水」を創造されました。その他の物質もその後して造られたと思われまます。

第三日目の働きは、天の下の水を集めて海を造り、乾いたところを陸とされたことです。また様々な植物も、種類にしたがって創造されました。第四日に、太陽と月と星を創造されたことが記されています。これは、地球の自転と公転が始まり、また地球を取り巻くガスがうすくなつてきて太陽の光がより強く差し込むようになった状態を表わしているのです。

第五日には、光合成によって酸素がどんどん増えて動物の住める環境になったので、空には多数の鳥、海には無数の魚が、これも種類にしたがって創造されました。

そして第六日には、地上に色々な動物が種類にしたがって造られたのです。神様は自分が創造されたすべてのものを見て良しとされました。

## (承) 学ぶべき真理

私たちの住むこの地は、神様に創造されたものです。神様の知恵と力で造られましたから、人間はそれを学ぶことによって神様を発見できます。

## (転) 生活への適用

さて皆さんは、学校で進化論を学んでいます。でも進化論は単なる仮説です。たとえば、爬虫類（とかげなどの仲間）が進化して哺乳類（猿などの仲間）になったと習います。しかし、からだの

構造が進化の途中にあたる生物は、化石をどれだけ調べても発見されません。突然変異で進化するという説もありましたが、遺伝学が進んで、変異は次の世代に遺伝されないことがわかりました。

また、生命が生まれるために必要なタンパク質が自然発生するためには、偶然が何億回も重ならなければなりません。万が一奇跡的にタンパク質ができたとしても、それが人間のように複雑な生物に進化するためには、それこそ途方もないような偶然が繰り返されなければなりません。一秒間に一回そんな偶然がおきても、何千億年という時間ではとても間に合いません。

さらに、人類は猿から進化した、あるいは猿と共通の祖先から進化したという仮説もあります。ネアンデルタール人とかクロマニヨン人とかの骨の化石が発見され、猿から人間に進化する途中の猿人の化石だと言われてきました。しかし、現代の発達した遺伝子検査でその化石の遺伝子を調べると、それらの猿人の化石といわれてきたものは猿と人間の骨が混じったものだったり、絶滅した大型の猿の骨だったり、現代人の骨となら変わらないものだったりすることがわかりました。

## 結論

皆さんが学校で学んでいる進化論は、絶対に正しい真理でなく、一つの仮説に過ぎません。科学的に調べても、神様による創造は間違いないのです。皆さんも、神の知恵で造られた被造物の精巧さを学んで、神様を発見しましょう。

## ワーク A

●暗唱聖句 (4月22日～5月20日)  
神は自分のかたちに人を創造された。

(創世記1・27)

## ●用意するもの

\*本物の花・小さな虫 (アリやだんご虫など)  
●導入のヒント

今日は、小さな虫をもってきました。こんなに小さいのに命があって、ちゃんと動いて、食べて生きています。誰がつくられたのでしょうか。

●「これはだれが造ったのかな」と尋ねながら、ぬり絵をしたり、動物の絵をはったりしましょう。

●ゲーム「どこで生きているの?」  
いろいろな生き物の名をあげ、「陸・海・空」のどこで生きているのかを子どもが答える。

## ワーク B

●質問1 天地創造の過程を調べつつ、神の創造のみ業のすばらしさを味わいましょう。

●質問2 本日の暗唱聖句です。「進化ではなく、はじめから神の手造りであったことをしっかりと確認しましょう。」「わたしも神さまが造り、愛して下さっていることも喜びましょう。」

●賛美歌 「あの空はどうして青いのでしょうか」 (友よ歌おう65番)

●今日のお祈り 「世界をはじめから造って下さったすばらしい神さま、これからも信じていきま

## ワーク C

●このワークでは進化論を扱わなかったため、必要と感じる教師は、研究資料を参考にして説明してください。

●このワークでは、人間が最後に造られた最高傑作であり、私たち一人ひとり大量生産の商品でなく、唯一の作品であることに強調点を置いています。「はなはだ良かった」(31節)は、「極めて良かった」(新共同訳)、「非常に良かった」(新改訳)とも訳されています。自分自身がそのように大切に高価なもの(イザヤ43・4)であることを自覚させてください。

## ワーク D

●質問1 神の行為を表現する動詞に注目して、創造のわざと被造物を書いてください。線で区切って整理しても分かりやすいでしょう。神のわざが、「言われた」という行為によって実現したことを確認しながら整理しましょう。

●aの答は「種類にしたがって」、bでは多くの種がはじめからあったことを説明します。この点で進化論との違いを明確にし、理解力に応じて、進化論が一つの仮説であること、創造の秩序が科学的に矛盾しないことなどを話して下さい。ポケモンなどで進化という言葉が一人歩きしているので、一面的に否定しないように注意が必要です。

## 中高校へのヒント

### ●考えてみよう

1 世界の創造について、あなたはどのように考えていましたか。

2 聖書は、何によって宇宙はできたと語っていますか。

3 世界は偶然にできたという考えがありますが、あなたはどう思いますか。

●自分に当てはめてみよう

1 神が自分を造ってくれたとしたら、あなたはどんな思いがしますか。

2 自然界を見て、神がこれらを造られたとしたら、神はどのような方だと思えますか。

3 学校での進化論の授業は、どのような態度で学んだら良いでしょうか。(答へ仮説として)

●話し合ってみよう  
学校の授業では進化論を学んでいます。この仮説と、神がみことばによって世界を創造されたという聖書の記述とは、対立します。

進化論は無神論を前提にしており、この世界は偶然にできたにすぎないと主張します。しかし、進化論は仮説にすぎません。特に、ダーウィンの考えた進化論をゆるがす多くの事実が、次々に発見されています。あなたは知っていますか。

一度、創世記1章の神の創造の行程を書いてみてください。いかにこの世界が整然と秩序正しく造られたかがわかります。このようにして創造された世界を見て、神様は何と言われましたか。



週 題 人間の創造  
聖 書 創世記1・26～31

## 序論

聖書は、天地創造の記事の中で最も詳細に、二つの章にわたって人間の創造を述べている。人間だけは特別の存在だからである。どういふ点か他の被造物と違ふのかを学んでみよう。

## 一、神に似るものとして

26節は「われわれのかたちに、われわれにかたどって」と口語訳聖書では翻訳されているが、新改訳聖書では「われわれに似るよう」に、われわれのかたちに「V」となっている。つまり、人間は神に似るよう創造された。人間が造られた目的は、神に似るものとなるためである。新約聖書にも、 $\Delta$ 栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていくV(IIコリント3・18)、 $\Delta$ 神にかたどって造られた新しい人を見るV(エペソ4・24)、 $\Delta$ 造り主のかたちに従って新しくされV(コロサイ3・10)など、様々な表現で、神に似ることの重要性が訴えられている。

人間の人生の目的は、金持ちになることでも、博士や大臣になることでもない。人の目にとまる偉大なことをすることでもない。もしそうなら、能力の劣る人や障害をもって生まれた人は、生きている価値がないとみなされるだろう。聖書は、ドゥーイング(行動)ではなく、ビーイング(存

在)の重要性を徹頭徹尾、主張している。たとい貧しくて、からだに不自由でも、神に似た聖い生き方をするからこそ、神が求めておられる人生の目的なのである。

## 二、神のかたちとは

$\Delta$ われわれのかたちVに人を造ろうと、神は言われた。神は人間のように肉体に制限される方ではないから、かたちといっても、外形のことではない。それは霊的な存在、人格的な存在という意味である。 $\Delta$ 神に似るVとは、霊的・人格的に神に近づいていくことに他ならない。

注意すべきは、これは墮落前の人間について述べられていることである。後に学ぶように、人間が罪を犯して以来、この神のかたちを失ってしまった。だから、神の特別の恩寵がなければ、それを回復することができない。御子イエスは、その恩寵そのものとして地上に來られた。神のかたちを具体的に人間に示すために受肉されたのだ。

## 三、神との交わり

霊的・人格的に神に似ていくためには、神と親しい交わりをもつ以外に方法はない。人間は、神と親しい関係をもつことができるように創造されたのだから、望みさえするならば、神との交わりを回復することができる。

墮落した人間は、後に学ぶアダムとエバのように、この神との交わりを避けようとする。しかし人間はこの悪い関係を変えることができるのだ。

## 研究資料

## 神のかたち

人は、神のかたちに創造された。創世記1章26、27節での人間の創造の記事の中で、「かたち」(ヘブル語でツェレム)という語が3度も繰り返されていることは、これが、人間の本質を理解するために極めて重要であることを示している。

神のかたちは、もちろん、肉体的な、目に見える形のことではない。いろいろなことが言われているが、以下のような点を含むと考えられる。

- ①人格性：知性、感情を持つと共に、自己決断をなすことのできる意志を持っている。
- ②霊性：神が霊であられるように、人も霊的な存在として造られている。このことは、神を礼拝することができる根拠にもなっている。
- ③道徳性：善と不善とを判別し、聖さの中に歩もうとする。
- ④社会性：他者との人格的な関わり、愛の交わりの中に生きようとする。

このような「神のかたち」は、人間の墮罪によって、はなはだしく損なわれたが、完全に失われたのではない。そして、キリストは、私たちの内に、損なわれた神のかたちを回復させ、創造の最初の目的を成就して下さるお方である(エペソ4・24、コロサイ3・10)。

## テキスト

24 地は生き物を…いだせ 動物が地から自然発生的に生じたことを意味するのでなく、あくまでも神の創造のわざであることは、次節より明らかである。あるいは、人と同じく、土を素材としての創造であったのかもしれない。

種類にしたがって、次節でも繰り返されている。すべての動物の「種」が、神の創造によって存在するようになった。

家畜と、這うものと、地の獣 地上の動物が、三種に区分されている。それぞれ、家畜、地をはいまわる足の短い小動物、家畜以外の四本足の動物。

26 われわれ なぜ複数になっているのかについては、天使との合議を意味するとか、威光を表す複数形であるとかの説もあるが、聖書全巻による啓示の眞正性を受け入れるのであれば、神の三位一体性の故であると考えるのが自然。

われわれにかたどって 人間は被造物であり、創造主との間には、無限なるお方と有限なる存在との絶対的差異があるが、同時に、神の性質に似せて造られた特異な存在であることを示している。治めさせよう 諸動物の適正な管理の使命を人に与えておられる。

27 神は自分のかたちに創造された 前の節での父・子・聖霊の相談を受けてなされた人間創造のわざを、端的に要約している。

男と女とに 人は、最初から孤独な存在としてではなく、他者との人格的な関係を持つべき存在と

動物は、互いの関係を変えることはできない。

例えば、ライオンとうさぎは弱肉強食の関係で、ライオンがうさぎと親しくなればしない。しかし人とライオンの関係は、人が喰われることもあれば、人の方がライオンを捕らえたり、またペットとしたり、はたまたライオンを偶像として拝むこともする。人間だけがライオンとの関係を変えていくことができる。

友人との関係も同様である。はじめは他人、しばらくすると知人、そのうち友だちになったり、ケンカして絶交したり、仲直りしたりして、ついに親友になってゆく。つまり、人間は他人との関係を変えてゆける。そしてそれは、神との関係でも同じだ。神と人とは、はじめは無関係か、もしくは罪を犯して神と敵対する関係の中にある。しかし、クリスチャンに出会い、教会に行くようになり、ついに神様に出会う。そして、主イエスを信じて神の子どもになり、神と交わる中で神に似る者となってゆく。

## 結論

神が自分のかたちに人を造られたのは、人が神に似てゆくためである。神を信じ、神の子どもとなり、神から教えられ、導かれ、助けられ、時には叱られて、神の子どもは神の似姿へと成長してゆくのだ。この成長のためには、神と親しく交わることが不可欠であることは、言うまでもないであろう。

して創造された(2・18)。それは、神自身に、三位の神による人格的交わりがあったことの反映でもある。

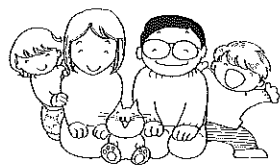
28 生めよ、ふえよ、地に満ちよ 人が子孫を増やして、地を満たすようになることが、神の最初からの意図であった。

地を従わせよ 地に満ちた人間が、調和の内に地を管理することを求めておられる。

海の魚と、空の鳥と、家畜と、…を治めよ 地の管理は、諸動物の管理も含む。

29 種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたに与える 創造の時点では、植物が食物として与えられたようである。肉食は、ノアの洪水後許可されるようになった(9・3)。

31 はなはだ良かった これまでの創造の過程では、「良し」とされた」との言葉が繰り返されたが(3・10、12、18、21、25)、創造の冠として人が創造され、すべての被造物が調和の内に置かれたこの時、神がすべてのものを見られた結果がはなはだ良かったのである。





## 礼拝メッセージ例

- 週 題 人間の創造
- 聖 書 創世記1・26～31
- 暗唱聖句 神は自分のかたちに人を創造された。 創世記1・27
- 目 標 神が人を創造された目的を知り、その目的にそって生きる者となる。

### 導 入

先週は神様が創造主であることを学びました。今週は、特に人間の創造の箇所を学びます。人間の創造については、今日の箇所と創世記2章全体とに、特に詳しく記されています。では、人間は何のために造られたのか見てゆきましょう。

### (起) ストーリーを語る

26節は「われわれのかたちに、われわれにかたどって」と口語訳聖書では翻訳されていますが、新改訳聖書では「われわれに似るように、われわれのかたちに」と翻訳されています。われわれにかたどってという言葉は、われわれに似るということの意味なのです。人間が造られた目的は、神にかたどられて、神に似る者となることです。新約聖書にも、「神にかたどりと造り出された新しい人を身に着る」(エペソ4・24)とか、「新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ」(コロサイ3・10)と書かれています。私たちの人生の目標は神様に似ることなのです。

みなさんの回りには、何かができることや成功

することが人生の目的であると思っている人が多いかも知れません。では、からだにハンディを負っている人はどうなるでしょう。何かができることや成功することが人生の目的なら、それができない人は、生きている価値がないのでしょうか。断じてそうではありません。全ての人は、神に似るという目的のために生きていて、何ができなくても神様に似ていくことができ、価値ある人生をおくることができるのです。

「われわれのかたち」に人を造ろうと、神様はおっしゃっています。神のかたちとは何でしょうか。神様は私たちのように肉体に制限される方ではありません。神のかたちは肉体のことではありません。それは魂とか人格と呼ばれていて、聖書では「霊」と表現されています。

みなさんは他の動物や植物と違って、神のかたちである霊を持つ者に造られたのです。それに肉体が与えられました。その霊が、神様に似ていくことができるのです。

### (承) 学ぶべき真理

皆さんは、「人間に霊があるなら見せてみる」とか、「証明してみよう」とか言われるかもしれませんが、霊は目に見えません。また、幽霊や地縛霊などの人間が造り出したおぼけとは違います。霊とは人格と言いつても間違いないではありません。人間を人間たらしめているものです。

例えば人間と他の動物との違いは何でしょう。どちらも食べる。呼吸する。寝る。ほとんど変わりがありません。人間も動物なのです。人間以外の動物

も心があり、悲しんだり喜んだりします。決定的に違うのは、他の動物は他者との関係を変えられませんが、人間にはできることです。例えばライオンとうさぎは弱肉強食の関係で、ライオンがうさぎと友だちになったりしません。しかし人とライオンの関係は、人が喰われることもあれば、人の方が狩ったり、またペットとしたり、はたまたライオンを偶像として拜んだりもします。人間だけがその関係を変えていくことができ、これが霊をもっている証拠です。

### (転) 生活への適用

皆さんには親友がいますか。親友となるにも、初めは他人、しばらくすると知人、そのうち友だちになったり、ケンカして絶交したり、仲直りしたりして親友になってゆきます。このように、人間は関係を変えてゆきます。そしてそれは、神との関係でも同じです。神様と人とは、初めは無関係か、もしくは罪を犯して神様の敵という関係です。しかし神様に出会い、イエス様を信じて罪が赦され、神の子どもになります。つまり神様との関係が父と子の関係になり、親しく交わって、霊が父なる神に似てゆくのです。

### 結 論

神様が神のかたちに人を造られたのは、人が神に似てゆくためです。神様を信じ、神様の子どもとなり、神様から教えられ、導かれ、助けられ、時には叱られて、神の子どもは神の似姿へと成長してゆきます。皆さんも自分が何のために造られたかを覚えて、神様に似る者となりましょう。

## ワーク A

- 用意するもの

\*鏡(できれば生徒の数だけ)

- 導入のヒント

鏡で自分の顔を見てみましょう。自分の顔が好きですか。「きれいだ」と言わないでよ。みんなは、神様のかたちに造られたんだから。じゃ、神様も目と耳が二つあって、鼻と口が一つあるのかな。そうではありません。今、みんなは「神様ってどんな方かな」と考えてみましょう。それは神様に似ているからです。神様にお祈りできるように。それも神様に似ている証拠です。

ワークでは、自分は神様に造られたんだと思いながら、自分の顔を描きましょう。

## ワーク B

- 質問1 今週の暗唱聖句を完成し、人間は神様のすばらしい作品であることを学びます。
- 質問2 学びの中心である「神のかたち」について考えます。それは「神様に似ること」につながっています。「かたち」は外見の形ではないことを深く知りましょう。
- 質問3 具体的にどんな子どもになるなら「神様に喜ばれるか」を考えましょう。
- 賛美歌 「このままの姿で」
- (ノアCDコレクション61番)
- 今日のお祈り 「神様、神様に似るためにわたしを生まれさせて下さって感謝します。」

## ワーク C

- 「神のかたち」とは、「霊を持つ者」であること、また、神のかたちがあるからこそ神と交わることができることを教え、確認させてください。
- 「何のために生まれてきたか、何のために生きるか」という問いを用いて、一緒に考えさせると良いでしょう。

● 毎日の生活の中で、神様と親しく交わることによって、神様に似た者となっていくことを、具体的な行動で考えさせます。聖書を読む、祈る、さんびするなど。

## ワーク D

- 質問1 人間は、他の被造物と違います。その造られかたも、その目的もハッキリしています。人間だけは、神に似るように、また被造物を治めるために造られました。
- 質問2 「神のかたち」「神に似る」ということを考えます。人間は心と知性と意志を持つ人格的な存在であること、また質問3、4も含めて、神との交わりができる貴い存在であることを考えたいものです。祈ること、聖書から御言葉の語りかけを聞くことなど、具体的な神様との関係を話すことができる良いでしょう。

## 中高校へのヒント

- 考えてみよう

- 1 人は「神のかたち」に造られたと書かれていますが、具体的にどのようなものでしょうか。
- 2 人間の生きる目的は、偉い人になることと成功者になることでしょうか。
- 3 人間と他の動物との一番大きな違いは何でしょうか。
- 自分に当てはめてみよう
- 1 神が私たちを造ってくださったとすれば、あなたはどのような思いを持ちますか。
- 2 人間だけが神と交わることができると言われていますが、私たちは日々神と交わっているのでしょうか。
- 3 私たちは神のかたちに造られた者にふさわしく、毎日を歩んでいるでしょうか。

- 話し合ってみよう

先週学んだ進化論では、人間は、偶然に発生したものと考えられています。それなら、人間は死んだら土になるだけで、他の動物と同じです。人間の目的もないことになるのです。なんとという虚しい教えでしょうか。

しかし聖書は、神が世界を創造し、私たちを神に似た者として創造してくださったと言います。人格のあるものとして、神を信じ、神に導かれて成長する人間としての。ここに私たちの生きる目的があります。このことを信じるなら、私たちの生き方に大きな変化が生まれるでしょう。

## ワーク解説

週 題 人類への命題  
聖 書 創世記2・15・25

## 序論

神は天地創造の最後に、「創造の冠」として人間をお造りになった。それは「神のかたち」としての人間に、地を従わせ、すべての生き物を治めさせるためである。神のみが天地宇宙の支配者であるが、あえてその支配権を人間に委託された事実を忘れてはならない。人間はこれを銘記し、謙遜になって委ねられた命題を実現していくべきである。赤ん坊が色々教えられて成長していくように、人間も御言葉に養われて「神に似る者」とされる。三つの命題がここに見られるだろう。

## 一、繁栄と自治の命題

まず1・28を見てみよう。神は、人間が全世界に増え広がり、繁栄するように命じられた。しかし同時に、神が造られたすべての鳥や地上の生き物を治めるようにとも命じられた。△治める△とは、被造物の一つ一つが本来の目的を果たし得るようにすることであり、人間の繁栄のために被造物を勝手に用いることではない。

興味深いことに、29節と30節には、△すべての草△と△実を結びすべての木△が人間の食物として、△すべての青草△が動物の食物として与えられたことが記されている。文字どおり解釈するなら、

## 研究資料

## 人類への諸命題と福音

創世記1、2章には、人類に対して与えられた様々な命題が記されている。特に、1章28節で人類に与えられた命令は、マタイ28・20の大宣教命令と比較して、しばしば文化命令と呼ばれる。それは、狭義の文化活動というより、家庭や労働、世界の環境管理に至る人間の活動全般に関わるものと考えられ、創世記1、2章にわたって敷衍解説されていると考えることもできる。

さて、これらは、人間の墮落(3章)前に、神から与えられた人類の命題である。しかし、墮落によって、神のかたちを致命的に損なってしまった人間は、これらの命題を果たすという使命を遂行することに失敗してきた。道徳秩序の崩壊に始まり、家庭崩壊、労働の非人間化、虚無化、種々の環境問題等の現状が、そのことを証明している。キリストの福音だけが、私たちの内に神のかたちを回復させることができる。そして、福音は、神への従順、神との人格的交わりの回復に始まり、家庭の回復、本来の労働の喜びの回復、世界の調和ある管理の回復さえもたらす力を内包している。

今週の教案は、これら人類への命題を整理した一例であるが、これらの命題と福音とのかわり、文化命令と宣教命令の関係を心に留めつつ子どもたちにわかりやすく語っていききたい。

当時は肉食ではなかった。9・3で初めて、人間に肉食が許されている。

現在、人間は全世界に広がり、繁栄している。しかし食糧の増産のために農業を用いすぎたことにより、絶滅する被造物があることも事実だ(一例として、トキの場合)。また、車や工場や発電所の排気ガスで地球が暖かくなり、異常気象が起きたり、酸性雨が降ってきたり、森林が枯れて砂漠化が進んだり、フロンガスの影響で地球を有害な宇宙線から守っているオゾン層が破壊されていることなども、問題になっている。

人間が繁栄することは神の御心であるが、地を治める責任もある。自分のことだけでなく、他の被造物のことも考えてはじめて、神に似る者となっていくのだ。

## 二、自由と秩序の命題

2・16・17には、第二の命題が記されている。

神は、△園のどの木からでも心のままに取って食べてよい△という大きな自由を与えてくださったが、それとともに、△善悪を知る知識の木からは取って食べてはならない△という秩序は守るようにと命じられた。「神に似る」とは、自由でありながらも秩序を乱さないことである。

現代は、自由だけが一人歩きしているように思える。自分の自由だけが主張され、秩序に従うことが嫌がられている。しかしそれは神の御旨ではない。家庭でも、学校でも、社会でも、ただ自由を主張するだけなら、秩序が破壊されてしまう例は、枚挙にいとまがないであろう。

## テキスト

15 エデンの園 位置的には、イスラエル東方にあったと考えられる(8節)が、その後の地理的変動によって、現在の地理的背景の中で考えることはできなくなっている。

これを耕させ、これを守らせ 最初の労働。「地を従わせよ」(1・28)の命令の具体化。

16 園のどの木からでも心のままに取って食べてよい 神は、人の生存のために必要な一切のものを備えていて下さる。

17 善悪を知る木 3・22等から考えると、この木の実を食べるという行為は、神に依存せずに自分自身で善悪を判断するようになるという意味があったのであろう。神は、人間が目の前に置かれた自由の中で、自らの意志で神に従うことを選び取ることを期待して、この木を置かれた。

きつと死ぬであろう 新改訳では「必ず死ぬ」。あ

いまいな解釈を許さない明確な言葉。「死ぬ」とは、

肉体の死と共に、霊的死、永遠の滅びをも意味する。

18 人がひとりでいるのは良くない 人は、神との人格的交わりと共に、他の人間との人格的交わりを必要とする。

ふさわしい助け手 人格的に対等な、真に助けとなるパートナー。

19 名をつける 名をつけることは、そのものの観察、その本質への洞察、他の物からの識別を必要とする。つまり「地に動くすべての生き物とを治めよ」(1・28)の命令実行の第一歩。

## 三、自立と協調の命題

最後の命題は、2・24に書かれている。神が人間を男と女とに創造されたのは、違った考えを持つ者たちが協調して生きていくためだった。また親に依存するのではなく、自立して生きていくことを示すためでもある。ある年齢になったなら、育ててくれた親に感謝しながらも、親から独立して、自分で判断して行動しなくてはならない。

女は、動物では決してできない真の助け手として造られた。男女は、創造の順序に違いはあっても(1コリント11・8)、対等な存在である。三位一体の神が愛の交わりの中にあるように、男女も愛し合う存在として創造された。そしてこの関係は、キリストと教会の関係を象徴している(エペソ5章)。違ったものが、相手を愛することを約束して一つとなるのである。これは、契約による新しい関係と言えるだろう。

△父と母を離れて、妻と結び合う△とは、血縁関係から契約関係に移ることを意味している。いつまでも親に依存するのではなく、親に感謝しつつも、自分の意志で行動する自立した人間になるべきことが教えられているのだ。

## 結論

以上三つの命題は、簡単に実現するものではない。食物を食べて人間のからだが成長していくように、聖書の御言葉に従ってこれらの命題を実現していくうちに、私たちの人格も「神に似る者」として成長していくのである。

20 人にはふさわしい助け手が見つからなかった 動物の中には、人と対等な立場で、人格的交わりを持つことのできるものがなかった。

21 あばら骨 女性の存在は、男性に依存しているようであるが、男性の人格的交わりの要求を満たすこともまた、女性に依存していた。「あばら骨」は、女性が男性のかたわらに立つ者として、対等の立場で造られたことを象徴していると言える。

23 これこそ、ついに ようやく、人格的に対等な助け手を得た喜びが表されている。

男からとったものだから、これを女と名づけよう 原語(ヘブル語)では、男は「イーシュ」、女は「イッシャー」。自らと対等であると同時に他者であることを意識しての命名である。

24 それで 結婚制度が、神による最初の男女の創造に起源を持つことの表明。

父と母を離れて 夫婦関係こそは、最初に存在した人間関係であり、家族や社会の中で最も基本的なものである故、基本的に、親子の関係よりも優先する性質を持つ。従って、夫婦関係の成立は、両親からの精神的自立を前提とする。

妻と結び合い、一体となる 性的結合と共に、人格的、精神的結合をも含む。

25 恥ずかしいとは思わなかった 恥の観念は、罪の侵入と共に始まった。

(暗唱聖句については、前週解説を参照のこと)



## 礼拝メッセージ例

- 週題 人類への命題
- 聖書 創世記2・15～25
- 暗唱聖句 生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。 創世記1・28
- 目標 人間が神に似ていくために与えられている命題を知り、どのようにに神に似ていくかを考える。

## 導入

犬の子が育って大きくなると、犬になります。猫の子が育って大きくなると、猫になります。あたり前ですね。では、神様の子どもが育って大きくなると、何になりますか。神様に似て、神様のようになってしまうはずですね。

## (起) ストーリーを語る

神様は人間を造られた時、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」と言われました。つまり人間が繁栄することは神様の願いです。しかし、そのためには、地上のすべてのものをきちんと治めるようにと言われました。このことは両立しないといけません。けれども人間の繁栄と地球を治めることは、しばしば相反します。たとえば学校で、「地球の環境問題を考えよう」と言われることがあるでしょう。人間が豊かな生活をするために石油を燃やすと二酸化炭素が発生し、地球温暖化が進みます。工業製品で豊かな生活をしようとする、工場の廃液や噴煙で地球環境を汚してしまいます。その結果、人も動物も、木や草も苦し

むようになるのです。自分のことだけでなく、動物や地球全体のことを考えて治めることは神様に似るための命題の一つです。

それから、人は、エデンの園で神様と大切な約束をしました。それは「園の中のどの木からでも取って食べてよい。しかし、善悪を知る木からは取って食べてはならない」という事でした。神様は人をロボットのように造られたのではなく、自分で判断する自由を与えられました。人間はもっとも自由になってゆくべきですが、同時にルールも必要です。自由とルールを守ることとはどちらも大切で、両立しないとけません。でも、自由とルールを守ることはしばしば相反します。たとえば、「人は自由だから、車を自由に運転する」といって赤信号で交差点に突入すると、他の車と衝突してしまいます。自由とルールを守ることが両立させることも、人間が神様に似ていくためのもう一つの命題です。

それから神様は人間を男と女に造られました。「人が一人であるのはよくない。」彼(アダム)のためにふさわしい助け手を造ろう」と、神様はおっしゃいました。また、「人は父母を離れ二人の者が一つになる」とも言われたのです。ふさわしい助け手は、他の動物ではだめで、霊を持った人間でなければなりません。人が自立することは大切です。「自分のことは自分でしよう」と、幼稚園で教えられましたね。と同時に、他の人と仲良く一つになって何かをすることも大切です。この自立することと一致することもなかなか両立しま

せん。しかし、人が神様に似て成長するためには、霊をもった他の人と交わって一致すること、自分のことは自分でするという自立の両方が必要なのです。

## (承) 学ぶべき真理

神様を信じる神の子どもは、その神のかたちである霊が成長し、神様に似てゆきます。しかし、その成長のためには、豊かになることと地を治めること、自由になることとルールを守ること、自立することと一致することが命題となります。努力してこのことをしてゆくあいだに、霊の成長がおきてくるのです。

## (転) 生活への適用

みなさんは、自分が勉強ができたからそれだいいと思っていまいませんか。ノートを見せてほしいと頼まれたとき、ケチって見せてあげなかったことはありませんか。自分だけ知識が豊かになっても、友だちのない人では片手落ちです。自習の時間にプリント問題が出た時、自分が終わったら自由にしてさわりだりしていませんか。「自由だから、人の迷惑になってもかまわない」と思っているではありません。自分の掃除分は自分でするのはあたりまえです。それさえできないのは、自立していません。自分の分担当が終わったら遊んでいませんか。他の分担当も終わらないと早く帰ったり遊んだりできないのですから、協力しましょう。

## 結論

神様は、私たちが神様の子どもとして、神様にその霊が似ることを求めておられます。

## ワーク A

- 今週は、神が委ねられた世界に生きるものを大切にするという点から、花鉢と鉢カバーを作ります。(鉢に土を入れ、花の種をまいてください)
- 用意するもの ペットボトル(5リットル・ビニールテープ・ガムテープ・油性マジック・リボン
  - 教師の準備 鉢づくり
  - ①ペットボトルを下から7cmのところを切る。
  - ②切り口は、ビニールテープで巻く。
  - ③底に水はけ用の穴をきりであける。
  - 子どもの活動 鉢カバーづくり
  - ①実線内に絵を書く。②実線を切る。③切った紙を並べ、裏側にガムテープを貼ってつなぐ。
  - ④ボトルにまいてとめ、リボンをつける。

## ワーク B

- 質問1 神様が人間に与えられた命題(つとめ・約束)について考えます。絵と文をつなぎながら、自治・約束・協調等について話し、全てが神様の愛から出ていることを伝えましょう。
- 質問2 実生活の中で「神様に似る」ことはどんなことを話し合いますか。
- 質問3 暗唱聖句です。人間に対する神様の期待を知り、光の子として歩けますように。
- 賛美歌 「ひかりひかり」
- (ごっこさんびか52番)
- 今日のお祈り 「神様、神様に似るためにわたしが出来ることを喜んでさせてください。」

## ワーク C

- テーマ・内容とも大変に大きく、また抽象的で難解です。しかし、これらは「神様から人間に与えられた命題」であり、これらを理解することによって、今後の聖書箇所やメッセージがより意義深くなります。ですから、今週の学びは今回で終わりではなく、今後の底流となります。
- 繁栄・自治・自由・秩序・自立・協調という六つの言葉を、メッセージに沿って、また、ワークを参考に説明してください。この六つに到達することが救われた人の一生の目標です。それを、毎週、聖書から学び取っていく、というのが今日の学びの中心点になります。

## ワーク D

- 表題は難解ですが、質問にそって説明します。
- 質問1 繁栄と自治の命令です。人間中心の乱開発などによって、地球を治めないうえかえって混乱させていることを、具体的な環境破壊などの身近な問題から考えて下さい。
- 質問2 ゲームのルールなどの一般的な自由と秩序の例をあげつつ、神が人を愛して示された真の自由と秩序は何かを考えて下さい。
- 質問3 父母を離れて一体となることは結婚生活ですが、社会的な協調にまで広げて下さい。
- 質問4 いずれも社会倫理に関わることです。でもその土台は神との関係です。神に似る歩みを具体的な生活で考えましょう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

- 1 神は人間を創造し、人間が地に満ち、神に代わって地を治めることを命じられました(1・28)。人間は地を正しく治めているでしょうか。もしそこに問題があるとしたら、どのようなものですか。
- 2 自由とはどのようなことだと思いますか。もしその自由が自分勝手なことをすることだとしたら、本当の自由と言えるでしょうか。
- 3 人間は、親から自立することが求められています。では自立とはどういうことでしょうか。●自分に当てはめてみよう
- 1 地球環境の悪化が叫ばれていますが、個人的に気をつけていることはありますか。
- 2 神様は、自由と共に秩序を与えられました。私たちは、その両方のバランスをとって生活しているでしょうか。
- 3 生活面で、すべて親任せということはないでしょうか。もしそうなら、そのままでよいでしょうか。

## ●話し合ってみよう

人間は、養われ、教えられ、戒められてこそ成長します。神様は、聖書の秩序の中で自由に生活し、人と人の協調性の中で自立して生きることを私たちに求めておられます。その生き方はどのように実行されるでしょうか。例えば、学校で掃除の時間に勉強することはどうですか。

## ワーク解説



週 題 罪の侵入  
聖 書 創世記3・1～24

## 序論

神が天地万物を創造されたとき、それは、はなはだ良かった（1・31）。しかし、現在の世界には悪が満ちている。今週のテキストから、このような世界になった理由がわかるだろう。

## 一、神のことは誤解する

神の被造物の一つであるへびを通して、サタンがエバに語りかけた。どういふ言葉を用いたかはわからないが、その目的は明確だ。サタンは、エバが三つの点で神の言葉を誤解するように仕向けた。第一に、神が与えられている大きな自由を疑わせた（1節）。その結果エバは、神の命令は厳しいものであると思ってしまった（3節）。第二に、神のことは偽りであると言う（4節）。そして第三に、神が悪意をもっておられると思わせた（5節）。

今でも、サタンは同じような口で神の言葉を疑わせようとしている。聖書は「何々をせよ、何々をするな」と命令する堅苦しい書物だとか、聖書は昔の神話集で本当の話ではないとか、神は罰ばかり与える恐ろしい神だとか思う人は、私たちのまわりにたくさんいるだろう。そう言う人々が「知識人」であろうと「科学者」であろうと、そ

の背後にはサタンがいることを見抜かねばならない。

特に、あなたがたは決して死ぬことはないでしようVとの言葉に注目したい。確かに、木の実を食べたアダムとエバは、肉体的には死んでいない。しかし、神から身を隠したことからわかるように、神との霊的な関係においては死んでしまった。ちょうど、放蕩息子が父のもとを離れた時に死んだ者となったように（ルカ15・24）。そしていずれは肉體も死んでしまい、さらにその後神の裁きを受けて永遠に滅びるのである。

## 二、神に代わって神のようになる

エバは、神のように善悪を知る者となるVというサタンのことばに乗せられて、その木に近づいた。そしてその木を見ると、それは人食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいVと思われた。イヨハネ2・16に書かれているように、人肉の欲、目の欲、持ち物の誇りVという欲が罪を引き起こしたのだ。エバはついにその実を食べ、アダムにも分け与えた。

善悪を知る木の実を食べるとは、人間が神に代わって善悪を決めて行動し、その結果で善悪を知っていくということである。すべてが良かった地に、人間が自分勝手な基準で善悪を定めようとしたことが問題なのだ。本当は、善悪を定めることができるのは神だけである。人間が自分勝手に善悪を定めるなら、自分に都合の良い事は善で都合の悪い事は悪になってしまう。それは、自分を神

の位置に置くことに他ならない。被造物にすぎない人間が神のようになるうとする、このような行はすれな行為こそが罪である。

先週学んだ「神に似る」とは、神の定めた善悪に従うことであって、神にとって代わって神になることではない。傲慢に神と等しくなろうとすることはなく、謙遜に神に学ぶことである。

## 三、罪を犯した結果

木の実を取って食べた二人は、へびの言った通りに目が開けたが、それでわかったのは皮肉なことになり自分たちが裸であることVだった。2・25と反対に、自分の姿を恥じるようになったのである。そして裸の恥を隠そうと必死になるのみか、神の前から逃げようとしたのだ。それでも神は、あなたがたはどこにいるのかVと、彼らを探ね求めておられることを忘れてはならない。

彼らは、最後には永久に生きることもないように、エデンの園から追い出される。しかしバックストンはこれを愛の審判と言った。詛われたる有様にて神を離れたる有様にて、限りなく生きますならは地獄です」（『創造と墮落』一〇四頁）。

## 結論

神は今でもあなたがどこにいるのかVと尋ねておられる。その問い掛けに、身を隠す者もあれば、罪の姿のままで神の前に出て、悔い改める者もいる。正直に「ごめんなさい」と告白し、神の子どもとして神に似ていく道に戻ろう。

## 研究資料

## 最初の罪

創世記3章は、人類が最初に犯した罪を記録している。その後、人類が増え広がるにつれて、様々な種類の罪が犯され、罪が人類にもたらす影響も複雑化している。しかし、罪の本質と、その結果とは、最初に犯された罪の場合と、本質的な部分では何ら変わっていない。

## 一、罪の本質

具体的な罪を犯す（神の戒めに背く）前に、神の愛への疑い、神の言葉の真実性への疑いがある。また、善悪の判断を、神に頼らず自分でできると考えること、すなわち、神のようになること（神に依存する存在から、神から独立した存在へと向かう）高慢がある。サタンは、まず、わたしたちの心に、これらのものを起こそうとする。不信仰と高慢こそは、罪の源泉であり、本質である。

## 二、罪の結果

「きつと死ぬ」（新改訳では、「必ず死ぬ」と言われていた言葉は、罪の結果としての肉體の死だけでなく、神との断絶を表す霊的な死、更には、永遠の滅びをも含んでいたであろう（8、19、24節）。罪を犯した瞬間、人間にまですたされたのは、罪人として、聖なる神の顔を避けざるを得ないという霊的な死の現実であった。

## テキスト

- 1へび 霊的存在であるサタンを象徴するものとして、「へび」と呼んでいるという解釈もあるが、「野の生き物のうちで」とあるので、へびを利用してサタンが女を誘惑したと解釈するのが妥当。園にあるどの木からも取って食べるなど…実際に神が語られたのは、「園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい」（2・16）。神は常に人間に多くの自由と祝福を与えておられるが、サタンは、与えられているものよりも禁じられているものの方に、注意を向けさせる。
- 2 園の木の実を食べることは許されていますが：エバのこの答えは、神が語られた「どの木からでも」という部分が省略されている。そして、禁じられている部分により多くの注意を向けさせようとするサタンの試みが幾分か成功している。
- 3 園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないから 神が禁止されていないこと（命の木、触れること）まで、禁じられているように受け取っている。また、「きつと死ぬ」という言葉を、「死んではいけないから」と弱めている。
- 4 決して死ぬことはないでしよう エバが弱めた神の言葉を、サタンは完全に否定する。神のように善悪を知る者となる 神が示された善悪の基準から独立して、自ら善悪を判断するものとなること。

神は知っておられるのです 神の愛の動機を疑わせる言葉。

- 6 その木を見ると：思われた 神の御言葉に信頼するよりも、自分の感覚に頼ろうとしている。
- 8 神の顔を避けて 聖なる神の前に出ることができない罪人の姿。霊的な死が始まっている。
- 9 あなたはどこにいるのか 罪を犯し、神から離れた人類に対して、神は常にこのように呼びかけておられる。私たちは今どこにいるだろうか。
- 12 あの女が アダムの責任転嫁。
- 13へびが エバの責任転嫁。
- 14へびに言われたへびへの裁きの宣告。
- 15 わたしは恨みをおく、おまえと女との間に、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。ここでは、へびへの裁きの宣告から、サタンへの裁きの宣告、御子によるサタンの滅びの預言に移っている。この節は「原福音」と呼ばれる。
- 16 女に言われた エバへの裁きの宣告。
- 17 人に言われた 新改訳では「アダムに」。アダムへの裁きの宣告。人類一般への裁きの宣告を含むであろう。
- 19 ついに土に帰る 「きつと死ぬであろう」と言われた御言葉は、人類への肉體的な死の支配として現実化した。
- 22 神は人を追い出し、…命の木の道を守らせた 以前は食べることが禁じられていなかった命の木なのに、罪を犯した時から、食べることを阻止された。「きつと死ぬ」という御言葉は、永遠の命の喪失としても現実化した。

# 礼拝メッセージ例

●週 題 罪の侵入  
●聖 書 創世記3・1-24  
●暗唱聖句 見よ、人はわれわれのひとりよ  
うになり、善悪を知るものとな  
った。  
●目 標 人が神に代わって善悪を定めるこ  
とが罪であることを発見する。

## 導入

神様が造られた初めの世界は、全てがよかった  
のです。でも今は汚いこと、いやなこと、悲しい  
ことがたくさんありますね。それではなぜこんな  
に変わってしまったのでしょうか。今日は罪の始ま  
りのお話です。

## (起) ストーリーを語る

エデンの園は、きれいな花やかわいい動物が住  
むすばらしい所です。最初の人間アダムはここを  
耕して守っていました。あるとき神様は一つの命  
令を出されました。「あなたは園のどの木からでも  
心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を  
知る木からは取って食べてはならない。それを取  
って食べると、きつと死ぬのである」という命令  
でした。園には数えきれないほどの木が実をつけ  
ていましたから、たった一本の木だけのことなら  
約束を守ることは簡単のように思えました。そし  
て、奥さんのエバにもこの約束をちゃんと教えて  
おきました。

ところがある日、する賢いヘビがやってきまし

た。このヘビはサタン、悪魔のことです。ヘビは

まずエバに話しかけました。「神様は園のどの木の  
実も食べちゃいけないと言われたんですって」と、  
まるで神様がすごくケチできびしい方のような言  
い方です。エバは「いいえ、そうではなくて園の  
中央の木の実はだめだ、触ったらいけない。死ぬ  
といけないからと言われただけです」とヘビと話  
を始めました。するとヘビはすかさず、「それは嘘  
ですよ。絶対に死にません。それを食べると目が  
開けて、神のように善悪を知ることができること  
を神は知っておられるんです」と、神様が悪意を  
もっていて嘘をついているのだと思い込ませてし  
まいました。こうしてエバはまんまとサタンの口  
車に乗ってしまい、「善悪を知る木」に近づきまし  
た。そして「この木の実は本当においしいそうでき  
れいだし、賢くなれそうだなあ」と思ったので取  
って食べ、自分だけでなく一緒にいたアダムにも  
分けて与えました。とうとう二人とも神様との約  
束を破ってしまったのです。善悪は神様だけが定  
められるものであるにもかかわらず、人間が自分  
勝手に善悪を定めるのは、人が神様に取って代わ  
る傲慢なことです。この的はずれた行いが「罪」  
です。とうとうアダムとエバは神の子の命を失っ  
て死ぬことになり、神様の裁きを受ける者になっ  
てしまいました。人が造られた目的は、神様の子  
どもとして神様に教えられ、導かれて神様に似て  
いくことでした。しかし人間は、自分勝手に善悪  
を定め、神様に取って代わって神のようになろう  
としました。その結果、罪のなかったエデンの園

に罪が発生してしまったのです。

## (承) 学ぶべき真理

そのうち神様は、「あなたはどこにいるのか」と  
アダムとエバを呼ばれました。しかし二人は自分  
たちの犯した罪の恐ろしさに気づき、木の間に身  
を隠していました。神様と顔を合わせることなど  
到底できません。神様に見つかって、罪を指摘さ  
れたときにも、自分の罪をこまかそうと、アダム  
は「あなたが一緒にしてくださったエバに食べさ  
せられたのです」と言い、エバは「ヘビにだまさ  
れたんです」と、二人とも弁解をして他に罪をな  
すりつけています。でも神様は、二人が正直に罪  
を悔い改めて神様のもとに帰り、再び神の子ども  
として、神様に教えられ、導かれて神様に似てそ  
の霊が成長し、永遠のいのちを得ることを願って  
おられたのです。

## (転) 生活への適用

みなさんは、自分勝手に善悪を決めていますか  
か。自分に都合の良いことは善で、都合の悪いこ  
とを悪とすることから、罪が発生するのです。お  
なかがすいたから、お姉ちゃんのおやつを食べて  
もよいのでしょうか。

## 結論

自分勝手に善悪を定めてはいけません。善悪は  
神様が定められます。神様の目で見えた善悪を、聖  
書から学びましょう。もし、みなさんが罪を犯し  
てしまったら、神様は「お前はどこにいるのか」  
と捜しておられます。「ごめんなさい」とすぐに悔  
い改めて、神様のもとに立ち帰りましょう。

## ワーク A

### 導入のヒント

● ケンちゃんはお母さんが「これ食べちゃダメ  
よ」と言っていたお菓子、だまっつみみぐいし  
たことありませんか。「したらダメだ」とわかっ  
ていながら、してしまうのは、なぜでしょうね。今  
日のお話を聞いてみると、それがわかってきます  
よ。

### ワークについて

①今日のお話の絵に色をぬりましょう。  
②実線で切りとって、ミミ紙芝居を作るのも良い  
と思います。教師も助けてあげながら、子どもに  
お話をしてもらいましょう。(子どもたちがどのよ  
うに理解しているかよく聞いてみて下さい。)

## ワーク B

●質問1 神様とアダム・エバとの約束の言葉  
を確認します。

●質問2 罪のはじまりです。神様との約束を破  
って、自分勝手な生き方をしたアダム・エバでし  
た。罪とは神様を神様としないところから来るこ  
とを考えましょう。絵を見ながら、子どもと話し  
あいましょう。

●賛美歌 「ごもよどこをみてる」

(ふくいん子どもさんびか22番)

●今日のお祈り 「神様、神様からいつも離れな  
いでいられるように、また、自分が神様より偉く  
なったりしないように、守って下さい。」

## ワーク C

●罪とは、人が神に代わって善悪を定めようとす  
ることです。また、神にとつて代わり、神のよう  
になろうとする、的はずれの生き方です。

●「自分の好きなようにしたい」という罪の本性  
が自分のうちにあることを自覚させます。

●それを知って神様が悲しんでいることを、神様  
の顔を描くことによって考えさせ、自覚させるこ  
とをねらっています。あるいは、怒っている顔を  
描くかもしれません。それは、その生徒の心のう  
ちにある罪に対する神様の反応の仕方のイメージ  
です。神様は罪に対しては怒られるが、罪人であ  
る私たちに対しては、愛して下さっているからこ  
そ悲しまれることを教えます。

## ワーク D

●神のことは自分の都合に合わせて解釈するこ  
とに罪の誘惑が入り込んできます。神、ヘビ、  
女のことばを、注意して比べてみましょう。

●質問2b 木の実を見て魅力的だったの口にし  
ました。つまり、神の言葉よりヘビの言葉を信  
頼し、神の言葉を曲げて自分の好みによって判断  
したので。信じるべき神の言葉を無視し、勝手  
な判断をしたゆえの重大な罪でした。

●質問3 「叱られるから」との答えもあるでし  
ようが、何が悪かったのかを考えさせて下さい。

●質問4、5 罪は隠しておきたいものです。で  
も素直に神の声に應えるよう導いて下さい。

## 中高校へのヒント

### 考えてみよう

1 ヘビは最初、エバに神のことばを疑うように  
誘惑します。ヘビは神のことばを正しくエバに  
言ったのでしょうか。

2 エバは、神のことばを正しく理解していたで  
しょうか。

3 人への最大の誘惑は、どのようなことだ  
ったのでしょうか。

### 自分に当てはめてみよう

1 善悪を知る知識の木の実を食べることは、人  
間が善悪を勝手に定めるという罪となりました。  
私たちは、自分に都合のよいことは善で、都合  
の悪いことは悪と決めていないでしょうか。

2 エバは、「肉の欲、目の欲、持ち物の誇り」に  
よって罪に向かったわけですが、私たちにもこ  
のような欲が潜んでいませんか。

3 誘惑に勝つにはどうしたらよいでしょうか。

### 話し合ってみよう

1 最初神が世界を造られた時は、「はなはだ良か  
った」(1:31)の、なぜ現在の世界はこのよ  
うに悪くなったのでしょうか。

2 ヘビの誘惑で罪を犯した人間に、何が起こっ  
たでしょうか。

3 神様は、罪を犯したアダムとエバに対して、  
「どこにいるのか」と尋ねられました。この言  
葉は今の私たちにも語りかけられています。  
あなたはどうか答えますか。

# ワーク解説



週 題 バベルの塔  
聖 書 創世記11・1-9

### 序論

エデンの園を追いつた人間は、悲惨な道をたどる。カインの弟殺しから始まった暴虐は、ノアの時代には地に満ちていた。それゆえ神は大洪水によって一度地上を滅ぼされたが、憐れみのゆえに、ノアの子孫は再び全地に広がったのである。しかし、神のようになろうとする人間の罪の性質は、消え去ることがなかった。

### 一、塔を建設する人間

洪水後にノアの子孫が生活し始めたとき、人全地は同じ発音、同じ言葉だった。しかし10章の5、20、31節で示されているように、人口が増え、人々が広い範囲に住むようになってくると、当然方言が生まれ、意志の疎通が難しくなる。それを防ぎ、団結した強い都市を作るために、その統合の象徴として高い塔を建て始めたのである。

古代バビロンでそういう塔（ジググラトと言われる）が造られた形跡があることが、考古学で証明されている。平地の広がるこの地方では、少し高い塔を造るなら遠くから見ることができ、人心をまとめるのに都合だった。彼らはすでに高熱で焼いた強固なレンガや、れんがをつなぐ接着剤としてのアスファルトも発明していたので、十分

にこれを作ることができた。

重要な点は、ジググラトは偶像の神殿でもあったことである。人心をまとめるために、神ならぬものを神とする人間に対して、神のさばきが下るのは当然であろう。具体的にどうなったかはわからないが、塔を建てている人々の意志が通じなくなり、彼らは工事を中止せざるをえなくなった。あるいは内紛が生まれたからか、反乱があったからか。その結果、大きな町を造ることができず、彼らは全地に散っていき、様々な言語が生まれることになったのである。

### 二、バベルの塔の間違い

彼らは、次の三つの点で大きな考え違いをしていた。彼らはまず、塔の八頂を天に届かせようとした。それは、天におられる全能の神に取って代わろうとする態度の現われだった。しかし、それこそが罪である。人間は神を信じて親しく交わり、神に教えられ、導かれ、戒められ、また与えられた課題を果たしていくことによって、神に似た者に成長してゆくべきだった。

次に彼らは八名を上げようとした。つまり、自分たちの力の偉大さを見せつけようとした。しかし、れんがの材料やアスファルトは神が与えて下さったもので、その技術も神の定められた法則を利用したものに過ぎない。神に感謝し、神に栄光を帰すのが人間のあるべき姿である。

さらに八全地のおもてに散るのを免れようとして言っているが、神の命令は八地に満ちようとして

### 研究資料

#### バベル（バビロン）

先週の学びでは、人間の最初の罪の本質が、神に依存せず、独立した存在になろうとする高慢にあることを学んだ。バベルの塔を建設しようとしたとき、神から裁きを受けたのも、人間の高慢のゆえであったと言える。

バベルは、「世の権力者となった最初の人ニムロデの国であった（10・8-10）。そこで人々は一致して塔を建てはじめたが、その一致は人間中心的な、神に敵対する一致であり、人間の高慢から生まれた計画であった。それは「名を上げよう」という野心に彩られていた。

バベルは、もともと「神の門」を意味するといわれている。ヤコブは、ベテルで、天使がはしこを上り下りしているのを見て、「これは神の家である。これは天の門だ」と言ったが、それは、神から与えられたはしこであり、キリストを予表する（ヨハネ1・51）。一方、バベルの塔は、人間の側から神に至ろうとする努力であって、その労苦は空しく終わらざるを得ない。

創世記10、11章で「バベル」と翻訳された言葉は、他の箇所では「バビロン」と訳されている。イザヤ14章では、バビロンが、その高慢のほなはだしさ故に滅ぼされることが預言され、それは、悪魔の起源を示唆するものとされている。

バビロンは、新約聖書の終末の預言の中で、権

力や財力を持ちつつ、神に敵対する都の名として登場する。それは、最終的には神の裁きを受け、滅ぼされるものである（黙示録18・2）。

#### テキスト

2 シナルの地 広くバビロンの地を指す。

3 彼らは互いに言った「同じ発音、同じ言葉」（1節）のゆえ、意志の疎通が可能になっていたことが、神のみこころに背く方向へと結びつけられてしまった。

れんが アスファルト 共に、メソポタミヤ地方では、広く用いられた。

4 町と塔とを建てて メソポタミヤ地方で複数発見されているジググラト（高塔神殿）との関連性が指摘されている。

その頂きを天に届かせよう 並外れて高いことを表現する定形表現と考えられる（申命記1・28、9・1）が、ここでは、特に、神から離れつつ、「神のようになろうとする人間の高慢さが表わされている。

名を上げて 自分たちの技術力、経済力などを誇示する意図が示されている。

全地のおもてに散るのを免れよう 神の御心は、「地に満ちよ」であった（1・28）。神の御心に背く中で人間の結束は高慢の結果であり、さらにもっと高慢を増長させるものだった。

6 もはや何事もとめ得ないであろう 人間中心の高慢な考え方で、結束して働きはじめる時には、何によってもとめ得ることのできないような

たことを忘れてはならない（1・28）。地球上に広がっていくことこそが神の御旨であった。

### 三、新約聖書の教え

ここで使徒行伝の17章26-27節を開いてみよう。八ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住ませられたのは、神ご自身だった。そしてそれぞれの地域を定め、それぞれの言語を与え、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さったのである。神は、地球上のすべての民族、すべての人間が、神を信じることを願っておられる。人々が熱心に追い求めて、本当の神を発見することができるように、国、言語、時代を定めて、「わたしはなぜこの国に生き、この時代に生きるのか」と考えることを求めておられるのだ。

### 結論

バベルの塔は、単なる昔話ではない。その当時よりはるかに科学技術が進化した現代は、コンピュータで世界がつながり、クローン人間さえも造りだせるようになった。「人間は何でもできるんだ」と考える高慢な人々は、「神などとはや必要ない、神は死んだ」などと豪語している。それは神に代わって自分が神になることだ。しかし、その結果は、神の裁きでしかない。こういう時代に生きる私たちは、謙遜になって神の御旨を追い求め、高慢にふるまう人々に対して警告できるようになりたい。

大きな動きとなることがある。神は、時として、そのような人間の動きに介入し、ご自身の主権と裁きを表される。

7 われわれは 三位一体の神を示唆する複数。

8 主が彼らをそこから全地のおもてに散らされた 神に敵対する形で人間の結束に対する裁きであると同時に、全地に散らされることによって、もう一度、人間一人ひとりが謙って神の前に出ることを期待されたのであろう。

9 バベル 最初の項「バベル（バビロン）」参照。元来、アッカド語で「神の門」（バブ・イリム）を意味したが、ここでは、「混乱」（バベル）との関連を見ている。人間から神に至ろうとする試みは、結局は混乱をもたらして終わる。

#### 暗唱聖句

使徒行伝17・27 こうして 偶像おびただしいアテネの町の人々に対して、パウロは、この世界を造り、人間を生かし、民族、時代、国土の境界さえも定めておられる神がおられることを伝える（22-26節）。その目的とされることは、人々がご自身を見出すことであつた。

人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見出せるようにして下さった 神は、人に近づき、世界や歴史の中にもご自身を啓示しておられ、人が神を求めるならば、さらに親しくご自身を現し下さる。

## 礼拝メッセージ例

●通題 バベルの塔

●聖書 創世記11・1-9

●暗唱聖句 人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。使徒行伝17・27

●目標 人間が塔を築いたことが神への叛逆である理由と、神が国境と言語を分かたれた理由を発見する。

## 導入

世界には約二百の国と二千の言葉があるそうです。天地のはじめ、エデンの園には一つの言葉しかなかったのに、どうして今ようになったのでしょうか。今日は、その事についてお話しします。

## (起) ストーリーを語る

アダムとエバが罪を犯してエデンの園を追い出されてからも、神様を悲しませる出来事が次々と起きました。そしてついに、人々の心は、その思いはかること全てが悪くなってしまうたのです。そこで神様は、とうとうノアの時代に大洪水を起こし、箱舟に乗らなかつた地上の生き物を全て滅ぼしてしまわれました。

しかし、その後、ノアの子孫たちもまた罪を犯し始めたのです。洪水後しばらくは人類の言葉は一つで、人間は再び地上に増え始めました。すると、人々は頂が天にどくような高い塔を建てて、自分たちの名を上げようとしはじめました。でもこれは神様のみにこころに背いていました。

バベルの塔を建てた目的の一つは、塔の頂を天

にとどかせることでした。これは、神様にとって代わって神のようになろうとする罪の本質が、何も変わっていないことを表しています。神にとどくようになるのは、神様を信じる信仰によって、神様の子どもとされる以外にありません。

その上人々は、自分たちが力を持っていることを誇り、「名を上げよう」としていました。自分たちの技術はすごいんだ、神をもしのぐものだと思いがつていました。二十世紀の人類も、「神は死んだ」、「科学は万能だ」と思いがつていますね。でも塔の建築のために使った材料は、神様から与えられたものです。建築にあたる人も神様が造られたものです。自分が偉いんだと誤解してはいけません。人は神様から与えられたものの中で、それを利用していただけです。自分の名を上げるのではなく、神様に感謝を表すべきです。

そしてもう一つのこと、全地のおもてに散るのを免れようとしたことでした。神様の計画は、人が地に満ちて一杯になることでした。しかしバベルの塔を作ろうとしていた人たちは、自分たちがちりぢりにならないで、どこからでも塔を目標に集まれるようにそれを作ったのです。この行為は、明らかに神様の計画に背いています。

神様は、「彼らがしようとする事はもはや何事もとどめ得ないであろう。さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」とおっしゃり、言葉を乱されたのです。こうして作業をしていた人たちは話

が通じなくなり、仕事を続けられなくなりました。そして言葉の通じる者ごうい、ばらばらに散って行きました。これが国や言葉がたくさんできる由来となったバベルの塔のできことです。

## (承) 学ぶべき真理

このように、色々な言葉ができた理由は、人間が神様に逆らって傲慢になったこと、神様を第一にして従おうとする心を失ったことでした。言葉が違い、国が違つと、習慣や考え方も変わってきます。違つた人々と交わると、自分の考えだけが正しいのではないことや、いろんな見方や考え方があることを発見します。そして、本当に正しいもの、価値あるものは何かを求めるようになります、神を発見することができるのです。

## (転) 生活への適用

友だちと考え方が違つたと思つたことはありませんか。家族で旅行するので平気で学校を休む人もあり、病気以外では絶対休んだらいけないと考える人もあります。まず自分の考えは何かを知って、なぜそう判断しているのか、他の人や他の国の人はどう考えるのかを調べましょう。そして、聖書はどう教えているのかを調べましょう。そうすると、神様を発見することができます。

## 結論

神様のように何でもできるようになることや、成功して有名になることを願う生き方は、神様への叛逆です。自分の考えと聖書の教えを照らし合わせて、真に正しいのはどちらかを考えてください。そして神様を発見しましょう。

## ワーク A

## 導入のヒント

マリちゃんは、高いビルとか塔に上ったことがありますか。きれいな景色が遠くまで見渡せて、すく偉くなったように思つたでしょう。

アダムさんとエバさんの子どもたちが、どんどん増えていったとき、「偉くなりたい」と思つた人たちが、高い塔をたてようと思ひました。その塔は、「バベルの塔」という名前でした。

## ●ワークについて

(バベルの塔の迷路)

バベルの塔をおりてくる迷路です。難しいところは、教師が手伝って下さい。

## ワーク B

●質問1 楽しみながら「バベルの塔」の名まえを覚え、今日のお話を復習しましょう。

●質問2 人々はなぜバベルの塔を建てようとしたのかを考え、神のようになることは間違ひだとして知れましょう。人間は被造物です。

●質問3 本日の暗唱聖句を記入します。私たちが追い求めるべきことは、「神様を喜ばせること」であることに気づかせましょう。

●賛美歌 「わたしはしめのことばです」

(子どもさんびか5番)

●今日のお祈り 「神様、いつも神様と人に喜ばれる子どもにして下さい。」

## ワーク C

## ●使徒行伝17章の御言葉を穴埋めします。

●人々がしようとしたことは、高い塔を建設することでした(左上の図)。しかし神様は、彼らの言葉を乱されました(右中の図)。左下の図は「バベルの塔」に引っかけた「バベルの塔」です。

●塔を建てた人間の本心を、メッセージに沿つて三つ選ばせ、自分の心の中にもそういう思いがないかを調べます。

●そんな私であっても、神様がしてほしいと望まれることは、神様の御心をこの私が実行することだと自覚させます。

## ワーク D

●質問1 ウォーミングアップを兼ねて、言葉が通じることがどんなに便利かを考えて下さい。

●質問2 建築資材の革新が塔の建築を可能にしました。「天に届く」は人の力を誇示する姿勢であり、謙遜に神に近づく態度ではありません。知恵も力も材料も神からの恵みの賜物です。名を上げることに使うべきではありません。

●質問3 言語の混乱と民族の拡散は神の裁きのように見えます。しかし使徒17章では、神に近づく恵みの手段として示されています。

●質問6 だれでも自慢したい長所があるが、それは自己満足です。神こそ良い生かし方を知っておられ、神に求めるなら示して下さいます。神を見失いやすい場合を考えてみましょう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 人々がバベルの塔を造ろうとした理由は何でしょうか。

2 神は塔を建てている人々の間に何をもたらされましたか。

3 その結果、人々はようになりましたか。

## ●自分に当てはめてみよう

1 自分の力を誇示していた当時の人々ですが、私たちも自分の力を誇示しようとすることはありませんか。

2 また彼らは、自分の考えを中心にして事を進めました。私たちも自分中心に事を進めることはないでしょうか。

3 どうしたら私たちは、本当の一致を見いだすことができるのでしょうか。

## ●話し合ってみよう

1 バベルの塔の出来事によって、神様は人間の言葉を混乱させられました。なぜそうされたと思ひますか。

2 神様は、当時の人々にどうしてほしかつたのでしょうか。

3 私たちは、どうしたら神の栄光を現すことができるようになるでしょうか。

## ワーク解説



週 題 アブラムの召し  
聖 書 創世記11・27・12・20

## 序論

創世記の12章から新しい区分が始まる。ここから、神の選民の歴史が始まるが、すでに11章においてその準備がされていることに留意したい。ウィルクスは、11章の前半を「社会を造る人間の計画」とまとめ、神はそれを打ち砕かれた後に、アブラムを通して救いの道を開かれたという。これこそ、「神の社会を建て給う方法」なのである(『創世記講演』上巻一〇三頁)。アブラハムの物語の中に、神の救いの計画と、それに応答する人間の信仰が明確に記されている。

## 一、偶像崇拜との決別

カルデアのウルは、バビロンの南東、ユーフラテス川下流にあった。この町に月神ナナナの祭儀を行う聖所があったことが、発掘調査でわかっている(『聖書大辞典』教文館)。アブラムの父テラは、その神を信じていたのかもしれない。しかし父テラは、アブラムをはじめ一族を連れてカナン之地をめざして出発した。そして千キロメートルほど上流にあったハランの町に着いた。その町も偶像崇拜が盛んだったようだが、テラはそこに住むことに決めた。何年かたつうちに彼らはすっかりその地に腰を落着け、特にアブラムの兄弟の

ナホルはその町が気に入ったようである。

そんなある日、主は突然アブラムに「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と言われた。やっとハランの地に慣れた頃であり、父テラも一四五歳でまだ健在だった。アブラムはかなり悩んだことであろう。しかし彼は、月の神が本当の神でないことを理解していた。彼はこのとき、偶像礼拝する町や人々から完全に別れることこそ、天地宇宙を創造された本当の神を信じる第一歩であると信じたのである。信仰とは、悔い改めて罪の生活から離れることから始まる。

## 二、祝福の基となる

この時、神はアブラムに「あなたは祝福するVとも約束され、また人地のすべてのやからは、あなたによって祝福されるVとも仰せられた。アブラムは自分だけが祝福を得るのではなく、神の祝福が彼を通して人類に広がるという約束を受けたのだ。信仰とは、神の祝福を受けとり、その祝福を人々に分かちあうことである。アブラムは父とナホルをその町に残し、妻とおいのロトと、使用人や家畜を連れて、カナンの地に向かった。

カナンの地に着いたときには、主はアブラムに現われて、「あなたはあなたの子孫にこの地を与えますVと約束された。そこで彼はその場所に主のための祭壇を築いた。またこれ以後も、彼は行く先々で祭壇を築き、主の名を呼び、神を第一とする生活を続けたのである。

## 三、いくつかの失敗

しかし失敗もあった。まず、ききんがおこったとき、食物が豊かになるエジプトに逃げ出した。またエジプトでは、自分が殺されるのを恐れて、妻サライを妹と偽る。このうそが原因で、サライを妻にしようとしていたバロの家には神からの疫病が下された。アブラムのうそを知ったバロは、彼ら夫妻をエジプトから去らせた。

アブラムは、この経験を通して、人祝福の基となるVとはどんなことかを学んだであろう。自分を祝福する者は神から祝福され、自分をのろく者は神からのろわれる。祝福の基は人々に祝福をもたらさないといけないのに、うそをついて人がのろわれるようにしてはならない。祝福の基はいつも神が祝福してくださるのだから、神の命令がないう限り、勝手に世に逃れず、妥協しないで聖別されるべきことを知ったのである。

この後、ロトの羊飼いとアブラムの羊飼いが争いを始めた。これも親族を離れよとの主の命令に従わなかったゆえの失敗だった。そこでアブラムはおいのロトとも別れた。

## 結論

アブラムは、決して完全無欠だったわけではない。ただ、まことの神は天地宇宙を創造されたお方であると理解して、偶像の町から出ていった。そして自分だけでなく、全世界に祝福を与えて下さるという約束をそのまま受け取った。これこそ信仰による歩みだったのである。

## 研究資料

## アブラハムへの祝福の約束

アブラハムの生涯を通して学ぶことができるのは、神様からの祝福の約束が、一人の信仰者の歩みを通して、どのように成就していくのかということである。

神は、アブラハムに対して、彼及び彼の子孫の祝福を約束された。その祝福に至る経緯については、最初から詳細が明らかにされていたわけではなかった。ただ、彼が、神の命令に従い、信仰を持って一歩を歩み出した時、一つひとつ、その道筋が明らかにされていった。①カナンの地における祝福であること(12・7) ②子孫とは、彼の実子による子孫であること(15・4) ③サラの子イサクによる子孫であること(17・19) 等である。

これらの約束は、神への信仰と従順という条件と共に与えられていたものであった。「国を出て親族に別れ、父の家を離れ」という聖別への召しに従い、「わたしが示す地に行きなさい」との「ご命令に従って、信仰をもって歩み出した時が、彼の祝福への第一歩であった。

もちろん、彼の信仰は、時として弱くなり、揺れ、神の約束を肉の方法で実現しようとするということもあったが、神の導きの御手の中、失敗を通して教えられ、試みを通して信仰が練られ、ついには神の約束のすべてを受け取るころの信仰と従順が備えられていった。

「信仰の父」と呼ばれるアブラハムの生涯を通して、私たちは信仰の本筋を学ぶことができる。

## テキスト

11・27 テラ 「テラは…ほかの神々に仕えていた」(ヨシュア24・2)とある。12・1の「ご命令の背後には、テラをはじめ、アブラムの親族が、異教礼拝の習慣の中で生きていたことが推測されるであろう。

アブラム 17・5でアブラハムと呼ばれるようになるまでの名。

29 サライ 17・15でサラと呼ばれるようになるまでの名。

30 サライはうますめで、子が多かった 以後の記事で重要な背景となる事柄。

ウル ハラン 共に、月神礼拝の中心地。ウルはユーフラテス川の下流の方、ハランは上流の方にあった。

12・1 国を出て、親族に別れ、父の家を離れ 国、親族、家族からの三重の別離。

わたしが示す地に行きなさい 「行く先を知らないで出て行った」(ヘブル11・8)とある。当面カナン之地をめざしたとしても、それが相続の地であるとは、最初の時には示されていなかった。

2 大いなる国民とし 子孫が増え、一つの国民を形成するまでになるという祝福の約束。

あなたは祝福の基となる 直訳は「あなたは祝福となれ」。3節を反映した意訳。

4 主が言われたように立て 主の「ご命令

に対して、単純に回答した。

ロト アブラムの甥(11・27)。父ハランは、ウルで死んでいる(11・28)ので、アブラムの家族の一員のようになっていたのであろう。

7 この地を与えます カナンの地を嗣業とすることの初めての明示。

祭壇 この地(シケム)以降、彼は、ホテルの東の山で(22・9)祭壇を築いている。それらはいずれも、彼にとつての礼拝の地となった。

10 エジプトへ寄留しようと ききんに対する反動的な行動だったのだろう。神の御心を注意深く聞こうとした様子はない。

13 わたしの妹だと言ってください 偽りとは言えない(異母妹、20・12)が、妻であることを隠し、妻でないかのように思わせる意図がある。ここからも、神への信頼と御言葉への聴従から逸脱していることがわかる。

14 女はバロの家に召し入れられた 肉的方法の悲惨な結果。

17 主はアブラムの妻サライのゆえに、激しい疫病をバロとその家とに下された 神の直接介入。アブラムがいかに神に尊ばれていたかを示す。

18 なんとこの事をしたのですか 神の人であるはずの人物が、異教の人から、正当な非難を受けている。

# 礼拝メッセージ例

- 週題 アブラムの召し
- 聖書 創世記11・27～12・20
- 暗唱聖句 地のすべてのやからは、あなたによつて祝福される。創世記12・3
- 目標 信仰とは神様を信頼し、神様の祝福を素直に受け取ることでありと発見する。

## 導入

みなさんはアブラムという名前を知っていますか。アブラハムと呼ばれるようになる前の名前です。今週から信仰の父アブラハムの物語で、神様の祝福を受けるとはどういうことが学びます。

## (起) ストーリーを語る

アブラムは父や兄弟、親戚と一緒にカルデアのウルに住んでいました。今のユーフラテス川の下流にあった町です。そこからお父さんのテラは、一族を引き連れカナンを目指して出発しました。しかし、彼らは途中のハランという所に留まってしまいました。そんなある日、神様はアブラムに現れて、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」と言われました。これは、神様がアブラムを選ばれて、それまで住んでいた偶像を拜む土地や親族や家族から離れて約束の地へ行かせ、祝福を多くの人々に与える源にするという約束です。

## ワーク A

● 暗唱聖句 (5月27日～7月1日)

アブラムは主を信じた。(創世記15・6)

## 導入のヒント

ケンちゃんは、旅行に行ったことあるかな。そのときは、「これからおばあちゃんの家に行くんだって、ちゃんとわかっていただろう。でも、今日のお話に出てくるアブラムさんは、行き先を知らないで、出ていったのです。神様が一番良い所に連れて行ってくださるって、信じていたからです。

## ワーク B

- 質問1 神様からアブラムへの命令を学びます。命令には素晴らしい祝福の約束があります。子どもたちに自分の言葉で書かせましょう。
- 質問2 アブラムが従ったことを知り、「神を信じること」について考えましょう。
- 質問3 一人一人が神様の祝福を受け取れるように話し合ひましょう。
- 賛美歌 「しめにしがいいゆへは」  
(子どもさんびか53番)
- 今日のお祈り 「神様、アブラムさんのように、神様の約束を信じて、神様が言われることに喜んで従えるように力を下さい。」

## ワーク C

- 四苦八苦 (しゅくはっく) は「しゅくはく」に引っかけられています。(しゅくはく→しゅくはく→しゅくはく)
- 自分は神様が与えて下さる祝福に対して、どれほど素直に、信仰をもって、受け取ることができかを、イラストの中に自分の姿を探すことについて考えさせます。

## ワーク D

- 質問1 家族関係を図にしてみるのもおもしろいかもかもしれません。
- 質問2 神の命令と約束を確認して下さい。祝福を「幸せ」と表現していますが、普通の人の考える目先の幸せと違うことを補足説明し、特に他者に祝福をもたらす点を強調して下さい。
- 質問3 神様の示す地だとわかったので礼拝をしたことに注目しましょう。
- 質問4 祝福の約束(3節)を忘れ、目先の不安に振り回されてしまうことを、日常の経験から考えましょう。ロトの問題(13章)についても、時間があれば取り上げて下さい。
- 質問5 「祝福の基」となるためには、自分の都合で祝福を受けるではありません。神の約束を信じ続けることが大切なのです。

## 中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 アブラムの家族は、カナンの地を目指すべきだったのに、ハランの地に住みついてしまっていました。なぜでしょうか。
- 2 神様は、ハランを出発してカナンに向かうように命じられましたが、その時の神様の約束はどのようなものでしたか。
- 3 アブラハムのカナンの旅は、順調だったのでしょうか。
- 自分に当てはめてみよう
- 1 もし神様があなたに、「今していることをやめなさい」と言われたらどうしますか。
- 2 神様が命じられる道を歩むときに、様々な困難があるとしたら、どうしますか。
- 3 私たちは、最後まで神様に従うことができるでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 約束の地カナンで起き上がった時と、エジプトで自分が殺されるのではないかという恐れを持ったときに、アブラムはどのようにしましたか。
- 2 この時のアブラムの取った行動は、神様の祝福をいただくものとなったのでしょうか。
- 3 アブラムのこのような失敗を通して、私たちは、どのようなことを学ぶことができるでしょうか。

ついに別れて住むことになるのです。中途半端な従い方が、このような失敗を生んだのです。

## (承) 学ぶべき真理

神様の祝福の約束を信じて旅立ったアブラムですが、失敗をおして、自分が神様に従っているかどうか、自分と周囲の人々の不幸を決めることを学びました。自分勝手な考えで行動したら、自分だけでなく周囲の人々にも災いをもたらすことを「祝福の基」は知るべきです。いつも祭壇を築いて神様を礼拝し、その言葉をよく聞いて行動しましょう。困難があると逃げ出したり、嘘をついたり、ある程度神様に従いある程度自分の考えに従ったりしてはなりません。約束された神様が最善をしてくださるのですから、神様に委ねましょう。そうするならば祝福が与えられますが、そうしないならば災いをもたらされるのです。

## (転) 生活への適用

日曜日に運動会があるとき、どうしますか。礼拝を休みますか。運動会を休みますか。それともどちらにも出るように工夫しますか。祝福の基である神様を信じる人が何を選ぶかということは、とても大きな影響を周囲に与えます。

## 結論

今も神様は、アブラムと同じ信仰を持つ人々に同じ祝福を約束しておられます。わたしたちも祝福の基になれるのです。もちろん神様に従えば、自分から始まって多くの人が祝福されます。しかし礼拝を怠り、神様の言われることを聞かずに行動すると、災いをもたらすことになります。

# ワーク解説



週 題 困難に立ち向かう  
聖 書 創世記14・13・24

## 序論

アブラムは、全世界の祝福の基となるVという神のことは信じて、神を認めない町から出て行った。しかし、八親族を離れVという御言葉に完全には従わず、おいの口を連れて行ったのだ。ここに失敗があった。その後、神に祝福されて家畜が増えてくると、ロトの羊飼いとアブラムの羊飼いの間に争いがおきたため、ついにロトと別れることになる(13章)。さらに、ロトの住んだソドムの町が、エラムの王ゲダラオメルに率いられた連合軍に侵略されるときには、アブラムはロトを救い出すための戦いにのぞんだ。

## 一、困難に立ち向かう

年長のアブラムがあえて優先権をロトに与えたとき、ロトは目先の欲にとらわれて、すみずみまでよく潤っており、物質的に豊かなヨルダンの低地を選んだ。たといその地方に罪に汚れたソドムの町があったとしてもである。そんな身勝手なロトが敵の捕虜となった。しかしアブラムは彼とそ一族を救い出そうとしたのである。彼は、家の子三百十八人を連れて、大軍勢に立ち向かった。どんなに訓練されていたにしろ、数では問題にならないほど少人数だったのに、よく戦ったものだと思心する。神を信じる者は、神が祝福し

てくださるから、正義のため、また弱い者のために大胆に戦えるのである。信仰とは、神に信頼してどんな困難にも立ち向かっていくことである。

## 二、神に感謝する

この戦いに、アブラムは勝利する。そして、彼ら一行が敵に勝利して帰ってくる途中、サレムの王メルキゼデクが彼らを迎えた。このメルキゼデクは、ヘブル7章で、イエス・キリストの型として描かれる人物である。彼には系図もなく、突如として登場する。彼は、サレム(「平和」の意)の王だけでなく、高いと高き神の祭司Vでもあった。彼は疲れきっていたアブラムとその一行を、八パンとぶどう酒Vでもてなし、祝福を祈った。

彼の祈りには、三つの重要な点がある。第一に、全天地の主なるいと高き神Vがアブラムを祝福してくださること。第二に、このお方が戦いに勝利させてくださったこと。第三に、このお方がそが

## 結論

アブラムは、罪の生活から離れ、神のみを信頼して「約束の地」に出発した。またその後、神のみを信頼して困難に立ち向かったのである。それゆえ、彼は神の祝福を豊かに受けとることができた。そして彼は、祝福してくださった神に感謝し、神のみに栄光を帰した。

信仰とは、神を信じて困難に立ち向かい、神の祝福をしっかり受け取って神に感謝し、神に栄光を帰することなのである。

## 研究資料

## 現実の困難と信仰者

信仰者アブラムの生涯の中でも、いろいろな現実的困難が起こった。14章に記されているのは、諸王の間の戦争に関する突発事件であって信仰とは全く別領域の問題に見える。しかし、世界のすべてを支配しておられる神を信じる信仰者は、このような問題にも対処することができるといふことを、アブラムは証明している。

王たちを追跡し、甥ロトとその家族を救う彼の行動には、優れた判断力、統率力、決断力、勇敢さなどが表されているが、その根底には、全能者なる神への信頼があった。このことは、サレムの王メルキゼデクの言葉(20節)やソドムの王に対する彼自身の言葉(22節)からも明白である。

信仰者は、現実の諸問題に対して無力な存在であってはならない。神から与えられている知恵や力を働かせつつ、何よりも全能者なるお方に対する信仰を働かせつつ、困難に立ち向かう者でありたい。

## テキスト

1~12 今週のテキストの範囲外であるが、アブラムが直面した状況が記されている。要約すれば、東方の4人の王(1節)すなわち、「ゲダラオメルとその連合の王たち」(17節)が、カナン地方の5人の王たち(ソドムの王他、2節)を攻め、ソド

ムとゴモラの財産や食料を略奪し、ソドムに住んでいたロトと彼の家族と財産を奪い去った。

13 彼らはアブラムと同盟していた エシコル、アネル、マムレ(「兄弟」とあるが、広義の用法なので、親族。新改訳では「親類」)は、アブラムと契約関係にあった。24節より、彼らは、アブラムと共に戦いに参加したことが分かる。

14 身内の者が捕虜になったことを聞き アブラムの生活に起こった突発的事件。身内の危機に対して、彼は、即座の行動に出る。

家の子 新改訳では「しもべども」。従者。

15 夜かれらを攻め 夜襲。即座の行動ではあったが、冷静な判断がなされていた。

16 取り返した 速やかな成功が与えられた。

18 サレム エルサレムのこと。

メルキゼデク サレムの王であり、「いと高き神の祭司」であるというメルキゼデクについては、前後の説明がなく、その神秘性を増し加えている。詩篇110・4、ヘブル6・20~7・25などで永遠の王にして大祭司であるメシヤ・イエスが「メルキゼデクに等しい祭司」と呼ばれている。

19 天地の主なるいと高き神 「いと高き神」は前後4回使用されている(18、19、20、22節)。中でも、メルキゼデクが口にした「天地の主なるいと高き神」を、アブラムも同様に口にかけていることから、メルキゼデクが、聖書の神に仕える神の祭司であることが明確にされている。

アブラムを祝福されるように 祭司としての祝福の言葉。

## 三、神に栄光を帰す

その後、アブラムはソドムの王のもとに行き、ゲダラオメルから取り戻したものを全て、王に渡す。ソドムの王は、「捕虜になった人々は返していただきますが、財産はあなたのものにしてください」と提案した。でも、ソドムの王が「アブラムを富ませたのはわたしだ」と言わないように、アブラムはその提案を、「糸一本、くつつも一本いらない」ときっぱり断ったのである。

アブラムは、メルキゼデクが告げたように、神が彼を祝福してくださっていることを堅く信じていた。信仰者は、神に信頼して神から祝福を受けとるから、人の富は必要がない。神に信頼して八ランを出て祝福され、ゲダラオメルとの戦いで祝福され、その後も神を信頼して祝福されるのである。信仰者に不正の富はいらない。信仰者は神の祝福を受けて、神に栄光を帰するのである。

20 あなたの敵をあなたの手に渡されたいと高き神があがめられるように アブラムの勝利は、根本的には、神によるものであることを指摘し、その神に栄光が帰されるようにと祈っている。

アブラムは彼に…十分の一を贈った メルキゼデクの言葉を受けての行為であり、彼の祭司としての立場のゆえであって、神への献げ物。

21 ソドムの王はアブラムに言った。『財産はあなたが取りなさい。』 敵を打ち破り、危機から救い出してくれたアブラムに対する儀礼としての申し出。

22 糸一本でも、くつつも一本でも、あなたのものは何も受けません 当然とも思えるソドムの王の申し出をアブラムは断固退ける。ここには、「アブラムを富ませたのはわたしだ」と、あなたが言わないように」とあるように、すべてのことににおいて、ただ神に信頼し依存して生きようとする信仰者としての強い意志を見出すことができる。

24 ただし若者たちがすでに食べた物は別です。そしてわたしと共に行った人々アネルとエシコルとマムレとはその分を取らせなさい アブラムには、信仰者としての潔癖とも見える態度と同時に、他の人々への良識ある態度があったことも、見過ごしてはならない。



## 礼拝メッセージ例

●週題 困難に立ち向かう

●聖書 創世記14・13・24

●暗唱聖句 願わくは天地の主なるいと高き神が、アブラムを祝福されるように。

創世記14・19

●目標 アブラムのように、神に信頼して困難に挑戦するときこそ祝福があることを発見する。

## 導入

神様を信じていたらいやなこと、困難なことがおきないかというと、そんなことはありません。また、自分ではなく、兄弟や友だちが辛い目にあっていられることもあります。アブラムは困難な時、どのようにしたのでしょうか。

## (起) ストーリーを語る

アブラムは、「全世界の祝福の基となる」という神様の言葉を信じて、カナンの地に移り住んでいました。そこで、神様の祝福を受けて、家畜が沢山ふえてきたのです。すると、おいのロトの羊飼いとアブラムの羊飼いの間に争いがおきるようになってしまいました。アブラムは、ついにロトと別れる決心をします。彼はロトに自分の好きなところを選びなさいと云うと、ロトは低地の豊かな地を選び、アブラムは高地のあまり豊かとは言えない地に住むことになりました。しかし、ロトの住んだ低地にはソドムの町があったのです。そのソドムの町が、エラムの王ケタラオメルに率い

られた連合軍に侵略されたとき、アブラムはロトを救い出すための戦いにのぞみました。

ロトは自分勝手に、豊かですが罪に汚れたソドムの町のある土地を選び、そこに移住しました。そんな身勝手なロトを、アブラムは救い出そうと家の子三百十八人を連れて、大軍勢に立ち向かってゆきます。するとどうでしょう。ソドムの財産と人々を奴隷にして連れて行ったケタラオメル軍が逃げ出して行くではありませんか。アブラムはついにロトとソドムの人とその財産を取り戻すことができたのです。

アブラムが戦いに勝利して帰ってくると、そこにサレムの王メルキゼデクが彼らを迎えに出てきました。このメルキゼデクは、新約聖書にイエス様の型として描かれる人物です。彼はサレム(「平和」の意)の王だけでなく、いと高き神の祭司でした。彼はアブラムとその一行を、「パンとぶどう酒」でもてなします。そして、「天地の主なるいと高き神」がアブラムを祝福し、この戦いに勝利させてくださったのだと祈りました。アブラムはこの祈りから、自分をこの地に導いてくださった神は、天地宇宙を創造し、支配しておられる方であり、どんな敵をも打ち破ってくださることがわかっている、心から感謝しました。そこで、彼は初めて会ったメルキゼデクに、すべての物の十分の一を贈ったのです。

その後、アブラムはソドムの王のもとに行き、ケタラオメルから取り戻したものを全て、王に渡します。ソドムの王は、「捕虜になった人々は返し

ていただきますが、財産はあなたのものにしてください」と提案します。しかし、ソドムの王が「アブラムを富ませたのはわたしだ」と言わないように、アブラムはその提案を「糸一本、くつひも一本いらない」と、きっぱり断りました。

## (承) 学ぶべき真理

さて、このアブラムのできことから、何を学ぶことができるでしょう。それは、神様は天地を造られたいと高き神であるということです。いと高き神は、一番偉い方ですから、どんな困難にも勝利を与えて下さいます。信仰とは、困難に立ち向かうことであり、勝利させて下さった神様に感謝し、栄光を帰すことなのです。

## (転) 生活への適用

みなさんなら、お友だちがいじめられていたらどうしますか。見て見ぬふりをしますか。それともアブラムのように救い出してあげますか。神様はいと高き神ですから、必ず勝利を与えて下さいます。正義のために、また弱い者のために、進んで困難に立ち向かいましょう。

## 結論

アブラムは、罪の生活から離れ、神様に信頼して「約束の地」に出発しました。その後も、神様に信頼して困難に立ち向かったのです。それゆえ彼は神様の祝福を豊かに受け取りました。そして祝福して下さった神様に感謝し、神様に栄光を帰しました。信仰とは、神様に信じて困難に立ち向かい、神様の祝福をしっかりと受け取って、神様に感謝し、栄光を帰することなのです。

## ワーク A

## 導入のために

ケンちゃん、意地悪なおともだちに、いじめられたことありますか。そのとき、だれかが助けてくれたら、どういう気持ちになりますか。

## ワーク

絵を見ながら、今日のお話を復習します。次のような質問をしてみてください。

●「ロトさんの羊飼いとアブラムさんの羊飼いがけんかをしたとき、アブラムさんはどうしたのかなあ。」アブラムさんは、ロトさんが敵に連れていかれたとき、どうしたのでしょうか。

最後の絵は、私たちはどうするか、考えるためのものです。子どもたちの声を聞いて下さい。

## ワーク B

●質問1 アブラムが神様に信頼を置いて進む姿を学びます。お話を思い出し、自分の言葉も使って書きましょう。

●質問2 自分が苦しい目にあった時にどうするかを話し合います。その苦しいことを神様が解決してくださった経験があるなら、話してもらいましょう。勇気が出ます。

●賛美歌 「おおしくあれ」

(ふくいん子どもさんびか82番)

●今日のお祈り 「神様、どんなに困った時でも神様が助けて下さることを信じて、勇気をもって進めるようお守り下さい。」

## ワーク C

●「天地の主なるいと高き神」に注目させます。

信頼すべきお方がどういってお方なのかを、この箇所のストーリーを話しながら会話していきます。

●そして、子どもたちの実生活の中で、(罪、恐れ、心など、自分の心の内にあるものも含めて)神様より強い存在はないことを発見させるように導きます。

●自分の目の前にある、現実困難状況も、この神様の存在を土台に見直すなら、心を安んじることができ、対処の仕方も違ってくることを実感させます。

## ワーク D

●質問1 アブラムの一回は決して優位ではなかったが、ロトのためにすぐに助けに行ったことを説明し、困難に立ち向かったことを話して、自分ならどうするかを考えてみてください。

●質問2 ソドムの王とメルキゼデクの対比ですが、聖書に書かれていることだけで十分です。混乱しないで人物を把握することが目的です。

●質問3 神の力による勝利として受けとめるように。アブラムは神の祭司に十分の一を贈ったことや、人からではなく神からの祝福だけを受け取ったことに、神に信頼することの具体的な姿を見いだして下さい。

●質問4 単なる正義感になってしまわないように気をつけて下さい。

## 中高校へのコメント

## ●考えてみよう

1 アブラムは、「親族を離れよ」と言われた主の言葉に正しく従わなかったために、どんな困難に出会いましたか。

2 エラムの王ケタラオメルにロトが捕らえられたことを聞いて、アブラムはエラムの王と戦ってロトを救い出しました。その時、ロトを救い出す動機となったものは何だったのでしょうか。

3 この戦いで、アブラムは勝利しました。だれのおかげによってアブラムは勝利したのでしょうか。

## ●自分に当てはめてみよう

1 アブラムは、「親族を離れよ」と主に命じられました。現代の私たちは、何によって主の命じられる言葉を聞くことができますか。

2 私たちの周囲で、弱い人が困難にあっているのを知ったとき、正義のゆえにその困難に取り組んで助けようとしているでしょうか。

3 困難を切り抜けて勝利を得た場合、その勝利を主によるものと考えることが出来ますか。

## ●話し合ってみよう

甥のロトがその財産もちも略奪されたことを聞いて、アブラムはそれを奪い返すために強い敵と戦いました。最初からムリだと思っていれば、ロトを救い出すことはできなかったでしょう。彼は主によって力づけられ、信仰による勝利を信じて戦いました。私たちも困難に直面したとき、彼のように主に信頼して立ち向かえるでしょうか。

## ワーク解説



過 題 信仰による義認  
聖 書 創世記15・1・16

## 序論

神にのみ信頼して約束の地に來たアブラムは、家畜が増え、敵に打ち勝ち、神の祝福を豊かに受けていた。しかし、あなたの子孫を地のちりのように多くします(13・16)という約束は、まだ実現していなかった。実は神は、このことを通してアブラムに、忍耐強く神の約束を待ち望むこと、つまり本物の信仰を教えようとしたのである。

## 一、アブラムの恐れ

今まで十分すぎるほど神から祝福を受けていたアブラムだが、その心には恐れがあった。彼は、「どんなに祝福されても、私にはそれを受け継ぐべき子孫がない。私が死んだら、すべての財産は、奴隷の長であるエリエゼルに譲るより他に方法はない」と考えていたのである。「いまだに子どもが与えられないのは、神の御心をそこねているからではないか」という恐れがあったのかもしれない。

しかし神は、彼の恐れを「存じ」の上で、アブラムよ恐れてはならないと仰せられた。神は、私たちの恐れや弱さをちゃんと知っておられる。その上で最善の時に最善のことをしてくださる。

## 研究資料

## 幻を受け取る信仰

パウロの「信仰義認」の例証としても用いられているアブラムの信仰(ローマ4・3、9)であるが、この時の彼の信仰は、遠い将来に関する神の壮大な約束(幻)を受け取る信仰であった。神は、時として私たちに大きな幻を与えようとする。そのようなとき、私たちもアブラムの信仰にならう者になりたい。

## ①見ないで信じる信仰(ヘブル11・1)

「あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです」(4節)という言葉が語られたが、この時アブラム自身の身から出た子はいなかったし、生まれる気配もなかった。

## ②語られたままを信じる信仰

数えることもできない天の星を示しながら、主は、「あなたの子孫はあのようにになるでしょう」と語られた。その時、「アブラムは主を信じた」(6節)のである。年齢や、子が一人もない現状からは、容易に受け入れることのできない約束だったはずであるが、全能の主への単純な信頼の故に、彼は、示された幻をそのまま受け入れた。

## ③試される信仰

神が示された幻は、必ず実現する。しかし、必ずしもすぐさま実現するのではない。実際、アブラムに与えられた約束は、数百年後も、イスラエル民族がカナンの地に戻るようになって初めて実

## 二、神を受け入れる信仰

神はまず、「わたしは敵の手からあなたを守る盾となる。あなたの報いは大きい」(英語の新欽定訳では「私は……大きな報いです」と、アブラムを励まされた。しかしアブラムにはまだ確信が生まれてこなかったようである。そこで主は、彼を天幕の外に連れ出し、満天に星のまだたぐ夜空を見上げさせられた。神は、この星だけでなく天地を創造された方である。その神が約束されたのだから、子は与えられると、アブラムは神の力を信じた。ここに、天地万物を創造された唯一絶対の神を信じる信仰が明確に表明されている。さらにまた彼は、御自身を盾として、また報いとして与えてくださる神は、子も与えてくださる方だと、約束に忠実な神のご人格を信じたのである。

その後、主はあなたの子孫はあのようにになるでしょうと語られた。アブラムはその主の言葉をそのまま受け入れることができた。そのとき神はこれを彼の義と認められたのである。アブラムは望み得ないのに望みをおいて神を信じた。人神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである(ローマ4・21・22)。

信仰とは、「神は、約束されたことを、能力的にも人格的にも必ず成就してくださる方だ」と信じ、受け入れることである。これ以前に登場した聖書人物のどれよりも明確に、アブラムは真の神が望んでおられる信仰を、自分のこととして経験したと言える。まさに「信仰の父」である。

## 三、神を待ち望む信仰

しかし、実際にアブラムが息子イサクを得るのは、この時からまだ十五年余り後のことである。さらにまた、イサクの子孫が「約束の地」であるカナンの地を領有するのは、五百年ほど後のことになる。この期間に、彼らはエジプトで約四百年を過ごさねばならなかった。なぜなら、カナンの地に住むアモリ人の悪が増し加わって、神がさばきを下されるまでに、それだけの時間が必要だったからである。神は、最善のときに最善のことをされることに心にとめておきたい。

残念ながら、アブラムであっても、この神のご計画の全体を見通すことはできなかった。主はそんなアブラムに、「待ち望む」ことを教えようとしていた。そのために、当時の契約の形式を実際に用いて、主は必ず約束を実行されることを示そうとされた。信仰とは、神が最善の時に最善のことをされるのを待ち望むことである。

## 結論

神様を信じていても、自分の思う通りにないことがよくある。しかし、神のご計画は自分の考えよりはるかにすぐれている。大切なのは、神を受け入れ、神のなさることを待ち望むことである。われらの神は、全能であり、ひとり子をさえてくださった方である。約束してくださったことを必ず成し遂げて下さると、信じ受け入れて、義とされたい。

現する(13・16節)。約束の成就の第一歩であるイサクの誕生でさえ、かなりの年数を経たからのことであった。信仰は、一度表明されたら終わりのものではなく、何度も試され、練られ、不動のものとされていく。

## テキスト

1 恐れてはならない 神の祝福の約束を信じてこまできたアブラムも、子どもが生まれない事実の前に、様々な戸惑いや恐れが生まれてきていたのかもしれない。彼の心を知りつつ、神は、彼の信仰を引き上げ、恐れを取り除こうとされる。

あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう祝福の約束の再確認と、その大きなはなはだし

いことの約束。

2 わたしの家を継ぐ者はダマスコのエリエゼル3節から、彼がアブラムの家に生れたしもべであることが分かる。当時は実子が生まれないう時、その家に生まれたしもべが相続することがあった。あなたはわたしに何をくださうとするのですか大きな祝福を頂いても、子が生まれないう状態では何になろうかという、彼の率直な思いが表されている。

4 あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです 彼のあとつぎは、この家のしもべエリエゼルではなく、アブラムから生まれる実子であることが、初めて明らかにされる。

4 主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで…」 子孫繁栄の約束を、これほど強い印象を

もって記憶させる方法は、他になかった。これはまた、創造の神を覚えさせる方法でもあった。

6 アブラムは主を信じた 神の示された壮大な幻を、彼は、そのまま受け入れた。

主はこれを彼の義と認められた アブラムの何かの行為のゆえに、義と認められたのではないことは注目すべきことである。これは、パウロの信仰義認の教理の例証ともされている(ローマ4・3、9)。これ以後の彼の従順さは、彼の信仰の結果である(ヤコブ2・21・23)。

7 この地をあなたに与えて 子孫繁栄の約束から、土地継承の約束に移っている。

8 わたしがこれを継ぐのをどうして知ることができまうか 御言葉に対する確証を神に求めることは、ときとして認められる(士師6・37、39)。

9 彼はこれらをみな連れてきて、二つに裂き、裂いたものを互いに向かい合わせて置いた 契約を結ぶ時に行われていた当時の儀式。当事者が裂いたものの間を通り、契約を破った場合は、同じように裂かれても良いと認めることを意味した。

13 あなたの子孫は他の国に旅びとなつて、その人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう 神の約束は、ときとして、長く厳しい試練の後にやっと成就する。

16 四代目になって彼らはここに帰って来るでしょう 神の約束は、遠い将来に至るまでを見通しているものである故、過程がどうであれ、必ず成就するものである。

## 礼拝メッセージ例

## ● 週 題 信仰による義認

## ● 聖 書 創世記15・1・16

## ● 暗唱聖句 アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。

## ● 目 標 私たちの盾であり報いである神様を信じ受け入れることが、信仰であることを発見する。

## 導入

私たちは、信頼できる相手とだけ約束ができます。それは、相手が約束を守る力があり、約束を守る人であると信頼しているからです。ところが、子どもが生まれない年齢にさしかかっていたアブラムは、子どもを与えるという神様の約束が信じられなくなり、恐れていました。

## (起) ストーリーを語る

今まで十分すぎるほど神から祝福を受けていたアブラムですが、その心には恐れがありました。「どんなに祝福されても、私にはそれを受け継ぐべき子孫がない。私が死んだら、すべての財産は、ダマスコのエリエゼルを養子にでもして、引き継がせるしかない」と考えていたのです。

そんなアブラムに神様は現れて、言葉をかけられました。「アブラムよ、恐れてはならない。神様は、彼の恐れを存じでした。神様はわたしたちの心を全てに存じます。全部知った上で、一番

良い時に一番良いことをして下さるのです。

神様はまず、「わたしは敵の手からあなたを守る盾となる。あなたの報いは大きい」と、アブラムを励まされました。しかしアブラムはまだ確信がもてません。

そこで神様は、アブラムを天幕の外に連れ出して、満天に星のまだく夜空を見上げさせられました。神様は、この星だけでなく天地を創造された方です。「その神様が約束されたのだから、約束は必ず守られる」と、アブラムはそうとき、神様の力を信じました。また「御自身を盾として与えてくださる神は、息子も与えてくださる方だ」と、神様の人格を信じたのです。

その後、主は「あなたの子孫はあのようになるでしょう」と語られ、アブラムはその主の言葉をそのまま受け入れることができました。そのとき神は、これを彼の義と認められたのです。アブラムは「神はその約束されたことを、また成就することができると確信した」のです。彼は、「神様は約束したことを、能力的にも人格的にも必ず成就してくださる方だ」と信じて受け入れ、義と認められました。これが、人類が神様を信じることによって、義(正しい者)と認めていただける初めとなりました。

さらにアブラムは、神様との契約の儀式の仕方也被えられて、そのとおり行いました。こうしてアブラムは、神様が一番良い時に一番良いことをしてくださるのを待ち望んだのです。

## (承) 学ぶべき真理

神様は、天地を造りたいと高き神です。その力を信じて待ち望むことが信仰なのです。また、神様は、あなたの盾ですから、その人格を信じて受け入れることが信仰です。この信仰によって、望みのもてない時でも望みをもって待ち望むことができるのです。

## (転) 生活への適用

皆さんも、約束をしたことがありますね。その約束を守れなかったことがありますか。「僕は必ず算数で百点とる」と約束しても、その力がなければ約束を守れません。また、約束して実行する力はあるても、いいかげんだったり、約束を忘れてしまったり、約束を守れません。百点取る力はあるても努力しない人は取れないのです。約束を信じるには、その約束した人が約束を守る力と約束を守る人格がないといけません。

神様は、天地を造った方ですからその力は十分であり、御自分が盾となって報いてくださる方ですからその人格は信じるに十分なのです。

## 結論

神様を信じていても、自分の思う通りにならないことがあります。しかし、その計画は自分の考えよりはるかにすぐれています。大切なのは、神様が約束されたことを待ち望むことです。

神様は、天地を造られたいと高き神ですから、その力を信じ、また神様はあなたの盾ですから、その人格を信じて、待ち望みましょう。

## ワーク A

## ● 導入のヒント

お友だちとおうちで遊ぶ約束していたのに、いつまでたっても家に来なかったことがありますか。お友だちが、約束を忘れてしまっていたからです。神様も、同じように約束を忘れることがあるでしょうか。

ワークでは、ぬりえをしましょう。ぬりえをしなから、次のような質問をしてみてください。

①神様はアブラムに何を言われましたか(5節)。

②神様はどんな約束をされましたか(5節)。

③アブラムは神様の約束を信じましたか(6節)。

●今日は暗唱聖句をしっかりと覚えましょう。

## ワーク B

●質問1 弱気になっていたアブラムへの力強い「神の約束」の言葉を学びます。天地を創造された、いと高き神の存在を更に深く知りましょう。

●質問2 アブラムの信仰の応答を学びます。自分も「信じる」決心をすることが大切です。

●質問3 今日の暗唱聖句です。主は、信じる人を喜んで下さることを話しましょう。

●賛美歌 「ハレル、ハレル」

(ふくいん子どもさんびか48番)

●今日のお祈り 「神様。神様はいつもすばらしいことをして下さいます。これからも神様をしっかりと信じていきます。」

## ワーク C

## ● 大切な聖書のメッセージである「信仰義認」を伝えます。

日本に生まれ育った私たちには、日本の異教的文化や歴史が無意識に染み込んでいるので、口では信仰義認といっても、実際には理解できていない場合が多いでしょう。勧善懲悪、因果応報、ばちあたり、などの考え方の根本には、「行いによって救われる」との考えがあります。

●「ハイ」の箇所を書き込む内容に基づき、会話しながら指導します。「ハイ」と答えた生徒にも「イエエ」の欄も考えさせると良いでしょう。

●ワークは材料にすぎませんから、教師がそれをどれだけ時間をかけてこなし、目標と話の筋を理解して、生徒とすることについて会話ができるかが一番重要です。

## ワーク D

## ● 質問1 聖書本文の内容を理解する設問です。

3つのことをもう少し説明して下さい。

●質問2 神様の約束を把握する設問。星の数の多さは都会では分かりにくいので説明を。

●質問3 確かに信じることでできる神様であることが理解できるよう、助けて下さい。神様は、信じる者を心から受け入れて義と認めて下さるお方です。

## 中高校へのヒント

## ● 考えてみよう

1 アブラムに与えられた主の約束はどんなものでしたか。

2 アブラムに子どもが与えられるという主の約束を、高齢になっていたアブラムは信じることでできたでしょうか。

3 アブラムへの主の約束は、すぐに成就したでしょうか。もしすぐでないとしたら、アブラムはそれでも主を信じたでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 アブラムは、主から約束の言葉が与えられるまで不安だったようです。私たちも、何かを祈っていても不安を感じた経験がありませんか。

2 また、約束の言葉が与えられたとしても、なかなかそれが実現しないときに、どのような気持ちになるでしょうか。

3 主は、約束を破られたり、取り消されるお方だと思いませんか。

●話し合ってみよう

主の約束がすぐに実現しなかったのなら、私たちはしばしば主を疑ってしまいます。しかし、私たちでも、よく約束を忘れたり、約束を取り消したりしますが、主はそんな愚かな私たちと同じであるはずがありません。主は、私たちよりずっと深く考えて、約束を与えられます。アブラムへの約束は、いつ、どのように実現したかを話し合ってみましょう。

## ワーク解説



週 題 自己の無能と神の全能  
聖 書 創世記17・1-8

## 序論

信仰によって義と認められたアブラムは、その後も、当然信仰によって歩むべきだった。しかし残念ながら、彼は妻サライの言葉に従い、つかえめのハガルによって子をもうけようとした。そして生まれたのがイシマエルだ。イスラム教の教祖マホメットは、自分がイシマエルの子孫であると主張している。今日の複雑な中東問題、すなわちイスラエル共和国と周辺のイスラム諸国との厳しい対立は、ここにその歴史的起源を持っていると言える。祝福ではなく、のろいがもたらされている現実をここに見る。

## 一、自己の無能

イシマエルが生まれた時、アブラムは八十六歳だった(16・16)。七十五歳でハランを出発してから十年余、主は何度も彼に現れ、語られたが、イシマエル誕生から十三年間には、そのような記録がまったく見あたらない。神が沈黙しておられたというよりも、アブラムの方に問題があったからだ。まさにアブラムの最暗黒期である。

しかしこの期間は、どうしてもアブラムに必要だった。自分の無能を徹底的に知る機会だったからである。神の約束を待ち望むことができなかったアブラムは、この世の象徴であるエジプトから

連れてきた奴隷の女ハガル(「移住」とか、「うつろう」とかの意味)の所にはいった。彼女が妊娠したことはサライとの間にいざこざをおこし、ハガルはいったん家を追い出されることとなる。アブラムは、何度もくちびるを噛んだにちがいない。この世の方法、肉の欲にひきずられた行動は、結局なんの解決も与えず、かえって神との交わりをそこねて、地にのろいをもたらすことを覚えたい。

## 二、神の全能

アブラムが九十九歳になったとき、主は再び彼に現れ、**「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と仰せられた。**もはや自分の力ではどうすることもできないことに気づいたとき、同時に憐れみ深い主の手がのびられていることに気づく。主は、約束を待ち望むことができなかったアブラムの不信仰を知りながら、**「全き者であれ」と言われた。**これは、**「全能の神」**が、不信仰な者さえも造り変えてくださることを意味している。しかし、そこには**「わたし」**の前に歩みという条件がある。これは直訳すると、**「わたしの顔に向かって歩み」となる。**全能の神の御顔を仰いで生活するときこそ、**「全き者」として生きる**ことができるのである。

アブラムは、自分の力ではどうしようもないことを体験していた。九十九歳で子は生まれない。しかし神にはできる。世の方法、肉の手段を放棄して、自己の無能に徹するとき、神の全能を経験する。自分を「こ存じ」のような者ですが、みこ

彼は、再び神の御声を聞く準備ができていたのであろう。

## テキスト

1 アブラムの九十九歳の時 前節では八十六歳という年齢が記されており、その間に長い空白期間があることが明確にされている。

わたしは全能の神である 「全能の神」は「エール・シャッダイ」の訳。明確な意味は不明とされているが、人間の弱さと対比されることが多いので、神の力を強調する言葉と見るのが妥当。人間の知恵や判断の無力を徹底して知らされ、謙らされていたアブラムに、神は、信頼に足る者、あらゆる祝福と守りの提供者、大能者として、「自身を啓示された。

あなたはわたしの前に歩み かつての行動において、神の御声を十分聞くことしなかったアブラムに対して、徹底して神の前に歩むことを求められている。それは、神にどこまでも信頼し、神の御声に注意深くあり、聞いた御声に忠実に従うことを含んでいる。

全き者であれ 神との関係において、欠けるところのない信頼、注意深さ、忠実さを持つことの要求。アブラムはこれまで、それらのものを部分的には持っていた。しかし今後は、それらを、生活のあらゆる場面、あらゆる領域にまで及ぼすように神は要求された。

2 わたしはあなたと契約を結び、大いにあなたの子孫を増すであろう 神のご要求の焦点は、こ

ろどおりなさってください」と、明け渡すとき、人は神の霊によって聖くされる。アブラムは、割礼を受けて、神に委ねた。自己の無能を知って神の全能に委ねることも信仰である。

## 三、アブラムからアブラハムへ

さらに注目すべきことは、このときに神はアブラムという名をアブラハムに変えられたことである。アブラムとは「高められた父」というような意味だが、アブラハムは「多くの国民の父」という意味になる。しかしより重要なのは、「ハ」という息の音が加わることだ。息で象徴的に表されているのは、「神の霊」である。

アブラムはこれまで、神との契約に忠実に従って生きてきた。しかし、現実にはその契約を守ることはできなかった。主はそのことを「こ存じ」だからこそ、神の御顔、神の臨在を常に覚えるように彼の名に「ハ」を入られたのであろう。さらに12章で語られた**「ハ」**の地すべてのゆからは、あなたによって祝福される**「ハ」**という神の約束は、より具体的に「全世界の多くの国民」に及ぶことが明確に宣言されたのである。

## 結論

この章でも、信仰とは何かが教えられる。それは自分の無能を知り、神の全能にゆだねることである。自分の力に頼っていたら、いつか頭を打つことは、誰でも経験していることだろう。だからこそ神に絶対的に信頼しよう。そのとき、私たちの生き方は全く変えられるのである。

## 研究資料

## 空白の13年間

今週のテキストは、アブラム99歳の時の出来事であるが、直前の16章は、アブラム86歳の時の事件で終わっており、この間の13年間については、何も記されていない。しかし、文脈を辿ってみると、この期間は、アブラムの信仰生涯にとってかけがえない期間であったと想像できる。

15章で、実子があとつぎとなるべきことを示されたアブラムであるが、16章では、サライに子が生まれる様子のないのを見、サライの勧めもあって、つかえめハガルによって子をもうけようとする。これは、人間的には賢そうな判断のように思えるが、どこまでも神に信頼し、御声を聞いていこうとする信仰的な行動ではなかった。

確かにハガルは子をはらんだ。でもその結果、彼女はサライを見下げるようになった。するとサライはハガルに厳しい態度をとるようになる。こういったあり様を目にしたとき、アブラムの心はどうであったか。

ハガルがイシマエルを生んだのはアブラムが86歳の時。その後、神の御声は絶えて聞こえない。アブラムは、先の見えない暗黒の中を通っているかのように思ったことであろう。どこで自分は間違ったのか。何が神の御心の道であるのか…。

## 礼拝メッセージ例

- 週 題 自己の無能と神の全能
- 聖 書 創世記17・1～8
- 暗唱聖句 わたしは全能の神である。
- 目 標 創世記17・1  
自分の力でどうすることもできないときこそ、全能の神様に委ねるべきことを発見する。

## 導入

神様は一番良い時に一番良いことをして下さるのに、それを待てないで、みんながしている方法でしてしまおうとすることがあります。アブラムもそのような状況にありました。

## (起) ストーリーを語る

神様の約束を信じて義と認められたアブラムでしたが、神様の約束が待ちきれず、奥さんのサライの言葉に従って、女奴隷のハガルとの間に子どもをもつてしまいました。その子どもがイシマエルです。その時、アブラムは八十六歳でした。七十五歳でハランを出発してから十一年、主は何度も彼に現れて語られましたが、イシマエル誕生からの十三年間には、何の記録もありません。アブラムが神様との交わりを失ってしまった期間ではないかと思われまふ。

エジプトの女奴隷のハガルは、自分がアブラムの子を生んだので、主人のサライを見下して、サライとの間にいざこざをおこし、いったんは家を

追い出されることになりました。アブラムは、この後ずっと、家庭にいざこざをかかえ続けるのでした。世の方法、肉の欲にひきずられた行動は、結局何の解決にもならず、かえって神様との交わりをそこねて、のろいをもたらします。

しかしアブラムが九十九歳になったとき、神は再び彼に現れ、「わたしは全能の神である。あなたはいわだしの前に歩み、全き者であれ」と言われました。もはや自分の力ではどうすることもできない高齢のアブラムに、神様は全能であることを示されます。人にはできないが神にはできます。そして神様は、約束を待ち望むことができなかったアブラムの不信仰を知りながら、「わたしの前に歩み、全き者であれ」と言われます。これは、いつも神様といっしょに生活するとき、全き者になれるということなのです。

アブラムは、自分の力ではどうしようもないことを体験していました。普通なら九十九歳では子どもはできません。しかし神にはできます。世の方法、肉の手段を捨てて、自らを明け渡したとき、神の全能を経験できるのです。

この時、神様はアブラムという名をアブラハムに変えられました。アブラムとは「大いなる父」という意味ですが、アブラハムは「多くの国民の父」という意味です。これは、「ハ」という息の音が加わることで、「神の霊が与えられることを意味しています。自分を明け渡して神様にゆだねる人に、神様はご自分の霊を与えて、いつも神様と共にいる、全き者にしてくださるのです。

アブラムは、いったんは「イシマエルが恵みを得ますように」と言って、神様の言葉に逆らいますが、その日のうちに割礼を受けて、神様に全てを委ねました。信仰とは、自己の無能を知って、神の全能に委ねることなのです。

## (承) 学ぶべき真理

神様は全能ですから、自分の力に頼ることをやめ、神様に自分を明け渡して委ねることが、信仰です。そうするなら、神の霊に満たされ、神様の前を歩んで全き者になれるのです。

## (転) 生活への適用

皆さんには、神様の約束が待てなかったことがありませんか。子どもに自動車を運転させるわけにはゆきません。交通规则を覚え、運転技術を身につけ、免許証をとるまでは、運転させることができないのです。神様も、私たちの成長を見て、一番良い時に一番良いことするために待たすことがあることを知って下さい。

## 結論

神様は一番良い時に一番良いことをなさいますから、待たされることもあります。それが待てなくて、世の中の方法や自分の力に頼ると失敗し、アブラムのようにのろいをもたらすのです。そんなときは、お祈りして神様に委ねましょう。神様は聖霊様によってあなたの心をきよくし、満たして下さい。

## ワーク A

## 導入のヒント

「神様、ほくはテレビ・ゲームがほしいです。与えてください。」「神様、わたしは力ちゃん人形がほしいです。絶対にください。」そんなお祈りをしたことがありますか。神様は、そのお祈りを聞いて下さってはいませんが、それをすぐになえて下さるとは限りません。「もう少し待ちなさい」と言われることもあるのです。そのとき、「はい」と言って、待てるでしょうか。

ワークでは、「やくそくめい」をします。アブラハムさんとサライさんのところから赤ちゃんのところまで、ちゃんと順番を守って行けるでしょうか。

## ワーク B

- 質問1 名前ががしです。今日のお話をもう一度思い出しながら考えましょう。人間の判断で行動すると悲しみが多いことを話しましょう。アブラムとアブラハムが答えに入ります。
- 質問2 暗唱聖句です。全能の神のすばらしさ、全能の神に委ねて祈りましょう。
- 質問3 具体的に助けて欲しいことを書いて、賛美歌「かみよわたしの」
- (こどもさんびか60番)
- 今日のお祈り 「神様、神様にはできないことはありません。自分の力ではかえらばらず、何でも神様におまかせできるようお助け下さい。」

## ワーク C

● 三択の問題は、正解は明らかで、間違っ人はいないでしょう。誤った二つの選択肢は、面白いもの、フツと笑えるものを出しています。「全能は「全ての能力を持つ」という意味です。

● アブラハムの気持ちに焦点を当てます。気持ちとは、感情を含んだ本音の部分です。アブラハムの本音の部分を想像させる中で、自分だったらどうだろうかと考えさせるのです。

● そして、実際の自分の問題とそれへの信仰的取り組み方に視点を移させます。アブラハムの神は自分の神でもあることを確認させ、自分のことをもアブラハムのように忍耐を持って祈り待つことを教えます。

## ワーク D

- 質問1 子どもが生まれるためにもう自分では何もできない状態です。これまでにアブラムが勝手にしてきた努力を回想してみましょう。
- 質問2 神の全能、従順な信仰、神の約束が理解できるように助けて下さい。
- 質問3 改名は、約束が自分のものになったというしるしです。他人からも神の約束が実現しているといわれるのです。例えば「天才さん」「美人さん」と呼ばれると、自分がそのように人から認知されているように思えます。
- 質問4 神様に信頼し委ねるとはどういうことを、一緒に考えて下さい。

## 中高校へのヒント

## ● 考えてみよう

1 必ず子どもが与えられるという主の約束を待ちきれなかったアブラムの取った方法は、どんなものでしたか。

2 その結果、どんなことがおこりましたか。

3 主は、アブラムの名前をアブラハムと変えられました。なぜ主は彼の名前を変えられたのでしょうか。

## ● 自分に当てはめてみよう

1 自分の考えや世の中の普通の方法で、神の約束を実現しようと思ったことはありますか。(例えば神の御旨と信じる学校に合格するために、礼拝を休んで塾に行くというような場合)

2 本当に大切なのは、自分の力に頼ることでしょうか。主の力を信じることでしょうか。

3 主の約束が成就するまで待たねばならない時があります。なぜ時間がかかるのでしょうか。

## ● 話し合ってみよう

もし神の約束が、私たちの努力や、他の人々がしている方法で成し遂げられるとしたら、その約束は神によるものだと信じられますか。

神は、私たちが、徹底的に主に頼る者となるように、また、私たちの信仰を引き上げるために、私たちの無能を知らされる方です。あなたはごう思いますか。もしそうであるなら、約束の成就までの時間をどのように過ごしたらよいか、話し合ってみましょう。

## ワーク解説



週 題 神の友となる(ソドムとゴモラ)  
聖 書 創世記18・16・33

## 序論

アブラハムの信仰は、様々な出来事を通して一歩ずつ深められていったが、おいのロトはどうだったろうか。彼は、ソドムの町の近辺が潤った土地だったので、そこを選んで移住した(13章)。その町にいたために、ケダラオメル連合軍の捕虜となったところを、アブラハムによって助けられた(14章)後も、彼はまだソドムの町に住み続けていた。よほど過ごしやす、繁栄した町だったからであろう。しかしこの町の悪は、もはや神が見過すことのできないほど、ひどいものになっていたのである。

## 一、神の友だったアブラハム

ある日、主は人としての姿をもってアブラハムを訪問された。それまでになかったことである。それは彼に、約束の子が次の年に生まれることを知らせるとともに、ロトの住むソドムを滅ぼすことを告げるためでもあった。それまでアブラハムは主の僕として歩んできたが、このとき主は彼を友のように思い、ご自分のしようとすることを彼に告げられたのである。主イエスも、弟子たちに對して同じような思いをもたれたことを思い出し、ほしい(ヨハネ15・15)。

## 研究資料

## とりなし

「とりなし」を意味する英語インターシードやその語源となったラテン語からは、「間に行く」という意味合いを読み取ることができる。とりなしとは、神と人(々)との間に入って行き、その人(々)の祝福を神に祈り求めることである。

とりなすためには、二つのことが必須である。第一は、神に近くあること。いつも心が神に向けられており、神の御思いやご計画に對して敏感でなければならぬ。第二は、人に近くあること。人の現状を覚え、その人に関心を持ち、さらにその人に代って、その人の祝福を神に訴え、祈るのである。

この点において、最大の模範は、キリストである。キリストは、神の御子として、父なる神と常に一つであられる。同時に、天での御位を捨て、人として生きて下さったお方でもある。滅び行く罪人を救おうとして、罪人の立場にまでご自分の身を置き、十字架の死を引き受けて下さったのである。よみがえられた主は、今も神の右にあって私たちのためにとりなして下さる。キリストこそ、最高最善のとりなし人である(ローマ8・34、ヘブル7・25)。

聖書の中には、更に、偉大なとりなし人としてモーセ(出エジプト32・31、32)、ダニエル(ダニエル9章)、ネヘミヤ(ネヘミヤ1章)などの人々

神との関係が深まってくるとき、信仰も深まっていく。このとき、アブラハムは神の思いを理解できるほど深い関係になっていたので、神は滅びの目前にある町のことを彼に隠しておくわけにはいかなかった。この町も、本当は神の祝福が注がれるべき町の一つなのだから。

## 二、とりなすアブラハム

神の思いを理解できるとともに、アブラハムはこの町が非常に悪く、主ご自身が調べられたら、滅びをまぬかれることはできないことも知っていた。しかし、「正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるはずがない」という確信のゆえに、彼は主の前に立ってとりなしたのだ。五十人から始めて十人に至るまで、彼は主に訴えた。「おいのロトとその家族が正しい者であつたら、この町全体が救われるはずだ」という希望をもって。

「地のすべての民がみな、彼によって祝福を受ける」とは、このようなとりなしによって実現する。たとい悪が満ちているこの世であっても、そこに少数の正しい人がいて、この世のために執り成すことによって滅びをまぬかれることができるのだ。現代の私たちは、国のために、町のために、人々のためにとりなしをしているだろうか。とりなしができてこそ、本当の信仰と言える。

## 三、中途半端な信仰のロト

Ⅱペテロ2・7には「義人ロト」と書かれているが、彼はソドムの町に住みながらも、町の人々

を記録しているが、アブラハムもまた、偉大なとりなし人であった。

アブラハムのとりなしは：

①神の御思いを知らされてのとりなしであった(17節)。アブラハムは、「神の友」(歴代志下20・7、イザヤ41・8、ヤコブ2・23参照)と呼ばれている。神は、罪惡に満ちたソドム、ゴモラを滅ぼそうとする際、その御思いをアブラハムに告げないではおられなかった。

②聖別された生活を背景にしたのとりなしであった。ソドムの町に住んでいたロトは、その罪惡を嘆きはしていたが(Ⅱペテロ2・7、8)、町が裁かれようとする時になっても、その町から離れがたく思う程、この世の物に心がとらわれていた(19・16)。アブラハムは、そのようなものから完全に聖別されていた(13・8・13参照)。

③神のご性質に訴えてのとりなしであった(23・25節)。正しい者を悪い者と一緒に滅ぼしてしまわれることは、神の公義に反するとの訴え。

④ねばり強いとりなしであった(27・32節)。神に對して、謙りつつも、大胆に、繰返して裁きの回避を求めていく忍耐深いとりなしであった。

## テキスト

16 その人々 アブラハムへの三人の訪問客。そのうちの一人は「主」と呼ばれており(13、15、17、20、22節他)、あとの二人は、御使い(19・1)と呼ばれている。

17 わたしのしようとする事をアブラハムに隠し

を悔い改めに導くことができなかった。それどころか、19章を読むなら、娘二人の婚約中の相手にも、また妻にも、信仰を伝えることができていなかったようである。かろうじて未婚の娘二人だけが、御使いに手を引かれて救い出される。

ロトの信仰は、自分と娘を救うだけのものだった。それでも彼を「義人」と見なし、滅びから救われた主は、どれほどあわれみ深いお方であろうか。ロトはソドムの人々の不法の行いを日々見聞きして、その正しい心を痛めていた(Ⅱペテロ2・8)のであるが、彼らのために必死にとりなすほどの信仰者ではなかった。また彼らが悔い改めて惡を離れないなら、意を決して他の町に移住するという聖さも持ちあわせていなかった。アブラハムとの違いは歴然としている。ロトは「神の友」ではなかった。

## 結論

この章からも、信仰とはどういうものかが教えられる。それは神の友となつて、何でも語り合える仲になることである。また、人々の救いのためにとりなすことであり、さらに、聖さを保って人を救いに導くことである。私たちは、このような深い信仰をもっているだろうか。

ておいてよいであろうか。神がこのように考えられたことの理由としては、アブラハムを「友」とみなしておられたことだけでなく、(続く18、19節から)彼を祝福の基、子孫への信仰的指導者となさっておられたこともある。神の御思いを十分知らされた者だけが、神の祝福を分かち与え、靈的な指導をすることができる。

20 ソドムとゴモラ 現在の死海の南端の部分にあったと考えられている。死海の水面の上昇と共に水面下に沈んでしまった。

叫び ソドム、ゴモラに満ちていた罪惡を訴え、その町の処罰を求める叫び。

22 その人々は：ソドムの方に行つた二人の御使いが、ソドムの現状の確認のために出かける。

アブラハムは、なお主の前に立っていた。とりなしのわざをなすため、常に立っているべき位置。

24 五十人の正しい者 正しい者が悪い者の道連れになつて滅びことは、それが少数ではあつても神の公義に反するのではないかと訴え。最初は「50人くらいなら」と思っていたアブラハムも、段々不安を覚えて、その人数を下げていく。それは同時に、主の義の厳格さと、主のあわれみの大きさに對する信仰の拡大でもあった。

33 わたしはその十人のために滅ぼさないであろう。しかし、アブラハムの懸念のとりなしにもかかわらず、10人の正しい者さえもいなかったソドムとゴモラは、ついに滅ぼされてしまう。

- 週 題 神の友となる(ソドムとゴモラ)
- 聖 書 創世記18・16-33
- 暗唱聖句 わたしはその十人のために滅ぼさないである。 創世記18・32
- 目 標 ロトとアブラハムを比較することにより、神の友となつて人々をとりなせることを発見する。

## 導入

アブラハムの信仰は、様々な出来事を通して一歩ずつ深められていきました。一方、おいのロトはどうだったのでしょうか。敵の捕虜となつたところをアブラハムによって助けられた後も、彼はまだソドムの町に住み続けていました。しかしこの町の悪は、もはや神様が見過ごすことのできないほど、ひどいものになっていたのでした。

## (起) ストーリーを語る

ある日、神様は人としての姿をとり、二人の御使いと共にアブラハムに現れられました。アブラハムはすぐに走って迎えに出ます。そして礼拝し、「ご馳走を出してもなしました。」すると、神様はアブラハムに「来年の今ごろ男の子が与えられる」と告げられます。サラは信じられなかったのですが、アブラハムはそれを信じていました。そして出発の時となり、アブラハムが見送りに行く途中で、主は「わたしのしようにすることを彼に告げないであらうか」と

思い、これからなされることをアブラハムに語られたのです。この時、アブラハムは神様の思いが理解できるほどの深い交わりをもっていたのでしよう。彼はそれまで主の僕として歩んでいましたが、この時には、神の友となつていたのでした。

神様がソドムとゴモラの町を滅ぼすことを告げられると、アブラハムはこの町をとりなし始めます。彼は「神様が正しい者を悪い者と一緒には滅ぼされるはずがない」と考えたのです。五十人から始めて十人に至るまで、彼は主に訴えます。「もし十人の正しい人がそこにいたら」とは、「ロトの家族が正しい者であつたら、この町全体を滅ぼされませんか」という意味でしょう。

アブラハムがとりなしている時、二人の御使いはソドムの町に着きました。ロトもアブラハムと同じように彼らを出迎え、礼拝し、食事を出します。するとそこに、ソドムの町の人々が押しかけてきて御使いに悪いことをしようとしたのです。ロトは御使いを守るために家の外に出ました。ところが戸に押しつけられ、戸が破られそうになったとき、かえって御使いに助けられたのです。

そこでロトは、神様がソドムの町を滅ぼそうとしておられることを聞き、親族を助けようと、このことを告げました。けれど、親族は誰も耳をかさず、ついに裁きのときが来ます。この時、ロトと妻と未婚の二人の娘は御使いに手を引かれて、かろうじて救われます。ところがロトの妻は、振り返ってはならないという御使いの言葉を聞かずに振り返り、塩の柱になってしまいました。

## (承) 学ぶべき真理

ロトはソドムの町に住みながらも、町の人々を悔い改めに導くことができませんでした。それどころか、家族や親族にも信仰を伝えることができなかったようです。ロトの信仰は、かろうじて自分と娘を救うだけのものでした。彼は、ソドムの人々の「不法の行いを日々見聞きして、その正しい心を痛めていた」(エペソ2・8)ののですが、彼らのために必死にとりなしてはいなかったのです。また彼らが悔い改めて悪を離れないなら、意を決して他の町に移住するという聖さも持っていませんでした。ロトは、「神の友」ではなかったのです。信仰とは、神様と親しく交わる神の友となつて、人々を神にとりなすことなのです。

## (転) 生活への適用

「地のすべての民がみな、彼によって祝福を受ける」とは、とりなしの祈りによってはじめて実現します。たとえ悪が満ちているこの世であっても、そこに少数の正しい人がいて、とりなして祈るなら、滅びをまぬがれることができるのです。皆さんは、国のために、また人々のためにとりなして祈っていますか。とりなしの祈りができてこそ、本当の信仰と言えます。

## 結論

信仰とは、神の友となつて、何でも語り合える仲になり、人々の救いのためにとりなして祈り、自らのきよさを保つて人を救いに導くことです。私たちも神様の友となり、地の全ての民が私たちを通して祝福されるよう祈りましょう。

## ワーク A

## 導入のヒント

みんなの家族やお友だちで、病気の人はいませんか。また意地悪なお友だちはいませんか。その人たちのためにお祈りしましょう。

● ワーク 「とりなしカードとカード入れ」

①紙皿2枚、ハサミ、ホッチキス、ひも(又はリボン)を用意しておく。

②動物のカードを切りとり、線の上にとりなしの祈りをする人の名前・祈りの課題を書く(字の書けない子のためには教師が書いて下さい)。

③お祈りカード入れをつくり、マジックやクレヨンなどで、絵を書く。

④カードを一枚ずつとり出して祈る。

## ワーク B

● 質問1 アブラハムのとりなしの祈りを思いつつ、ロトの救いまでの迷路をします。熱心なとりなしを聞かれる神さまを知りましょう。

● 質問2 アブラハムとロトの違いを考えます。アブラハムに習いましょう。

● 質問3 わたしの祈りとして、今イエス様を伝えたい人を挙げます。神の友になりましょう。

● 賛美歌 「わたしはおともだちに」

(ふくいん子どもさんびか53番)

● 今日のお祈り 「神様。まだイエス様のことを知らない家族やお友だちのみなをお救い下さい。そのためにわたしをつかって下さい。」

## ワーク C

● 「神の友」という語は、この聖書の箇所には出てきません。また、暗唱聖句も「神の友」を含みません。よって、内容によってそのことを説明する必要があります。

● 「ドクター・ゴッホ」は、①前後をつなぐため、②用語を解説するために、時々登場します。

● 最後の質問で「イエス様を信じているあなた」の表現があります。明確な信仰を持っていない生徒も多いと思いますが、「信仰を持ったらあなたも神の友になるんだよ」と教えて下さい。

● 名前を書かせて、一緒に祈ってあげて下さい。

## ワーク D

● 質問1 神を心から信頼している者に対して神は真実でいてくださる。真に受け入れ合える神との信頼関係を理解できるように助けて下さい。

● 質問2 アブラハムが、滅び行く人のことを思つて神様に心から信頼して迫る、熱心なとりなしの祈りです。状況を説明してアブラハムの真剣さを考えることができるように。

● 質問3 ロトの心細い思いからくる信仰の不徹底を考えましょう。不安は不信から来ます。

● 質問4 一人の人の祈りにでも心をこめてくださる神に信頼しましょう。恐れないうで祈ることができるように、また具体的なとりなしの祈りができるように導いて下さい。

## 中高校へのヒント

## ● 考えてみよう

1 主がアブラハムに現われ、ソドムを滅ぼすことを告げられたのは、なぜでしょうか。

2 アブラハムはそれを知ってどうしましたか。

3 ソドムと今日の日本の社会は、似ているでしょうか。それとも違うでしょうか。

## ● 自分に当てはめてみよう

1 ロトは、汚れた罪の町と知りながら、ソドムの町に住んで、その悪影響を受けていたようです。私たちもこの世界で、悪い影響を受けていることはないでしょうか。

2 もし、主がアブラハムにソドムの裁きを告げられたように、私たちに世の裁きを知らされるなら、あなたはどうしますか。

3 アブラハムは、必死にとりなしの祈りをしました。私たちは、同じようにするでしょうか。

## ● 話し合ってみよう

アブラハムは、ロトの住んでいるソドムの町のために、とりなしの祈りを主に捧げました。それは、ロトとその家族を愛するゆえであつたと思われま。

主は、今でも聖書を通して、罪の世を裁かれることを告げておられます。現代の社会は、ソドムやゴモラほど汚れていないでしょうか。あるいはもっと汚れているでしょうか。神の裁きが必ず下ることを知らされている私たちは、何をすべきでしょうか。



週 題 イサクをささげる  
聖 書 創世記22・1～19

## 序論

アブラハムの信仰は、数々の出来事を通して深められていったが、今週の体験はそのクライマックスと言える。15章で信仰によって義と認められた彼は、本章でその信仰に基づいて行いによって義とされた(ヤコブ2・21)。信仰は必ず行いによって表現される。幾つかの失敗を犯した彼であっても、主の約束を信じ続けた結果、「イサクをささげる」という大胆な行動をとることができたのである。この箇所から、真の信仰は次の三つのことを生み出すことがわかるだろう。

## 一、神に従う

イサクが十代になった頃であつたろうか。ハムはアブラハムを試みて彼に言われた。「神の試は人の心のうちより善きものを引出さんとして試験し給う」(ウイルクス)。神の約束を待ち望んでずっと与えられたイサクをささげよとの神の言葉だった。彼は一晩まんじりともしないで考えたに違いない。それでは、子孫が増えるとの神の約束はどうなるのか。息子を火に焼いてささげることは、主の憎まれることではないか(申命記18・10)。神は矛盾したことを命じられているのではないか。しかし、最終的に彼は自分の考えよりも神の御旨に従った。ただ「このお方に従えば間違いない」との信仰による従順であつた。

に従うことを決意した。彼はこのとき、当時では考えられない復活の信仰をもったと、ヘブル書の著者は記している(11・19)。彼の信仰は一段と引き上げられたのである。

## 二、神にささげる

アブラハムは、12章で国・親族・父の家を離れて主の示される地に出ていったように、本章でもイサクをささげるために、主の示される山へ出ていった。三日間の道程で、彼はイサクと色々話したに違いない。今後のことを考えて、あるいは不安が心をよぎることもあつたろう。そして、モリヤの山が見えたとき、彼は息子と二人っきりで坂道を上り始めた。イサクの質問に心がきむしられる思いをしながら、神の示される場所に着いた。そこで彼は、息子に神の言葉を知らせ、その同意を得たと思われる。そうでないと、老人のアブラハムが青年イサクを縛れるはずがない。

アブラハムは、最愛の息子を文字通り燔祭としてささげた。それは、最愛の息子以上のお方がおられたからである。アブラハムが息子以上に神を愛するかどうかを、神はためされたのだ。天地を創造されたお方は、息子以上のお方であることを彼に確認させられたのだ。

信仰によって義とされた者は、義として下さったお方に最善のものをささげるに違いない。義とされることはそれほど価値あるものである。もし私たちが最愛のものをささげられないなら、その最愛のものが私たちの神となっているのだ。

## 三、神の御心を理解する

ソドムを滅ぼそうとされたとき、主は「わたしのしようとする事をアブラハムに隠してよいであろうか」と思われた。本章の経験も、神がなそうとすることをアブラハムに知らせるためであつたことが、それから二千年後、神のひとり子が十字架につけられたときに明確になる。

モリヤの山は、後にエルサレムの町が建設された所である。たとい復活の信仰をもっていたとしても、自分の手で息子を殺さねばならなかったアブラハムは、父なる神が御子イエスをエルサレムで十字架につけられたときの痛みを、自分のこととして経験したのである。しかし、御子イエスの場合には、ハワラバを手にかけてはならないVとの声が聞こえることがなかった。

アブラハムがこの経験をしたゆえに、神は再度彼を祝福するという約束を確認された。そして現代の私たちも、彼の経験を通過して、ハ神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さったVという、神の愛の偉大さを実感できる。

## 結論

ささげられたイサクは殺されなかった。それは、ハ神みずから燔祭の小羊を備えて下さったからである。神は時に試験を与えられる。しかしそれはあなたの信仰をさらに引き上げるために他ならない。神は試験とともに脱出の道も備えて下さる。あなたがささげる以上のことを、神ご自身が備えて下さるのである。

## 研究資料

## 神からの試験

悪魔は、誘惑により神の道から引きずり落とそうとして信仰者を試みるが、神は、信仰者の中から不純物を取り除き、他の方法によっては身につかない不動の信仰と、練られた品性とを与えようとして、信仰者を試みられる(ヨブ23・10、詩篇119・71、箴言3・11、12、ローマ5・3、4、ヘブル12・5～11、ヤコブ1・2～4、1ペテロ1・6、7)。幾多の試験を通して初めて、私たちは「試験済みの者」として神の前に立つことができるようになる。

「あなたの愛するひとり子イサクを…ささげなさい。」(2節)

アブラハムも、多くの試験の経験をしてきたが、そのクライマックスとして、神の最終試験とでも言うべきものが与えられた。

①従順のテスト 従いえないと思える神の言葉。彼の心はどんなにか苦しみ、揺れ動いたことだろう。しかし、聖書中には、翌朝早く起きて、黙々と神の言葉に従おうとする彼の姿だけが記されている。

②信仰のテスト イサクを通して子孫を増し加えるという神の約束はどうなるのか。疑問は最後まで、決して明確には晴れなかったであろう。しかし、「彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある」(ヘブル11・19)とさえ信じて、御言葉

に従った。ただ「このお方に従えば間違いない」との信仰による従順であつた。

③献身のテスト 最晩年の子、神の約束により奇跡的に与えられた子。祖国を離れ、愛する家族を後ろにして神に従ってきたアブラハム。神のご要求とあれば、何物をもささげてきたアブラハムであるが、その彼にとつても、最も困難なご要求だったに違いない。しかし、その子をささげることを通して、彼は、「神を恐れ」(12節)、神の絶対主権を知る者であることを証した。

## テキスト

1 これらの事後、神はアブラハムを試みて多くの試験を受け、時には失敗も重ねながら、アブラハムは、その信仰が練られてきていた。神は、最終的な試験を与えることができる時がついにきたことを覚えられたのであろう。主は、信仰者に、いつ、どのような試験を与えるべきかを存じてある(1コリント10・13)。

2 あなたの愛するひとり子 神は、アブラハムがイサクをこよなく愛していることを存じて、あえてこの試験を与えておられる。後に、神ご自身がひとり子を十字架につけられたことに思いを馳せさせられる。

モリヤの地 後にソロモンが神殿を建てた場所とされる(歴代下3・1)。ここでは、神への礼拝と献身が、数多くの犠牲の供え物を通して表されるようになった。

3 朝早く起きて 遅延なしの従順。

5 わたしとわらへは…そのち、あなたがたの所に帰ってきます。どのようにしてそれが可能であるかはわからないが、イサクを通しての祝福を約束されていること故の、信仰による言葉。

8 子よ、神みずから燔祭の小羊を備えて下さるであろう。ここでも、雄羊の出現を予想しての言葉というより、彼自身、戸惑いと疑問を持ちつつ、信仰による従順の中での発言であらう。

9 その子イサクを縛って 父子合意の上のことであつたろう。イサクもまた、神の恵みの中で、神を畏れる者に成長していた。

10 その子を殺そうとした時 神は、しばしば、ぎりぎりのタイミングで事態に介入される。

12 あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った 神がひとり子をさえ、私たちのために与えて下さったので、私たちは、神が、私たちを深く愛しておられること、また、万物をも喜んで与えて下さることを知ることができた(ヨハネ3・16、ローマ8・32)。

13 雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた 小羊なるイエス様の身代りの死を思わせる場面。

14 アドナイ・エシ(主の山に備えあり) 忠実に従う者に、主は、必要な物を必要なときに備えて下さる。

●週題 イサクをささげる

●聖書 創世記22・1～19

●暗唱聖句 あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った。

創世記22・12

●目標 信仰とは、神様のなされることが最善である信じ、神様に委ねることであることを発見する。

#### 導入

アブラハムが神様を信じて従えるようになるために、神様はいろいろな訓練を与えられました。その中で一番厳しかったのが、今日学ぶ箇所です。ある日、神様はとんでもないことをアブラハムに告げられました。

#### (起) ストーリーを語る

息子イサクが十代の頃です。神様はアブラハムを試して言われました。「あなたの愛するひとり子イサクを：モリヤの山でささげなさい」。これを聞いたアブラハムは耳を疑ったでしょう。その夜は、ほとんど眠れなかったに違いありません。しかし彼は、神様のみこころに従う決心をし、次の朝早くに出発しました。神様の計画は、必ず最も善いものであると堅く信じていたからです。

アブラハムは、二人の若者とイサクを連れてモリヤの山を目指して出かけました。父と息子はいろいろな話をしながら歩いていったことでしょう。愛するイサクの顔を見、声を聞きながら、アブラ

ハムは神様の御言葉をおもいめぐらしたことを思います。そうして出発してから三日目に、約束の山が見えてきました。アブラハムは、一緒に連れてきた若者たちをそこで待たせました。彼は、イサクにたきぎを負わせ、自分の手には火と刃物をもつて、二人だけで約束の山に登ってゆきました。途中でイサクが「お父さん、火とたきぎはありますが、燔祭の羊はどこにありますか」と聞き

ました。すると、アブラハムは、「神様みずから燔祭の小羊を備えてくださる」と答えて、なおも一緒に歩き続けました。

こうして、二人は神様が示された場所に着き、そこに祭壇を築き、たきぎを並べました。アブラハムはもうこの時には、神様からの言葉をイサクに告げていたでしょう。イサクは素直に縛られてたきぎの上に載せられたのです。イサクは父に信頼し、父は神様の真実に信頼していました。いざ刃物を手に、本気でイサクを殺そうとしたそのとき、神様は天からストップの声をかけられました。そして、アブラハムが神様のためにひとり子をささげたくないほど神を恐れ敬う信仰をもっていることを知ったと告げられたのです。そのとき目を上げたアブラハムは、角をやぶにかけた一頭の雄羊を見つけました。そして、それをイサクの代わりに燔祭としてささげたのです。そこで彼らは、『主の山に備えあり』ということを経験しました。神様がなされることには、備えがちゃんとあることを学んだのです。

#### (承) 学ぶべき真理

アブラハムは前にも学んだように、神の友と呼ばれたほど神様のみこころを知っていた人です。彼は神様の計画は、自分の考えと比べものにならないほど良いものだと思っていたので、最愛のイサクさえ神様にささげる決心ができました。またイサクを与えて下さった神様は、彼をよみがえらせて下さると信じていたことも、ヘブル人への手紙に書かれています。

人の目には理不尽に見えても、神様は絶対に正しいのです。理不尽に思えることでも、神様に従うなら、そこに神様が用意しておられる祝福を発見でき、受け取れるのです。

#### (転) 生活への適用

皆さんは、神様が聖書で教えておられることと自分の思いが異なったとき、どうしていますか。たとえば、聖書には怒ってはならないと書かれているのに、怒ってしまったらどうしますか。怒らせたと相手に気づけますか。確かに怒らせたと相手も悪いかもしれませんが、怒った自分も間違っています。聖書は怒りを消してから注意してあげなさいと教えていますから、自分の感情にとらわれないうで、怒りを静めてから行動するべきです。

#### 結論

皆さんの思いと異なっても、神様は絶対に正しいのです。おかしいと思えることでも、神様の御言葉どおり従うなら、そこに神様が正しいことを発見し、神様の用意された祝福を受け取ることができます。

## ワーク A

### ●導入のヒント

もしお父さんがみんなを縛って、「神様にささげる」って言ったとしたら、どう思うかな。そんなひどいことってないよね。でも、神様はアブラハムさんに、せつかく与えられた子どものイサクさんをささげるように命令され、アブラハムさんもそれに従ったのです。なぜでしょうか。

### ●ワーク アブラハムのささげもの

神様がアブラハムにささげるように命令されたものは、イサクだと確認します。色をぬりながらこんなに大切なイサクをささげなさいといわれたこと、そのときのアブラハムの気持ち、でも従ったことなど、対話しながらすすめて下さい。

## ワーク B

●質問1 アブラハムへの神様の命令を確認します。どんなに大変な命令であるかを話し合ってみましょう。「ささげる」ってどんなことかな。

●質問2 「モリヤの山」を示します。どんな気持ちで二人は山へ三日間歩いたのかを考えます。

●質問3 「主の山の備え」を知ります。神はささげる者に必ず祝福を下さる事を話しましょう。

●賛美歌 「おささげします」

(ふくいん子どもさんびか17番)

●今日のお祈り 「神様、アブラハムのように誰よりも神様を愛せますように。そして、どんなときでも神様に従えるように助けて下さい。」

## ワーク C

●ワークは生徒と会話をする材料ですから、学校のテストのようにならぬよう注意下さい。予習してやるわけではないので、最初の5分ぐらい各自で書き入れることはやむをえないことでしょう。しかしその後は、目標と適用を思い描きながら、生徒たちの考えや書いたことを材料にして話し合い、目標に進んでいくように努力して下さい。

●そのため教師は前もって、質問すること、予想される解答、会話などを祈り備えて下さい。

●「おそれる」とは、恐怖ではなく「恐れかしこむ・恐れ敬う」という「畏怖」の意味です。

●生徒の「大切にしているもの」とは何かを話しあうチャンスです。

## ワーク D

●質問1 神の命じられた内容を知り、アブラハムがすぐに従ったことを確かめます。アブラハムの気持ちを考えつつ、自分ならどうするかを考えましょう。

●質問2 従う中で、さらに従うことを問われ続ける姿を見て、従うことの意味を考えます。

●質問3 アブラハムの行動は、本気で神に信頼することの具体的な証しであることを発見し、信仰は具体的な従順であることを考えます。また、神は信じる者を守られることを覚えさせます。

## 中高校へのヒント

### ●考えてみよう

1 なぜ神様は、ひとり子イサクをささげるようアブラハムに言われたのでしょうか。

2 神様の言葉を聞いたときに、アブラハムはどう思ったのでしょうか。

3 アブラハムは、神様の言葉に従うことができただけでしょうか。

### ●自分に当てはめてみよう

1 私たちにとって神様より大切なものが何かないでしょうか。

2 もし、神様より大切なものがあるとしたら、それは何でしょうか。

3 その大切なものを、神様にささげなさいと言われたら、あなたはどうしますか。

### ●話し合ってみよう

1 アブラハムにとって、ひとり子イサクは最愛の息子でした。そのイサクをささげるとき、心は張り裂けるようだったでしょう。それでも、アブラハムがイサクをささげたのは、神が第一だったからです。これは、神様を第一にしているかどうかの神様の試みでした。この試みについて、あなたはこう思いますか。

2 ご自分に対するアブラハムの態度をご覧になられた神様は、彼の信仰を確認されたことでしょうか。そして、その場所に小羊が備えられていました。現在の私たちにとって、この小羊とはだれをさしているのでしょうか。



週 題 争わないイサク  
聖 書 創世記26・1-33

## 序論

アブラハムの死後(25・8)、主との契約はイサクに受け継がれた。先週も学んだように、イサクは父に従う従順な息子であったが、それは神に対する態度や、他の人々に対する態度にも表れている。寄留民という弱い立場にあっても、彼は周囲の人々と争わずに歩んだ。それは父親と同様、主なる神を信じ続けたからである。彼の信仰は、次の三つのことからわかるだろう。

## 一、主との交わり

彼がベエルシバに住んでいた頃、アブラハムの若い時におこったのは別のききんがおこった。イサクは父を真似てエジプトに行こうと、20キロほど西のゲラルまで進んだ。でもそのとき、主は彼に現れて、**「この地にとどまるなら、わたしはあなたと共にいて、あなたを祝福し、よくと言われた(26・3)。」**あなたと共にいるVとの約束は、アブラハムにはまだ明確ではなかった。

また数年後にベエルシバに戻ってきた時にも、主は彼に現れて、再び**「わたしはあなたと共にいる」と仰せられた(26・24)。**そこで彼はその所に祭壇を築いて、主の名を呼んだ。このように主は、アブラハムに対するよりも明確に、**「あなたと共に**

にいるVとの事実を強調されている。

## 二、主の守り

このゲラルに住んでいたとき、イサクは妻リベカを妹と偽った。これはアブラハムが自分を守るためにしたのと同じで、大きな過ちだった(12・13、20・2)。しかしこの時も、父親の場合と同じく、神が彼を守られたことに注目したい。王アビメレクがイサクとリベカが夫婦であることを発見したのは、祝福の基である彼らが、のろいの基とならないための神の摂理だった。民が罪を犯さないように、またその結果としてイサクが傷つけないように、神が守られたのである。たといイサクが不信仰になったときでも、主は結ばれた契約のゆえにイサクに真実を尽くされた。

## 三、主の祝福

イサクが主の言葉に従ってゲラルにとどまったゆえに、ききんの時であるにもかかわらず、その年に百倍の収穫が与えられた。その他にも多くの家畜やしもべを持つようになったが、それらはみな、主の祝福だったことを忘れてはならない。しかし、外国人が豊かになっていくことを見たペリシテ人は、彼をねたむようになった。そしてアブラハムが掘った全ての井戸(21・30)をふさいだ上に、イサクをその地から追い出したのである。彼は町の外にある谷(というよりも平地)に天幕を張り、そこで家畜の群れを飼うことにした。そこで彼は必需品の水を得るために井戸を掘った

が、二度までもペリシテ人に奪われる。しかし三度目は大丈夫だったので、彼はそこをシボテハ(広い所という意味)と名付け、**「主がわれわれの場所を広げられた」と、主に感謝した。**

そこで数年過ごした後であらう。ききんがおさまったので、彼はベエルシバに戻った。そこでも主は彼を祝福されたため、ペリシテ人はイサクが神に祝福されていると認めざるを得なかった。そこで、ペリシテの王アビメレクは部下と一緒にイサクを訪問し、相互不可侵の契約を結ぼうと提案したのである。アブラハムの時代にも同じような出来事があったことに留意しよう(21・22)。この身勝手な彼らの提案をイサクは受け入れた。主が彼と共にいて彼を祝福されたので、争わなくても、敵の方から和解を求めてきたのだ。そればかりか、イサクは彼らに馳走をふるまった。そのような彼に、主はさらに祝福を与え、アビメレクの一行を送り出した日に、さらにもう一つの井戸から豊かな水を湧き出させられたのである。

## 結論

イサクについての記録は、アブラハムに比べて非常に少ない。しかし、彼がアブラハムの信仰を受け継いでいることは、この章を見るだけでも明確であらう。彼は決して争わなかった。それは、主が彼と共にいて、必要なものを与えて下さるという信仰があったからである。それこそが、地のすべての国民が祝福される秘訣であることを銘記したい。

## 研究資料

## 柔和

聖書は、私たちに柔和を教えている。キリストも、柔和な者の祝福を教えられたし(マタイ5・5)、パウロも、クリスチャンたちに、柔和であるよう勧めている(エペソ4・2、コロサイ3・12等)。また、キリストの特筆すべき性質の一つは、その柔和さにあった(マタイ11・29、マタイ21・5)。このような柔和さは、単に生まれつきの性質によるのではなく、信仰による歩みの中で、聖霊の実として結ばれてくるものである(ガラテヤ5・22、23)。

私たちは、自分の思い通りに事が進まないときに苛立ったり、争いを起こしたりしやすい。しかし一切の事は、主の御手の中に治められており、主が常に私たちのために最善をなして下さるこの信仰に立つならば、怒ったり争ったりする必要はない。柔和さは一見弱々しく見える場合もあるが、実際には、祈りの中で、全てを主の御手に委ねていく力強い信仰を必要とする(1テモテ2・8)。

## テキスト

1 ペリシテびとの王アビメレク 20・2のアビメレクと同一人物と思われる。(時期的にかなりの年数の開きがあると思われるが)。  
2 エジプトへくだってはならない アブラハムはメソポタミヤからカナンの地へ移り、イサクは

この地に留まり、ヤコブは、エジプトへ下った。各世代における神の導きは、内容的に異なっていたが、従うことの祝福は変わらない。(3節)  
3 わたしはあなたと共にいて イサクへの祝福の中心点。  
4 あなたの子孫を増して 土地の獲得(3節)と子孫の繁栄の両面から、アブラハムへの約束が更新される。

6 彼女はわたしの妹です 自分の身を守るための偽り。神の保護に信頼しきることができなかった点で、アブラハムと同じ過ち(12章)を犯す。  
7 アビメレクは：見た イサクの不信にもかかわらず、一方的な恵みとして、神は、王が真実を知り、イサクに保護を与えるようにされた。

12 主が彼を祝福された 豊かな収穫、経済的な繁栄(13節)、家畜の群れの増大(14節)。

14 ペリシテびとは彼をねたんだ 神の祝福の結果が、人々のねたみを引き起こすこともある。

15 ペリシテびとは：父のしもべたちが掘ったすべての井戸をふさぎ、土で埋めた アブラハムが掘った井戸については、アビメレクとの間に契約が結ばれている(21・25-31)。ねたみゆえの故意で、悪質な行為。

16 アビメレクはイサクに言った、「われわれの所を去ってください」 王自身もイサクに対して憎しみの思いを持つようになった(27節)。

17 イサクはそこを去り 感情的になって争うことも大いにありえる状況であるが、彼は、争いを避ける道を選び取った。

18 父アブラハムの時に人々の掘った水の井戸を再び掘った イサクは、まず、以前ふさがれてしまった井戸を掘り返した。

19 イサクのしもべたちが谷の中を掘って これは、アブラハムが掘ったものとは、また別に掘られたものかもしれない。

そこにわき出る水の井戸を見つけたとき 水が貴重なその地域にあつては、わき水はその地の人々の貪欲とねたみの対象にならざるを得なかった。

22 そこから移ってまた一つの井戸を掘った 3ヶ所目は、かなり場所を変えたのかもしれない。

いま主がわれわれの場所を広げられた イサクはその地での争いが無いことを確認した時、そこに主の御手を認めた。

24 その夜、主は彼に現れて 長い試練の後の、主の再度の顕現。

26 時にアビメレクが：イサクのもとにきた 祝福されるイサクを見て、アブラハムとの間の契約(21・22-24)と同様、相互不可侵の契約を結ぶため。

30 イサクは彼らのためにふるまいを設けた「今さら何を」との感情的対応が取られても不思議ではない場面であるが、彼は、提案された契約を受け入れ、食事のふるまいを設けさせた。

31 彼らは：穏やかに去った 争いを避け続けたイサクの姿勢が、平和な結末となって実を結ぶ。

32 わたしたちは水を見つけました イサクに対する神様の祝福のしるし。

●週題 争わないイサク

●聖書 創世記26・1～38

●暗唱聖句 わたしはあなたと共にあって、あなたを祝福し(よう)。

創世記26・24

●目標 神は、神を信じる人と共にいて祝福して下さるゆえに、人と争う必要がないことを発見する。

### 導入

人間は、貧しいときに奪い合ったり、争ったりします。水が豊かなときは、水争いはおきませんが、少ないとおそれがおこるのです。今日は、イサクが争わなかった理由を学びましょう。

### (起) ストーリーを語る

イサクがベエルシバにいたときに、ききんがありました。そして、父アブラハムがしたのと同じくエジプトに下ろうとすると、神様からのお声がありました。それは、「あなたがこの地にとどまるなら、わたしはあなたと共にいて、あなたを祝福し、アブラハムに誓った誓いを果たそう」というものでした。神様からゲラルの地に避難すべきことを示されたイサクは、そこに住むことにしました。するとまたもや父の時と同じ試みが訪れます。イサクはその地の人々から、妻リベカの事を探ねられました。リベカがとても美しいので、イサクは人々が自分を殺して妻を奪うのではないかと恐れ、「彼女はわたしの妹です」とうそをついたのです。

しかしペリシテ人の王アビメレクにそのうそがばれました。王はイサクのために彼らの生命を守る命令を出してくれました。

そこで、イサクはゲラルの地で種を蒔くと、神様が祝福されたので、百倍の収穫がありました。そして大変裕福になったのですが、かえってペリシテ人のねたみをかい、アブラハムの掘ったすべの井戸を埋められてしまい、さらにその地から追い出されてしまったのです。

追い出されたイサクは、ゲラルの谷(平地)に移り住みました。自分たちと家畜に必要な水を得るため、ペリシテ人が埋めた井戸を再び掘ると水がわき出しました。ところがゲラルの羊飼いたちが「この水はわれわれのものだ」と言い張って、イサクの羊飼いと争ったので、次の井戸を掘りました。しかしまたもゲラルの羊飼いたちが奪いにきたので別の井戸を掘りました。そこでは争いがなかったため、レホボテと名づけそこに住みます。そこから彼がベエルシバに上ったある夜、神様はイサクに現れ、神様が共におられるとの約束とアブラハムの祝福をイサクにも下さるとの約束を与えられました。イサクはそこに祭壇を築き、神様を礼拝し、天幕を張って住むことになり、さらにもう一つの井戸を掘ったのです。

その後、アビメレクが部下たちとやってきました。でも今度は争うためではありません。イサクが神様から祝福を受けているのがわかったため、互いに侵略しないという契約を結ぶためでした。イサクはこの一方的な提案を受け入れ、彼らに御

馳走をふるまった上、翌朝誓いを立てたので、彼らは穏やかに去って行きました。そしてその日も掘っていた井戸から豊かな水が湧き出たのです。

### (承) 学ぶべき真理

イサクは耕作すれば多くを収穫してねたまれ、井戸を掘っては水がわき出て、言いがかりをつけられてそれを奪われました。しかしイサクは、争いません。それは、人がどんなに奪いにきても、神様は共にいて自分を祝福してくださると信じていたからです。神様を信じる人には、その人の行くところでも神様が共にいてくださり、そこで祝福があります。ですから神様を信じる人は争う必要がありません。奪われてもなお祝福されていくなら、結局奪った人たちは「彼には神様が共におられる」ということを発見し、むこうから和解を申し出てくるのです。

### (転) 生活への適用

皆さんは、友だちからいいがかりをつけられたり、陰口を言われたことはありませんか。そんなとき、すぐやり返したりしていませんか。イサクと同じように、神様は私たちと共におられ、必ず祝福して下さいます。ですから自分で復讐しないで、正しい裁きを神様に委ねましょう。

### 結論

イサクは決して争いませんでした。それは神様が共におられ、どこへ行っても祝福されることを信じていたからです。イサクと同様、私たちも争うことなく、神様が共におられて祝福されていることを見て、和解してゆきましょう。

## ワーク A

●暗唱聖句 (7月8日～7月22日)

わたしはあなたと共にあって、あなたを祝福しよう。

(創世記26・24)

### 導入のヒント

みんなはけんかしたことがありますか。だれとけんかしましたか。けんかしたとき、どんな気持ちでしたか。今日は、けんかをしなかったイサクさんのお話をしましょう。

●ワーク イサクの井戸を見つけよう

左上にあるイサクの井戸と同じものを見つけだしましょう。4つあります。これは、イサクが掘った井戸の数です。その内、2つがペリシテ人に奪われてしまったことも話して下さい。

## ワーク B

●質問1 今日のお話の確認です。争わなかったイサクの人となりをお話のストーリーを追いましょう。「主が彼を祝福されたので」(12節)を心にためつつ、イサクと一緒に歩いて下さい。

●質問2 なぜイサクは争わなかったかを考えつつ、今の子どもたちの生活にあてはめて話します。

●質問3 暗唱聖句です。主の力強い約束の言葉はイサクのためであり「わたし」のためです。

●賛美歌 「なかよくなさい」

(教会学校せいかい50番)

●今日のお祈り 「こんな時でも一緒にいて下さる神様、これからも、私を守り祝福しつづけて下さい。」

## ワーク C

●イサクが争わなかったことには、持ち前の性格もあるでしょうが、信仰的に捉えれば、「神様の祝福」がその土台にあります。

●三択の中で、はじめの二つ、①、②(ワークに数字はないが、便宜的に順番に番号を付けて解説。以下も同様)は、地上での損得勘定の結果を示しています。最後の③が正解で、これも損得勘定とも言えますが、神様の存在とその祝福(天国、霊、永遠のいのち)を視野に入れた勘定。●3の適用問題では、日常的な3つの出来事を挙げて、イサクのように判断し行動するとしたら、どうするのが良いかを考えます。これらを実行することは、教師にとっても簡単ではありません。

## ワーク D

●質問1 神様の命令と約束を確認し、イサクのしたことを一緒に見て下さい。

●質問2 a ペリシテ人はねたんで井戸をふさぎイサクを追い出しました。

b イサクは争わずに去って井戸を掘ります。

c 争わず神に従うイサクに、アブラハムの祝福が更新されます。

●質問3 敵対してきた側から和解が訪れました。人と争わず神に従うイサクに、神の守りと祝福を見ながらです。

●質問4 神さまの祝福を信じて従う姿を自分の生活にあてはめ、従い方を具体的に考えます。

## 中高校へのヒント

●考えてみよう

1 ペリシテ人は、イサクが豊かな収穫を得、裕福になったのを見て、アブラハムの掘った井戸をふさいで、その地から追い出しました。なぜこのようなことをしたのでしょうか。

2 ゲラルの地に来たときに、イサクは妻のリベカを妹と偽りました。なぜ偽ったのでしょうか。

3 イサクはゲラルの地で井戸を掘りましたが、二度までもペリシテ人に奪われました。このとき、イサクはどうしたのでしょうか。

●自分にあてはめてみよう

1 他の人が裕福になるのを見たとき、どのような気持ちを持ちやすいでしょうか。

2 人が争いをしかけてきたときに、イサクのような態度がとれるでしょうか。もしとれないとしたら、それはなぜですか。

●話し合ってみよう

1 イサクは、何度も井戸を奪われる経験をしたが、争うことなくめぐる事ができました。このイサクの姿に、「のしられてもののしりかえさな」(1ペテロ2:23)と、「敵を愛しなさい」(マタイ5:39、44)と言われたイエス様の言葉を思い出します。このように、イサクは、人にゆずることができましたが、私たちがどうでしょうか。

2 イサクには、必要な物は神様が与えて下さるという信仰がありました。私たちはどうですか。



週 題 ヤコブへの約束  
聖 書 創世記27・1～28・22

## 序論

アブラハムからイサクへと受け継がれた主の約束は、さらにイサクの息子へ継承されるのだが、ここに「神の選び」という聖書の重要な主題が出てくる。ふたこの兄のエサウではなく、弟のヤコブが選ばれたのだ。彼らがまだ母の胎にいるときに、すでに弟が選ばれていた(25・23)。それゆえに、成人したエサウは長子の特権を軽んじ、ヤコブはそれを追求した(25・34)。ヤコブは決して立派な人物ではない。神の選びの計画は人間に理解できない部分がある。しかし神の主権を認めねばならない。全ては神のあわれみによるからである(ローマ9・11以下)。

## 一、人間の考え

27章で四人の人物が登場している。この「四人」が四人ともあやまちをした。ここどこが肉の行為で、人間性の暴露である(小島伊助『全集』6巻18頁)。イサクは、エサウが長子の特権をヤコブに売った(25・33)ことを知っていたと思われるが、ハシカの肉が好きだったので、エサウを愛したV(25・28)。自分の嗜好のゆえに、父から委ねられた祝福の約束をエサウに受け継がせようとしたことは、神の御旨にかなうはずがない。リベカ

が、年老いた夫イサクを欺いてまで、愛するヤコブに祝福を継承させようとしたことも、人間的な策略だった。またヤコブが、母からそのかされたとはいえ、あなた達の神、主がわたしにしあわせを授けられたVと、神の名を用いてまで父親を欺いたことも大問題である。エサウが空腹を満たすために長子の特権を売ったことも、まさに肉的な行為だった。アブラハムがハガルによって子を得ようとしたことと同様、これらの行為は全て、神のご計画を無視したものだ。

## 二、悲惨な結果

ハガルから生まれたイシマエルが家庭に悲劇をもたらしたように(21・8以下)、今回の出来事も悲惨な結果を生み出した。エサウがヤコブを殺そうと考えていることを知ったリベカは、ヤコブを遠くハラランにまで送り出そうとする。ちょうどヤコブが結婚適齢期になっていたことも、その理由の一つだった。エサウがカナンの原住民の娘をめぐっており、それが家庭内に様々な問題を引き起こしていたのだらう。いずれにせよ、この事件によって、四人の心がばらばらになったことは確かである。人間の考えで神の祝福を得ようとすることは、かえって呪いを招くことになるのだ。

## 三、神のご計画

人間の考えがどうであれ、神のご計画は明確に定められていた。それに気づいたイサクは、今度は明確な意志をもってヤコブを祝福した。ハ全

の神が：アブラハムの祝福をあなたと子孫とに与えて、神がアブラハムに授けられたあなたの寄留の地を継がせてくださるようにVという祈りは、子孫と土地を与えるという創世記12章以来の主の約束を、そのまま受け継がせるものだった。

神ご自身も、この約束を確認された。ハラランに向けて旅立ったヤコブが、何日か後に野宿した場所でのことである。彼は夢で、地上から天に届くはしこを、神の使いたちが上り下りしているのを見た。さらに主が彼のそばに立ち、子孫と土地を与えるだけでなく、彼を通して祝福が地の諸族にも拡大することを約束して下さった。その上、ハわたしは決してあなたを捨てVないとも言われた。アブラハムにハわたしの前を歩めVと仰せられた主は、イサクにはハわたしはあなたと共にいるVと語られ、さらに自力で祝福をもぎとろうとしたヤコブにはハあなたを捨てないVと約束された。そしてヤコブは、ハまことに主がこのところにおられるのに、わたしは知らなかったVと告白し、この場所をベテル(神の家との意味)と名づけた。約五十年前、アブラハムが祭壇を築いて主の名を呼んだのがこの所であったことは、決して偶然ではない(12・8、13・4)。

## 結論

ヤコブは、柔和なイサクと対照的な人物と言える。彼は祝福を得るために、兄を押し退けた。しかし神はそんな彼に現れ、決して見捨てないと約束され、ついに彼をイスラエルとされるのだ。

## 研究資料

## 神の恵み

「恵みとは愛なる神の、人間に対する好意(愛顧)またはそれに基づく働きかけである。それは、特に、受けるに値しない対象に向けられた神のいつくしみである。」(『新キリスト教辞典』「いのちのことば社」「恵み」の項より)

私たちが神の祝福を受けるのは、根本的に、神の恵みによることを忘れてはならない。本来、滅ぶべき者であった私たちに、キリストの尊い贖いが示され、罪の赦し、永遠のいのちの恵みを頂いて、クリスチャンとしての生涯が始まった(ローマ3・24、エペソ2・8)。信仰者として、神の恵みに応える生き方を願うのは当然であるが(ローマ6・1、2)、そのような生き方を可能とし、そこへと導いて下さるのも神の恵みに他ならない(1コリント15・10、IIテモテ2・1)。自分の努力や優秀さを信仰生活の土台とするのではなく、常に神の無限の恵みを土台として進むところに、感謝と喜びの生活が与えられる。

ヤコブは、神の恵みの証し人として最適な人物である。彼は、人間性において、決して優れていなかったわけではない。神の祝福を求める強い願いを持っていたが、一方では、激しい性格の持ち主であって、彼の名前が示すように、「押し退ける者」であった(創世記27・36)。しかし、神は、そのような者をあえて選んで、自身の祝福を与えられた。

私たちも同様ではないだろうか。

## テキスト

4 わたしは死ぬ前にあなたを祝福しよう イサクのこの祝福は、単に、神の祝福を願うというより、一家の長として、神から委ねられた権威に基づいて、神の祝福を宣言し定めるもの。一旦宣言されたなら、祝福した本人も取り消せない程の権威を持っていた(36、37節)。後に、ヤコブ(創世記48・8～49・27)、モーセ(申命記33章)も同様の祝福をしている。

27 イサクはその着物のかおりをかぎ、彼を祝福して言った 詩的な内容の祝福。エサウと信じきって、心からの喜びをもって祝福したのでらう。

エサウへの偏愛の故、その内容は、他の兄弟に祝福のひとつかからも残さないものであった(37、38節)。それゆえに、逆に、神のヤコブへのご計画(25・23)が成就していく。

39 父イサクは答えて彼に言った 祝福の全てをヤコブに与えてしまったイサクは、自らが語ったところの結論として、エサウへの厳しい将来を預言的に語ることになる。

41 その時、弟ヤコブを殺そう エサウの殺意を契機として、ヤコブは、リベカの兄ラバンのところに行き、彼の娘を妻に迎えることになる。

28 i イサクはヤコブを呼んで、これを祝福し、命じて言った 事の経緯を見る中に、自らの思いを超えた神のみこころを読み取ったイサクは、遂に、自らの意志でヤコブを祝福する。

12 一つのはしが地の上に建っていて、その頂きは天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た ヤコブは、この所を神の家、天の門と呼んだ(17節)。バベルの塔が、人間の傲慢な思いから生れ、人間が天に至ろうとする努力の結果であったのに対し、この場面では、天の神が人間に恵みをもって臨んでおられる。この所でのハネ1・51、14・6)。

13 主は彼のそばに立って言われた ここで神はアブラハムへの約束を、ヤコブの子孫に対して適用することを明らかにされている。また、ヤコブ個人に対しては、①共にいる、②どこにおいても守る、③この地に連れ帰る、④決して捨てない、⑤約束を実行するとの言葉を語られる。将来に対して不安に満ちていたヤコブにとって、何と大きな励ましとなったことだろう。

16 まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった 孤独の中、異国の地に旅立とうとするヤコブにとって、思いがけない神の臨在を知ったの驚き。

19 ベテル 「神の家」の意。アブラハムも、この地で二度、祭壇を設けて礼拝をささげている(12・8、13・3、4)。

20 ヤコブは誓いを立てて言った ヤコブらしい条件付きの誓いとも取れるが、神の約束の言葉を喜び、感謝の内に誓いを立てている。

## ●週題 ヤコブへの約束

●聖書 創世記27・1～28・22

●暗唱聖句 わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を言うであらう。

創世記28・15

●目標 神は、利己的なヤコブさえも祝福し、共にいて、見捨てないお方であることを発見する。

## 導入

ヤコブは、ずる賢く自己中心な人で、とても立派な人物とは言えません。しかし神様は、「ご自分のことを」「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と名乗られます。では、ヤコブはどのようにして信仰の父祖とされていったのでしょうか。

## (起) ストーリーを語る

エサウとヤコブはふたこの兄弟です。ヤコブはお兄さんの足をつかんで生まれたので、ヤコブ(押し退ける者)という名をつけられました。二人が大きくなったある日、ヤコブは長子の特権がどうしてもほしくて、空腹で狩りから帰ってきたエサウにスープと交換して長子の特権をえました。

そして、父イサクが年老いて目が弱くなった頃のことです。イサクは、神様の祝福を受け継がせようとエサウを呼びました。それは、イサクが鹿の肉を好み、狩りの上手な兄のエサウを弟のヤコブよりも愛したからです。イサクはエサウに、鹿をとってきて食べさせてくれたら、神様の祝福を

与えようと言いました。そこで、エサウは急いで狩りに出ます。しかし、このことを知った母のリベカは、弟ヤコブに入れ知恵をしました。リベカは、ヤコブの方を愛していたからです。リベカは、おいしい食事を作り、ヤコブにエサウの着物を着せ、さらにヤギの毛をヤコブの手や首につけて兄に変装させ、父親のイサクの所に行かせました。

イサクはみごとにだまされます。そしてヤコブは祝福を自分のものにしてしまいました。狩りから帰って来たエサウには、祝福は残されていませんでした。その結果、エサウはヤコブを殺そうと心に決めるのです。

これを知ったヤコブは、カナンの地から逃げ出すことにします。ヤコブはお嫁さん捜しという理由で、リベカの兄ラバンに住むハランに、ひとりで向かうことになりました。エサウがカナンの女を妻にしたことで多くの問題がおこっていたことを口実にしたのです。出発前に父イサクは、祝福がヤコブにあるように祈って送り出しました。

かくして旅立ったヤコブは、ハランに行く途中に、石を枕にして眠ります。そのとき、一つのほしごが天に達し、天使がそれを上り下りしている夢を見ました。その所で神様は、「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏している地をあなたと子孫とに与えよう。わたしはあなたと共にいて、守り、この地に連れ帰る。わたしはあなたを決して捨てず、語ったことを行う」と、約束されます。目覚めたヤコブは、そのとき初めて神様がそこにおられることを

悟り、「これは神の家、これは天の門だ」と言って、枕にしていた石に油を注いで、そこをベテル(神の家)と名づけました。

## (承) 学ぶべき真理

ヤコブのする性格や、うそやごまかしには感心できません。彼は、決して正しくて良い人とは言えません。けれども神様は、こんなヤコブと共にいて、決して見捨てない方であることを約束されました。神様は、神様を信じる者がどこにいても祝福してくださる方であり、さらに、決して見捨てない方であることがわかります。ヤコブのような自己中心な性質の人でも、神様を信じるならば、神様は決して見捨てられないのです。

## (転) 生活への適用

ヤコブはとてもずるい人だと思いませんか。こんな悪い人は、すこし祝福を減らした方がいいと考えてしまいます。しかし、神様が私たちを愛して下さるのは、私たちが立派だからとか良いことをしたからではありません。どんな悪い人でも、そのまゝの姿で愛して下さるのです。意地悪な人も、弱虫な人も、泣き虫な人も、神様は決して見捨てないで、そこから神様に似た人に成長させて下さいます。

## 結論

ヤコブとは押し退けるという意味の名前です。そんな欲ばりなヤコブでさえ祝福し、決して捨てないと約束された神様は、今の時代にも神様を信じる人々を祝福し、共にいて、決して見捨てず、神様に似た人に成長させて下さいます。

## ワーク A

## ●導入のヒント

ふたこの兄弟を見たことがありますか。とてもよく似ていますね。イサクさんとリベカさんにはふたこの子どもがいました。二人は似ていたでしょうか。

## ●ワーク エサウ、ヤコブのぬりえ

二人の顔つきや体つきの違いに気が付くように絵をぬって下さい。「ヤコブさんはやさしかったかな?」「エサウさんはじょうぶなのかな?」などと、性格の違いを話すと、ストーリーが定着するため役に立つでしょう。

## ワーク B

●質問1 今日のお話の要点を思い出し、話し合いつつ、登場人物について確認しましょう。

●質問2 大切な長子の権利と引きかえた「あつもの」について知ります。軽々しい選択は悲しい結果になることを今から知っておきましょう。

●質問3 暗唱聖句です。逃げるヤコブにかけて下さった愛の言葉です。一方的な愛を知ります。

## ●賛美歌 「ただひとり」

(教会学校せいか98番)

●今日のお祈り 「神様、わがままな私をも愛して、いつも一緒にいて下さることを知りました。ありがとうございます。これからもういっすいから守り下さい。」

## ワーク C

## ●私たちに染みついている律法的な考えは「悪い人は救われない」ということです。悪い行動、悪い性格、悪い過去など。しかし、そういう罪人の私たちを神様は愛し、救うというのが福音です。

●メッセージを通してヤコブの自己中心性が語られるでしょう。「シコチュー」という流行語もあるように、だれでも他人の自己中心は嫌悪します。ヤコブの自己中心性への嫌悪を自覚させた後に、自分の自己中心性に目をむけさせます。さらに同じ人間に対して、神様御自身はどうなさるだろうかと、自分と比較させながら考えさせます。いろいろな答えがあるでしょうから、「それはどういふことかな」と尋ねて、進めていきましょう。

## ワーク D

●長い箇所なので、登場人物の考えを追いながらストーリーをふりかえりましょう。

●質問1 神様が与えられる祝福をそれぞれの人間的な思惑で利用しようとしているまちがいを見出します。

●質問2 人の考えによってさらに混乱しますが、主の導きによって事態は変わります。

●質問3 神様の計画が前進していく中で、失敗した者も神様に捕えられ、信じて従う者に変えられていくことに注意します。質問4で、より深く考えましょう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 ヤコブは、父であるイサクをだまして、神様の祝福を得ました。このヤコブの行為について、どのように考えますか。

2 イサクをだまして、エサウから祝福を奪ったヤコブであるのに、なぜ神様は祝福を与えられたのでしょうか。

3 ヤコブの家族は、大変混乱し、また過ちを犯しているように見えます。具体的にどのようなことが挙げられますか。

## ●自分に当てはめてみよう

1 ヤコブの家族のように、私たちの家族にも何か問題はないでしょうか。

2 ヤコブは強引に神様の祝福を奪いました。私たちにそのような強引さはないでしょうか。

3 神様は、利己的な者がしこいヤコブを見捨てられませんでした。そうであるなら、もし私たちが主に従おうとするなら、神様は、私たちを見捨てられるでしょうか。

## ●話し合ってみよう

1 エサウは、神様の祝福を軽んじた人でした。彼は、神様の祝福をどのように軽んじたのでしょうか。

2 私たちは、ヤコブのように、神様の祝福を大切に考え、「せひとも頂きたい」と願い求めているでしょうか。もしそうでないとしたら、それはなぜですか。



週 題 変えられたヤコブ  
聖 書 創世記32・1～33・20

## 序論

ペテルの経験をした後、ヤコブはおじらパンのもとに行って20年間働き、妻と子と財産を得た。その間ラバンに数度欺かれるが、彼も策略を巡らして対応した。しかし、その背後に主が共におられたことを忘れてはならない。そして、ペテルでの約束通り(28・15)、主は彼を再びカナンの地に連れ帰られる。その途上、彼はマハナインとペニエルの経験をした。ペテルが真の救いの経験とするなら、マハナインは神の保護の経験、ペニエルは神との交わりの経験だとウィルクスは述べている(『創世記講演』下巻二六三頁)。これらの経験を通して彼は次第に変えられていき、兄エサウと再会する備えができていったのである。

## 一、策略をたてるヤコブ

兄エサウはまだ自分を恨んでいるのではないかと心配していたヤコブに、主はペテルと同じような形で彼を励まされた。多分、夢の中で神の使いが現れたであろう。彼は、神の軍勢が自分と共にいて守って下さることを確信した。

彼は勇気を奮ってエサウのもとに使者を遣わしたが、兄は四百人を率いて迎えに来るといった返事がきた。自分たちを撃ちに来ると思ったヤコブは、家族と家畜を二組に分けて対応しようとするが、

それでも安心できない。そこで彼は神の約束をひっぱり出し、「わたしを救ってください」と必死に祈った。この謙遜が必要だったのだ。  
しかしまだ安心できない彼は、△贈り物をもつてまず彼(エサウ)をなだめ、それから、彼の顔を見よう▽とさらなる策略をたてた。まだまだ神に頼りきれない彼の本心をここに見る。

## 二、神と戦うヤコブ

しかしその夜、彼の中途半端な信仰の姿勢が取り扱われる事件がおこった。家族と家畜を連れてヤボク川を渡った後、彼は一人きりになった。きつと祈るためだったろう。そこに、神の使いと思われる方が現れ、ヤコブと組打ちを始めたのである。これは霊的な戦いであるとともに、肉体的な戦いでもあった。もののつがいはずされ、戦えなくなってもなお祝福を求める彼に、この方は名前を尋ねられた。そのとき彼は、△ヤコブ(押し退ける者)です▽と告白する。自分のありのままの姿を認めたとき、この方は彼に「イスラエル(神は戦われる)」という名を与えられたのだ。

ヤコブは、それまでエサウやラバンと戦って、何とか勝ってきた。でもそれは神が戦って下さったからだ。彼はこのときに悟った。自分は逃げもできず戦いもできなかったが、神に委ねることこそが勝利の秘訣だとわかったのだ。そして、彼は主の顔を見たことを記念して、その所をペニエル(神の顔)と名付けた。

## 三、和解したヤコブ

ある日、ヤコブは兄エサウと再会した。ここにもヤコブ特有の策略があるようにも見える。しかし△七たび身を地にかがめて、兄に近づいた▽のは、決してイエスチャーだけではないように思われる。もはや兄と戦う思いは全くなくなっていたからだ。エサウも自分からヤコブの方に走ってきて、彼を抱きしめて接吻し、共に泣いた。またヤコブの贈り物を受け取ることも遠慮した。ヤコブはそのような兄の姿に、昔とは違ったものを感じたに違いない。「エサウをこのように柔らかにしておいて下さったのはペニエルの神であった」(小島伊助)。だからこそヤコブは兄に、△あなたの顔を見て、神の顔を見るように思います▽と言えたのだろう。

しかし、たといエサウと和解しても、共に過ごすことは後々にいろんな問題を引き起こすことが想像された。それゆえ、ヤコブはエサウの同行の申し出を断り、またエサウの住むセイルにも行かなかったと思われる。だが、意識的にうそをついた可能性もないわけではない。

## 結論

ヤコブは、アブラハムやイサクに比べると、確かに問題の多い人物である。しかしこの「押し退ける者」を神はあえて選んで見捨てず、ついにイスラエルとして下さった。もののつがいをはずされても、ただひたすらに神にすがることこそ、勝利の秘訣なのである。

## 研究資料

## 砕かれる経験

クリスチャンの成長の過程において避けて通れないのが、自我の砕きの経験である。自分の意志を通して、神のみに従わない「不従順」、自らを誇り、神により頼もうとしない「高慢」、自分の主張のみ繰り返す、他を顧みない「自己中心」、このようなものを、私たちは、誰しも内側に固く持っているものである。しかし、そのところに光が当てられ、神によって打ち砕かれるとき、それは私たちの成長の過程において、転機的なものとなる。キリスト内住の信仰も、自我が十字架につけられて初めて明確なものとして与えられる(ガラテヤ2・19、20)。

ヤコブにとって、生涯で最大の砕きが与えられたのが、このペニエルでの経験であった。エサウとの再会を前に、自らの知恵によって危機を切り抜けようとするヤコブ。しかし、神との組み打ちの中で、もののつがいをはずされた出来事は、自我が打ち砕かれ、どこまでも神に信頼する者と変えられた、ヤコブの砕きの経験を象徴するものと言える。

## テキスト

32・2 マハナイン 「一對の陣営」の意。

3 さきだつて使者を遣わした エサウに会うにあたって、先方の様子を伺うと同時に、少しでも

エサウの気持ちを和らげようとするもの。

4 あなたがしもへヤコブ この言葉は、以後、エサウへの言葉として繰り返される(18、20)。

5 わが主 この言葉も、エサウへの言葉として繰り返される(18、33・8、33・14)。

6 彼もまたあなたを迎えようと四百人を率いています 使者の報告からは、エサウの行動の真意を知ることができないが、ヤコブが恐れたのは、エサウが憎しみと殺意を持ち続けている可能性だった。実際には、エサウもヤコブの様子を伺おうとしていたのかもしれない。

7 二つの組に分けて ヤコブの策略の第一(8節参照)。

9 神よ 以下のヤコブの祈りは、神の約束をよりどころとして、主の守りを願うものであるが、それは、自分自身の知恵による策略と同時に並行。

13 贈り物を選んだ ヤコブの策略の第二(20節参照)。

16 群れと群れとの間に隔たりを置きなさい 何種類もの家畜が、種類毎に分けられ、一定の距離が置かれた。ここにも、ヤコブの策略がある。

24 ひとりあとに残った 自分より先に家族を渡らせた後、どうしても不安の消えない彼は、一人になって祈りたいとの願いを持ったのであろう。ひとりの人 主の軍勢の将として知られる御使いのことであろう。この御使いとの出会いは、そのまま神との出会いとして認識されている。御子の受肉前、この御使いを通して、神の自己顕現がなされたと言える。(1、2節。ヨシユフ5・13)

15、ホセア12・3～5、創世記18章)

組打ち ヤコブは、祈りの中で霊的な格闘を始めていたが、神はより現実的な形で顕現され、ヤコブへの取り扱いを、組打ちの形で表現された。

25 ヤコブに勝てない ヤコブが、肉の力で歩もうとすることを、どうしてもやめようとしなかったの表現。

もものつがいがはずれた 強い自我が砕かれたことの表現。

26 わたしを祝福してくださいとしないなら、あなたを去らせません 神の祝福を求めることにおいては、ヤコブは人一倍のものを抱っていた。「求めよ、そうすれば、与えられる。」

「あなたの名はなんと言いますか」 「ヤコブです」 「押し退ける者」としての自らの姿をより明確に自覚させるため、名が問われている。

28 イスラエル 「神が戦われる」の意。

あなたが神と人との力を争って勝ったから これまでは強い自我によって、神または人と戦ってきた彼であるが、このとき、霊的祝福を求めて、それを得た。肉の力によってでなく、神の力によって歩むことへの転換を、勝利として示している。

30 ペニエル 「神の顔」の意。

33・3 みずから彼らのまえに進み ペニエルでの経験で大きく変えられたヤコブの姿が見出される。その結果は、エサウとの劇的な和解(4節)となる。

●週題 「変えられたヤコブ」

●聖書 創世記32・1～33・20

●暗唱箇所 あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい。

創世記32・28

●目標 神様を信じる人は、自分を明け渡し、神に戦っていただけて勝利できることを発見する。

## 導入

ヤコブは、おじのラバンのもとに行って20年間働き、何度もラバンにだまされ、ただ働きさせられました。ヤコブも自分がだまされて初めて、だまされた人の気持ちを知ったでしょう。そんな中でも、神様は決して彼を見捨てず、共にいて祝福されたので、ヤコブは結婚して家族ができ、財産を得ました。そして、彼はホテルでの約束のとおり、再びカナンに帰るようになります。

## (起) ストーリーを語る

ヤコブは、兄のエサウのいるカナンに帰ることを非常に心配していました。「お兄さんはずっと昔のことを根に持っていて、自分に仕返しをするだろう。殺すと言っていたからな」。ヤコブの独り言が聞こえてくるようです。ヤコブは、旅路を進めてマハナインで再び天使に会い、神の軍勢が自分と共にいて下さることを確信し、勇気を奮って前進するのですが、やっぱり不安です。そこで使者を先に遣わすと、エサウが四百人を連れてやって

来るというではありませんか。これを聞いたヤコブは、てっきり仕返しされると思い込み、思案の末、家族と家畜を2組に分けます。どちらかが襲われても、どちらかが逃げられるようにしたのです。それでもなお不安なヤコブは、「わたしを救って下さい」と、神様に祈りました。けれどまだ不安なので、たくさんのお供物を送って、エサウの気持ちをなだめようとした。

とうとうヤコブは、ヨルダン川にやってきました。ここを渡ればむこうはカナン地です。その日、ヤコブはヤボクの渡しという浅瀬を、まず家畜を渡し、次に家族を渡しました。しかし自分は渡ることができません。その夜、一人だけ残ったヤコブに、神の使いが現れて、組打ちが始まり、それが夜明けまで続きました。ヤコブは神の使いと一騎打ちで格闘しました。その人はヤコブに勝てないのがわかり、彼のものつがいにならわってはずしてしまいます。身体が不自由になってもまだ戦おうとするヤコブに、その人は名前を尋ねました。彼は「ヤコブ(押し退ける者)」です」と、答えます。するとその人は「もはやヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい。あなたが神と人との力を争って勝ったからです」と言われたのです。イスラエルとは、「神が戦われる」という意味です。そこで彼は、その場所をベニエル(神の顔)と名付けました。神様と顔をあわせたという意味です。

こうして、ヤコブがエサウに会う日となりました。エサウは心から喜んでヤコブを迎えてくれ、

二人は仲直りをすることができました。

## (承) 学ぶべき真理

ヤコブはものつがいをはずされながら勝ったのでしょうか。普通なら負けになるでしょうが、神様は「神と人に勝った」とおっしゃいます。それは、自分では戦うことも逃げ出すこともできなくて、神様に戦っていただくことになったからです。財産も、家族も渡した。しかし自分は渡せない。そんな自分を、神様に委ねて明け渡すことこそ、神様に戦っていただく勝利です。

## (転) 生活への適用

ヤコブは人を押し退ける者でした。なんとかして自分が得をしようとしてきましたが、本当の勝利は、自分で押し退けることでも、逃げ出すことでもなく、神様に戦っていただくことだと気付いて、足を引きずりながらヨルダン川を渡り、エサウと対面したのです。

あなたは自分が得をしようとして四苦八苦していませんか。あやまらずに、うそをついたり、言い逃れしたりしていませんか。正直にあやまり、神様に明け渡したら勝利するのです。神様は一番よい解決を用意しておられます。

## 結論

ヤコブは決して誉められる人物ではありませんでした。しかし、神様はそんなヤコブと共にいて見捨てず、押し退ける性質まで変えて、神様の祝福を受けとれる人に変えて下さいました。皆さんも、逃げ出さないで神様と取組み合い、神様に戦っていただけて勝利を得ましょう。

## ワーク A

## 導入のヒント

けんかしているお友達と仲直りするのは、難しいですね。お兄さんとけんかして家を出たヤコブさんは、どうしたら仲直りできるか、心配していました。そこに神様が現れて、びっくりするような方法で、仲直りできるようにして下さいたのです。

## ●ワーク 神様と戦ったヤコブさん(紙相撲)

今日のお話を思い出しながら、楽しく遊んでください。負けたときにどんな気持ちがあるかを探ねるといいでしょう。自分の弱さを認めることの大切さを発見できるよう、お話を思い出しながら対話しましょう。

## ワーク B

●質問1 ヤコブの変えられていく様子を思い起こしつつ二者択一の問いを考えて下さい。ヤコブを愛し続けて下さる神と、神を頼り続けるヤコブをそれぞれの気持ちになって考えましょう。

●質問2 暗唱箇所パズル。ヤコブを「イスラエル」と変えて下さった神の愛を知りましょう。

●賛美歌 「もうふりむかない」

(ノアCDコレクション3番)

●今日のお祈り 「神様、私がどんなに弱くても、私を神様に喜ばれる子どもに変えて下さるから感謝します。これから信じていきますから、私をお守りください。」

## ワーク C

●先週に引き続き、ヤコブに焦点を絞って考えましょう。ヤコブでさえ受け入れて下さる神様は、利己的な者をも変えてくださることを教えます。2の①はユーモアの笑い、②は正解、③は姓名判断の迷信です。日本ではこのような感覚は日常的なことですから、その感覚や習慣の間違ひにも気づかせるのが良いでしょう。

●3の問題は真中のものが正解ですが、下の左右も半ば正解と言えるでしょう。こういう点も会話を考える材料になります。

●タイトルの最初の文字は、ひっくり返した「愛」の字です。

## ワーク D

●新共同訳は聖書の節がずれているので注意。

●質問1 ヤコブは策略をたてますが、平安がありません。そこでやっと神に祈るのです。神の約束に立って祈ることの大切さを発見しましょう。

●質問2 力で勝つことができなかったにも関わらず、真剣に求めてしがみついたヤコブを捕らえて下さる神。「組み打ち」(格闘)が信仰的な意味でちゃんと理解できるように助けて下さい。

●質問3 恐れていた再会が和解となりました。ヤコブが小手先で兄をなだめたからではありません。変えられたヤコブが、兄に対して謙遜に近くことができたからなのです。

●質問4 神に信じきる祈りをささげましょう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 ヤコブは、おじラバンの家から故郷に帰ろうとしますが、兄のエサウに会うことは楽しみでしたか。それとも不安なことでしたか。

2 もし、不安だとすると、それはなぜですか。

3 ヤコブはエサウに会うことに恐れを感じていました。恐れを取り去るためにヤコブは何をしましたか。

●自分に当てはめてみよう

1 ヤコブは、エサウから神様の祝福を奪い、後味の悪い生活を送っていました。私たちは、ヤコブのように、心に後味の悪いことを持ちながら、日々を過ごしていないでしょうか。

2 もし私たちがだれかに会う場合に、不安や恐れがあるとしたら、私たちはどうすれば良いのでしょうか。

3 神様は、私たちが、自分の知恵、自分の力に頼ることを願っておられるでしょうか。

## ●話し合ってみよう

1 ヤコブは、エサウの怒りを恐れて、たくさんのお供物を渡すことを考えました。また自分が一番大切なので、すべての贈り物や、家族の者を先に行かせ、自分は一番最後に進みました。自分を一番大切にすることは、自我の表れということができるでしょう。でも彼の自我を砕くために、御使いはヤコブと争いました。その結果、ヤコブは砕かれたのではなかったでしょうか。



週 聖  
題 書  
人を汚すもの  
マルコ 7・15 23

## 序論

四月から続けてきた今年の旧約聖書の学びをいったん終え、今週からは第二期にはいる。今期は子ども的人格を自覚めさせて自立に向かわせ、神の前に立つ備えをさせることがその目的である。まず前半で「神の国の価値観」を学ぶ。今週は、人を汚すものは外部からではなく、内部から出てくることを発見させたい。

今週学ぶところは、主イエスに対する反対が高まってきた時期の出来事である。特にパリサイ派の律法学者は、手洗い等の儀式的な行為によって、汚れが取り去られると考えていた。しかし主は、汚れは人間の内側から出てくると主張された。ここには、汚れを取り去るのは外面的な行為か、それとも内面的な変革か、との根本的な問いが暗示されている。パリサイ人の考え方と、主イエスの考え方とは、大きな違いがあった。

## 一、ハリサイ人の考え方

確かにレヒビ記には、祭司が犠牲をささげる前に水で身を洗いきよめるべきことが記されている(8:6)。しかしこのことが律法学者によって拡大解釈され、主イエスの時代には、一般のユダヤ人でも汚れをきよめるために手や身体、さらには様々な

# 研究資料

パリサイ人

紀元前二世紀、中下層手工業者の熱心な律法研究家を中心に始まった一派。「分離された者」を意味するヘブル語バール・シュに語源があると推測されている。彼らは当時の社会的立場を得ていたユダヤ教のリーダーたちで、イエスの言動を調査するためエルサレムから派遣されてきた。彼らは旧約聖書の律法（厳密に言うなら、律法の口伝や解釈）を非常に大切にしていた。しかし、律法の中心である神を心から愛すること、また人を自分と同じように愛することを忘れていた。そして長年の伝統と歴史を重んじる余りに、数多くの規定を設けて人々を縛り、御言葉の言わんとすることではなく、自分たちの伝統やこだわりを人々に押し付けていた。

この7章に至るまでも、イエスは彼らと何處も議論をしておられる。特に安息日問題に關しては、2・23〜3・5に見られるように、ユダヤ教の本末転倒を御言葉の權威によつて覆された。これを快く思わなかつた指導者たちは、イエス殺害計画を考え始めたのである(3・6)。

デキスト

1 エルサレムからきて エルサレムからカペナウムまでは、直線距離でも百キロ以上ある。旅をすれば1週間近くかかるが、そのエルサレムから

食器までも洗うようになっていた。しかも市場には異邦人も多数いたため、彼らから受けた汚れを洗い落とすことも必要とされたのである。これらの規定は、人昔の人の言伝えとして大切に守られており、それは神の戒めよりも重要なものと見なされていた。これは、まさに神の律法を空文化することには他ならない。

主イエスは空文化の実例を挙げておられる。十戒には「父と母とを敬え」と定められていた。だが、年老いた両親を扶養するために必要な資金はハコルバン、すなわち供え物ですVと言ったならば、もはや両親の面倒を見ないで済むというようないい伝えさえあったのだ。

これらのことは、イザヤが預言しているように、人間のいましめを教として教え、ゝていることだと主は指摘された。当時の律法学者は、人の神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している、愚かな人々だった。それを守りさえすれば、きよい者となるのだと思っていた。だが儀式的な行為によって汚れを取り去ることはできない。

## 二、主イエスの考え方

主イエスは、パリサイ人とは全く違った考え方をしておられた。主はもう一つ、当時のユダヤ人の考え方に反することを明言されたのだ。それは、**どんな食物でもきよいものとされた**ことである。レビ記11章には、**食べてはならない汚れた動物のことが詳しく書かれている**。それは、主イエスによる救いの象徴である。たといそのようなも

わざわざやってきました。

2 弟子たちのうちに、不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者がある。確かに律法には手洗いの規定がある(出エジプト30章)。しかしこれは祭司が祭壇に仕えるときのもので、一般の人々に適用されるものではない。

6 偽善者 仮面をつけて芝居を演じる役者のことを意味する。人は見栄えの良い面をつけて、他人の目に美しく見てもらいたいと願う。

8 人間の言伝えを固執している イエスは、彼らが神の戒めよりも人間の言い伝えを重視していることを何度も指摘する（7、8、9、13）。ここでイエスが言わんとすることはこうである。彼らは自分では律法に熱心であると自認しているが、本当は神様の目ではなく、人の眼指しを恐れて生きているのだと。神の言葉ではなく、言い伝えが正しいと信じている人々の目が怖かったのである。彼らは外面にこだわり、形だけで宗教家としての權威を保とうとしていた。

12 その人は父母に対して、もう何もしないで済む。法律学者はすり替えの名人。年若いた親を扶養する責任があるのに、ささげ物をたてにして、親をないがしろにしていた事実があった。法律は「あなたの父と母を敬え」(出エジプト20・12)と言っている。これは「あなたの両親を重い存在として扱え」と言うこと。たとえ寝たきりになっても、というニュアンスが含まれている。しかし彼らはこの御言葉のメッセージを受けとめないで、自分のすることは正しいと自認していた。表面的

のを食べたとしても、便として外に出て行くだけであり、人の心を汚すものではない。主が最も関心をもたれたのは、汚れた食物ではなく、汚れた人間の心だった。

手や身体を洗ったなら、外面的な汚れを取り去ることはできるだろうが、人間の心の汚れを取り去ることはできない。律法学者は、外面的なきよさにこそ価値を見いだしていた。だが主は、内面的な心のきよさを求められたのである。

三、きよい心をもつて生きる

食物は人を汚せない。人を汚すのは、人間の心の中から出てくる悪い思いである。ここに列挙されている前半六つの、行為に表れた悪行と、後半六つの、心のうちにある悪徳は全て、生れつきの人間がもっているものだ。コルバンの言い伝えなどは、多くの供え物を得ようとした悪い祭司たちの貪欲や邪惡の産物だと悟るべきであろう。

心が変革される以外に、これらの汚れを取り去る方法はない。ではだれが心を変革して下さるのか。それこそ主イエスである。「わたしは命のパンである」(ヨハネ6:35)と言われる百パーセントきよいお方を食して、私たちの心の中にお迎えするなら、どんな邪悪な心もきよくなるのだ。

## 結論

あなたの心からの悪い思いが、自分と他の人を汚してはいないか。自分の悪を認めて悔い改め、主イエスを迎えるならあなたは変えられる。

には民数記30・2を守っているようであるが、実際は十戒のおきてを空文化している。しかし神は、その偽善を見抜かれる。

15 すべて外から人の中にはいつて、人を汚しうるものはない。ここでイエスは、食物は人の心を汚さないと断言している。食物は私たちの体を支えるために神が備えて下さったもの。そして口からはいったものは、消化器官で栄養を吸収した後、外へ出て行く。イエスは食物が神と人との關係を左右することはないと教えられた。

21 人から出て来るもの 心の内側から出てくる罪と汚れ。人間の心は、その人格の中心である。心には理性があり、感情があり、また意志決定する働きがある。これが人を人たらしめている。人が神の前に立つとき、神がご覧になるのは人の心である（サムエル上16：7）。心の中にある汚れこそが外に出て人を汚すのである。

神の国に入るためには、民族性を根拠にはできないし、祭儀的、律法的に正しく伝承の規定を守れることも全くあてにならない。神の国で問題にされるのは心であり、悔い改めて福音を信じることである（マルコ1:15）。私たちは天使のような心をもってはいない。自分の罪や心の汚れ、また醜さを率直に主の前に認め、方向転換し、主イエス・キリストを心にお迎えすることだけが、神の国に入る恵みである。神の国の入り口はやはり、主の十字架と復活だけである。

礼拝メッセージ例

●週題 人を汚すもの  
●聖書 マルコ7・1～23  
●暗唱聖句 人から出て来るもの、それが人を汚すのである。マルコ7・20  
●目標 人を汚すものは、人の心から出てくることを発見し、汚れを認め悔い改める。

導入

今週からイエス様のお話になります。イエス様は全ての人に慕われていたかというところ、そうではありません。特に律法学者やパリサイ人たちはイエス様をねだみ、そのお話を行動を監視していました。そして律法に反していると思える行動を発見すると、やりこめようとしたのです。

(起) ストーリーを語る

旧約聖書には、これはしてはいけない、あれはしなければならないという多くの規則が書かれています。その中に、神殿の御用をする祭司は、犠牲をささげる前に水で体を洗い清めなければならぬという規則がありました。律法学者はその規則をもっと厳しくして、普通のユダヤ人も、汚れを清めるために、手や身体や食器もていねいに洗うように命じていたのです。しかし、これはただの言い伝えであり、意味のないものでした。

このようなことが神様に喜ばれると考えていた律法学者やパリサイ人は、イエス様の弟子たちが

その言い伝えに従っていないのを見て、非難しました。その時イエス様は、彼らが守っている言い伝えを明確に否定されたのです。例えば、「父と母とを敬え」という律法があるにもかかわらず、年若い両親を養う費用を「コルバン」、すなわち神様への供え物です」と言えば、もう父母の世話をしなくていいと言っていたのです。これは「人の言い伝え」を大切にして、本当の「神の言」を無視することでした。

そこでイエス様は、「外から人の中に入って、人を汚すものはない。かえって、人の中から出るものが人を汚すのです」と、教えられたのです。この意味がわからなかった弟子たちが、イエス様に質問しました。するとイエス様は「食べ物は何でもお腹に入ってから、そのカスが身体の外に出ていくだけで、人を汚したりはしません。」「どんな食物でもきよいのです。」「人から出てくるものが、人を汚すのです」と言われました。外から入る食物は人を汚すことができないが、人の心から悪い思いが出てきて、それが人を汚すという意味です。人の心のねたみから、盗みや殺人がおきます。人を嫌う心や欲張りな心から、悪口とうそが出てきます。自分を偉いと思う心から、差別がおきます。目に見えなくても、人の心から出てくるものが、自分も周囲の人も汚してしまうのです。このようにイエス様は、心の中がきよくなければ、手や身体や食器を一生懸命洗っても、全く無駄だと話されたのです。

(承) 学ぶべき真理

聖書に書かれた律法は、人に神様の目で見た善悪を教えるためにあるのです。言い伝えを守って清くなることはできません。また、どんな食べ物も人を汚すことはできません。人を汚すものは、人の中から出てくるものです。まず自分の中にそのような心があることを知りましょう。そしてそれが自分も人も汚していることを知りましょう。世の中の罪をなくすことも、結局自分の心の汚れをきよめていただくことから始まります。

(転) 生活への適用

近頃は、すぐきしたり、ムカつく人がたくさんいます。また万引きしてもうそをついても平気な人、悪口を言って喜んでる人もいます。皆さんは、そんな人ではないですか。心の汚れは自分も周囲の人も汚します。イエス様はそんな心が大嫌いです。イエス様が注目されるのは、目に見えない心がきよいか汚れているかです。皆さんの心の中には、汚れたものはありますか。もしあるなら、それを神様に告白し、悔い改めのお祈りをしましょう。イエス様の十字架の血は、すべての罪をきよめてくれます。

結論

私たちは、手や着物を洗い、部屋を掃除して、毎日きれいに過ごそうとします。けれどももっと大切なのは、心の中をきれいにすることです。心の中の罪に気がついたらすぐにおわびして、心の中にイエス様をいつもお迎えしましょう。毎日毎日新しいきれいな心にしていただいて、イエス様に喜んでいただきましょう。

ワーク A

●暗唱聖句 (7月29日～8月19日)  
主なるあなたの神を愛せよ。(マルコ12・30)  
●導入のヒント  
イエス様は心の中も全部知っておられるよ。みんなの心の中から、どんなものがでてくるかな。  
●ワーク 罪の心はどんなもの?  
「罪の心とは、どんなものだろうか」と尋ね、子ども自身に言わせてみて下さい。字の書ける場合は、それを書き込みます。書けないときは教師が書いてあげましょう。まん中の十字架は「こんな活い心でも、十字架できれいにしていたただけなんだね」と話すためです。

ワーク B

●質問1 パリサイ人たちが固守している言伝えを知り、形ばかりのきよさについて考えます。  
●質問2 イエス様が教えられた「内面の罪・きよさ」について考えます。この時にも、外側よりも内側を見ておられるお方に目を注ぎましょう。  
●質問3 自分の罪を悔い改め、イエス様こそ救い主であることを信じ、感謝しましょう。  
●賛美歌 「ヨハネ1・12」  
(ふくいん子どもさんびか66番)  
●今日のお祈り 「神様、私の心の中からきよい思いが出てくることを知りました。どうか私をきよくし続けて下さい。」

ワーク C

●「悔い改める」が目標となっていますが、ワークでは、汚れをきよめるのは主の血潮である点も加えました。ヨハネ1・9を開いて、「だから、悔い改めよう」と語るのはどうでしょう。悔い改めるときよめと関連づけてください。  
●イラストは、汚れた心が物干し竿にかけられていて、十字架のイエス様の血潮を通してきれいになることを描いています。対話の材料にどうぞ。  
●2のイラストでは、物質の汚れは洗ったり捨てたりできるが、心から出て来る言葉や態度の汚れはそうできないことを自覚させます。さらに3の三択問題で、それは心から出て来ることを自覚させ、主イエスの十字架が解決だと示します。

ワーク D

●質問1 食事前の手洗いとは違うことを確認して下さい。言伝えに固執することや食物が汚すのではないことからわかると思います。  
●質問1b 汚れに対する恐れが、神様に従うという根本的な命令を忘れさせています。守っていると安心という心はだれもが持っています。  
●質問2 ①15節②19節(新共同訳では説明が必要)③21節④21・22節。  
●質問3 21・22節を自分自身に問うためには、説明が必要です。上級生ですから姦淫、好色などもはっきり指摘して下さい。悔い改めの導きのため、個別に取り扱う必要もあると思います。

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 パリサイ人たちは、イエス様の弟子たちが、洗わない手でパンを食べるのを見て、なぜ非難したのでしょうか。
  - 2 この場合、問題になっているのは衛生的なことでしょうか、それとも神様の前にきよくなることでしょうか。
  - 3 水で身を洗えば、神の前にきよくなることができるでしょうか。
- 自分に当てはめてみよう
- 1 パリサイ人たちは、神の教えよりも、昔の人の言い伝えを重んじていました。私たちも、人の言った通りにするなら安心だと思っていることはないでしょうか。
  - 2 私たちにも、自分がいるような規則を守っているからといって、守っていない人を非難することはなかったでしょうか。
  - 3 もし非難していたとしたら、そういう心を神様は喜ばれるでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 パリサイ人、律法学者たちは、昔からの言い伝えを守ることで、神の前に義とされることができていました。それは正しい考え方でしょうか。
  - 2 イエス様は、神の前に義とされることは心が問題だと言われました。私たちの心の中には、いったい何があるでしょうか。

ワーク解説



週 題 生きている者の神  
聖 書 マルコ12・18～27

## 序論

今週から三週間、受難週におこった出来事から「神の国の価値観」について学ぶが、ここでも神法学者との論争が背景となっている。主イエスがここで主張されたのは、神の国はこの地上の国と全く違っていることだった。ユダヤ人でありながら、モーセ五書しか権威あるものと認めていなかったサドカイ派の神法学者は、五書の中に復活についての明確な言及がないため、復活はないと主張していた。現代にもそういう人々がある。しかし主は、それが誤りであると明言された。

## 一、サドカイ人の考え方

サドカイ人は、自分たちの考え方の正しさを証明するために、律法が命じているレビート婚をひっぱり出す（申命記25・5～10）。彼らは、もし復活があるなら混乱が生じるゆえに、復活などありえないと言いたかったのだ。七人の兄弟が次々に死んでいくなどということは、現実の世界ではおこりえないが、紀元前二世紀頃に成立した旧約外典のトビト書にはそんな話が載っている。

モーセがレビート婚を定めたのは、夫を失った婦人の生活を守り、その相続地を次代に継承させるためだった。その目的は、この地上の生活が

公正に保たれていくことにある。だからといってモーセが復活を信じていなかったと結論できるわけではない。しかしサドカイ人は、自分たちの考え方の正しさを証明しようと、都合の良いところだけを引用したのである。

## 二、主イエスの考え方

主は、彼らの考え方を次の二つの点から批判された。第一に、復活は地上のからだと同じものではなく、御使のようであることだ。永遠のいのちを与えられているので子孫は必要ない。だから結婚も必要ない。この地上と全く違った復活のからだにして下さるというすばらしい神の力を、サドカイ人は知らなかったのである。

第二に、主イエスは彼らの信頼するモーセ五書から、復活を暗示している箇所を引用される（出エジプト3・6）。ここで神は、**「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と**仰せられた。モーセの時代には、彼ら族長は死んでいたにもかかわらず、**「あである」と**現在形で言われたのは、彼らがこの時も生きているからに他ならない、と主は主張されている。サドカイ人は地上の視点で聖書を読んでしたが、主は永遠の視点をもって聖書を説き明かしておられたのだ。

## 三、復活を信じて生きる

サドカイ人は**「人非常な思い違いをしていて、彼らは目に見える地上の生活しか見ていなかった」**のである。確かに、復活した後の生活がこの地上

の延長だとするなら、不都合なことはいっぱいある。まず何を食べるのか。人口は増え続ける一方だから大変だ。復活しても老人のままか。身体の不自由な人はそのままのからだか。夫婦でお互いの顔がわかるのか。勉強や試験もあるのか。疑問は次々にでてくる。

復活を信じて生きるとは、地上の考え方、地上の価値観とは全く違ったものを持つことである。この地上では、たくさんお金をもっていて、有名になって、楽しい家庭を築いて生活することに価値が置かれている。しかし、死んでしまえばそれらは終わりだ。聖書は明確に、**「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっている」（ヘブル9・27）**と宣言する。そのとき私たちは、どういう態度で神の前に立つことができるだろうか。

## 結論

私たちは、過去数か月間に、アブラハム、イサク、ヤコブの生涯を学んだ。彼らはみな失敗をしていた。そして地上の生涯を終えた。だが神は、**「わたしは彼らの神である」と**現在も仰せられている。彼らは今も神の御前で生きているからだ。

私たちも、いつかは死ぬ。しかしその後復活があるのだ。この地上だけ楽しければ良いという浅はかな考え方をやめよう。本当に重要なのは、死んでから後であることを思い、復活を信じた価値ある生き方はどういうものかを、現在十分に考えよう。

## 研究資料

## サドカイ人

サドカイ人は、ユダヤ教徒の中では少数派であり、貴族階級に属していた。彼らの中から大祭司と呼ばれる祭司の最高権威者が選ばれた。サドカイ派は、神殿の支配者階級と結びついており、経済的には裕福な人々であった。彼らの特徴は、旧約聖書のモーセ五書を大切にしたこと。モーセが記した律法こそ神のみことろだと受けとめた。そして死者の復活を信じなかった（使徒23・6～8）。その根拠は、モーセ五書には死人のよみがえりは記されていないからだと言う。

その彼らが神殿でイエスに質問した。一人の子にも恵まれない女性が、夫を失い寡婦となり、再婚を重ね、地上で7人の夫を持った。しかも全ての夫は兄弟関係にあった。この場合、復活の時にはこの女性はだれの妻になるのかと。

サドカイ人の質問は、申命記25・5～10を意識している。この箇所は、イスラエル社会の中で家の名が途絶えないようにするための規定であり、また財産が他の家に渡るのを防ぐためのものだった。ところがサドカイ人は、ここから7人の兄弟が一人の女性の夫となった場合を仮定して、復活したらこの女性はだれの妻になるのかとイエスに質問した。これは文脈を無視した屁理屈。だが、死をどう受けとめるかという問題が提起されているのは重要なことである。

## テキスト

24 そんな思い違いをしている 「誤っている」と言う意味。文語訳では、「汝ら大いに誤れり」とある。「迷い出る」とも訳せる。イエスはサドカイ人が、御言葉から迷い出ていると指摘している。論語読みの論語知らずならぬ、聖書読みの聖書知らず。

25 死人の中からよみがえるとき 人の死をどう受けとめるべきかが言われている。サドカイ人は死んでからのことを考えない。地上の価値観だけが根底にある。死後も地上の関係が続くと思っている。しかしイエスは、死者が復活する時、地上での人間のあらゆる絆は無関係だと宣言された。何々家だとか、誰々の子だとかは一切関係ない。

復活にあずかる者は、天国で「天にいる御使のようなものである」。天国の信仰者は、永遠に神を礼拝しつつ生きる存在である。死後も延々と地上の人間関係が続くかのような錯覚を持ってはならない。生涯独身の人もいるし、わけあって親の顔を知らない人もいる。しかし天国では地上の関係がまかり通るのではない。唯一、つながっているのは、礼拝の関係。

26 モーセの業の篇 出エジプト3章。この箇所はモーセがエジプト脱出に際して、イスラエルの民の指導者に召し出される場面。ここで大切なことは、イエスが天の父なる神を、アブラハムの神であり、イサクの神であり、ヤコブの神であると現在形を用いて語っておられること。つまり神は昔も今も生きて働かれていると言う主張である。

神は生きて働かれているお方だという信仰なくしては、聖書から迷い出してしまう。

サドカイ人の問題は、エルサレム神殿と結びついていて、彼らはたくさんのお金と物集まる神殿の利益と関係が深く、経済的に満ち足りていた。サドカイ人にとって神との交わりとは神殿の祭儀だけで十分だった。神殿が生み出すお金が彼らの神と言っても過言ではなかった。あえて死を超えて神に期待することなど、サドカイ人には思いもよらないこと。だから復活を期待することもない。地上の富の楽しみが彼らにとって全てだったのである。彼らには生きて働かれる神への信頼が全くなかった。彼らの神は、この世の金であり、生きることと無縁な、死んだ神であった。

ここに私たち人間の罪の現実がある。私たちは高度に発達した情報化社会の中で、何を求めて生きているのであろうか。クリスチャンは、自分の死のこと、復活の希望、天国での礼拝、主イエスのみもとに召されることを本気で考え、地上を生きていきたい。思い違いをして、御言葉の真実から迷い出ることがないように、神の国の福音に生かされていく。



● 週 題 生きてゐる者の神

● 聖 書 マルコ12・18～27

● 暗唱聖句 神は死んだ者の神ではなく、生きてゐる者の神である。

マルコ12・27

● 目 標 復活があることを知り、地上でどう生きるかで、永遠が決まることを発見する。

#### 導入

人は死んだらどうなるのでしょうか。それで終わりではありません。聖書は、人は死んだ後に復活があることを教えています。今日は、復活を信じなかった人々に、イエス様がその思い違いを正された箇所です。

#### (起) ストーリーを語る

サドカイ人も律法学者の一派ですが、彼らは復活を信じていませんでした。彼らは、モーセの五書といわれる、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記だけが聖書だと考えていました。ですから、そこに復活のことが書かれてないと思い、復活を信じなかったのです。

この人たちが、イエス様のもとに質問を持ってきました。彼らは、イエス様は質問に答えられないだろうから、そこで自分たちが正しいことを証明してやろうと思って近づいてきたのです。

申命記には、夫の名を残すため、夫に先立たれた夫人は、夫の兄弟と結婚するように定めていま

す。この決まりを持ち出してきたサドカイ人は、「も

しある婦人が、7人の夫に次々と先立たれた場合、復活した後にはその7人の夫の中のどれの妻になるのか」と、質問してきたのです。イエス様はこれに答えて、「サドカイ人は、聖書も神様の力も知らないで、思い違いをしている」と、告げられました。復活後は、天の御使いのようになるので、結婚したりしないのだと教えられたのです。天国は、地上の延長ではありません。復活したら霊の体となるので、肉体の制限にとらわれたいはしないのです。結婚もないし、けがも病気もなく、痛み苦しみもなく、時間や空間にも支配されることはありません。

そしてもう一つ、サドカイ人が信じている出エジプト記で、神様が「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」と自己紹介されたのは、アブラハムとイサクとヤコブが、今も生きてゐるからです。「神様は死んだ者の神ではなく、生きてゐる者の神です」と、イエス様は教えられました。信仰の父祖たちは、今も天において神様と共に生きてゐるので、神様は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われました。ですからモーセの五書も、復活が間違ひなくあることを教えてゐるのです。人は死んだら終わりだというのはたいへんな思い違いです。人は一度死ぬことと、死んだ後に裁きを受けることが定まっています。ですから、人はその地上の生涯において、神様の前に出る用意をしなければなりません。

#### (承) 学ぶべき真理

この地上の命が終われば、何もかも終わりだと思つてゐる人は多いでしょう。だから、地上の生涯をおもしろおかしく生きたいいんだと思つてゐます。しかし、それは大きな思い違いです。この地上での生涯の生き方は、全て神様の前で裁かれます。そして、復活の体が与えられ、永遠のいのちをいただいて神様と共に神の国に住むか、永遠に滅びるかが決まるのです。この地上の生涯を善く生きるか、悪く生きるかで、死後の永遠の時間が決まることを忘れてはなりません。

#### (転) 生活への適用

皆さんがこれをする、あれをしないと判断するとき、善悪で判断していますか。それとも損得やおもしろいかどうかで、判断していますか。

欲しい物を万引きすれば、自分のものになりまです。損得で判断すれば得ですが、善悪で判断すれば悪です。死んだ後に裁きがなく、復活もないとすれば、欲しい物は奪った方がいいと考えるでしょうね。でも復活はあります。死んだ後には、裁きがあります。神様が定めておられる善悪で判断して、善いことをして、悪いことをしないようにしましょう。それが復活の備えです。

#### 結論

イエス様はとても大切なことを教えて下さいました。アブラハムもイサクもヤコブも生きています。復活は本当にあるのです。私たちが復活を信じましょう。そして、神様の前にいつでも喜んで出られるようにしましょう。

## ワーク A

### ● 導入のヒント

天国って、デイスニランドのような所でしょうか。色んなお菓子をいっぱい食べられる所でしょうか。けれど、毎日遊んだり食べたりしている、しまいに飽きてしまうでしょう。

天国は先週学んだような活い心がない所です。だれも意地悪する人はいません。みんなイエス様を信じて、きれいな心にもたらした人ばかりです。だから死ぬこともありません。

### ● ワーク 天国への道

五つのパッチは、みな雲の形が違います。あてはまる所に入れるとき、イエス様が天国へ行く道であることを知らせて下さい。

## ワーク B

● 質問1 サドカイ人の復活についての質問へのイエス様の答えを思い出して、パズルをします。

● 質問2 イエス様を信じる者には永遠にイエス様と共に生きるいのち、「復活が備えられていることを知ると共に、その「永遠」につながる生き方を今からしていくことを勧めましょう。

● 質問3 今日の暗唱聖句です。「死は終わりではなく永遠のいのちへの始まり」です。

● 賛美歌 「神のお子のイエスさま」

(ふくいん子ともさんびか74番)

● 今日のお祈り 「神様、私たちに永遠の命を下さることを感謝します。」

## ワーク C

● 壁で仕切られた二つの世界があります。「生きてゐる者の神」の世界と、地上の世界です。「生きてゐる者の神」の世界には、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセたちが、現在も生きて存在しています。

● この世の価値観の多くは、私たちをも支配していることでしょうか。そこで、子どもたちに自分自身を省みさせながら、自分のいる場所はどこであるのかと考えさせます。

● その入り口は何によって開くのか、どういう人が入れるのかも確認しましょう。

## ワーク D

● 質問1 復活がないと思うのは、今の生活の続きと考えるからです。子どもたちも永遠のいのちや天国のことをよく理解しているでしょう。それを確認することがまず大切です。

● 質問2 ①主イエスのいわれる復活について、どのように考えてゐるかを探ります。②信じて永遠のいのちを持つとは、肉体の死が終わりでないことです。復活を信じるとは、永遠のいのちが今の生活の続き(今と同じ価値観)ではないことがわかるように導いて下さい。

● 質問3 主を信じて永遠のいのちをいただくことが必要です。また、神の前に立つ時があることも説明して下さい(ハブル9・27参照)。

## 中高校へのヒント

### ● 考えてみよう

1 サドカイ人は、復活はないと主張していましたが。その根拠はどこにあったと思いますか。

2 イエス様は、死者の復活はあると言われましたが。それともないと言われましたか。

3 サドカイ人は、非常な思い違いをしていたようです(27節)が、それは、彼らがどこを見ていたからでしょうか。

● 自分にあてはめてみよう

1 あなたは死ということを真剣に考えてみたことはありますか。

2 あなたは、自分の復活が信じられる場合と、信じられない場合、生き方にはどんな違いが出てくると思いますか。

3 あなたはどちらの生き方を選びますか。

● 話し合ってみよう

1 私たちの周囲の人々は、お金をたくさん儲けることとか、有名な人になることとか、賢沢に暮らすことといったような、地上的なことに価値があるように考えています。しかし、これらのものは死んだ後、持っていけるのでしょうか。イエス様は、死んでも続く世界のことを語られました。そして、復活を待ち望んで生きることを私たちに求められたのではなかったでしょうか。私たちは、このイエス様の思いを受けとめているでしょうか。



週 題 一番重要な命令  
聖 書 マルコ12・28～34

序論

今週のテキストは、11章27節から始まった律法学者との論争の第五場面である(第一～第三の場面は今回は扱っていない)。先週はサドカイ派の律法学者とのまさに「論争」だったが、今週の場面は真摯な態度で主に近づいたパリサイ派の律法学者との「対話」と言った方がよい。ヨハネ3章に登場するニコデモも、同じような態度で主のもとにきた人物だった。パリサイ人は、表面的ではあったが、当時六一三あったと言われている律法の全ての項目を必死に守ろうとしていた。しかし余りにも多くのいましめがあったので、人すべてのいましめの中でそれが第一のものでしょうかという質問をしたのだらう。

一、明確な答え

主イエスは即座に答えられた。第一は、申命記6・4に記されており、敬虔なユダヤ人ならみな知っていた人主なるあなたの神を愛せよといういましめである。しかし第二に挙げられたのは、レビ記19・18の人自身を愛するようにあなたの隣り人を愛せよであった。この二つを組み合わせて「全律法の要約と考える引用例は、同時代のユダヤ教に例がない」(『新聖書注解』新約第一巻二

六四頁)。つまり主は、愛こそ律法を全うするものであることを明確に教えられたのである。この教えは初代教会にしっかりと受け継がれたことは、ローマ13・9、ガラテヤ5・14、ヤコブ2・8などを見ればすぐわかる。そして現代においても、神を愛することと隣人を愛することは、私たちの生活の基盤であることを銘記せねばならない。

二、神を愛するとは

では、神を愛するとはどういう意味なのだろうか。それは以下の二つほどにまとめられる。最初に、この命令には、人主なるわたしたちの神は、ただひとりの主であるとの前書きがあることに注目しよう。これは、32節の律法学者の応答にもあるように、真の神以外に神はないことを確認する表現だ。神を愛するとは、それ以外の何物をも神としないことである。偶像の神だけでなく、富や名誉を、あるいは人間のそれかや自分自身を、神の位置に置いてはならない。さらに、人主をつくり、精神をつくり、思いをつくり、力をつくりと記されていることに留意したい。人間に与えられている全てのものを総動員して、神を愛すべきなのである。神が喜ばれることは何かを見極め、それを実行していくところに、神への愛は具体化する。神を愛しておれば、十戒の最初の四つ、「なにももの神とするな」「偶像を造るな」「主の名をみだりに唱えるな」「安息日を聖とせよ」は、必ず守れる。

三、隣り人を愛するとは

隣り人を愛せよとの命令にも、人自身を愛するようにとの前書きがある。自分を愛することが悪いわけではない。問題は自分を愛するが、隣り人は愛さないことである。利己的な行動がこの命令に反することは明らかである。そして自分を愛するように隣り人を愛するならば、十戒の後半六つ、「父と母を敬え」「殺すな」「姦淫するな」「盗むな」「偽証するな」「むさぼるな」などのいましめも必ず実行できるはずだ。

結論

私たちにとっては、神を愛し隣り人を愛する生活にこそ価値がある。たとい自分が損をしても、神はそのような生き方に報いて下さる。感情や意志、また知恵を総動員して神を愛そう。またその神の御旨である、隣り人を愛することを、全力を尽くして実行しよう。人の問題を自分のこととして取り組もう。愛による行動こそが、神の国において最も大切なことだからである。

研究資料

重要ないましめ

ある律法学者がイエスに、「すべてのいましめの中で、それが第一のものですか」と尋ねた。彼がこう言うのには背景があった。当時のユダヤのおきてには、しなければならないという戒めが二四八、やってはいけないという禁止の命令が三六五あった。合計六一三。現実にはこれだけのいましめを意識しての生活は不可能である。六一三を覚えるだけでも困難。そこでこの人は、律法の勘所、中心は何かとイエスに問うた。

この質問に対するイエスの答えは、神を愛すること、隣人を愛することであった。つまり愛に集中すること。律法の目標とするところは、神を愛し、隣人を愛する一点に絞られる。出エジプト記20章にある十戒は、最初の四つは神様と私たち人間との関係であり、後半の六つは対人関係である。例えば、神を愛して生きるなら、日曜日に礼拝をささげるため、地上で損をするかも知れない選択をすることもある。また人を愛するなら、父や母を重要な存在として受けとめるであらう。たとえ尊敬できない親であっても。

「神を愛し、隣人を愛せよ」との戒めは、「隣人との関係の中で、いつも神を認めなさい」というメッセージを持っている。イエスは、神を愛する生活と隣人を愛する生き方とに優劣をつけていない。むしろそれは一つであると言っている。私た

ちが最高の礼拝を主にささげて生きることとは、日常生活の中で人との関わりを大切にすることと一つであると主張されているのである。非常に重く、深いメッセージだ。主の前に祈り深く生きる人には、また同時に人とも心から向き合う生き方が求められている。

ここで私たちは、自分には読めるものが何一つなく、ただ罪多き者でしかないことを認めざるをえなくなる。「愛に集中せよ」との御言葉の前に、自分の罪を深く自覚させられる。また同時に、イエスの十字架の愛に立ち返られる。主イエスこそ、この御言葉を実践し、完成して下さった唯一の方である。主の十字架を仰ぎ、聖霊の豊かな注ぎを頂いて、主の恵みによってのみ愛に生きることが可能なのである。

テキスト

28 イエスが巧みに答えられたのを認めて 場面はエルサレム神殿。イエスにサドカイ人が質問したが、主は見事にお答えになった(12・18～27)。その論議を見ていた一人の律法学者がイエスの答えを認めて質問した。「巧みに」という言葉は、美しい、或いは良いと言う意味。悪質な質問に対して、主は美しい答えをされたのである。

29～30 第一のいましめはこれである 二重括弧の部分では、申命記6章4～5節の引用である。これは、唯一の主を畏れ、主だけを愛する約束である。私たちにあって、主はこのお方以外にはないのだから、私の全てをもって愛するということ

である。愛するとは、別の表現で言うなら、貞操を守るということ。私たちの愛が、ただ一人の神に向けられること。逆に不貞とは、二心であり、心を尽くさないで、心の一部を他の対象に残しておくこと。

31 第二はこれである 二重括弧の部分は、レビ記19章18節の引用である。この隣人を愛するという約束も律法全体にかかわっている。人間関係に対して聖書は多様な指針を与えているが、中心は隣人を心から愛するかという一点に絞られる。隣人を愛することで難しいのは、限定できないという点である。ユダヤ人は、隣人をユダヤ人に限っていた。しかしイエスは、よきサマリヤ人のたとえ(ルカ10・25～37)に代表されるように、出会った人全てと言う意味で使っておられる。私たちはここで自分の罪を知らされる。私たちは、無意識、無自覚のうちに隣人を選ぶ罪を犯しやすいのだ。自分を愛するように この言葉は実に厳しい。別の表現で言えば、「あなた自身の人格として」というようなニュアンスである。

33 すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです この律法学者は、形ではなく内的なものの重要性を認めている(サムエル上15・22)。律法の真意を認め、イエスの答えを支持する。

34 あなたは神の国から遠くない この表現は、彼が神の国にはいついていないことを示している。彼も自分の心に巣くう罪を認め、イエスを心に受け入れることによってのみ、神の国に入れる。

## ●週題 一番重要な命令

## ●聖書 マルコ12・28～34

## ●暗唱聖句 主なるあなたの神を愛せよ。

自分を愛するようになんたの隣り人を愛せよ。マルコ12・30～31  
 ●目標 神と人を愛することが一番重要な命令であることを発見し、それに応える。

## 導入

イエス様のまわりには、いろんな質問を次から次にかけてくる人がたくさんありました。今日の人、けんかを吹っかけるようなタイプの人ではなくて、はじめにイエス様に尋ねたい心でやってきたパリサイ派の律法学者です。

## (起) ストーリーを語る

私たちの生活には、交通ルールや学校の校則のように、いろんな規則があります。イエス様の時代には、人々が守らなければならないルールが、六二三もあったそうです。覚えるだけでも大変なのに、それを必死で守り、完璧にやり抜いて、それで神様に喜ばれたいと、パリサイ人は考えていました。しかし、何が本当に大切なのか普段から疑問に思っていたのでしょうか。一人のパリサイ人が、律法をよく知っていることで評判になっていたイエス様に質問したのです。「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と。

って、旧約聖書の申命記6章4節の御言葉を引用されました。それは、「主なるあなたの神を愛せよ」といういましめです。この聖句は、真の神様以外に神様はおられないことを告白した後、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」と続きます。つまり、私たちの全身全霊をもって、神様を愛しなさい、ということなんです。そうすると他のいましめはみな守れます、と教えて下さったのです。

これと組み合わせて言われた第二のいましめは、「自分を愛するようになんたの隣人を愛せよ」というものでした。そして「この二つより大事ないましめはほかにはない」と、はっきり答えられたのです。だれでも自分のことは第一に考えて大切にします。それと同じほど、あなたの周囲にいる人々を愛しなさい、という意味なんです。この律法学者は、イエス様の答えに感銘を受けました。彼は、「どんな燔祭や犠牲よりも、神様を愛し、隣人を愛することのほうが、神様に喜ばれます」と答えています。イエス様も彼に、「あなたは神の国から遠くない」と言われました。この律法学者は、律法の本当の意味をわかっていて、神様のみこころを知っていたので、神の国から遠くなくなったのです。

## (承) 学ぶべき真理

モーセの十戒を知っていますか。その中の最初の4つは、第一のいましめの神様を全力で愛すること、必ず満点になります。また、あとの6つのいましめは、第二のいましめを守り、自分と同

じように隣人を愛するなら、これも全部百点満点にできるようになります。律法全体が、この二つの戒めにかかっているのです。

私たちの社会に多くの規則があるのは、みんなが仲良く平和に暮らすためです。今日学んだ二つの大事ないましめは、この社会の規則をも包み込んでいます。多くのこと考えなくても、ただこの二つが心の底から守れたら、神様にも人にも喜ばれるのです。神様を全身全霊で愛すること、他の人を自分のように愛すること。この二つをしっかりと心に刻みましょう。

## (転) 生活への適用

「自己中」という言葉を知っていますか。自己中心ということばを縮めた言葉です。「わたしが、わたしが……」とか、「わたしの、わたしの……」とか、「わたしを、わたしを……」とか、わがままだらけの言葉を毎日使っていますか。やさしいイエス様は悲しまれます。イエス様の心になんたことは、弱い人に親切にすることです。困っている人を助けることです。喜び人と一緒に喜び、泣く人と一緒に泣くことです。

## 結論

自分によくしてくれる人だけに親切をするのは本当の愛ではありません。だれでもしていることです。イエス様がおっしゃったのは、神様と同じ愛し方をして生きることです。神様を全身全霊で愛し、他の人を自分のように愛しましょう。

## ワーク A

## ●導入のヒント

聖書って分厚い本ですね。これだけみんな覚えなくては天国に行けないのでしょうか。そうではありません。イエス様は、聖書の中で最も大切な二つのことを教えて下さいました。

## ●ワーク 御言葉の壁かけ

色画用紙を二枚用意して、大切な二つの戒めを書いて下さい。壁かけの窓を開くと見えるようにします。「主なるあなたの神を愛せよ。マルコ12・30」「自分を愛するようになんたの隣り人を愛せよ。マルコ12・31」のように。(全部ひらがなにしてもよいでしょう。)

## ワーク B

## ●質問1 イエス様の言われた一番大切ないましめを確認します。ヒントから言葉を探しながら文章を完成しましょう。子どものときから、私たちの生きる目的はここにありと語りましょう。

●質問2 「神と人を愛する」ことの具体例を考えます。一つ一つを話し合いつつ進んで下さい。時間があれば、他に「私ならこんなことが考えられる」と、具体的な例を挙げてみましょう。

## ●賛美歌 「あいの神」

(ふくいん子どもさんびか81番)

●今日のお祈り 「神様、神様と人を心から愛してゆけるよう、私を守り、強くして下さい。」

## ワーク C

## ●本日は、暗唱聖句をすべて書きま。

●3の問題は、「してもらったこと」を、神、家族、友だちの3分野で調べ、「してあげたい」と思う気持ちがあるなら、それを書きます。

●してもらったことがないという生徒がいても、今、生きてここにいるのは、いろんな世話をしてもらったからだといふことに気づかせましょう。●してもらったことをリストアップする時、それまでの家族関係や友人関係がどうだったかも反映されてきます。複雑な家庭で、実際にしてもらったことが少ない場合もあるでしょう。でも神様に造られ保たれており、イエス様に愛されていることを覚えて、自分にできることを考えさせます。

## ワーク D

## ●質問1 御言葉の確認です。

●質問2 唯一の神を愛すること。様々な神の一つではない。人が使うことのできるものとして与えられている「心・知恵(精神と思い)・力」を日常にどのように使っているかを思い起こし、神に喜ばれるために具体的にできることを考えます。そのうえで十戒を示して下さい。

●質問3 自分が中心になつてしまつほど自分を大切にしている。それと同じレベルで人を愛することを考えます。その上で十戒を示して下さい。

●例えば「お祈りをする」「1日1回は、積極的に親切にする」など、具体的な決心ができるよう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 この一人の律法学者が「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」とイエス様に尋ねたのは、なぜだと思えますか。

2 その質問に対するイエス様の答えは、どういうものでしたか。

3 イエス様の答えに、この律法学者は同意できたでしょうか。できなかったでしょうか。

## ●自分に当てはめてみよう

1 私たちにとって一番大切なもの、あるいは愛しているものは何でしょうか。

2 もし、神様よりも大切なものがあるとしたら、神様はどう思われると思いますか。

3 神様を第一に愛せないとしたら、その理由は何か。

## ●話し合ってみよう

1 人が神様から離れていくときに、偶像を作り出し、神様をばかにするようになり、お父さんやお母さんを大切にすることが薄れ、人の命を軽く見たり、異性に対していやらしい思いをもったり、うそをついたり、人のものが欲しいと考えるようになるのではないのでしょうか。

2 また私たちが、心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして真実に神様を愛するときに、人間として正しい姿が形成されるのではないのでしょうか。



週 題 まことの献金  
聖 書 マルコ12:41-44

## 序論

ある人がどういった価値観をもっているかは、お金の使い方を見ればだいたいわかると言われる。自分の趣味や楽しみや健康のために大枚をはたく人は、それらを価値あるものと考えている。しかし自分の生活は質素にして多くの献金をしたり、他の人々に贈り物をする人の場合は、神と人との愛することに価値を見いだしているのだ。

主イエスは、エルサレムの神殿の中で人々に教えられていたとき(35節)、群衆がさいせん箱に金を投げ込んでいる様子を見ておられた。そして弟子たちを呼び寄せ、何が神に喜ばれて価値あることかを教えられたのである。

## 一、全てをご存じの主

神殿には多くの人々が神を礼拝するために集まっていた。そこには金持ちの人もいたし、また貧しい人もいた。それは身なりでもわかっただろうが、主はその人の経済状態も、人となりも全てご存じだった。

私たちは、主イエスが全能の神であることを忘れてはならない。神殿に来ている人々は、主が自分をご覧になっているとは思わずに、あるいは祈りを唱え、賛美をし、律法の朗読を聞き、いけに

えをささげていた。彼らがどういった心で礼拝しているか、主は全てをお見通しだった。

主は今も、私たちの心の状態も経済状態も全てご存じでいらつしやる。家計が苦しいなら、それもお知っておられる。子どもたちがどれくらいのお小遣いをもらっているかもご存じなのだ。その上で、どのような献金をするのかをじっと見ておられる。

## 二、対照的な献金

主は、多くの金持ちがありあまる中からたくさんのお金を投げ入れている姿をご覧になっていた。また、ひとりの貧しいやもめがユダヤのシバ銅貨2つをささげる姿も見えられた。それは、ローマの貨幣では1コドラントで、1アサリオンの4分の1の価値だった。△二羽のすずめは1アサリオンで売られているではないか▽ (マタイ10:29) という主イエスの言葉から考えると、彼女の献金では1羽のすずめも買えないようなわずかなものだ。現代に置き換えてみると、一万円札をひらひらさせながら献金する人と、十円玉2つをささげる人のようなものである。

しかし、全てのことをご存じの主から見ると、どちらの方が価値があったのか。金持ちは、たとい1万円ささげても、家には何千万円以上も残っていただろう。でもやもめには、もはや何も残っていなかった。彼女とその子どもたちは、その日の食事ができなかったかもしれない。彼女は、△その生活費全部を入れた▽のである。

## 三、献金の意義

彼女がこんな大きな犠牲を払ってまで献金したのはなぜなのか。聖書は何の示唆も与えていない。しかし、よほど大きな神への感謝があったことが想像される。また、「今日食べるものがなくても、神は明日の糧を与えて下さる」という、神への絶対的な信頼があったと思われる。

彼女にとって、本当に価値あるものはお金ではなかった。やもめが必死に働いても、入手できるお金はたかが知れている。しかし、生ける神に対して「今日一日守られた」ことを感謝し、「明日も必ず守って下さる」と信頼する心こそ、彼女にとって最も価値あることだった。そして、それでこの日までやってこられた。彼女は、金持ちが決して持つことのできない、崇高な価値観を自分のものとしていたのである。

## 結論

「神の国の価値観」は、一般の価値観とまったく違っている。貨幣経済の中にある現代社会で、金に頼らないで神に頼ることは本当に難しい。しかし、主が言われたように、△神と富とに兼ね仕えることはできない▽ (マタイ6:24)。

あなたは、どんな思いをもって献金しているだろうか。重要なのは、あなたがささげた額ではない。どのような心でささげているかである。神が喜ばれるのは金額ではなく心である。今日一日を感謝し、明日の守りを信じる心こそ、最も価値あるものである。

## 研究資料

## 礼拝の表現としての献金

場所エルサレム神殿の中。ここには13の献金箱が並んでおり、それぞれの使用目的は決まっていたようである。イエスはその献金箱に向かい合って座り、献金をささげる人たちの様子を一部始終見ていた。多くの金持ちが大金を投げ入れていたが、主の目にとまったのは、ひとりの貧しいやもめであった。1シバは当時の通貨の最小単位であった。それを2枚ささげた女性に対して、イエスは最高の賛辞を送った。ここにはイエスに喜ばれるささげ物とは何かが記されている。

この女性は、生ける神を礼拝するために神殿に来ていた。イエスは直前の章において、「わたしの家は、すべての国民の祈の家となえらるべきである」と言われている(11:17)。しかし律法学者、祭司長、長老たちは、神殿を自分たちの収入や社会的立場を維持する商売道具と変えていたのである。彼らは、本来祈りを重んじるべき人たちであるにもかかわらず。

ところがイエスは、神殿をまことの祈りの家として重んじる礼拝者を見つけた。それがこの貧しいやもめであった。彼女は形骸化した神殿礼拝の中で、真実に祈り、主を礼拝し、献金をささげたのである。だからこの2シバは準備してきたものである。ポケットにあるものをささげたのではなく、祈りの形としてささげたのである。

## 神を愛するゆえの犠牲的な献金

先週学んだように、律法の中で一番大切な箇所の一つは、「主なるあなたの神を愛せよ」であった。イエスは、このやもめの姿にこそ、具体的に神を愛する生き方が表されていると、弟子たちに教えられたのだ。やもめは、貧しさ欠乏の中でも、人を恨まず、また自分の境遇をのろわず、ただ主なる神を心から愛した。

この女性はどれだけ聖書を学び、学問的なことを知っていたであろうか。おそらく彼女は物知りではなかっただろう。しかしこのやもめには霊的識別力があつた。自分の欠乏を満たして下さるのは主であると確信していた。

ここで、主イエスご自身こそ愛の犠牲となられたお方であることを覚えたい。この数日後、イエスはご自分の命と体を十字架にささげて下さった(14:15章)。パウロはⅡコリント8:9で、キリストの十字架を一言で言っている。もともとⅡコリント8:9章は、コリント教会への献金の勧めだが、その中でパウロは、主の十字架の犠牲への感謝が献金の原点であると説いている。十字架の愛を知らされたものとして、十字架の価値をどう受けとめているかが献金に現れるのである(参照Ⅰヨハネ3:16)。私たちは十字架をいくらに値づもっているだろうか。

## テキスト

42 貧しいやもめ 「貧しい」は全くの極貧、欠乏を意味する言葉。彼女は必要なものをさえ欠けて

いるところからささげたのである。金持ちの献金は額が多いが余る中からのもの。

シバ ユダヤの銅貨で約1グラム。現在の1円アルミ貨も約1グラム。

コドラント ローマの銅貨で約3グラム半。当時のローマの銭湯の1回の入浴料が1コドラント。

43 ああ貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れたのだ。彼女は、2シバという財産とは呼べない彼女の全財産をささげた。この女性こそ様々な援助を必要としていた。彼女にとって、2シバはその日を送るためになくてはならぬものだったが、それを神にささげてしまった。もちろん彼女が毎日宮に来て、自分の持ち物を毎日全部ささげたのではないだろう。けれどもこのとき、やもめは欠乏の中から自分の最善をささげた。ささげることの総額から言えば、彼女は一番少ない献金をしたのである。しかし視点を変えて見ると、彼女の手元には1円も残っていなかった。自分のために使えるお金はゼロになった。よく言われるように、献金はささげた額よりも、自分の手元に残った額を考へることが大切である。

44 生活費全部 直訳すれば、「彼女の生活すべて」となる。彼女は自分の命を投げ入れたのである。なぜそれができたのか。それは、自分の欠乏を補って下さる、生きて働かれる神を信頼していたからであろう。だからこの箇所は献金の態度だけではなく、主が必要を与えて下さるという信仰が問われているのである。やもめのささげものは、彼女の信仰そのものだった。

●週題 まことの献金  
●聖書 マルコ12:41-44  
●暗唱聖句 あの貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れたのだ。マルコ12:43  
●目標 神の喜ばれるのは、献金の多さではなく、神への感謝と信頼であることを発見する。

導入

今日はイエス様が喜ばれた、一人の女の人の献金についてのお話です。私たちも、礼拝で献金をささげますが、どのようなささげものが神様に喜ばれるのでしょうか。

(起) ストーリーを語る

場所はエルサレムの神殿です。大勢の人たちが集まって礼拝をしています。お金持ちも貧しい人もいます。イエス様は、さいせん箱に向かって座っておられ、みんながどのようなささげものをするのかが黙って見ておられました。

立派な身なりをした、見るからにお金持ちだと分かる人たちがたっぶりささげて、自分ではとても満足している様子です。そこへ一人の、見るからに貧しいやもめ(未亡人)がやってきて、さいせん箱にチャリンと2レプタをささげました。それは、例えばお金持ちが一万円札で献金しているところに、十円玉2つを献金したようなものです。そこでずっと見ておられたイエス様は、わざ

わざ弟子たちを呼び寄せて、「あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ」と言われたのです。皆さんは、変に思いませんか。でもイエス様は、金額の多さを言われたではありません。お金持ちがたくさんささげましたが、それ以上のお金が残されていません。ですから金額は大きくても、ささげたのは持っているうちのほんの少しでした。しかし、この貧しいやもめのささやかな額のささげものは、あとに1円も残らない全財産をささげたものでした。だから「だれよりもたくさん入れたのだ」と言われたのです。

イエス様はこのとき、「あの婦人はその乏しい中から、その生活費全部を入れたからである」とおっしゃいました。イエス様は、彼女がどんなに貧しいのか、どんな気持ちでささげているのか、全部知っておられました。2レプタは、1羽のすずめも買えないようなちっぽけな金額でしたが、神様の目には、生活費全部という立派なささげものでした。しかも、彼女はイヤイヤながらささげたのではなく、感謝して喜んでささげたのです。

明日の生活のことを考えていないのは、おかしいと思われそうですが、当時のイスラエルでは、多くの人々は一日ずつ給料をもらっていたのです。ですから生活費全部ささげるということは、明日は必ず神様が養って下さって、収入があると確信しているということです。そこには、明日からの生活も神様が必ず養って下さるという信仰がうかがえます。この貧しいやもめは、今日一日守られ

たことを感謝し、明日も守って下さる神様に信頼する信仰で、ささげたのです。

(承) 学ぶべき真理

神様は、外側だけを見ておられるのではなく、人の心の中をご覧になります。あなたの心の宝が天国につながっているのか、地上の何かにくっついていないのか、お見通しです。

神様は、皆さんに何かしてもらったり、ささげてもらわなければならない方ではありません。何でも持ちで、何でもできる方です。また奉仕や献金とひきかえて何かをして下さる方ではありません。いつも最善の恵みを与えて下さる方です。ですから神様が喜ばれるのは、金額の多さではなく、神様に対する感謝と信頼なのです。

(転) 生活への適用

皆さんは、この後すぐに礼拝献金をささげるチャンスがあります。今まではどんな気持ちでささげていましたか。今日のお話は、神様がご覧になるのは金額の多さでなく、ささげる人がどんな感謝と信頼をもってささげているかでした。たとえ金額が少なくても、感謝と真心を込めておささげしましょう。毎週、新しい感謝を込めて献金するなら、神様はどんなにお喜びになるでしょう。

結論

献金はもちろん、聖書を読むこと、賛美すること、お祈りすることも、いやいやしていたのでは神様に喜ばれません。神様が喜ばれるのは、神様に対する感謝と信頼なのです。

ワーク A

●用意するもの 紙芝居「二つのレプタ」  
(キリスト教視聴覚センター)

●導入のヒント

みんなは毎週神様へのささげもの(献金)をしていますね。でもささげる時、どんな心でおささげしていますか。「もったいないなあ」とか、「これでカードを買いたいなあ」とか、思っていますか。ある日、イエス様が神殿に行かれたとき、一人の女の人のささげ物を見られました。

●ワーク 女の人のささげもの

レプタ2枚はこの人の持っていた全てであったことを復習しながら、女の人と銅貨2つに色をぬってください。

ワーク B

●質問1 多くの金持ちと貧しい女性との違いを見つけてみましょう。「ささげる心」の違いを知り、神の喜ばれる献げ物について話し合ってみましょう。

●質問2 貧しい女性がなぜ全てをささげることができたのか、その信仰の深さを知りましょう。

●質問3 今日の暗唱聖句です。「だれよりも」神を愛し、神に信頼した女性にならなさい。

●賛美歌 「まことのこめ」(こどもさんびか116)

●今日のお祈り 「神様、いつも私たちを守って下さり、必要なものを下さるから感謝します。私が献金をする時、心も一緒にささげることができ、ますように助けて下さい。」

ワーク C

●献金の基本的な姿勢を教えます。義務でも強制でもなく、他人との比較競争でもなく、自発的な神様への感謝の表れが神様へのささげ物であること(IIコリント9:7)を伝えます。

●「たくさん」とは金額の多少ではありません。あえて数字をあげるなら、金額という数字ではなく、自分の持っているものの何パーセントをささげたか、という割合の数字が大切です。

●マラキ3:10の「十分の一をもつてわたしを試みよ」という聖句は、神様が幾倍もの祝福をもつてくださる方であることを示します。神様は人間が地上の物質に執着するのではなく、天に視点を移して祝福を受け続けるよう願われるのです。

ワーク D

●質問1 人の目で観察できることを越えて、主イエスは生活背景や心の思いを見ておられることを発見する。

●質問2 献金は金額の大きさではないこと。全部ささげたことを強調しすぎると、同じように全部ささげないことに罪悪感を持つかもしれないので、精一杯の感謝の表れとしてのささげものであることを説明して下さい。

●質問3 金額でなく心、ささげる思いを見ておられる。神様への信頼(信仰)の表れを考えると、ことができる良いでしょう。

●質問4 献金に対する不満、無関心、無知を知

り、意味のある献金を心からささげることができるようになって下さい。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 お金の使い方、その人の価値観がわかると言われますが、そのことについてあなたはどのように思いますか。

2 ここに出てくる一人の貧しいやもめが一番大切にしていたことは何だったのでしょうか。

3 神様に献金することで、この貧しいやもめは何を示しているのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 私たちは、どんなことにお金を用いているのでしょうか。

2 私たちが、日曜日ごとに献金しているのは、何のためですか。

3 私たちは、神様から受けている恵みについて、どれだけ感謝しているのでしょうか。

●話し合ってみよう

1 私たちが形だけで、心のこもらない献金を神様にしたら、神様は喜ばれるでしょうか。

2 神様への献金の額を感謝の思いをこめて決めていたのでしょうか。そうでなかったとしたら、これからどうすべきでしょうか。

3 私たちは、このひとりの貧しいやもめと同じように、「神様が養って下さる」と信頼しているのでしょうか。



週 題 良きサマリヤ人  
聖 書 ルカ10・25～37

## 序論

今週から七週間は、ルカ福音書にそって「神の国の価値観」を学ぶ。まず一回目は有名な「良きサマリヤ人」のたとえ話である。この話の背景には、先々週マルコ福音書に出てきた「一番重要な命令」についての問答があることに注意したい。マルコでは、主イエスが語られた神と隣人を愛することが、ルカでは、律法学者によって述べられている。さらに、学者は人何をしだら永遠の生命が受けられましようかと尋ね、主は人それとおりの行いなさい。そうすれば、いのちが得られるVと答えておられる。律法学者は知っていた。しかしそれを行うことができるかどうかがこの問題なのである。この問題を、人隣り人とはだれのことですかVという、彼のさらなる問いを軸にして考えてみよう。

## 一、隣人とは

△ある人Vがユダヤ人であることは論をまたない。彼は強盗に襲われ、半殺しの状態で道端にころがされていた。そこに祭司とレビ人とがさしかかった。二人はユダヤ人社会で尊敬されている人々であって、襲われたユダヤ人の同胞だった。しかし、二人とも道の△向こう側Vを通過して去って

いったのである。

律法によると、彼らは死体にふれて身を汚してはならなかった(レビ21:1)。けれど、襲われた人が死んでいるかどうかはふれてみなければわからない。それにたとい死んでいたにしても、身を水にすすぐならばその汚れは取り去られる(レビ22:6)。彼らはその手間を惜しんだのだ。彼らは律法に精通していながら、死にそうになっている人を見ても、助けようとはしなかった。同じユダヤ人同士であったとしても、彼らは襲われた人を隣人として愛さなかったことは明白である。本当の隣人であるなら、自分が汚れたとしても、このけが人を助けたであらう。

## 二、隣人となる

彼ら二人と対照的なのは、次に登場するサマリヤ人である。ユダヤ人は宗教的な理由でサマリヤ人を汚れた者と見下しており、彼らを自分たちの隣人だとは思ってもしなかった。サマリヤ人もユダヤ人を敵視していた。けれどもそのサマリヤ人が、襲われたユダヤ人の隣人になったのである。彼は、当時医薬品として用いられていたオリブ油とぶどう酒で傷口を消毒し、包帯をまいてやった。さらに、自分が乗っていた家畜にこのけが人を乗せて宿屋に連れていった。彼は自分にできる限りの犠牲を払って助け出したのだ。もともとは敵対していた者が、隣人となったことに注目してほしい。彼はその後、宿屋の主人にこのユダヤ人を委ねて、自分の旅を続けた。

## 三、たとえ話の意味

このたとえ話は様々な適用できる。自分はこのサマリヤ人のように、犠牲を払ってでも苦しむ人を助けているだろうか。たとい敵のような人であっても、その人の隣人となっているだろうか。たとい自分が汚れるようなことがあっても、人を助けることができるだろうか。そのように自分に問うてみよう。

また、自分がどんなに犠牲を払っても、できることには限界があることを知ろう。だからこそ、宿屋の主人である主イエスのもとに隣人を連れてきて、主に救っていただくのだ。主に委ねることの大切さをここから学び取ることができる。

さらに、主イエスは、罪ゆえに苦しんでいた自分を、このサマリヤ人のように救い出して下さったことに気づこう。まず最初に主が私たちの隣人となって下さったからこそ、私たちも隣人となれるのである。

## 結論

主は△人それとおりの行いなさい。そうすれば、いのちが得られるVと言われた。そしてサマリヤ人のように自ら私たちに近付き、自分の命を犠牲にしてまで私たちを救って下さった。主こそ、私たちの隣人となられた方だ。それならば、私たちも喜んで隣人となるうではないか。もちろん私たちができることには限界があるだろう。でも自分にできる限りのことをして隣人を主のもとに連れてくることを、主は望んでおられる。

## 研究資料

(語句の後のカタカナはギリシャ語)

この箇所は二つの部分によって構成されている(25～28、29～37)。キーワードは、行(ポイエー)10・25、28、37(2回)と、隣人(プレシオン)10・27、29、36とである。律法学者は永遠の生命について質問したが、イエスは律法に基づいて答えさせた。そして手本とすべきサマリヤ人の注釈的なたとえへと続いている。たとえの内容は、隣人への責任は限定された人々ではなく、全ての人間を含むことを示している。全ての民族を二様に扱う側面は、イエスの倫理の鍵となる部分である。

## テキスト

25 永遠の生命 以下を参照する(ルカ18・18、30、使徒13・46、48)。彼の質問は良いものであるが、救いを獲得する行為と混同すべきではない(参照使徒2・37、16・30)。永遠の生命は、救われた存在と同義であり、神の国に入ることでもある(参照18・18と18・24)。そしてこれは神からの贈り物である。

26 律法にはなんと書いてあるか 律法学者が答えるべき内容が旧約聖書に発見されることを示した質問(参照18・18と23)。律法の教えは決定的。永遠の生命に入る道は、恵みにより、愛によって働く信仰のみ(ガラテヤ5・6)。

27 律法学者の答えは旧約の二つの部分から構成

されている。最初は「シエマ」と呼ばれる申命記6・5。第二の部分はレビ記19・18(参照ローマ13・9、ガラテヤ5・14、ヤコブ2・8)。この二つの要約は、たとえ話に表されるイエスの教えの基本にある(ルカ15・18、21)。たいていのユダヤ人にとって隣人とは他のユダヤ人であって、サマリヤ人や異邦人ではなかった。

28 そのとおり行いなさい この動詞は、現在時制の命令形で、信仰者の責任が絶え間のないものであることを強調している(参照9・23)。

29 自分の立場を弁護しようと思つて 直訳すると「自分自身を義とすることを欲して」となる。彼は10・25にある否定的態度と同様に、すでに間違っている。すなわち彼は自分自身の言葉が包含している意味を理解していない。それで、「隣人とはだれか」と尋ねた。

30 ある人が ルカはたとえ話の導入だけでこの表現を用いている(参照14・16、15・11、16・1、19、19・12、20・9)。隣人を語るのに、民族の枠は不要。エルサレムからエリツまでは、約28キロ。標高差が千メートルもある岩地の下り道。

31 祭司 彼はエルサレム神殿での奉仕を終えて家に帰る途中で、半殺しにされた人に出会った。祭司は律法に精通している。ここで適用されるべき教えは、申命記22・4にある配慮の規定である。しかし彼は倒れている人を見ただで、反対側を通り過ぎていった。彼はレビ記21・1以下にある葬儀の規定を考えたのであろうか。

32 レビ人 祭司同様、神殿での奉仕を終えて家

に帰る途中だったと思われる。彼もまた宗教的有力量であり、必要ある人を助けるよう関心を持つことが期待されていた。しかし彼も儀式的純潔にしか視点がなかった。

33 サマリヤ人 祭司、レビ人、律法学者が軽蔑した民族であった。ユダヤ人は彼らとの接触を避けた(ヨハネ4・9)。見る(イドーン)ということとは、31、32と全く同じ言葉。気の毒に思い(エスプランクニスセ)と言う表現は、隣人となる存在の本質を示している(参照ルカ7・13、15・20)。

34 ここでは6つのあわれみに満ちた行為が述べられている。オリブ油は痛み止め。ぶどう酒は傷口を消毒するため。自分の家畜に乗せるとは、サマリヤ人は歩かなければならない事を意味する。

35 翌日 これはサマリヤ人が時間を犠牲にしたことを意味する。デナリ2つとは、当時の労働者2日分の労賃である(参照マタイ20・2、9、13)。まさに経済的犠牲を払っている。そしてさらなる費用の犠牲を覚悟して、彼は旅を続ける。

36 だが隣り人になったと思つたか 隣り人となつた」という表現が重要である。同情と応答と愛が隣り人を作る。隣り人は限定できない。

37 その人に慈悲深い行いをした人です 明白な答えをしてはいるが、自分自身がサマリヤ人のように生きているとはいえない。彼はあわれみを示すことを自らの口で答えているが、これこそ手本とすべきサマリヤ人の行為の鍵であった。しなさい(ポイエー)との言葉が28節を想起させる。

- 週題 良きサマリヤ人
- 聖書 ルカ10・25-37
- 暗唱聖句 そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる。  
ルカ10・28
- 目標 困っている人に良くしてあげるのが隣人であることを発見する。

導入

皆さんは、先々週のお話を覚えていますか。神様と人を愛することが、最も大切なまいしめですというお話でした。イエス様はたとえ話がとても上手ですが、今日はその中でも最も有名な「良きサマリヤ人」のたとえ話です。

(起) ストーリーを語る

まだまだ法律学者がやって来ましたが、今度の人は「何をしたら、永遠の生命を受けられますか」と質問します。イエス様は答える前に、「あなたは律法をどんなふうに読んでいますか」と尋ねられました。すると、この法律学者はよく知っていて、「神様と人を心から愛するようにと書いてあります」と答えました。その答えを聞かれたイエス様は、「あなたの答えは正しい。その通り行いなさい。そうしたら永遠の命が得られます」とおっしゃったのです。すると「では、私の隣人とはだれですか」と、法律学者が重ねて尋ねてきたので、イエス様はここで非常に分かりやすいたとえ話をされました。

あるユダヤ人が、旅の途中で強盗に襲われて持ち物を奪われ、死にそうになり、道端に倒れていました。そこに神殿で御用をする祭司が、通りかかりました。しかし祭司は死体に触れてはならないからか、道の向う側を通り過ぎて行ってしまいました。次に、レビ人という、やはり神殿の御用をする人が来ましたが、この人も前の祭司と同じように、死体に触れてはならないからか、見て見ぬ振りをして道の向う側を通って行ってしまいました。死体に触れてもきよめの儀式をすればよいのに、死体かどうかとも確かめずに向こう側を通って行ってしまったこの二人は、ユダヤ人でした。そこに普段はユダヤ人が見下しているサマリヤ人が通りかかりました。この人は、すぐにかわいそうに思い、そばに近よってオリブ油とぶどう酒で手当をしたのです。さらに、自分が乗っていた家畜にその人を乗せて宿屋まで連れて行きました。次の日、このサマリヤ人はケガをした人の宿泊料を払い、「もっと必要ならわたしが帰りに払います」と言って旅立っていきました。

そこでイエス様は、「この二人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねられました。法律学者はすぐに「その親切な事をした人です」と答えました。するとイエス様は、「それが分かったのなら、あなたも行って同じようにしなさい」と命じられたのです。これを聞いた法律学者は、もうそれ以上何も質問できませんでした。

(承) 学ぶべき真理

神様を知っていたら、隣人の苦しみを知らないでいいでしょうか。自分が汚れないために、汚れたものに手を出さない人と、自分はいつでもきよくされるから、汚れたことに手を差し伸べる人、どちらが本当にきよいでしょうか。

皆さんにも答が分かったでしょう。自分の損を顧みないで面倒を引き受けたサマリヤ人は、本当にきよい隣人です。隣人になるということは、助けの必要な人に、手を差し出すことです。

しかし、私たちにできることには限りがあります。ですから、一番頼りになるイエス様の所にお連れすることが最も良い隣人になる方法です。

(転) 生活への適用

お医者さんが、手が汚れるから遠巻きに見てるだけで、傷に触れなかったら、傷はなおりません。手が汚れても後でよくすればいいから、傷に触れるところに、治療があります。

あなたのまわりに、困って助けを求めているお年寄りや病気の人はいませんか。学校でいじめられてひとりぼっちの人、のけ者にされている人はいませんか。皆さんは、その人の友だちになってあげていきますか。それとも遠巻きに見て見ぬふりをして、通り過ぎていきますか。

結論

神様を信じる人が隣人を知らないのでは、話になりません。最も小さい人に仕えましょう。弱い人や困っている人を見ても見ぬふりをするのはなく、そのような人に良くしてあげることが隣人になることなのです。

ワーク A

●暗唱聖句 (8月26日～9月23日)

天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。

(ルカ12・33)

●用意するもの 紙芝居「やさしいサマリヤ人」(キリスト教視聴覚センター)

●導入のヒント

「隣人」って、だれのことかな。隣のおうちの人? 幼稚園の隣の席の友だち? それとも、だれか困っている人? イエス様のお話を聞いてみましょうね。

●ワーク 絵を見て適用を考えましょう。

毎日の生活の中でありそうな場面です。「隣の人を愛する」ことを具体的に考えましょう。

ワーク B

●質問1 今日のお話を思い出しつつ、パズルをときます。問題を考えることにその人の思い、行動と一緒に深く考え、話し合いましょう。

●質問2 「本当の隣人」に自分になっていくか、なれるのか、具体的に考えてみましょう。イエス様こそ「私の本当の隣人」であることを知る時、私も愛の人になれることを知りましょう。

●賛美歌 「イエスさまはイエスさまは」

(こどもさんびか106番)

●今日のお祈り 「神様、苦手なお友だちでも、その人を助けてあげることができまうように、私を本当の隣人にして下さい。」

ワーク C

●「何をしたら永遠の生命を受けられるか」との問いに対して、イエス様は「全心全霊をもって神を愛せよ」、また「自分を愛するように隣人を愛せよ」と、律法のエキスをもって答えられました。

その隣人とはだれであるかを、イエス様はこのたとえによって教えられ、また同じように行動するようになると導いておられます。

●助けを求められたときに、逃げてしまったことではないでしょうか。また、自分が本当に困ったときに助けてもらった経験がありますか。そのような体験談を話し合うことによって、現実感がわいてくると思います。

ワーク D

●質問1 聖書の記述に基づいて、その場面に共に立ち会って下さい。祭司やレビ人の事情は多少の説明を加えて下さい。彼らの行動を他人事のようには思い、ただの悪者にしてしまわないように。自分だったらどうするかが一番大切でう。

●質問2 サマリヤ人がどこまで何をしたのか。彼の立場を含めて、自分ができるかどうか。そんなことを、助けてもらった人の気持ちになって考えてみましょう。

●質問3 自分の実生活の中で考え、決心して祈れるように。主イエスの贖いの恵みにあずかっていることを土台に考えるとよいでしょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 強盗に襲われ、半殺しになったユダヤ人のかたわらを通ったのは、祭司とレビ人とサマリヤ人でした。そのうちのだれが、襲われた人の隣人になりましたか。

2 なぜ、他の人は、半殺しになった人の隣人になれなかったのでしょうか。

●自分に当てはめてみよう

1 自分が傷ついているとき、困っているとき、悩んでいるとき、悲しいとき、あなたはどのようにしてほしいですか。

2 あなたのまわりで、そのように傷ついている人や困っている人がいたら、あなたはどのようにしますか。(好きな人の場合ときらいな人の場合)。

3 イエス様が語られた隣人とは、私たちの回りのだれのことでしょうか。

●話し合ってみよう

1 永遠の生命を得るためには、どうしたらよいとイエス様は言われましたか(答「神と隣人を愛すること」)。

2 私たちは、そのこと(1の答え)を本当に実行することができるでしょうか。できないとしたら、どうすればよいでしょうか。

3 イエス様だったら、私たちが苦しんでいるとき、悩んでいるとき、どうして下さると思いますか。



週題 天に宝をたくわえる  
聖書 ルカ12・13～34

## 序論

先々週の「まことの献金」で学んだように、お金の用い方は、その人の価値観に大きく左右される。今週の手紙で主イエスは、遺産分配の調停者になってくれという要請を受けたことをきっかけにして、第一にすべきものはお金ではないことを教えられている。前半のたとえ話は、後半の説教と密接に結びついている点に注意したい。

## 一、地上の富に価値を置く人

たとえ話に登場する金持ちが、一般の人々から見れば成功者だった。彼は、自分の魂に、人おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよと言ったのである。しかし神は彼に人あなただけの魂は今夜のうちにも取り去られる。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのかと仰せられた。彼の作物も倉もそして魂も、本当は彼自身のものではなく、神のものであった。それを悟っていなかったところに、この金持ちの悲劇がある。人自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである。主の警告に耳を傾けよう。地上の富は永遠のいのちをもたらさない。富や財産は、人間にとって第一に価値あるものではないのだ。

## 二、御国に価値を置く人

以上のたとえ話を群衆に対して話された主は、その後、弟子たちに向かってさらに深い真理を語られた。弟子たちは金持ちではなかったが、衣食のことで思いわずらっていたからであろう。人間が用意せねばならない衣食よりも、神が与えてくださっている命やからだのほうがはるかにまっさている。律法では汚れた動物の一つであったカラスであっても（ルカ11・15）、人神は彼らを養っていて下さる。カラスはあの金持ちの農夫のように、安心を得るために必死に働いてはいない。しかし神が養っておられる。人は、どんなに思いわずらって財産をたくわえたとしても、自分の寿命を延ばすことはできないのだ。

野の花も同じである。紡ぎもせず、織りもしないけれども、その美しさはソロモンが大金をはたいて作ったきらびやかな王服にはるかにまさっている。たった一日だけの命しかない野の花であっても主がこれほど装って下さるのなら、人間にはそれ以上よくして下さらないはずであろうか。重要なのは、人御国を求めることである。この地上の富よりも、天の御国に入るほうがずっと価値があるのだ。地上でどんなに豪華に食み飲みしても、永遠に死んでしまふなら何の価値があるうか。地上のいのちよりも、永遠のいのちのほうがはるかにすぐれていることを知るべきである。

## 三、神の前に富む人

金持ちの農夫は、人自分のために宝を積んで神

## 研究資料

イエスは迫害下における神への信頼の必要性を弟子に語った後に、お金が神へのトータルな献身の障害物となり得ることを教えている。13～21節において、イエスは相続の口論を用いて、富の魅力的な危険性について教示している。自分自身のためにだけに蓄える財産は、はかない生活を人におくらせる。天国への入国に際して、神の前にスーツケースといった富を提示することはできない。神は別の最優先事項を求められる。イエスは、人が神に対して富むようになるために全てを語る。最も有効な生き方を考えるならば、長期的な見方が重要である。富の追及は自分に向けられる時、危険な娯楽となり、貪欲な性質を持つに至ることを弟子は悟るべきである。自分の持つ富は神の前には貧困そのものである。富からの慰めと物質主義に由来する力は、つかの間と偽りの安全だけを供給し、無駄な努力に終わり、神の裁きが待っている。物惜しみせずさげられた富だけが神の賞賛を受ける（1テモテ6・17～19）。

22～34節では、弟子の生活に関する基本的な手引きが一瞥できる。イエスは弟子たちに、心配は信仰者の特徴ではないことを思い起こさせる。なぜならそれは神に対する間違った見方の結果であるから。創造の神の摂理に対する適切な見方は、正しい視点を指し示す。神にとって、被造物世界の中で一番大切なのは人間である。神は私たちが人

間の基本的必要を知っておられる。日々神の支配を求め、神に信頼する者こそ主の弟子である。

## テキスト

13 遺産 旧約の遺産相続に関する規定は、申命記21・15～17、民数記27・1～11、36・7～9に見られる。それゆえ律法の教師ラビは、遺産相続の調停にかかわることがしばしばあった。

14 だがわたしを立てたのか これはイエスが遺産相続などを決定する法的立場を持っていないことを意味するが、それ以上に罪人の永遠の救いにかかわるお方であることを暗示している。

15 警戒しなさい イエスは財産への過度な関心について警告する。その警告は全ての人々に与えられている。弟子たちはお金のみならず、あらゆる種類の貪欲について警告されている。すなわちもっと持ちたいという欲望。貪欲はその人の生涯にゆがみやねじれを生み出す。なぜならいのちの意味は物ではなく、神とそのみこころに見出されるからである。貪欲は偶像礼拝である（エペソ5・5、コロサイ3・5）。現代日本は、性と金が偶像。いのちは財産の中にあるのではない。

16 一つの譬 エルサレムへの旅の途中で話された、財産に関する四部分の一つ（12・22～34、14・12～33、16・1～13、16・19～31）。豊作であったとは、その年の収穫が例外的であり、彼に非常な益をもたらしたことを意味する。

17 この幸運な男はシレンマを抱えている。彼は極自然に収穫物を保存しようとしているが、問題

に対して富まない者Vだった。自分の財産を増やすことには心を向けていたが、神や永遠のいのちや、さらには自分の周囲にいる貧しい人々については全く関心のない人だった。しかし、彼と対照的に、神の前に富む人もいる。それはどんな人なのか。主は、人自分の持ち物を売って、施しなさいVと命じられた。そうする人こそが、人盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえるV人であり、神の前に富む人である。

ただし、施しそのものが永遠のいのちを得る手段と誤解してはならない。人御国を求めるVがゆえにこそ、自分のために宝を積むのではなく、人々に与えるのである。地上ではなく、天の御国に価値を置くという価値観こそが重要なのだ。

## 結論

衣食のことを無視してはこの地上で生きていくことはできない。しかしそのために思いわずらっては寿命を縮めるだけである。どんなに苦勞して地上の宝を増し加えても、いつかは死を迎える。だれにでも必ずその時があるのだから、そのために準備することが不可欠だ。それが人御国を求めるVことである。

主イエスは、御国を求めるならば、生活に必要なすべてのものは人添えて与えられるVと約束された。御国とは、神と人を愛するところに実現する。神と人とを愛して生きていくなら、地上の生活も守られ、永遠のいのちも与えられるのだ。

はその視点にある。17～19節には、何度も「わたしの」と言う語句が繰り返されている。わたしの作物。わたしの倉。自分（わたし）の魂。これらは、排他的な自己中心性を示している。彼は自作自演の世界に酔いしれている。働いてくれた労働者のためにという発想は微塵もない。

18～19 倉を取りこわし 彼は貯蔵庫の拡張に取り掛かる。そして彼が出した結論は、総合的レジャーと放縦に生きることであった。彼の人生の哲学は、「食え、飲め、楽しめ」と言う快楽主義。また彼は自分の魂を自らが所有していると言つ大いなる錯覚に陥っている。財産を多く所有すること、地上で長生きすることは全く無関係である。そして何よりも彼には、収穫を与えて下さった神に対する感謝が欠落している。

20 愚かな者よ この男が熱望していた安逸な日々は、彼のいのちを左右する権威を持つておられるお方によって思いもよらなく中断させられた。愚かな者とは、神なしで生きる者、或いは起こり得る破滅に対して知恵のない者のことを言う（ヨブ記31・24～28、詩篇14・1、53・1、伝道の書2・1～11）。死は、神の主権的な召しである。魂の損失は、全ての損害である。富だけの人生は、神の前に何の功績をももたらさない。

21 神に対して富まない このたとえは、計画することや富そのものを否定しているのではない。むしろイエスは富を持つ人に、また自己に対して総合的な方向付けをする人に、苦言を呈しているのだ。12・33にある生き方が大切。

●週題 天に宝をたくわえる

●聖書 ルカ12・13～34

●暗唱聖句 天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。

●目標 地上ではなく、天に宝をたくわえることが神の求めておられる生き方であることを発見する。

●目録 地上ではなく、天に宝をたくわえることが神の求めておられる生き方であることを発見する。

#### 導入

「人のいのちは財産にあるのではない」と、イエス様は教えて下さっています。地上の宝より、もっと大切なものがあります。それはいったい何か、イエス様のお話を聞いてみましょう。

#### (起) ストーリーを語る

イエス様のところに、遺産の相続で兄弟ともめて、財産を分けるように説得してほしいという人がやってきました。そこでイエス様は、貪欲に注意するように、たとえ話を始められました。

あるお金持ちがいました。その人の畑が豊作となり、何年も暮らしていける食糧が収穫でき、まだお金もたっぷりありました。そこで彼は、それを蓄えておく新しい倉を建てたのです。その人は、もう何も心配はないから、これからは遊び暮らすと思うようになってしまいました。しかし神様は、「お前は本当の愚か者だ。今夜お前が死んでしまったら、お前のお金や食糧はだれのものになるのか」と言われたのです。地上の富には永

遠の価値はないのです。死後にお金や食糧を持って行くことはできません。自分のために蓄えても、神の前に富まないと何の価値もないのです。この後、イエス様は弟子たちに向かって話されました。イエス様の弟子たちは、金持ちではありませんでしたから、食べることも着ることも心配して

いたようです。しかし、神様が与えられた命と体は、どんな食べ物や着物よりはるかに大切です。空を見上げて、からすが必死で働いている姿を見たことがあります。しかしカラスは元気で、神様が養っておられるからです。人間はカラスよりもはるかに大切ですから、神様は必ず養って下さいます。

私たちがどんなに心配して働き、貯め込んだとしても、それで寿命がのびるわけではありませんね。自分の力のわずかなこと、神様の力の偉大なことに目を向けて、心配しないで神様にまかせたら良いのです。

今度は目を足元にむけ、野の花を見ましょう。野の花は、人間が作り出すどんな色よりもきれいで、良い香りがします。でも花は自分で縫ったり編んだりすることはできません。ソロモン王でさえ、こんなにすばらしい王服を作れませんでした。ですから、神様は人間にそれ以上良くしてくださらないわけがありません。

イエス様は、この世の命のことばかりを心配しないで、全てを知っておられる神様にお任せなさいと言われます。私たちが愛しておられる神様は、私たちに必要な物をみんなご存じです。神様

に喜ばれることを第一にするなら、着物も食べ物も与えられ、天に宝を積むことができるのです。

#### (承) 学ぶべき真理

農夫は、地上の命を守るための宝はもっていましたが、それ以上に大切な物があるなんて知りませんでした。でもイエス様は、天国に積む別の宝があることを教えて下さいました。「神に対して富む」とは、天国に貯金することです。それは、自分のために地上の持ち物を増やして満足することなく、他の人のために施すこと、犠牲を払うことです。神と人を愛する生活は、盗まれたり、虫に食われない天に宝を積むことになります。

#### (転) 生活への適用

あなたの宝物は何ですか。ペットやゲーム、アイドルグッズ、それともお金かな。あれもこれもわたしのもの、だれにも貸さない、あげないと言って、一人占めする欲張りな人はいませんか。私たちの持ち物は全部、神様からの預かり物です。今は預かっていますが、神様にお返しする日がきます。だれかを助けるために、自分の物を握っている手を開きましょう。今欲張って、天国で貧乏な人になってはなんにもなりません。

#### 結論

イエス様は、欲深いことも心配することも愚かであると教えて下さいました。自分で自分のことを心配する以上に、神様が心配して下さいます。今の命も、永遠の命も、どちらも守って下さる神様に信頼しましょう。神と人を愛して犠牲を払い、天に宝をいっぱい積む人になりましょう。

## ワーク A

### 導入のヒント

みんなの宝物は何ですか。いろんな宝物がありますね。でも、次々にあれもこれもほしいと思うことがないでしょうか。イエス様は、「地上でたくさんものを持つより、天に宝をたくわえなさい」といわれました。どういうことでしょうか。

### ワーク 天に宝をつもうゲーム

「神を信じて生きること」を喜びの顔であらわしました。おこっている顔は拾わずに、喜びの顔を、金魚すくいのようにすくっていきましょう。たくさん拾えた人が勝ち。大きめの箱を用意して下さい。難しくしたいときは箱なしでします。

## ワーク B

●質問1 金持ちの農夫が、「自分のためにのみ宝をつんだ」ことに対する神様のおしかりを学びます。「取り去られる」に注目しよう。

●質問2 イエス様のたとえ話に出る「カラス」と「野の花」を考え、神の偉大さと、地上の富のみを求める浅薄さを知りましょう。

●質問3 暗唱聖句を書きます。宝（お金や持ち物だけでなく、私の命も才能も全て）を神と人に喜ばれる「永遠の生き方」に使えますように。

●賛美歌 ●「すべてはイエスさまのもの」

(ふくいん子どもさんびか80番)

●今日のお祈り 「神様、私のものは全部、神様のものです。神様と人に喜ばれるために使います。」

## ワーク C

●まず1と2の質問で、「天」というところに宝をたくわえるべきことに目をためさせます。3の質問では、その理由を御言葉から確認させます。

●このワークでは、「天に宝をたくわえる」ということが実際にはどういうことか、どういう行動か、ということには触れていません。これに加えるにはスペースが足りませんでした。ですから、もし時間に余裕があり、また生徒ができそうだったら、お祈りをする前に、この事を話し合ってお考えみるのが良いかと思えます。

## ワーク D

●質問1 金持ちのしたことは、普通の人なら皆考えることです。そして命まで自由になるものと錯覚してしまいます。でも、主の主権の中での恵みと守りであることを知らねばなりません。

●質問2 カラスや野の花をかえりみられる神は、人にはなおさらよくして下さいます。思い悩んでも人にはできないことを悟り、備えて下さる神を求めるように。御国を求めることは次の質問で考えましょう。

●質問3 宝を天に積むことは、地上の宝に心を奪われないで、神と人への愛を表すことです。

●質問4 全て添えて与えられる。御国を求めることの意味にふれ、具体的なことを考えます。

## 中高校へのヒント

### 考えてみよう

1 神様に「愚か者」と言われた金持ちのことが話されていますが、いったい何が愚かだったのでしょうか（次の中から一つ選んでください）。  
①豊作になったので、大きな倉に収穫した穀物を蓄えたこと。  
②たくさん働いて、たくさん収穫を得たこと。  
③穀物や食料をたくさん得ることが、いのちを保証すると考えたこと。

3 この愚かな金持ちは、一般の人々からはどのような見られていたでしょうか。  
●自分に当てはめてみよう

1 私たちの持っているものは、全て自分のものでしょうか。それとも神のものでしょうか。

2 たくさんものを持つていることが、長く生きる保証となるでしょうか。

3 地上のものをたくさん得ることが、永遠のいのちを保証するでしょうか。

### 話し合ってみよう

1 生活の中で、衣食のことを悩むことはないでしょうか。

2 神様が私たちのことを養っていて下さることを信じていることができますか。

3 天に宝をつむ生き方とは、どんな生き方でしょうか。



週 題 招いておられる神  
聖 書 ルカ14・15～24

## 序論

今週のテキストにも、神の国の価値観がはっきりと示されている。神はどんな人をも招いておられるが、その招きに価値を見いださず、断る人があるのも事実だ。招きを断るのは、別のものに価値を置いているからだろう。それは何だろうか。ルカ14章は、主イエスがパリサイ人によって食事の席に招かれた記事から始まっている。その列席者の一人が人神の国で食事をする人は、さいわいですゝと言ったことをきっかけとして、主はたとえ話をなさったのである。

## 一、初めに招かれていた客

当時は、大切な宴会には二度、招きの知らせをしていただ。そのとき用事がある場合は一度目の招待で断るのが通例であり、「二度目の招きを断るのは、侮辱であって、アラブ諸部族の間では宣戦布告にひとしい」(『新聖書注解』新約一巻三七九頁)。ところが、晩餐会に招かれていた人々が異口同音に断り始めたというのである。

第一の人は、人土地を買いましたので、行って見なければなりません」と言った。買う決心をする前に土地を見ていたはずであり、買ったときには急いで見に行く必要はなかったはずである。第

二の人は、人五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところですゝと理由を述べる。買う前に調べなかったのだろうか。第三の人は、人妻をめぐりましたので、参ることはできません」と断った。確かに律法は、結婚後一年間は戦争に行かなくてよいと定めているが(申命記24・5)、晩餐会に行くことまで禁じてはいない。

土地や家畜を買え、結婚できるということは、一般の常識では「さいわいな人」であろう。しかし、彼らは招いてくれた人の好意を無視し、無礼な態度を取った。彼らは晩餐会に出席することに価値を見いださなかったのである。

## 二、後で招かれた客

「ごちそうを用意していた主人は当然のことながらおこった。そして急いで人貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人などゝ連れてくるようしるべに命じた。一般の常識ではさいわいとは言えない人々である。それでもまだ席が残っているの、人道やかきねのあたりに出て行ってゝ、無理やりにでもひっぱってこいとさえ命令する。そのあたりには、社会的な落後者や異邦人たちが住んでいた。彼らも一般的なしあわせとは縁遠い人々であった。

以上のような人々は、晩餐会に招かれたことなどそれまで一度もなかったに違いない。だから招待されてもすんなりと応じることが難しかったので、主人はしもべに人無理やりにひっぱってきなさい」と命じたのだろう。主人は、これらの人々

が自分と一緒に喜びを分かち合ってくれることを心から願っていた。この晩餐会に価値を見いだしてほしかったのである。

## 三、たとえ話の意味

最初に招かれた人々とは、神から恵みの契約を与えられたユダヤ人のことである。彼らは神の選民でありアブラハムの子孫であることを誇りとしていた。確かに神は彼らを招かれていた。けれども、契約を忘れて歩んでいる彼らに、神が預言者たちを遣わして、再び神の招きを伝えたとき、彼らはそれを断ったのである。

後で招かれた人々は、パリサイ人から低く見られていた罪人、取税人、遊女などであり、また異邦人をも意味する。彼らは、自分たちが招きにふさわしい者でないことを自覚していたが、ただ神の恵みのゆえに人神の国で食事をするゝことができるようになった。彼らは、神の国の宴会を価値あるものと考え、招きにこたえたのである。現在の私たちも同じように招かれている。

## 結論

貧しい者でも、障害がある者でも、私たちは皆等しく、神様に招かれている。しかし、その招きに価値を置かない人もいるのだ。教会に行くことよりも、遊びや塾に熱心になってしまわないように注意しよう。本当にさいわいなのは、神の招きにこたえて晩餐会に出席し、永遠に神と共にすゝ人々なのである。

## 研究資料

この箇所は、失われたものが神に立ち返る機会と神の恵みについて、生き生きと描写している。ユダヤ人指導者たちは、神の祝福に関する家系にいたるが、招きにはこたえなかった。イエスは勧めたが、彼らは拒否した。彼らは、貧しく必要があつてもユダヤ人でない人々とは一緒にテーブルにつかない。このたとえ話は、そのような態度を神は望まれないことを明確にしている。食卓につかないことは、招待を拒絶し招待者を拒むことになる。出席するチャンスはすでに与えられていたが、再度の申し出さるも拒否された。イエスの招きに断固拒否しない指導者たちが、ここにほめかされている。拒絶の記録は、前の章でも明らかにされている(13・28～29、31～35)。イエスは二つの重要なことを教えている。一つは誰も神の招きなくして神の国に入れないという点。と同時に、人は自分自身の自由な選択によって救いの外にとどまれるという点である。

人は自らを救うことはできない。しかし自分自身を永遠の刑罰に落とすことはできる。そしてイエスの説教で何度も言われているのが後者の事実である。イエスを拒むことによって、指導者たちは神の最も偉大な贈り物を拒否している。すなわち神と共に永遠の交わりの食卓に座る機会である。彼らは、神が与える祝福を共有するチャンスをつかみ損なっている。しかし神の国の恵みは失

われたのではない。他の者たちが招かれ参加するのである。豊かな祝福の機会と神の御手にある交わりとが、他の者たちに有効となる。

## テキスト

15 文脈としては14・1から続いている。イエスが安息日にパリサイ派の指導者の家で、食卓についている時の場面である。列席者のひとりとは、律法学者がパリサイ人であろう。彼は、イエスが義人の復活を語る(14・14)のを聞いて、疑いなく自分がそこにいるとの前提で話しかける。

16 盛大な晩餐会 このたとえ話で、イエスは列席者の言葉に答えている。

17 僕をおくって 食事ができたなら、主人は招待者たちが来るように僕を送り出す。上流社会では、招かれた客を呼ぶために僕が送り出されるのは常識であった。旧約聖書にも二重の招待の例を見ることがある(エステル5・8、6・14)。この段階で招待を断るのは、非常に礼儀を欠くことだった。ここで主人を神と考えるならば、僕はキリストとなる。

18 みんな一緒に 晩餐会に招待されていた者たちが、同じように出席できない言い訳をしだす。第一の人の最優先事項は、土地である。彼は見に行く必要があると言いが、すでに取得しているのだから急ぐ必要はない。弁解にすぎない。

19 五対の牛 第二の言い訳は最初と似ており、最近購入した家畜を視察すること。この人は、平均的農夫より多くの土地を所有していることをほ

のめかしている。普通の農夫は、一ないし二対の牛を所有していた。この人も、いつでも牛を見に行くことができたはずである。

20 妻をめぐりました 第三の人は、結婚生活の理由に弁解している。旧約聖書は、戦争のような拘束力ある責任から新郎は自由にされると記している(申命記20・7、24・5)。しかし結婚生活を理由に食卓の招きを断るのは、論理の大幅な飛躍。彼は単に食事に参加したくなっただけ。

21 主人はおこって 僕の報告に怒った主人は、晩餐会を予定された時刻通りに開催することに決定し、言い訳して主人の計画を混乱させた者たちを赦さなかった。そして僕を遣わし、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人などを連れて来させた。

22 まだ席がごさいます 僕の報告には、晩餐会は部屋いっぱいの人々を迎えて催されるべきだという心配があらわれている。

23 主人は僕を三度も送り出している。この時は、町の外の街道や郊外の農園にまで行くよう命じている。無理やりに(アナカンソー)とは、「説得しても」という意味。目的は晩餐会をいっぱいにする。参照ローマ15・7～16。

24 わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう 食事に最初に招待された人々は参加できなかった。イエスは選民イスラエルを神の国に招いたが、彼らは拒否した。それゆえ、救いの機会は異邦人に移った。神の国の招きを断る者は神の国に入れない。

## 礼拝メッセージ例

●週題 招いておられる神

●聖書 ルカ14・15・24

●随唱聖句 町の大通りや小道へ行って、貧しい人、などを、ここへ連れてきなさい。

●目標 神は全ての人を招いておられることを発見し、その招きに応える。

ルカ14・21

## 導入

皆さんは、お友だちの家で開くお誕生会に招かれたことがありますか。今日のお話は、神様が私たちに天国のすこいパーティーに招待して下さっているということを、イエス様がたとえ話で教えて下さったところです。皆さんならどんな返事をするでしょうか。

## (起) ストーリーを語る

ある人が盛大な晩餐会を催すために、親しくしていた人々に招待状を送りました。主人は、大切なパーティーなので、当日にもしもべを迎えにやりました。必ず来て下さいね、という心からの招待です。ところがいよいよ当日になり、準備も整ったところに、「土地を買ったので見に行かなければならないので行けません」とか、「五頭の牛を買って調べることにしましたので、失礼します」とか、「結婚しましたので出席できません」とか、断りの知らせをしもべが持って帰ってきました。この人たちは、なんとかやりくりすれば出かけたのに、主人の好意を踏みにじる大変失

礼な対応をしたのです。この人々は、土地や牛が買えるし、結婚もできる幸せな人たちでした。それで、主人の招きよりも地上の宝を選んでしまったのです。

招待主は心を込めて準備し、首を長くして待っていたのですから、もうカンカンに怒ってしまいました。そこで、「いまずぐに町の大通りや小道に行つて、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人などをここへ連れてきなさい」と言いつけました。こうして代わりに連れてこられたのは、こんなすこい宴会なんて見たことも聞いたこともない人たちばかりです。恐らく、びっくりしたことでしょう。

それでもまだまだ席が余っていると告げられた主人は、「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいつぱいになるように、無理やりにひっぱりきなさい」と命じました。この主人は、用意したものが無駄にならないように、この宴会を一緒に喜んでくれる人たちを捜したのです。

初めに招待を受けていた人たちは、ユダヤ人を指しています。彼らは神様から祝福を約束された選びの民でした。しかしそのことを誇りにして、預言者やイエス様の招きの言葉を聞き過していったのです。だから、当時は罪人として低く見られていた取税人や貧しい人たちが連れてこられ、またかきねの向こうの外国人さえもひっぱり込まれました。彼らは身分不相応な招きだと知っていましたが、お招きにあずかったことに感謝して、大変な馳走をいただくことができました。

## (承) 学ぶべき真理

イエス様は、神の国の食卓に私たち全員を招いておられます。どんな人も、もれなく祝福にあずかるように招かれているのです。この招待を断ることは、神様を悲しませることになります。なぜなら、神様が用意された天国の宴会とは、神の御子イエス様が私たちの罪の身代わりになって下さったからこそ、開かれたものだからです。イエス様を信じる人はみな罪が赦され、天国の宴会に出席できます。晩餐会に連れてこられたのは、体の不自由な人であり、かきねの外の人たちでした。これは、罪人や異邦人が招かれ、招きに応える者が救われることを表しているのです。

## (転) 生活への適用

あなたはもうイエス様のご招待の声を聞いているでしょうか。イエス様を信じる人は永遠の命をいただくことができ、天国が約束されています。今日、イエス様の招きに答えましょう。そして、いじめっ子も、いじめられっ子も、みんなを教会に誘い、教会がいつぱいになるようにしましょう。神様は全ての人に来てもらいたいのです。

## 結論

今日のお話のように神の国の宴会には、全ての人が招かれています。だれ一人もれていない人はありません。地上の宝に心を奪われて、招きをうけないでください。席はたくさんあります。あなたもわたしも、お友だちも、みんなイエス様の招きに、「ハイ出席します」と喜んで返事しましょう。

## ワーク A

## 導入のヒント

イエス様は私たちを天国に入れてあげたいと思って招いておられます。でもたくさんの方が理由をつけて、その招きを断っているのです。ある時イエス様はこんなお話をして下さいました。

## ワーク まねき人形

人形の手で体を、セロハンテープでとめる位置に気をつけて下さい。後ろの部分を動かすと、手がよく動きます。「だれに天国へきて欲しいですか。人形を使って招きましよう。」「イエス様を信じて天国へ行こう。おいで。」などと、子どもたちと会話しながら遊んで下さい。

## ワーク B

●質問1 招待されていたか否か。出席したか否かについてお話を思い出しつつ、確認します。招待される価値のない者でも、招かれる神の大きな愛を知りましよう。

●質問2 「なぜ招待されていたのに出席しなかったのか」を話し合います。神の招きより、自分の気持ちを優先していないかを考えます。

●質問3 「神の招きにこたえる」とは？

●賛美歌 「こどもをまねく」

(子どもさんびか48番)

●今日のお祈り 「神様、いつも私を呼んでいて下さることを感謝します。いつも神様のそばにおられるよう私をお守り下さい。」

## ワーク C

●この「晩餐会」のたとえ話は、天国への招き、救いへの招きを明示しています。それは全ての人に与えられている招きです。しかし、地上の生活の都合、物質への執着などにより、この招きをないがしろにしてしまうことがあります。自分はそのういうことをしていないかを点検しましょう。最も大切なのは、そういう自分を招き続けておられる神様に感謝することです。

## ワーク D

●質問1 18、19、20節。事前に招待されていたことを無視して、他の仕事をするのがよいことかどうか。これらの人々は招いてくれた人を軽んじていることに気づくように。

●質問2 主人は人々が招きにこたえて祝宴に出席することを願っています。すべての人が招かれているのですが、招きを断る人は出席できません。

●質問3 強い思いで神は招いておられます。いろいろな心を奪うものがあるので、招きを無視する人が多いことを発見し、一人一人が具体的に決意できるように導いてください。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 盛大な晩餐会に招かれていた人々が、次々にその招きを断りました。その理由は何でしたか。

2 晩餐会を計画した人は、招いた人が来ないことをどう思ったでしょう。

3 晩餐会への出席を二回目にな断った人々は、その後、招いた人とどういう関係をもつようになったでしょう。

## ●自分に当てはめてみよう

1 これまで、友人の誕生会などに誘われたことがありますか。もし招かれて、行くと言っていたのに、自分の勝手な理由で、その招きを断った相手はどう思うでしょう。あるいは自分がそうされたらどう思いますか。

2 神様は、私たちを救いと祝福へ招いておられると思いますか。

3 神様の招きを断る人と、受け入れる人がいます。あなたはどちらの人でしょうか。

## ●話し合ってみよう

1 神様は、晩餐会の招きを断った人の代わりに貧しい人、足の悪い人などを連れてくるようにしもべに命じました。このことから、神様は、人を分け隔てせず、全ての人を救いに招いておられることがわかります。あなたの周囲に、「あの人は救われない」と思う人がいますか。

## ワーク解説



週 題 神のもとに帰る  
聖 書 ルカ15・1～32

## 序論

主イエスの話を聞くために、罪人たちは主のもとに集まってきた。今週のテキストは、それを見てつぶやいているパリサイ人や律法学者たちに対してのたとえ話である。主イエスとパリサイ人の価値観の違いがよくわかる。百匹の羊の中の一匹が迷子になった時も、十枚の銀貨の一枚がなくなった時も、それが見いだされたなら大きな喜びがあろう。それは、二人の兄弟の一人が父親のもとに帰ってきた時も同じである。

## 一、弟息子との違い

弟息子は家にいるのがいやで、早く家を出て独立し、自分の力をためたかった。そこで、父親に無理に頼み込んで、本当は父親の死後にしかもらうことのできない財産を分けてもらって、遠い所へ行ったのだ。ところが、放蕩に身を持ちくずして財産を使い果たし、さらにききんになったために食べることもできなくなってしまった。

彼の根本的な間違いは、財産さえあれば父親などいらない、財産さえあれば自分はしあわせに生きられると考えたことである。しかしそうでないことがわかったとき、彼は本心に立ちかえった。そして、父のもとに帰って、父よ、わたしは天

に対して、あなたにむかって、罪を犯しましたVと告白しようとしたのである。

彼が父のもとに帰ったとき、父親は彼を温かく迎え入れてくれた。父親は彼を抱いて接吻し、最上の着物を着せ、奴隷でない証のくつをはかせ、自分の子であることの証の指輪を彼に与えた。さらに肥えた子牛をほふって、彼の帰りを祝う宴会さえ開いたのだ。

## 二、兄息子との違い

兄息子は、このような父親の態度を見て非常におこり、家にはいるうともしなかった。そして父親に、自分はまじめに父親のもとで働いてきたのに子やぎ一匹もくれたことはなかったと、つぶやくのである。ここに兄息子との違いを見いだすことができる。彼も、本当は弟と同じように、好きなことをし、ごちそうを食べて楽しみたかった。つまり、父親よりも財産を愛していたのである。兄息子は、からだは父親のもとにいたけれども、その心は父親から遠く離れていた。

そのような兄息子に対して、父親は、父よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだVと諭している。だとい兄息子は気付いていなかったにせよ、父親と一緒にいることが、どんな財産よりも値打ちのあることなのだ。父親のもとを離れた弟息子は、父親にとっては死んでいたも同然だった。しかしその弟が帰ってきたのは、まさに生き返ることであり、喜び祝うのはあたりまえなのだ。

## 三、たとえ話の意味

父親は、父なる神のことである。兄息子はパリサイ人を意味し、弟息子は主イエスのもとに集まっていた取税人や罪人を指している。父なる神は兄であれ弟であれ、全ての人々に恵みを与えてくださる。また、自分を無視して離れていった者が帰ってくるのを待っておられる。さらに、悔い改めた者を子として扱って下さる。

このお方と一緒にいることこそ、本当に価値ある生き方なのだ。しかし、弟のようにこのお方から離れて自分の力で生きていこうとするなら、いつかは滅びに至る。あるいは兄のように真面目に生きていても、心の中は不満でいっぱいなら、いつかは馬脚が表れる。神と共にいることこそ、天でも地でも、最も価値あることなのだ。

## 結論

主イエスは、父なる神の姿を現実に見えぬ形で人間に現された。主は、一匹の迷える小羊を捜し出し、一枚のなくなった銀貨を見つけ出されるお方である。けれど、人間の場合だけは、自分の方から帰ってくるのを待っておられることを心に刻みつけよう。主は、一人も滅びないで救いはいることを待ち望んでおられるのだ。

財産に惑わされてはならない。現実の世界の楽しみに目を奪われてはならない。主と共にいることこそ、最高の喜びである。そして、一人の人が主のもとに帰るときに、神と共にそれを心から喜ぶ者となろう。

## 研究資料

これは全聖書中、最もよく知られかつ最も愛される章の一つである。三つのたとえ話によって、失われた罪人が発見されるとき、神の大きな喜びが起こることがわかる。特に第三のたとえ(15・11～32)では、一人の罪人の悔い改めに対して天の喜びがいかに大きいかが描かれている。三つのたとえ話は、直接にはパリサイ人、律法学者たちに語られたものである(15・1～3、参照5・29～30)。天の父は無条件の受容と喜びを示しておられる。イエスは大きな二つの真理を教えている。一つは、罪人の悔い改めに伴う天の父のトータルな受容(5・32)。そしてもう一つは、悔い改める者と喜びを共にすること。神が恵みと赦しに満ちておられるゆえに、人々にもそうあってほしいと願われているのである。

## テキスト

11 ふたりのむすこ ルカは最初から二人を登場させている。11～32節は二人の息子のたとえ。前半には弟息子、後半は兄息子が描かれている。  
12 弟 年齢や既婚かどうかは、わからない。当時の財産分与は、兄三分の二に対して弟は三分の一だった(申命記21・17)。普通、相続は父親の死後になされること。遺言には、遺言者の死亡証明が必要(参照ヘブル9・16以下)。しかし父は二人に身代を分けた。

13 幾日もたたないうちに 生前贈与では、財産処分は親の許可が必要。しかし、弟息子は財産を現金に替えて、遠く離れた地へ旅に出た。そして持てるものを湯水のように使い、放蕩に身を持ちくずした(15・30、参照箴言29・3)。

14 ひどいききん すべてを使い果たした後、予想しない事件がおこる。しかもかなり厳しいもので、彼は食事にすらありつけない。

15 豚を飼わせた 豚は不浄の動物。ユダヤ人は非常に嫌った(レビ記11・7、申命記14・8)。

16 何もくれない人はなかった 良家の息子が、豚の食べるいなご豆すら食べなくなる惨めさと、豚の方が彼より価値があると思う社会の現実。

17 本心に立ちかえる 奇跡的なことが起こる。彼は自分の状態に目覚め、帰るべき所は自分の父のところだと気付いた(15・7、10)。雇人とは賃金労働者のこと(参照レビ記25・50、ヨブ記7・1、マタイ20・1～16)。

18 こう言おう 彼は肉親の父だけでなく、天の父に対する意識も持っている。すなわち自分の犯した罪は、神と人に対して責任があること。神と人に対する自覚は重要(ルカ10・27、参照出エジプト10・16、民数記21・7、サムエル上15・24)。弟息子には罪を告白する心備えがある。

19 雇人のひとり同様 彼にはかつての自分の立場を回復してほしいという甘えはない。日雇い人として父のためにひたすら働こうとする思い。

20 父のところへ出かけた 彼は悔い改めと信仰をもって、生まれ故郷というより、父のもとに帰

っていった。イエスはここで、迎えるに値しない息子を父は歓迎していることを強調している。そして父は、息子の悔い改めに先行して、彼を赦し受け入れる備えをしていた。

21 父は息子が用意した悔い改めのことを最後まで言わせた。

22 最上の着物 著名な客のために備えられた衣服。また父は息子に指輪を手にはめさせ、権威を与えている。そしてはきものを足にはかせ、自由を保証している。奴隷は靴をはかなかった。

23 肥えた子牛 特別に育てられたもので、宗教的な喜びの日に食されるもの。

24 いなくなっていたのに見つかった 父親が祝宴を催す理由。本章冒頭の二つのたとえ話と共通する主題が繰り返されている(喜び15・6～7、9～10、32、なくした15・4、8、27)。

25～32 この箇所には、兄息子の生き方が説明されている。11～24節では、悔い改めて帰ってくる罪人を天の父は喜んで迎えて下さることが、見事に述べられていた。その後兄息子のことを語るのには、パリサイ人や律法学者たち(15・2)に対して、天の父のみこころを教えるためであった。兄は弟の帰還に対して、喜ぶどころか怒っている。そしてその怒りは父に向けられたものであった。兄は父に対しては不満と批判を向け、弟へは断罪と侮蔑の言葉を浴びせている。兄は喜んで父のもとにいたのではなかった。また、戒めを一度も破ったことがないという、自分自身に対する誇りをもって生きていた。

●週題 神のもとに帰る

●聖書 ルカ15・1-32

●暗唱聖句 父よ、わたしは天に対しても、あなたに向かっても、罪を犯しました。ルカ15・18

●目標 神と共にいることが、一番価値があることを発見する。

#### 導入

イエス様のまわりには大勢の罪人たちが話を聞こうとして集まってきました。それを、パリサイ人や律法学者は、苦々しく思っていました。「イエスは罪人を受け入れている」と批判していた彼らに、イエス様は次のような話をされたのです。

#### (起) ストーリーを語る

イエス様はここでは3つのたとえを語っておられます。まず一つは、百匹の羊の群れから1匹の羊がいなくなってしまう、捜しに捜してやっと見つけて、友だちや近所のひとと一緒に喜んだ話。次は、大切な十枚の銀貨のうちの1枚をなくした女の人が必死で捜し当てたとき、友だちや近所の人を集めて一緒に喜んだという話です。どちらも、神様は一人の罪人でも滅びることを望まず、救われることを望んでおられるたえです。最後の一つは、ある人の二人の息子のたとえ話です。

弟息子は、お父さんに財産を分けてもらいます。財産分けは普通、お父さんが亡くなってからするものです。父親が生きている間に財産を分けても

らうのは、お父さん自身はいてもいなくてもいい、財産さえあればいいという態度です。

弟息子はすぐに旅立ち、他の国に行きます。彼は遊び暮らしましたが、楽しい時は束の間で、お金は飛ぶようになくなり、アツという間に財布はからっぽです。さらにその国にききんがおきて彼は食えることもできず、ブタ飼いになってしまいます。そこで初めて本心に立ち返り、父親のことを思い出したのです。お金が一番、自分勝手が一番と思って家を出たのですが、実は家にいて父親のそばにいたのが一番幸せなことに気がつきました。そこで彼は、「お父さんの所に帰ろう。そして、『あなたにも天にも罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。どうか使用人のひとりにしてください』と言おう」と、決心します。

こうして家に帰ってきた息子を、父親は遠くから発見し、走り寄って迎えました。そして彼を家に連れ帰り、最上の着物を着せ、靴をはかせ、息子である証拠の指輪をはめさせた上に、子牛を料理させて祝いの宴会を始めたのです。

ところが、この様子を知った兄は、腹をたて、父親に食ってかかります。「僕はずっと真面目にあなたの下で働いてきたのに、一度のご褒美もなかった。なのに、財産を食いつぶした弟の帰りを喜んで、宴会をするなんて」と、すごい怒り方です。父親は、「おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは、全部おまえのものだ」と言ってなだめます。そして、死んだと思っていたはずの息子が生きて帰ったのですから、喜ぶのはあたりまえなんです

よと、諭したのです。

#### (承) 学ぶべき真理

99匹いるから1匹くらい、9枚あるから1枚くらい、兄がいるから弟はいなくなってもいいや、とは思えません。神様は全ての人が救われることを願っておられるのです。

このたとえは、父が神様、兄がパリサイ人、弟が取税人や罪人のことです。神様は、この父のよう二人の息子を同じように愛しておられます。弟は父の心を痛めたことを悔い改めて、本当の幸せがどこにあるのかを見つけました。でも兄にとっては、父のそばにいたことは喜びではなく、イヤヤ働く義務感だったのです。

#### (転) 生活への適用

あなたは、神様自身が大切ですが、それとも神様の与えて下さる財産が大切ですか。神様といつも一緒にいることが大切ですか。それとも神様と共に働くことをしかたなくしていませんか。兄息子も実際は遊び暮らしたかったのが本音なら、弟となんの違いもないのです。本心に立ち返って、自分が何を大切にしているかを考えましょう。

#### 結論

私たちの本当の幸福は、愛に満ちた神様を知って、神様と一緒にいることです。1匹の羊と1枚の銀貨は見つけ出され、喜ばれました。家出した弟息子も、悔い改めて自分から父のもとに帰ったので、大喜びされました。私たちも自分から進んで神様のおそばに行きましょう。神様は私たちの帰りを、今か今かと待っておられます。

## ワーク A

### 導入のヒント

みんなは迷子になったことがありますか。お父さんやお母さんの姿が見えなくて、どこにいないかわからないとしたら、泣いてしまつてしょうね。今日は自分からお父さんの家を離れていった人のお話をしましょうね。

### ワーク 家に帰る道

お父さんやお母さんのそばにいたなら安心できるように、神様の言われることをちゃんと聞き、神様と共にいることがどんなに素晴らしいことが、迷路の後、会話して下さい。

## ワーク B

●質問1 一緒に読みつつ、今日の中心のたとえ話を完成しましょう。「父のもとにいます」ときこそ幸福であり、自由であることを学びます。

●質問2 兄息子の怒りに対する父親の論しの言葉を味わいます。私たちも、いつも神様の愛を感じつつ生活出来るよう話し合ひましょう。また多くのイエス様を知らないお友だちが神様のもとに帰れるよう祈りましょう。

### 賛美歌 「愛、あい、アイ」

(ノア・CDコレクション6番)

●今日のお祈り 「神様、いつも大きな愛で私を待っていて下さることを感謝します。また、お友だちも神様の所に帰れるようお導き下さい。」

## ワーク C

●神と共にいることが一番価値あることを示すテキストですが、メッセージが大きすぎて一つのワークにすることは困難でした。ここには、①神の愛、②放蕩息子の悔い改め、③兄息子の態度(律法学者とパリサイ人の姿の比喩)という3つのポイントがあります。そこで、このワークでは、神の愛の大きさと、罪人が本心に立ち返って悔い改め、神のもとに帰ってくるという2点を扱いました。自分がどのような罪人であっても、神様は待っていておられ、喜んで迎え入れて下さることを確認させます。

## ワーク D

●質問1 早く自分の考え通りにしたかった弟の思いは、だれもがもっています。彼の失敗の過程と結果をおさえながら、父と共にいるさいわいを再発見しましょう。

●質問2 兄の気持ちを考えます。普段、なかなか気がつかないでいる、神と共に歩むさいわいを、この学びを通して実感する者となりましょう。

●質問3 共にいたいと望んで、ずっと待っている父の姿を通して、父なる神の深い愛を知ることが出来るように。

●質問4 共にいるさいわいに気がついていないこと。自分勝手に生きないで、神のもとに帰ることを発見し、祈る時をもちましょう。

## 中高校へのヒント

### 考えてみよう

- 1 弟息子はなぜ家を出たかと思えますか。
- 2 弟息子は、財産を分けてもらいましたが、そのお金を何のために使ったのでしょうか。
- 3 お金が無くなったときに弟息子を助けてくれた友だちがいたでしょうか。
- 4 お金を使い果たした弟息子は、どんな思いでお父さんのところへ帰ったのでしょうか。

### ●自分に当てはめてみよう

- 1 あなたは家を出たいと思ったことはありませんか。もしあるとしたらそれはどうしてですか。もしこの弟息子のようなら、あなたが金だけもらって勝手に家を出て行ったら、あなたの両親はどんな思いをするでしょうか。
- 2 弟息子が家を出ていったときの父親の気持ちを想像して、言い表してみよう。
- 3 あなたは、神のもとにいたこと、お金をたくさんもって楽しく過ごすこと、どちらが幸福だと思いますか。

### ●話し合ってみよう

- 1 父のもとを離れた弟息子を、イエス様はだれにたとえて話されたと思いますか。
- 2 父のもとにいた兄息子は、だれのことでしょうか。
- 3 私たちは、弟息子が父のもとに帰ったように、父なる神のもとに帰っているでしょうか。



週 題 死後の世界  
聖 書 ルカ16・19～31

## 序論

今週のテキストは、人欲の深いパリサイ人Vに対して語られている(14節参照)。この世で豪奢に生きている者であっても、死後も同じようになるとは限らない。いや、かえってどんでん返しがあることを、このたとえ話は教えている。死後の世界を考慮に入れるなら、私たちは自分の価値観を再考せざるをえないのだ。

主イエスの多くのたとえ話の中で、固有名詞を持つ人物は、唯一この箇所のラザロだけである。ラザロとは「神が助ける」という意味であり、ヨハネ11章に、主の力により生き返った同名の人が記されている。たとえ話の形式をしてはいるが、主はこの情景を見られたのかもしれない。

## 一、生前の状態

金持ちは、高価な人紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。彼は、全身で食物だらけのラザロが玄関の前にすわって、自分たちの食べ残したもので飢えをしのいでいるのに気づかなかったはずはない。しかし彼は、自己中心的な価値観によって生きていたゆえに、ラザロを憐れむ気持ちなどは微塵も持たなかった。

ラザロは、どのように考えて生きていたか、聖

書は何一つ語っていない。だが、死後にアブラハムのふところに抱かれているので、少なくとも神を信じていたことは確かである。いずれにせよ、金持ちはこの地上においては人よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。

## 二、死後の状態

ところが二人とも死んでしまった。金持ちは黄泉(新改訳聖書ではハデス)にいて、火炎に包まれて苦しんでいた。彼の生前の生き方は、神に喜ばれるものでなかったからである。それと対照的に、ラザロはイスラエル民族の父であるアブラハムと親しい交わりの中にあつた。

金持ちは、生前一度もしたことの無い祈りをこでしている。しかしラザロを召し使いのように考え、あつかましくも水を一滴でも与えてほしいと願っている。この期にいたつても、金持ちとしての高慢さは消えていないのだ。アブラハムはその願いを退け、金持ちのいる所との間には人大きな淵Vがわいてあつて、行き来ができないことを説明する。これは厳粛な事実である。

死後の状態は、生前とはまるっきり反対であつた。地上で楽しんでいいた金持ちは苦しみ、地上で苦しんだラザロは慰められている。地上で生きる時間はただかだか数十年、長くても百年だが、死後の時間は永遠である。ここから、地上における生活だけを視野に入れるだけでは十分であることが理解できるだろう。永遠をめざして生きることが、神の御旨である。

## 三、私たちへの警告

金持ちは、アブラハムにもう一つの願いをしていることに注目しよう。それは、ラザロを遣わして、彼の五人の兄弟が人こんな苦しい所へ来ることをないように、彼らに警告していただきたいのですVという求めだった。アブラハムは、その願いに対して厳しい答えを出す。人彼らにはモーセと預言者がある。それに聞くがよろうV。つまり「聖書に聞け」ということである。金持ちは、死人がよみがえったなら、彼らは悔い改めると反論した。しかし、ヨハネ福音書で主がラザロを生き返らせたとき、祭司長や律法学者は主を殺そうとたくらんだ(ヨハネ11:53)。主イエスがよみがえられた時も、彼らは弟子たちが主のからだを盗み出したといううわさが広がる工作をした(マタイ28:12～15)。聖書に聞く謙遜な気持ちがない人々は、人がよみがえっても悔い改めようとはしない。それは現在でも同じである。私たちも、聖書に耳を傾けるか否かで、死後に對する考え方が決まることを銘記しよう。

## 結論

この世だけを見る価値観と、死後も視野に入れた価値観とは、その内容がまったく違うのは当然である。あなたはどちらの価値観を自分のものとするだろうか。この世に生きている間だけ楽しければ良いのか。それとも死後に悔い改めることのないように生きていくのか。聖書に耳を傾ける人生こそ、永遠のいのちをもたらす。

## 研究資料

ラザロと金持ちのたとえ話は、ルカ16章における富に関する第二の大きな教えである(第一は16:1～13の抜け目のない管理人のたとえ)。この世における金持ちと、貧しさにあえぐ人が、最後の審判の時には逆転している図式が描かれている(参照1:50～53、16:13～15)。金持ちが地上の生涯で得た全ての恩恵は次の世では失われており、貧しいものが地上で持てなかつた全てのものが来世では彼に供給されている。この話は一つの警告である。すなわち現在富を所有していても、来るべき世でその富を持っているとは必ずしも言えないこと。本来地上の富とは、何も持っていない人々の必要のために豊富に用いられるべきはずのものである。地上の生涯を無感覚に、また気ままに生きることは、後の世において神からの祝福を欠くことになるであろう。人はまいた種を刈り取る。たとえ話の焦点は、否定的な見本である。金持ちは取り返しのつかない悲劇的な苦汁を味わっているゆえに、自分の家族が同じ目に会わないように嘆願している(16:24～31)。ルカの対照的な文学的タッチによれば、ラザロは一言も語っていない。彼は防御する必要がないのである。

## テキスト

19 ある金持がいた これはルカがたとえ話でしばしば用いる導入。金持ちの豊かさは二つの側面

で描写されている。すなわち彼の服装と食習慣。

紫の衣は豪華に着飾っていたことを意味する。毎日ぜいたくに遊び暮らしていたとは、字義的には毎日自分自身に金をかけて楽しんでいただとなる(参照ルカ12:19、比較3:11、ヤコブ5:5)。

20 ラザロ ヘルム名はラザルであり、エルアザルの短縮形。その意味は「神は助けられる」。これは、イエスのたとえ話において名づけられている唯一の事例。彼は金持ちの玄関に座っていた。金持ちの家は玄関を持つのに十分な広さがあった(参照使徒10:17、12:13、マタイ26:71)。座りとは、字義的には「投げ出されていた」と言うこと。この表現はしばしば病氣や足が不自由なことを描写するのに使われる(マタイ8:6、14、9:2、マルコ7:30)。彼の体はでき物でおおわれていた。これは潰瘍で、レブラではない。

21 飢えをしのぐ ラザロの基本的欲求は食すること。彼が口にする全ての物は人の残飯。放蕩息子の場合と同様に十分に満たされない食事(15:16)。金持ちの犬(複数)は、貧しいラザロよりも良い物を食べていたであろう。その犬たちがラザロのできものをなめていたとは、彼の惨めさが頂点に達していたことを示している。

22 ここから第二の対比が始まる。ラザロは埋葬すらされなかった。にもかかわらず彼は神の臨在の中に入れられた。アブラハムのふところの厳密な意味は定かではないが、ラザロは後の世でアブラハムとの親密な交わりを楽しんでいる(ルカ13:29)。金持ちの地上での死に際する取り扱いは、ラ

ザロとは違っていた。彼は埋葬された。

23 このポイントには、ラザロも金持ちも各自が居るところを知っていること。金持ちは黄泉(ハデス)で極度に苦しんでいる。ハデスは旧約のシエオル(ヘルム語)に対応する。この言葉は、死者の場所或いは、罪深い死者が行く場所を意味する。金持ちは裁きに苦しんでおり、一方ラザロはアブラハムのふところで祝福を楽しんでいる。

24 ラザロをおつかわしになって 金持ちは地上での関係が続いていると思っている。彼は地上で量ったように、今自分が量られている(ルカ6:38)。金持ちの地上での富は、来るべき世で彼に何もたらしていない。

25 イエスはたとえ話の主要な図式がもたらした終末的逆転を要約している。この教えはイエスが6:20、24で宣言したことを描いている。

26 淵 天国と黄泉との間には、懸け橋は無い。地上の生涯でどう生きたかが全てを決定する。

27 ラザロをつかわして 金持ちは自分の兄弟が悔い改める必要があることを知っている。

28 警告していただきたい 金持ちは自分の五人の兄弟が、かつて自分が地上で持っていた同じ人生哲学で生きていることを認めている。

29 神はすでに聖書という啓示によって語っている。この節の精神は11:28に要約されている。

30 これは生まれつきの人間がする詭弁。

31 耳を傾けないなら たとえの結論。人は全聖書の御言葉に耳を傾けることによってのみ、悔い改めの恵みにあずかることができる。

## ●週題 死後の世界

●聖書 ルカ16・19～31

●暗唱聖句 今ここでは、彼は慰められ、あな

たは苦しみをたえている。

ルカ16・25

●目標 死後の世界があり、そこで報いがあることを発見する。

## 導入

今日のイエス様のたとえ話は、欲の深いパリサイ人に向かって語られたものです。お金持ちは、死んだ後でもお金持ちで、貧乏人は死んだ後も貧乏人なんですか。今日は、死んだ後どうなるのかがわかることです。

## (起) ストーリーを語る

このたとえ話にはラザロという名前の人が出てきます。ラザロという名を聞いたことのある人もいます。イエス様がよみがえらせたと同じ名前です。その名には、「神が助ける」という意味があります。

ある金持ちがいました。彼は毎日、良い服を着て、ご馳走をいっぱい食べて、遊んで暮らしていました。しかし、その金持ちの家の玄関先には、体中におできのあるラザロが座り、金持ちの食事の残り物で飢えをしのぐとしていたのです。しかも、犬がやってきてラザロのおできをなめているというひどくかわいそうな様子です。

この貧しいラザロは死んで天使に連れられ、信

仰の父アブラハムの所に行きました。金持ちも死に、立派なお葬式が挙げられましたが、黄泉(ハデス)で炎に包まれ、とても苦しんでいたのです。

金持ちがふと目を上げると、あのラザロが幸せそうにアブラハムのふところにいるのが見えます。それを見た金持ちは、さっそくアブラハムにお願いしました。彼は、「父、アブラハムよ、わたしを

あわれんでください。ラザロの指先に水をつけて、わたしの舌を冷やさせてください。わたしは火の中で苦しみをたえています」と言いました。生きていた時、ラザロにあわれみの一つもかけなかった金持ちですが、自分が苦しいときには助けを求めた上、死んだ後でも、ラザロを自分よりも卑しい召使いのように考えていました。

そこでアブラハムはまず、アブラハムやラザロのいる所と、金持ちのいる所には大きな淵があつて渡れないことを教えます。次に、地上で生きていたとき、ラザロは悪いものを受けていたので、死んでから慰められているが、金持ちはせいにくとあわれみのない生活をしていたので、今黄泉で苦しんでいるということを教えました。

そこで金持ちはもう一つ願いました。それは、まだ地上に生きている5人の兄弟にラザロを遣わして、こんな苦しい所に来ることがないように警告してほしいということでした。しかし、それにもアブラハムはノーと答えました。こうなることは、はっきりと聖書に書かれているのだから、聖書の警告を受けても従わない者は、よみがえった人が警告しても聞きはしないと教えたのです。

## (承) 学ぶべき真理

死んだ後にいく所があり、そこには報いがあることがわかります。そしてそれは、どのように地上で生きてきたかで決まることもわかります。

また、たとえ死人の復活を見ても、人は心を入れかえたりはせず、聖書に聞かない人は滅びを刈り取ることもわかります。私たちは聖書に書かれていることをよく学んで、今の生き方を考えなければなりません。

## (転) 生活への適用

皆さんは、死んだらどうなるんだろうかと考えたことがあるでしょう。苦しいハデスか、信仰の父アブラハムと一緒にパラダイスか、どちらがいいでしょう。今日のお話から、生きている時と死んだ後では立場の逆転があることがわかります。私たちは日曜日の朝、遊びに行くのか、それとも教会学校に行くのか、毎週選んでいます。どちらが大切でしょう。今だけが楽しければよいわけではありません。私たちの地上の生涯は、死後どこに住むかの準備なのです。

## 結論

天国は、現在の状態がそのまま続くものではありません。今、何を大切にして生きているのが、永遠に住む場所を決めることになるのです。聖書は、永遠の命を得るためにどんな生き方をすればよいのかをちゃんと述べていますし、死んだ先のことも教えています。私たちは、聖書に学び、その警告や導きをしっかり守り、アブラハムのふところに行く者でありましょう。

## ワーク A

## ●導入のヒント

みんなはお母さんのお腹から生まれてきましたね。それから一つずつ年をとっていき、いつかおじいさん、おばあさんになるでしょう。じゃあ、その後はどうなるのかな。聖書には、死んだらどこへ行くのか、どうなるのか書いてあります。

●ワーク 天国と地獄の絵カード

質問1 神様を信じていたラザロさんは、死んだとき、どこへ行きましたか。

質問2 神様のことを聞いても信じようとしない金持ちは、死んだときどこへ行きましたか。

質問3 神様を信じる私たちはどこへ行きますか。(その他にも良い質問を考えて下さい。)

## ワーク B

●質問1 ラザロと金持ちのたとえを思い返し、「死後の世界」があることを確認します。また、イエス様につながる者には、素晴らしい天の御国が準備されていることを知しましょう。

●質問2 金持ちが兄弟に警告して欲しいと願ったことから「聖書に聞く」ことを教えられます。私たちの救いの手引きは「聖書」です。

●質問3 暗唱聖句です。天国で「慰められる」ことを思いつつ、今日を励みたいものです。

●賛美歌

「わたしのかわりに」  
(ふくいん子どもさんびか23番)

●今日のお祈り 「天国が用意されていることを感謝しながら生活できるよう、お守り下さい。」

## ワーク C

●今回は、視覚的なワークを作りました。切って貼るので、幼稚科のように感じるでしょう。それまたまにはいいのではないのでしょうか。

●この絵から、死後の世界があること、それは二つ(二カ所)であること、そして必ずどちらかに行くことを、視覚的に捉えさせます。

●当然、「あなたはどちらに行くの?」「行きたいの?」「それなら、今どうしたら良いの?」という会話になっていくと思います。

## ワーク D

●質問1 生きている時の貧富の差は、死後も続くものでないことを、先に学んだ天に宝を積むことを思い出して考えることができればなお良いでしょう。

●質問2 自分が金持ちの立場だったらどうするかを考え、死後の決定的な違いを理解します。(金持ちは黄泉におかれても現状認識は浅い。)

●質問3 自由に話し合いながら、聖書に聞くことの重要性をハッキリと示しましょう。

## 中高校へのヒント

## ●考えてみよう

1 この地上では、金持ちはどのように生きていましたか

2 それと対照的に、ラザロはどのように生きていましたか。

3 死んだ後、金持ちとラザロの行ったところはそれぞれどこでしたか。

●自分に当てはめてみよう

1 私たちのいのちは、この地上だけのものかそうでないのか、今まで考えたことがありますか。

2 金持ちは、たくさんのお金がありながらそれを貧しい人々に施す心は持ち合わせていませんでした。あなたなら、たくさんのお金や、財産があるとしたら、それをどのように使いますか。

3 金持ちは、神を信じて誠実に生きるのではなく、お金を愛して生活していました。あなたには神様以上に愛するものがありますか。

●話し合ってみよう

1 ラザロは天に引き上げられ、金持ちはそうではありませんでした。天の御国に入る条件とは何だと思えますか。

2 お金や地位や名譽は、天の御国に入る条件でしょうか。

3 それでは、天の御国に入るにはどうしたらよいのでしょうか。



週 題 謙遜な祈り  
聖 書 ルカ18・9～14

## 序論

18章は祈りについての章である。8節までには失望せずに常に祈るべきことが教えられており、9節以降には真実な祈りはどういうものかが示されている。ここもたとえ話だが、だれに対して語られたのかは記されていない。パリサイ人が名指しで上げられているので、直接彼らに対して話されたものではないだろう。ここでは、パリサイ人ともう一人の登場人物である取税人との比較によって、祈りの本質が明示されている。この二人の価値観は、天と地ほど違っていた。

## 一、パリサイ人の祈り

パリサイ人は、当時の正式な祈りのスタイルである起立の姿勢をとり、一人（原語を直訳すると「自分自身に向かって」）こう祈った。彼は、神に向かって祈ったのではないことに注目していただきたい。それは言わば自分の自慢話を自分自身にしているようなものである。11節は、当時のパリサイ人ならほとんどの人が自信をもって言えることだった。パウロも八律法の義については落ち度のない者である（ピリピ3・6）と告白している。

このパリサイ人は、普通は年に一度、贖罪の日

にするだけで良かった断食を（レビ記23・29）、一週間に二度もしていた。また、はつかのような小さなものでも、その十分の一をきちんとささげていた（ルカ11・42）。そして、近くで祈っている取税人を横目で見ながら、この取税人のような人間でもないことを感謝します（と）言っている。彼の祈りは最初から最後まで、「わたしは何々です」であり、神に向かうものではなかった。

## 二、取税人の祈り

取税人の祈りは、このパリサイ人の祈りと全く対照的である。彼は自分が神の御前に立つにふさわしくないことを自覚していたので、へたくすで立ち、目を天にむけようとしなくて祈り始めた。彼は、胸を打って悲しみを表現しながら、へたくす、罪人のわたしをおゆるしく下さい（と）言うより他に言葉がなかった。自分に何の誇るところもない彼は、自分が神のために何をしたらかと言うことができなかったのだ。

取税人の祈りは、神の前に恐れかしこんで出ている者の祈りである。自分自身に何のよいものも見いだすことができず、ただ悔いた魂で叫ぶのみであった。しかしそれこそ、神の求められる祈りである。「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心を、かるしめられませんか」（詩篇51・17）。

## 三、義と認められる祈り

以上はたとえ話であり、このような実例があっ

たかどうかは定かではない。しかし重要なのは、神の子である主イエスは、人の心の思いを見抜かれることだ。私たちが祈るときにおいても、主は私たちの本心をこぼすのである。へたくすに義とされて家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった（と）いうことを、私たちは決して忘れてはならない。

パウロは、このへたくすとされる恵みに感動していた人だった。彼は、この話を自分のこととして聞いていたのではなかつたか。彼は、この福音書の記者ルカと行動を共にしていたからである。パウロは、このパリサイ人のように律法を正しく守って生活していたが、また取税人のようにへたくす、罪人のわたしをおゆるしく下さい（と）祈った人でもある（ローマ7・24）。

私たちはどう祈っているだろうか。「私は礼拝を休んでいません。献金をちゃんとしています。友人を導いています。すべてを感謝しています」と祈ることは悪くない。けれどもそれらは、自分の業績というのではなく、皆、神からの賜物なのである。神が共にいて下さるから、それができる。神は心の中でご存じの方である。

## 結論

真の祈りは、自分を誇るのではなく、神の前に出て謙遜に自分の姿を言い表すことである。偉そうにふるまう必要はない。ありのままの姿で出ればよいのだ。よしんば罪を犯すことがあっても、そのまま告白する者とならうではないか。

## 研究資料

他のたとえ話（15・11～32、16・19～31）と同様に、この箇所は二種類の人物の行動を対比させている。パリサイ人は旧約律法が要求する以上の行為を誇り、高潔な行為とうぬぼれ、取税人を見下している。一方取税人は自分の罪を意識し、ただ神にあわれみを請うだけである。イエスは前者ではなく後者が神に受け入れられたことを、権威をもって宣言している。

## テキスト

9 18・1と同じく、このたとえ話の目的が説明されている。ルカは16・14～15（参照10・29）でパリサイ人の性質を記しているが、ここでのパリサイ人の祈りの内容は、彼らだけがしていたものではない。自称イエスの弟子であっても当然問われるべき内容である。祈りの態度が扱われているが、テーマはむしろ義とされることである。

10 ふたりの人 彼らは町から宮のある丘へ上った。当時、人々は祈るためにいつでも神殿に入ることができた。ただし、朝の9時（参照使徒2・15）と午後の3時（参照使徒3・1）は、公の祈りの時として確保されていた。パリサイ人は、ハスモン王朝時代に形成されたユダヤ教の一派で、イエスの時代には民衆に大きな影響力を持っていた。律法学者の多くはパリサイ派に属していたと思われる。彼らは、律法を守ること、特に安息日

や断食、施しを行うことや宗教的きよめを強調した。そしてここでは、モーセの慣習に忠実なユダヤ教導者として言及されている。取税人はローマ帝国の手先となり、徴税請負人としてユダヤ同胞から税金を徴収していた。その場合、相当の利幅を取って私腹を肥すことができ、同胞から嫌悪の的となっていた。ここでは罪人を連想する代表的人間として記されている。

11 立つて この姿勢は、当時祈るための普通の姿勢であった（マタイ6・5、マルコ11・25）。ひとりでこう祈った 直訳すれば、「自分自身について繰り返しこう祈った」となる。早い話彼は神にではなく、自らに語りかけていたのであった。彼は言葉においては、「神よ」と呼びかけてはいる。しかし自らの本当の罪深さを知ることなく、自分が神の前に全く無価値なものであることに気付いていない。そして彼の祈りの内容が、パリサイ人の本質を良く表している。すなわち、他者との分離。

12 パリサイ人が行っている宗教的実践は、律法が要求する以上のものである。旧約聖書によれば断食は年一回だけである。すなわち贖罪の日、イスラエルの民全体でこれを行う（レビ記23・26～32）。しかしパリサイ人は、一週に二度 実行している。またささげものに關しても、「あなたは毎年畑に種をまいて獲るすべての産物の十分の一を必ず取り分けなければならない」（申命記14・22）とある。しかしパリサイ人は、それ以上実行していた（11・42）。このパリサイ人が自分に関して述べ

ていることには、嘘偽りはないであろう。しかし祈る者としての心は、完全に間違っている。

13 遠く離れて立ち おそらく取税人が神殿の庭の境界あたりにいたのであろう。彼はただならぬ罪の自覚を感じているようである。目を天に向けてようとしないう。当時目を天に上げて祈ることは、自然なことであったことを暗示している（参照マルコ6・41、7・34、ヨハネ11・41、17・1、詩篇123・1）。しかし取税人はそうせず、自分が価値のないものであることを深く意識している。胸を打ちながら 直訳すると、「何度も自分の胸をたたいた」（動詞の時制は完了形で、継続を表している）。胸を打ちただけは、悲しみのしるし（参照23・48）。神様、罪人のわたしをおゆるしく下さい きわめて単純な祈りである。「あなたの怒りを取り去って下さい」との意。彼はただ自分自身を神のあわれみに投げ出すだけであった。取税人はある意味で、仕事に何の喜びもない機械的人間だったろうし、自分でも十分承知していたであろう。そこで彼は神のあわれみを求めた。なぜなら、あわれみこそ彼が大胆に求めることができた唯一の事柄であったから。

14 義とされて たとえの適用。これは赦された存在以上のことを意味する。義認とは、神の前に新しい立場をプレゼントされたことをも含んでいる。聖書は自分の義によらず、神のあわれみを信じて神からの義を求めることを教えている（ローマ3・24、ピリピ3・9）。神の前でも、人の前でも、祈りにおいても、謙虚さが大切。

- 週 題 謙遜な祈り
- 聖 書 ルカ18・9～14
- 暗唱聖句 神様、罪人のわたしをおゆるしく  
ださい。 ルカ18・14
- 目 標 謙遜に悔い改めて祈ることこそ、  
神に義とされる道であることを発  
見する。

#### 導入

皆さんの中には、毎日お祈りしている人がいますか。いっようなお祈りをするのかな。今日は、二人の人の全く違ったタイプの祈りを通して、本当の祈りについて学びましょう。

#### (起) ストーリーを語る

二人の人が、宮で祈っています。一人はパリサイ人です。彼は起立して、正式な祈りのスタイルでお祈りを始めました。しかし、どうも神様に向かって祈っているのではなく、自分の正しいことを誇っているような祈りなのです。では、何と祈っているか耳をすまして聞いてみましょう。「神よ、わたしは欲張りでもないし、曲がったこともしていないし、不潔な行いをもしていません。また取税人のようでもありませんから感謝します。そして、普通の人は年に一度だけ断食しますが、わたしはそれ以上、週に二回も断食しているのですから、たいしたものですよ。ささげ物だって収入の十分の一をきっちりささげています。わたしは自分で自分に満足しています。エッヘン」ですって。

なんと、初めから終わりまで、自分の自慢ばかりでした。神様はどう思われたでしょう。

さてもう一人の人は取税人でした。この取税人は先のパリサイ人とは全然違って、誇るようなことは全くありません。それどころか、胸の痛みにたえているようです。彼は神殿から遠く離れて、目を上げることさえせず、神様に対する罪を悲しむ心でいっばいになって、胸を打って祈りました。「神様、罪人のわたしをおゆるしく下さい」と。取税人は心の底から罪をおわびする悔い改めの祈りをささげていたのです。神様が喜んで受け入れられたのはどちらの祈りでしょう。

そう、神様に正しいと認められたのは、取税人の方でした。パリサイ人は得意満面に、あれもこれも正しいことはみなできていますという自己満足の祈りを、自分自身にささげたようなものです。彼の祈りは、祈りではなく自慢です。神様には受け入れられるはずありません。私たちはどんなに頑張ったとしても、自分の努力で神様に義と認められることはできないのです。

神様が受け入れられるのは、取税人のように心から罪を悔い改める祈りです。神様の前に頭をたれ、自分には何の良いものもありませんと、神様のあわれみにする祈りを神様はしっかりと受けとめて下さるのです。

#### (承) 学ぶべき真理

この取税人の祈りは私たちの模範です。自分は神様に近づくことはおろか、神様に對して正面から顔を上げることもできない者だとわかってい

人は、自分の罪を認め、それを心から悔い改めます。神様は全知全能のお方ですから、私たちの祈りの中身や、どういう心で祈っているかを知っておられます。私たちの正しさは、どうひきめに見ても、神様の正しさには及びません。自分のありのままを神様に申し上げ、悔い改めて、神様が下さるゆるしをいただきましょう。

#### (転) 生活への適用

皆さんは普段どんな祈りをしているでしょう。いやいやですか。しかたなくですか。それとも形だけですか。神様は、悔い改めた祈り、心の砕けたへりくだった祈りを喜ばれます。

神様がよしと認められるのは、良いことをたくさんする人や、礼拝を休まない人、献金を忘れずにする人、御言葉をたくさん覚えていてる人ではありません。それらも大切なことですが、神様はそういう行為を受け入れられるのではないのです。神様は悔い改めて、へりくだった魂こそ、受け入れられます。

#### 結論

本当の祈りとは、自分のよいわざに頼ることではありません。かえって自分の足らないことや悪いことを正直に認めて、神様に「ゆるしてください」と、心から祈ることです。神様の目は人の行いよりもその人の内にある心を見ておられます。私たちは、「自分のわがままな心をゆるしてください」と、ありのままの姿で神様にお祈りしましょう。神様は、素直なへりくだった祈りをいつでも受け入れて下さいます。

### ワーク A

● 暗唱聖句 (9月30日～10月21日)

神様、罪人のわたしをおゆるしく下さい。

(ルカ18・13)

#### ● 導入のヒント

みんなはどんなお祈りをしていますか。「おもちゃを下さい」とか「お食事を感謝します」とかの祈りが多いでしょうか。それとは違うお祈りをした2人の人のことをイエス様は話されました。

● ワーク 神に受け入れられた祈り (ぬり絵)  
ぬり絵の後、2人がどんなお祈りをしたかを子どもに聞いてみましょう。神様が喜ばれる、罪を認める謙遜な祈りについて会話して下さい。

### ワーク B

● 質問1 パリサイ人と取税人の祈りの違いを考えます。一つ一つ話し合いながら子どもと共に「祈り」について確認しましょう。

● 質問2 「神の受けられるいけにえは砕けた魂です」(詩51・17)の聖句を思いつつ、神は「悔いた心」を喜ばれることを心に刻みましょう。

● 質問3 暗唱聖句です。「罪人の私」と告白する謙遜な姿こそ、「祈りの心」です。

● 賛美歌 「祈ってごらんよわかるから」

(日本児童福音伝道協会版)

● 今日のお祈り 「神様、私のような罪深い者のお祈りを聞いて下さるので感謝します。」

### ワーク C

● 先週の放蕩息子のお話で、「本心に立ち返る」とは自分が罪人であることを明確に自覚することでしたが、ここでも同様のことが言えます。

● 3の意味質問の三択で、①のイラストの取税人が見ている先は「取税人は嫌われていた」という文章です。法律学者はもちろんのこと、人々は取税人を罪人として軽蔑していました。しかし人々にそう見られても「実は、わたしは正しい」と思っている姿です。②が正解です。③は人と比較して、「誰々よりは正しい」と言う意識にすぎらうとする姿です。この③は、私たちの現実の姿ではないでしょうか。「自分も確かに悪いよ。しかしこの人よりはましだ」と思っただけの問題です。

### ワーク D

● 質問1 パリサイ人は自慢しているつもりではないでしょうが、自分の頑張りばかり言って、神の恵みにはまったく感謝していません。

● 質問2 取税人は、自分の罪深さを自覚し、へりくだってあわれみを求めています。

● 質問3 詩篇51・17を開いて確認をしてみてください。

● 質問4 神に祈るとはどうすることかを考えましょう。神は全てを「存知」だから、素直に心を開いて祈りをささげることができるように。分級では、必ず祈る時を持って下さい。

### 中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 パリサイ人と取税人の祈りには、どんな違いがありましたか。

2 イエス様は、どちらの祈りが神に聞かれたと言われましたか。

3 自分を義人だと自称している人をイエス様はどのように見られたでしょうか。

● 自分に当てはめてみよう

1 あなたは他の人と自分を比べてみて、心の中でも他の人を非難、中傷したことはありませんでしたか。もし非難していたとしたら、その根底には何があると思いますか。

2 他の人とあなたでは、どちらが神様に義と認められるでしょうか。(答・どちらも義と認められるものを持ち合わせていない。ただイエス様の十字架の贖いにすぎると他にはない。)

3 あなたは、他の人の行動をみて、優越感をもったことはありませんか。あるいはその逆はありませんか。

● 話し合ってみよう

1 私たちは、神様の前に出るときに、自分に正しいところがあつて神に受け入れられていると言えるものがあるでしょうか。

2 お祈りで大切なことは何でしょうか。

3 私たちは神様の前に真実な祈りをしているのでしょうか。



## ●主題 母を敬う

●聖書 出エジプト20・12

ルカ2・51

## ●暗唱聖句 あなたは父と母を敬え。

出エジプト20・12

## 導入

母の日を迎えました。この日は、全世界の各地でお祝いされています。(母の日の由来参照)

考えてみれば、一人で生まれ、一人で大きくなってきた人なんて、だれもいませんね。私たち一人一人のために、必ず私たちを産み、育て、お世話をして下さった人がいます。それは、わたしたちの両親です。お父さん、お母さんが私たちをここまで育てるために注いで下さった愛と犠牲と忍耐を、少し考えてみましょう。(あなたの小さいときからのアルバム写真を開き、お母さんにあなたの生まれた時のこと、赤ちゃんのとき、幼稚園のときのこと……いろいろ尋ねてみましょう。あなたの知らなかったことがわかってきます。)

あなたは、ここまで愛してお世話し、育み大きくして下さった父母のことなどすっかり忘れてしまい、まるで一人で大きくなってきたかのようなことを言っていないませんか。またわがままな態度をとってお母さん(両親)を困らせ、怒らせたことはありませんか。神様は、私のために、まずお父さんとお母さんを選び、備えて下さいました。全世界には、多くの、いろいろなお母さんがいます。

しかし、私を産み、育て、愛して下さいる「私の」お母さんは、たった一人です。神様は、そのような「あなたの」お父さん、お母さんを敬うように命じておられます。

## 一、神の命令(出エジプト20・12)

神様が「あなたの父母を敬え」と命じておられるのは、子どもを教え、訓練し、育てていく親としての権威を両親に与えておられるからです。クリスチャン・ホーム(両親が、信仰をもっている家庭)で生まれ育った人は、お祈りと聖書のみことばを最初に教えて下さったのは、両親であったことに気づくでしょう。神様は、神様を敬うことを、まるで一つのことに命じておられます。神様を信じる私たちは、母(両親)に感謝しましょう。母(両親)のために祈り、心から愛し敬いましょう。そして、母(両親)の恩にむくいるものとなりましょう。お母さん(両親)が信仰をもっていないなくても、神様が与えて下さった大切なお母さん(両親)であることを思い、まごころこめて祈り、敬いましょう。

## 二、イエス様の模範(ルカ2・51)

イエス様は、母(両親)に仕えられました。聖書には、イエス様の子どもの時代のことは、ほとんど書かれていません。しかし、間違いなくイエス様は、両親に従い、子どものときから父ヨセフの仕事を手伝い、長兄として弟たちや妹たちの世話をなされ、母マリヤに仕えておられました。それらのことが、「両親に仕えられた」と一言で言われ

ています。この短いことばの中に父なる神様を敬いつつ、父なる神様が与え下さった両親を心から愛し敬い、両親に従い仕えられたイエス様の全てのことが言い表されているのです。

私たちも、このイエス様の模範にならなければいけません。とりわけ、この母の日に、私のお母さんを与えて下さった神様に感謝し、お母さんを敬い、感謝を表しましょう。

## 三、母の日の由来

アメリカの東海岸バージニア州にある教会に、日曜学校の教師をしていたジャービスという夫人がいました。ある聖日に夫人は「あなたの父と母を敬え」の聖句を説明して、「皆さんのうちでだれか、お母さんの大きな愛に対して、心からの感謝を表わす方法を考え出して下さる人はいませんか」と尋ねました。その席には、夫人の娘のアンナもいて、母の言葉を感銘深く聞いていました。

後日、この夫人が天に召され、教会で追悼会が開かれたとき、アンナは母の言葉を思い起こし、母の愛を感謝するために、この集會に一束のカネーションを贈りました。そして「この花は私の母の記念です。私の母はこの教会の教会学校教師を26年間つとめていた信仰篤いやさしい母でした。皆さん、この母を思い出すカネーションの一輪をもらって下さい」と言ったのです。このことは列席者一同に深い感動を呼び起こし、やがて、他の教会でもこうした催しが行われるようになりしました。それが全世界に広まって、今の母の日になったのです。

## 編集後記



「新しいぶどう酒」とともに「新しい皮袋」を用意するのが本当のあり方なのですが、先に「新しい皮袋」ができてしまい、その中に入れるにふさわしいぶどう酒を必死に作ったというのが、この一年間の歩みでした。何とか、編集後記が書けるところまでこぎつけて、ホッとしています。

「教育基本法」の改訂が国会で論議されるほど、現在の教育現場には様々な問題が噴出してきます。次代の日本を担う人材をどのように育て上げるかということは、十分に考えねばなりません。それは決して法律を変えてできるようなものではないことは明らかでしょう。このようなときにこそ、正しい意味での宗教教育の意義が見直されるように、心より祈っています。

昔も今も、人間に明確な生きる指針を与えるのは、聖書しかないというのが私たちの信仰です。幼いときに、この指針を知ってほしいと願いつつ、私たちは教会学校教育を続けています。

現代の様々な問題にちゃんと対処できるようにと、執筆者一同、心を一つにして制作してきました。何度も力の足りないさを覚えながらも、何とか前半部分を仕上げる事ができたのは、ただ主のあわれみのゆえであつたことを深く覚えます。

残念なことに、昨年と同様、注文数が予想を下回りました。コストを引き下げるためにかなりの苦勞をしましたが、生徒数の減少という大きな波を乗り越えることができなかったようです。

特にフラッシュ・カードは、印刷会社頼むほどの数がないために、今回は私たちが印刷しました。そして注文のあるなしにかかわらず、本誌を注文くださったすべての教会に一部つつ贈呈することにします。どうか一度用いてください。拡大コピーして、紙芝居のようにしていただいても結構です。

使用法のアイデアがあれば、ぜひお知らせください。

今回は、以下の者たちで執筆やイラスト作成をしました。

聖書講解	鎌野 善三
研究資料	森沢 尚生
メッセージ例	長田 栄一
ワークA	足立 宏
ワークB	森沢 尚生
ワークC	高橋 頼男
ワークD	光田 隆代
中高科	白尾真理子
フラッシュカード	長谷川宣恵
	長尾 秀紀
	仁科 真人
	朝川 清英
	土屋 直子

また、信徒の荒井みどり姉、陰山恭子姉、矢持英子姉にイラストをお願いしました。さらに様々な面で編集の援助をしていただいた森明子姉、本部事務所の藤森牧男師と岡本羊一兄、そしてあくとの本田慈郎兄に、心からの感謝を申し上げます。

鎌野善三

## 教会教育教案誌 牧羊者

二〇〇一年三月十五日発行

発行 日本イエス・キリスト教団出版局

発行人 中島 秀一

編集人 鎌野 善三

申込先 〒523-0821

滋賀県近江八幡市多賀町五〇六一

日本イエス・キリスト教団本部事務所

〒523-0821 近江八幡市多賀町五〇六一

振替〇〇二二〇〇八三三七出版局

印刷 有限会社 あくと

・日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み